一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

日田市高瀬遺跡群の調査　3

上野（うえの）第１遺跡

2001

大分県教育委員会

日田市高瀬遺跡群の調査　3

上野（うえの）第１遺跡

上野第１遺跡全景（東から）

北
三隈川南岸空中写真1（1996年9月国土地理院撮影）
西
東
南
ガランドヤ古墳群
三 隈 川
護願寺古墳群
穴観音古墳
姫塚古墳
高瀬条里
上野台地
陣ヶ原台地
⇧
上野第1遺跡

三隈川南岸空中写真２（1948年極東米軍撮影）

東原地区全景

刻書石製品　―権―

序

大分県の西部に位置する日田地方は、北九州と東九州をつなぐ文化の中継地として、多くの文化遺産に恵まれているところです。

大分県教育委員会は、この日田市域を通る国道210号の改良工事に伴って発掘調査を実施してまいりました。本書は、その中で日田盆地の南縁部に立地する上野第１遺跡の調査の記録です。

調査の結果、上野第１遺跡では、湧水を中心に開けた奈良時代集落の主要な掘立柱建物群、や「豊馬」と刻書された石製品等が発見されました。このことから本遺跡は日田地方の中でも古代の交通路にかかわる村落跡ではないかと推定され、その重要性が注目されています。

本書が古代史を理解するための資料として、また広く文化財保護と学術研究に活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から本書の作成まで御指導、御協力をいただきました関係機関各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成13年３月31日

大分県教育委員会教育長

田　中　恒　治

例　　言

1．本書は、一般国道210号日田バイパスの建設に伴い建設省大分工事事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した日田市高瀬地区遺跡群の発掘調査報告書である。

2．本書に報告する遺跡は、1990（平成３）年度と1992（平成５）・1993（平成６）年度に本調査をおこなった日田市大字高瀬に所在する上野第１遺跡である。

3．本書におさめた各遺跡の概要は以下の概報に速報してあるが、本書をもって正式な報告とする。

田中裕介『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』1991　大分県教育委員会

田中裕介『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』1993　大分県教育委員会

田中裕介・高畠豊『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』1994　大分県教育委員会

4．本書の執筆は田中裕介があたり、プラントオパール分析は佐々木章（大分短期大学助教授）に依頼した。

5．出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁文化課文化財資料室において保管している。

6．本書の編集・構成は田中が担当した。

目　　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査にいたる経過……1
　第２節　埋蔵文化財調査の経過と調査組織……1
　第３節　調査日記抄……7
第２章　三隈川南岸の地理と歴史……9
　第１節　日田盆地の位置と地形……9
　第２節　三隈川南岸の地形……13
　第３節　上野地区の景観……15
　第４節　三隈川南岸の歴史……16
第３章　調査の方法と報告書の凡例……21
　第１節　上野第１遺跡の現状……21
　第２節　調査の方法と経過……24
　第３節　整理の方法と経過……26
　第４節　報告書の凡例……28
第４章　東原地区……31
　第１節　調査概要……31
　第２節　東原Ａ区……32
　第３節　東原Ｂ区……40
　第４節　東原Ｃ・Ｄ区……50
　第５節　小結……84
第５章　野間地区……87
　第１節　調査概要……87
　第２節　野間Ｅ・Ｆ区……88
　第３節　野間Ｇ・Ｈ区……112
　第４節　道路状遺構と水場状遺構……147
　第５節　野間Ｉ・Ｊ・Ｌ・Ｋ区……162
　第６節　基盤層調査区……206
　第７節　野間Ｍ区……208
第６章　平原地区……229
　第１節　調査概要……229
　第２節　平原Ａ・Ｂ区……229
　第３節　平原Ｃ・Ｄ区……239
　第４節　平原Ｅ・Ｆ・Ｇ区……239
第７章　米田地区と上野第２遺跡Ａ・Ｂ地区……249
　第１節　調査概要……249
　第２節　米田地区……250
　第３節　上野第２遺跡……252
　第４節　小結……254
第８章　自然科学的分析……255
　プラント・オパール分析から見た上野第１遺跡野間地区の水田開発…（佐々木章）…255
第９章　調査の成果と課題……259
　第１節　奈良時代以前……259
　第２節　奈良時代……261
　第３節　奈良時代以後……287
　第４節　まとめと課題……288
　（コラム　現地説明会）……290
遺構一覧表……292
遺物観察表……300
写真図版……345
　（報告書抄録・巻末）

細　目　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査にいたる経過……1
　第２節　埋蔵文化財調査の経過と調査組織……1
　第３節　調査日記抄……7

第２章　三隈川南岸の地理と歴史……9
　第１節　日田盆地の位置と地形……9
　　１－１　日田盆地の位置……9
　　１－２　日田盆地の地形……10
　　１－３　日田盆地の気候……11
　第２節　三隈川南岸の地形……13
　　２－１　地形区分の説明……13
　　２－２　段丘地形の特徴……13
　第３節　上野地区の景観……15
　第４節　三隈川南岸の歴史……16

第３章　調査方法と報告書の凡例……21
　第１節　上野第１遺跡の現状……21
　　１－１　調査前の上野台地……21
　　１－２　上野台地における既往の調査……21
　第２節　調査の方法と経過……24
　　２－１　試掘調査……24
　　２－２　確認調査……24
　　２－３　本調査……25
　第３節　整理の方法と経過……26
　　報告書の凡例……28

第４章　東原地区……31
　第１節　調査概要……31
　第２節　東原Ａ区……32
　　２－１　Ａ区の概要……32
　　表面採集と試掘時の遺物……32
　　２－２　奈良時代の遺構と遺物……32
　　①　掘立柱建物跡……33
　　１号掘立柱建物跡……33
　　２号掘立柱建物跡……33
　　３号掘立柱建物跡……34
　　②　土坑……35
　　１号土坑……35
　　２－３　近世以降の遺構と遺物……36
　　①　土坑……36
　　２号土坑……36
　　Ａ号土坑……37
　　②　溝……37
　　１号溝……37
　　２号溝……38
　第３節　東原Ｂ区……40
　　３－１　Ｂ区の概要……40
　　表面採集と試掘時の遺物……40
　　３－２　古墳時代の遺構と遺物……40
　　①　墓……41
　　１号土器棺墓……41
　　３－３　奈良時代の遺構と遺物……42
　　①　掘立柱建物跡……42
　　４号掘立柱建物跡……42
　　②　竪穴建物跡……43
　　１号竪穴建物跡……43
　　③　土坑……43
　　３号土坑……43
　　４号土坑……44
　　④　ピット……46
　　３－４　近世以降の遺構と遺物……46
　　①　土坑……46
　　５号土坑……46
　　７号土坑……47
　　②　溝……47
　　３号溝……47
　　４号溝……47
　　５号溝……49
　　６号溝……49
　　③　ピット……49
　　３－５　時期不明の遺構……49
　　１号焼土面……49
　第４節　東原Ｃ・Ｄ区……50
　　４－１　Ｃ・Ｄ区の概要……50
　　表面採集と試掘時の遺物……50
　　４－２　縄文時代の遺構と遺物……52
　　①　土坑……52
　　11号土坑……52
　　４－３　奈良時代の遺構と遺物……52
　　①　掘立柱建物跡……53
　　５号掘立柱建物跡……53
　　６号掘立柱建物跡……54
　　付属土坑……55
　　７号掘立柱建物跡……57
　　８号掘立柱建物跡……58
　　９号掘立柱建物跡……58
　　10号掘立柱建物跡……60
　　11号掘立柱建物跡……60
　　12号掘立柱建物跡……60
　　刻書石製品……62
　　13号掘立柱建物跡……62
　　14号掘立柱建物跡……63
　　15号掘立柱建物跡……63
　　②　竪穴建物跡……64
　　２号竪穴建物跡……64
　　３号竪穴建物跡……72
　　③　柱穴列……74
　　１号柱穴列……74
　　２号柱穴列……74

④　土坑……74
8号土坑……75
9号土坑……75
10号土坑……76
13号土坑……78
14号土坑……79
15号土坑……81
4－4　近世以降の遺構と遺物……81
①　土坑……81
12号土坑……81
16号土坑……82
②　溝……82
7号溝……82
8号溝……83
4－5　ピット……83
第5節　小結－奈良時代建物群の変遷と性格－
……84

第5章　野間地区……87
第1節　調査概要……87
野間地区全体の表面採集遺物……87
第2節　野間E・F区……88
2－1　E・F区の概要……88
表面採集と試掘時の遺物……88
2－2　奈良時代の遺構と遺物……88
①　掘立柱建物跡……90
16号掘立柱建物跡……90
17号掘立柱建物跡……90
19号掘立柱建物跡……91
26号掘立柱建物跡……92
27号掘立柱建物跡……95
28号掘立柱建物跡……95
29号掘立柱建物跡……95
②　竪穴建物跡……97
4号竪穴建物跡……97
13号竪穴建物跡 ……102
（54号土坑……104）
14号竪穴建物跡 ……104
③　土坑 ……105
52号土坑 ……106
53号土坑 ……106
55号土坑 ……106
1号焼土坑 ……107
④　ピット ……107
2－3　近世以降の遺構と遺物 ……108
①　溝 ……108
9号溝 ……108
24号溝 ……108
25号溝 ……108
2－4　時期不明の遺構 ……111
17号土坑 ……111
2－5　小結－奈良時代建物群の変遷と性格－
……111
第3節　野間G・H区 ……112
3－1　G・H区の概要 ……112
表面採集と試掘時の遺物 ……112
3－2　奈良時代の遺構と遺物 ……115
①　周溝建物 ……115
20号掘立柱建物跡 ……116
内部土坑 ……119
周溝 ……119
3号柱穴列 ……121
出土遺物 ……121
まとめ ……122
②　竪穴建物跡 ……122
5号竪穴建物跡 ……122
6号竪穴建物跡 ……130
7号竪穴建物跡 ……132
③　土坑 ……134
19号土坑 ……134
20号土坑 ……137
22号土坑 ……137
23号土坑 ……138
24号土坑 ……138
25号土坑 ……138
26号土坑 ……139
28号土坑 ……139
30号土坑 ……139
31号土坑 ……141
60号土坑 ……144
61号土坑 ……144
62号土坑 ……145
④　ピット ……146
3－3　近世以降の遺構と遺物 ……146
①　溝 ……146
13号溝 ……146
②　ピット ……146
第4節　道路状遺構と水場状遺構 ……147
4－1　概要 ……147
4－2　奈良時代の遺構と遺物 ……147
①　道路状遺構 ……147
②　水場状遺構 ……155
③　小結－奈良時代の道と湧水－
……156
4－3　近世以降の遺構と遺物 ……156
①　土坑 ……159
34号土坑 ……159
B号土坑 ……159
②　溝 ……159
10号溝 ……159
12号溝 ……160
16号溝 ……160
第5節　野間I・J・L・K区 ……162

５－１　Ⅰ・Ｊ・Ｌ・Ｋ区の概要 ……162
表面採集と試掘時の遺物 ……162
５－２　縄文時代の遺構と遺物 ……165
39号土坑 ……165
５－３　奈良時代の遺構と遺物 ……165
①　掘立柱建物跡 ……166
21号掘立柱建物跡 ……166
23号掘立柱建物跡 ……168
24号掘立柱建物跡 ……169
25号掘立柱建物跡 ……171
30号掘立柱建物跡 ……171
32号掘立柱建物跡 ……172
33号掘立柱建物跡 ……172
②　竪穴建物跡 ……175
９号竪穴建物跡 ……175
８号竪穴建物跡 ……178
15号竪穴建物跡 ……182
10号竪穴建物跡 ……185
11号竪穴建物跡 ……188
12号竪穴建物跡 ……191
③　土坑 ……193
38号土坑 ……184
40号土坑 ……195
45号土坑 ……196
102号土坑 ……198
④　溝と関連施設 ……198
19号溝 ……200
44号土坑 ……201
⑤　小結－奈良時代遺構群の変遷と性格－
……202
５－４　中世の遺構と遺物 ……203
22号溝 ……203
５－５　近世以降の遺構と遺物 ……204
①　溝 ……204
14号溝 ……204
15号溝 ……205
20号溝 ……205
５－６　ピット ……205
第６節　基盤層調査区 ……206
第７節　野間Ｍ区 ……208
７－１　Ｍ区の概要 ……208
表面採集の遺物 ……208
７－２　水田遺構 ……215
①　16トレンチ ……215
②　17トレンチ ……216
③　水田層 ……219
水田面 ……219
32号溝 ……219
33号溝 ……219
出土遺物 ……219
まとめ ……220
７－３　ピット群 ……220
７－４　水田下土坑群 ……221
301号土坑 ……221
302号土坑 ……222
303号土坑 ……222
304号土坑 ……222
305号土坑 ……222
306号土坑 ……223
307号土坑 ……223
308号土坑 ……223
309号土坑 ……224
310号土坑 ……224
311号土坑 ……225
312号土坑 ……225
313号土坑 ……226
314号土坑 ……226
315号土坑 ……226
316号土坑 ……226
317号土坑 ……227
318号土坑 ……227
７－５　近世以降の遺構と遺物 ……227
①　溝 ……227
30号溝 ……227
31号溝 ……227
７－６　小結－奈良時代の水田開発－ ……228

第６章　平原地区 ……229
第１節　調査概要 ……229
奈良時代 ……229
近世・近代 ……229
第２節　平原Ａ・Ｂ区 ……229
２－１　Ａ・Ｂ区の概要 ……229
表面採集の遺物 ……229
２－２　奈良時代の遺構と遺物 ……232
①　掘立柱建物跡 ……232
51号掘立柱建物跡 ……232
52号掘立柱建物跡 ……233
53号掘立柱建物跡 ……234
54号掘立柱建物跡 ……234
②　土坑 ……235
201号土坑 ……235
203号土坑 ……236
２－３　近世以降の遺構と遺物 ……237
①　溝 ……237
51号溝 ……237
２－４　ピット ……237
第３節　平原Ｃ・Ｄ区 ……237
３－１　概要 ……237
204号土坑 ……239
第４節　平原Ｅ・Ｆ・Ｇ区 ……239
４－１　概要 ……239
縄文時代 ……239
近世・近代 ……239

表面採集と試掘時の遺物 ……240
4－2　縄文時代の遺構と遺物 ……242
①　土坑 ……243
211号土坑……243
212号土坑……243
213号土坑……243
4－3　近世以降の遺構と遺物 ……243
①　溝 ……244
1・3・6号溝 ……244
2号溝 ……245
4号溝 ……245
5号溝 ……247
4－4　小結－近世畠地区画の変遷－ ……247

第7章　米田地区と上野第2遺跡A・B地区 ……249
第1節　調査概要 ……249
第2節　米田地区 ……250
2－1　米田A区 ……250
2－2　米田B区 ……252
第3節　上野第2遺跡 ……252
3－1　A地区 ……253
3－2　B地区 ……254
第4節　小結 ……254

第8章　自然科学的分析 ……255
プラント・オパール分析から見た上野第1遺跡
野間地区の水田開発 ……（佐々木章）255
はじめに ……255
分析方法 ……255
分析結果および考察 ……256

第9章　調査の成果と課題 ……259
第1節　奈良時代以前 ……259
1－1　旧石器時代 ……259
1－2　縄文時代 ……259
①　遺構と縄文土器 ……259
②　石器 ……259
③　まとめ ……260
1－3　弥生時代 ……260
甕と磨製石斧 ……260
1－4　古墳時代 ……260
第2節　奈良時代 ……261
2－1　遺構各説 ……261
①　掘立柱建物跡 ……261
柱穴構造 ……261
柱穴配置 ……262
基本寸法 ……263
床面積 ……264
②　竪穴建物跡 ……264
柱穴配置 ……265
カマドの位置 ……266
カマドの構造 ……266
カマド祭祀 ……268
竪穴の埋没状態 ……269
床面積 ……269
③　掘立柱建物と竪穴建物 ……270
④　土坑 ……270
廃棄土坑と掘立柱建物 ……272
⑤　道と水場と祭祀施設および水田 ……272
2－2　遺物各説 ……273
①　刻書石製品－権－ ……273
②　須恵器 ……273
器種構成 ……274
転用硯 ……274
③　土師器 ……274
④　製塩土器 ……275
製塩土器の意味 ……276
⑤　鉄器 ……276
⑥　石製品 ……276
2－3　遺構の編年 ……277
①　遺構の切り合い関係 ……277
②　竪穴建物の整地の時期 ……277
③　建物の方向 ……278
正方位の磁場 ……278
方向と柱筋の一致 ……279
④　遺構の位置関係 ……280
⑤　接合資料 ……280
土器 ……280
カマド石材 ……281
⑥　五期編年 ……282
上野1期 ……283
上野2期 ……283
上野3期 ……284
上野4期 ……286
上野5期 ……287
⑦　建物の存続期間 ……287
第3節　奈良時代以後 ……287
3－1　中世 ……287
3－2　近世以降 ……287
①　畠地境界溝 ……287
畠地境界溝の特徴 ……288
掘削の時期 ……288
第4節　まとめと課題－上野第1遺跡の奈良時代集落の性格－
……288

（コラム　現地説明会） ……290

遺構一覧表 ……292
遺物観察表 ……300
写真図版 ……345
（報告書抄録 ……巻末）

挿図目次

第１章　はじめに

第１図　日田バイパスの路線と遺跡……５～６

第２章　三隈川南岸の地理と歴史

第１図　遺跡の位置……９
第２図　日田盆地の位置と地勢……９
第３図　日田盆地の地形分類図……10
第４図　三隈川南岸の地形……12
第５図　上野第１・２遺跡と周辺地形……14
第６図　日田盆地の主要遺跡……19～20

第３章　調査の方法と報告書の凡例

第１図　上野台地の既往の調査……22
第２図　上野切畑山地区出土遺物……22
第３図　上野試掘調査出土遺物①……23
第４図　上野試掘調査出土遺物②……23
第５図　上野第１遺跡の調査区と地形……27
第６図　上野第１遺跡調査区設定図……27
（方位凡例 ……28）

第４章　東原地区

第１図　東原地区Ａ～Ｄ区の調査区……29～30
第２図　東原地区Ａ区遺構配置図……32
第３図　東原Ａ区試掘時出土遺物……32
第４図　東原Ａ区１号掘立柱建物跡……33
第５図　東原Ａ区２号掘立柱建物跡……34
第６図　東原Ａ区３号掘立柱建物跡……34
第７図　東原Ａ区３号掘立柱建物跡出土遺物……35
第８図　東原Ａ区１号土坑……35
第９図　東原Ａ区１号土坑出土遺物……36
第10図　東原Ａ区２号土坑……37
第11図　東原Ａ区２号土坑出土遺物……37
第12図　東原Ａ区Ａ号土坑……38
第13図　東原Ａ区１号溝出土遺物……38
第14図　東原Ａ区２号溝出土遺物……38
第15図　東原Ａ区１・２号溝……39
第16図　東原地区Ｂ区遺構配置図……40
第17図　東原Ｂ区表面採集遺物……41
第18図　東原Ｂ区１号土器棺墓……41
第19図　東原Ｂ区１号土器棺墓出土遺物……41
第20図　東原Ｂ区４号掘立柱建物跡……42
第21図　東原Ｂ区４号掘立柱建物跡出土遺物……42
第22図　東原Ｂ区１号竪穴建物跡……43
第23図　東原Ｂ区１号竪穴建物跡出土遺物……43
第24図　東原Ｂ区３号土坑……44
第25図　東原Ｂ区３号土坑出土遺物……44
第26図　東原Ｂ区４号土坑出土遺物……44
第27図　東原Ｂ区４号土坑……45
第28図　東原Ｂ区各ピット出土遺物……46
第29図　東原Ｂ区５号土坑……46
第30図　東原Ｂ区７号土坑……46
第31図　東原Ｂ区３号溝出土遺物……47
第32図　東原Ｂ区３号溝……48
第33図　東原Ｂ区４号溝……48
第34図　東原Ｂ区５号溝……48
第35図　東原Ｂ区６号溝……48
第36図　東原Ｂ区６号溝出土遺物……49
第37図　東原Ｂ区１号焼土面……49
第38図　東原ＣＤ区表面採集遺物……50
第39図　東原地区ＣＤ区遺構配置図……51
第40図　東原Ｃ区11号土坑……52
第41図　東原Ｃ区５号掘立柱建物跡……53
第42図　東原Ｃ区６号掘立柱建物跡……54
第43図　東原Ｃ区６号掘立柱建物跡付属土坑……55
第44図　東原Ｃ区６号掘立柱建物跡出土遺物……55
第45図　東原Ｃ区２・３号竪穴と７号建物の関係　…55
第46図　東原Ｃ区７号掘立柱建物跡……56
第47図　東原Ｃ区７号掘立柱建物跡出土遺物……57
第48図　東原Ｃ区８号掘立柱建物跡……57
第49図　東原Ｃ区８号掘立柱建物跡出土遺物……58
第50図　東原Ｃ区９号掘立柱建物跡……58
第51図　東原Ｃ区９号掘立柱建物跡出土遺物……58
第52図　東原Ｃ・Ｄ区10号掘立柱建物跡……59
第53図　東原Ｃ区10号掘立柱建物跡出土遺物……53
第54図　東原Ｃ区11号掘立柱建物跡……60
第55図　東原Ｃ・Ｄ区８・10・12号建物の関係…61
第56図　東原Ｄ区12号掘立柱建物跡……61
第57図　刻書石製品……62
第58図　刻銘細図……62
第59図　東原Ｄ区13・14・15号建物の関係……63
第60図　東原Ｄ区13号掘立柱建物跡……63
第61図　東原Ｄ区14号掘立柱建物跡……63
第62図　東原Ｄ区15号掘立柱建物跡……64
第63図　東原Ｃ区２号竪穴建物跡①……65
第64図　東原Ｃ区２号竪穴建物跡②……66
第65図　東原Ｃ区２号竪穴建物跡③……67～68
第66図　東原Ｃ区２号竪穴建物跡④……67～68
第67図　東原Ｃ区２号竪穴建物跡出土遺物①……71
第68図　東原Ｃ区２号竪穴建物跡出土遺物②……72
第69図　東原Ｃ区３号竪穴建物跡……72

第70図　東原Ｃ区３号竪穴建物跡出土遺物……73
第71図　東原Ｃ区１号柱穴列……74
第72図　東原Ｃ区２号柱穴列……74
第73図　東原Ｃ区２号柱穴列出土遺物……74
第74図　東原Ｃ区８号土坑……75
第75図　東原Ｃ区８号土坑出土遺物……75
第76図　東原Ｃ区９号土坑……75
第77図　東原Ｃ区10号土坑……76
第78図　東原Ｃ区10号土坑出土遺物……77
第79図　東原Ｃ区13号土坑……78
第80図　東原Ｃ区13号土坑出土遺物……78
第81図　東原Ｃ区14号土坑……79
第82図　東原Ｃ区14号土坑出土遺物……80
第83図　東原Ｄ区15号土坑……81
第84図　東原Ｄ区15号土坑出土遺物……81
第85図　東原Ｃ区12号土坑……82
第86図　東原Ｃ区16号土坑……82
第87図　東原Ｃ区７号溝……82
第88図　東原Ｃ区７号溝出土遺物……83
第89図　東原Ｃ区８号溝……83
第90図　東原Ｃ区８号溝出土遺物……83
第91図　東原Ｃ区ピット出土遺物……84

第５章　野間地区
第１図　野間地区の調査区……85～86
第２図　野間地区表面採集遺物……87
第３図　野間Ｅ・Ｆ区表面採集遺物……88
第４図　野間地区Ｅ・Ｆ区遺構配置図……89
第５図　野間Ｆ区16号掘立柱建物跡……90
第６図　野間Ｆ区17号掘立柱建物跡……91
第７図　野間Ｆ区19号掘立柱建物跡……91
第８図　野間Ｅ区26・27・28建物と14竪穴の関係……92
第９図　野間Ｅ区26号掘立柱建物跡出土遺物……92
第10図　野間Ｅ区26号掘立柱建物跡……93
第11図　野間Ｅ区27号掘立柱建物跡……94
第12図　野間Ｅ区27号掘立柱建物跡出土遺物……94
第13図　野間Ｅ区28号掘立柱建物跡……96
第14図　野間Ｅ区29号掘立柱建物跡……97
第15図　野間Ｅ区29号掘立柱建物跡出土遺物……97
第16図　野間Ｆ区４号竪穴建物跡①……98
第17図　野間Ｆ区４号竪穴建物跡②－カマド－…99
第18図　野間Ｆ区４号竪穴建物跡出土遺物①　…100
第19図　野間Ｆ区４号竪穴建物跡出土遺物②　…101
第20図　野間Ｅ区13号竪穴建物跡①　……102
第21図　野間Ｅ区13号竪穴建物跡②－カマド－　103
第22図　野間Ｅ区54号土坑　……103
第23図　野間Ｅ区13号竪穴建物跡・54号土坑
　　出土遺物　……103
第24図　野間Ｅ区14号竪穴建物跡　……104
第25図　野間Ｅ区14号竪穴建物跡出土遺物　……104
第26図　野間Ｅ区52号土坑　……105
第27図　野間Ｅ区52号土坑出土遺物　……106
第28図　野間Ｅ区53号土坑　……106
第29図　野間Ｅ区55号土坑　……107
第30図　野間Ｅ区55号土坑出土遺物　……107
第31図　野間Ｆ区１号焼土坑　……107
第32図　野間Ｅ区ピット出土遺物　……107
第33図　野間Ｅ区24号溝・25号溝出土遺物　……108
第34図　野間Ｆ区９号溝……109～110
第35図　野間Ｅ区24号溝……109～110
第36図　野間Ｅ区25号溝……109～110
第37図　野間Ｆ区17号土坑　……111
第38図　野間地区Ｇ・Ｈ区遺構配置図　……113
第39図　野間Ｇ・Ｈ区表面採集遺物①　……114
第40図　野間Ｇ・Ｈ区表面採集遺物②　……115
第41図　野間Ｈ区周溝建物①－各遺構層序－　…116
第42図　野間Ｈ区周溝建物②－遺構配置図－　…117～118
第43図　野間Ｈ区周溝建物出土遺物①　……120
第44図　野間Ｈ区周溝建物出土遺物②　……121
第45図　野間Ｇ区５号竪穴建物跡①－完掘状態－　…122
第46図　野間Ｇ区５号竪穴建物跡②－カマド１－　…122
第47図　野間Ｇ区５号竪穴建物跡③－カマド２－…123～124
第48図　野間Ｇ区５号竪穴建物跡④－改築状態－　…125
第49図　野間Ｇ区５号竪穴建物跡⑤－竪穴埋没状態－　…126
第50図　野間Ｇ区５号竪穴建物跡出土遺物①　…127
第51図　野間Ｇ区５号竪穴建物跡出土遺物②　…128
第52図　野間Ｇ区５号竪穴建物跡出土遺物③　…129
第53図　野間Ｇ区６号竪穴建物跡①　……130
第54図　野間Ｇ区６号竪穴建物跡②－カマド細部－　……130
第55図　野間Ｇ区６号竪穴建物跡出土遺物　……131
第56図　野間Ｇ区７号竪穴建物跡①　……132
第57図　野間Ｇ区７号竪穴建物跡②－カマド－　……132
第58図　野間Ｇ区７号竪穴建物跡出土遺物　……133
第59図　野間Ｇ区19号土坑　……135
第60図　野間Ｇ区19号土坑出土遺物　……136
第61図　野間Ｇ区20号土坑　……137
第62図　野間Ｇ区20号土坑出土遺物　……137
第63図　野間Ｇ区22号土坑　……137
第64図　野間Ｇ区23号土坑　……138
第65図　野間Ｇ区23号土坑出土遺物　……138
第66図　野間Ｇ区24号土坑　……138
第67図　野間Ｇ区25号土坑　……139
第68図　野間Ｇ区25号土坑出土遺物　……139
第69図　野間Ｇ区26号土坑　……139

第70図　野間Ｇ区28号土坑 ……139
第71図　野間Ｇ区30号土坑 ……140
第72図　野間Ｇ区30号土坑出土遺物 ……141
第73図　野間Ｇ区31号土坑 ……142
第74図　野間Ｇ区31号土坑出土遺物 ……143
第75図　野間Ｇ区60・61号土坑 ……144
第76図　野間Ｇ区61号土坑出土遺物 ……144
第77図　野間Ｇ区62号土坑 ……145
第78図　野間Ｇ・Ｈ区ピット出土遺物 ……145
第79図　野間Ｇ・Ｈ区13号溝 ……146
第80図　野間Ｇ・Ｈ区13号溝出土遺物 ……146
第81図　野間地区道路状遺構・水場状遺構配置図 …148
第82図　野間Ｈ区道路状遺構①－全体図－ ……149
第83図　野間Ｈ区道路状遺構②－土坑１～19、
土坑Ａ～Ｏ－ …150
第84図　野間Ｈ区道路状遺構③－土坑20～34－ ……151
第85図　野間Ｈ区道路状遺構④－土坑35～39－ ……152
第86図　野間Ｈ区道路状遺構出土遺物 ……152
第87図　野間Ｈ区水場状遺構①……153～154
第88図　野間Ｈ区水場状遺構②－断面層序－ …155
第89図　野間Ｈ区水場状遺構出土遺物 ……156
第90図　野間Ｈ区10・12号溝……157～158
第91図　野間Ｈ区34号土坑 ……159
第92図　野間Ｈ区Ｂ号土坑 ……159
第93図　野間Ｈ区10号溝出土遺物 ……160
第94図　野間Ｈ区12号溝出土遺物 ……160
第95図　野間Ｈ区16号溝とＢ号土坑 ……160
第96図　野間地区Ⅰ・Ｊ・Ｌ・Ｋ区遺構配置図 …161～162
第97図　野間Ⅰ・Ｊ・Ｌ区表面採集遺物 ……164
第98図　野間Ｊ区39号土坑 ……165
第99図　野間Ｊ区39号土坑出土遺物 ……165
第100図　野間Ⅰ区21号掘立柱建物跡……166
第101図　野間Ⅰ区23号掘立柱建物跡①……167
第102図　野間Ⅰ区23号掘立柱建物跡②－柱穴層序－ …168
第103図　野間Ⅰ区23号掘立柱建物跡出土遺物…168
第104図　野間Ⅰ区24号掘立柱建物跡……169
第105図　野間Ⅰ区24号掘立柱建物跡出土遺物…169
第106図　野間Ⅰ区25号掘立柱建物跡……170
第107図　野間Ⅰ区30号掘立柱建物跡出土遺物…172
第108図　野間Ⅰ区30号掘立柱建物跡……172
第109図　野間Ⅰ区32号掘立柱建物跡……173
第110図　野間Ⅰ区33号掘立柱建物跡……174
第111図　野間Ⅰ区８・９・15号竪穴と30号建物の関係…175
第112図　野間Ⅰ区９号竪穴建物跡①……176
第113図　野間Ⅰ区９号竪穴建物跡②－土坑２－ …177
第114図　野間Ⅰ区９号竪穴建物跡出土遺物……177
第115図　野間Ⅰ区８号竪穴建物跡①……179
第116図　野間Ⅰ区８号竪穴建物跡②－カマド－ …180
第117図　野間Ⅰ区８号竪穴建物跡出土遺物……181
第118図　野間Ⅰ区15号竪穴建物跡①……183
第119図　野間Ⅰ区15号竪穴建物跡②－カマド－ …183
第120図　野間Ⅰ区15号竪穴建物跡出土遺物①…184
第121図　野間Ⅰ区15号竪穴建物跡出土遺物②…185
第122図　野間Ⅰ区10号竪穴建物跡①……186
第123図　野間Ⅰ区10号竪穴建物跡②－カマド－ …186
第124図　野間Ⅰ区10号竪穴建物跡出土遺物……187
第125図　野間Ⅰ区11・12号竪穴と102号土坑の関係 ……188
第126図　野間Ⅰ区11号竪穴建物跡①……189
第127図　野間Ⅰ区11号竪穴建物跡②－カマド－ …189
第128図　野間Ⅰ区11号竪穴建物跡出土遺物……190
第129図　野間Ⅰ区12号竪穴建物跡①……191
第130図　野間Ⅰ区12号竪穴建物跡②－カマド－ …192
第131図　野間Ⅰ区12号竪穴建物跡出土遺物……193
第132図　野間Ｊ区38号土坑……194
第133図　野間Ｊ区38号土坑出土遺物……195
第134図　野間Ｌ区40号土坑……196
第135図　野間Ｊ区45号土坑……197
第136図　野間Ｊ区45号土坑出土遺物……198
第137図　野間Ⅰ区102号土坑 ……198
第138図　野間Ｊ・Ｌ区19号溝……199
第139図　野間Ｊ・Ｌ区19号溝出土遺物……200
第140図　野間Ｌ区44号土坑……200
第141図　野間Ｌ区44号土坑出土遺物……201
第142図　野間Ⅰ区22号溝……202
第143図　野間Ⅰ区22号溝出土遺物……202
第144図　野間Ｊ区14・15号溝……203
第145図　野間Ｊ区14号溝出土遺物……203
第146図　野間Ｊ区15号溝出土遺物……203
第147図　野間Ｌ区20号溝……204
第148図　野間Ｌ区20号溝出土遺物……204
第149図　野間Ⅰ・Ｌ区ピット出土遺物……205
第150図　野間地区基盤層調査区……206
第151図　野間地区基盤層調査区出土遺物……207
第152図　野間Ｍ区表土出土遺物……208
第153図　野間地区Ｍ区遺構配置図① ……209～211
第154図　野間地区Ｍ区遺構配置図② ……212～214
第155図　野間Ｍ区下層水田断面層序 ……212～214
第156図　野間Ｍ区16トレンチ南壁断面層序……215
第157図　野間Ｍ区16トレンチ出土遺物……215
第158図　野間Ｍ区17トレンチ南壁断面層序……217
第159図　野間Ｍ区17トレンチ出土遺物……218
第160図　野間Ｍ区水田層出土遺物……220
第161図　野間Ｍ区ピット群出土遺物……220
第162図　野間Ｍ区水田下土坑群……221

第163図　野間M区301号土坑 ……222
第164図　野間M区302号土坑 ……222
第165図　野間M区303号土坑 ……222
第166図　野間M区304号土坑 ……223
第167図　野間M区305号土坑 ……223
第168図　野間M区306号土坑 ……223
第169図　野間M区307号土坑 ……224
第170図　野間M区308号土坑 ……224
第171図　野間M区309号土坑 ……224
第172図　野間M区310号土坑 ……225
第173図　野間M区311号土坑 ……225
第174図　野間M区312号土坑 ……226
第175図　野間M区314号土坑 ……226
第176図　野間M区315号土坑 ……226
第177図　野間M区316号土坑 ……226
第178図　野間M区317号土坑 ……227
第179図　野間M区318号土坑 ……227
第180図　野間M区水田下土坑群出土遺物……227

第６章　平原地区
第１図　平原地区Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区の調査区 …230
第２図　平原地区Ａ・Ｂ区遺構配置図 ……231
第３図　平原Ａ区表面採集遺物 ……232
第４図　平原Ａ区51号掘立柱建物跡 ……232
第５図　平原Ａ区52号掘立柱建物跡 ……233
第６図　平原Ａ区53号掘立柱建物跡 ……234
第７図　平原Ａ区54号掘立柱建物跡 ……234
第８図　平原Ａ区201号土坑……235
第９図　平原Ａ区201号土坑出土遺物……235
第10図　平原Ａ区203号土坑……236
第11図　平原Ａ区203号土坑出土遺物……236
第12図　平原Ａ区51号溝 ……237
第13図　平原Ｂ区ピット出土遺物 ……237
第14図　平原Ｄ区204号土坑……238
第15図　平原Ｄ区204号土坑出土遺物……239
第16図　平原Ｅ・Ｆ・Ｇ区の位置 ……240
第17図　平原Ｅ・Ｆ区遺構配置と層序 ……241
第18図　平原Ｅ・Ｆ区表土出土遺物 ……242
第19図　平原Ｅ・Ｆ区試掘トレンチ出土遺物 …242
第20図　平原Ｇ区出土遺物 ……242
第21図　平原Ｅ区211号土坑……243
第22図　平原Ｅ区212号土坑……244
第23図　平原Ｅ区213号土坑……244
第24図　平原Ｅ区１・３・６号溝と区画 ……245
第25図　平原Ｅ区２号溝 ……246
第26図　平原Ｅ区２号溝出土遺物 ……247
第27図　平原Ｅ区４号溝 ……247
第28図　平原Ｅ区４号溝出土遺物 ……247
第29図　平原Ｅ区５号溝 ……248
第30図　平原Ｅ区５号溝出土遺物 ……248

第７章　米田地区と上野第２遺跡Ａ・Ｂ地区
第１図　上野第１遺跡米田地区と
　　上野第２遺跡の調査区 ……249
第２図　米田地区調査区配置図 ……250
第３図　米田地区の調査区 ……251
第４図　米田Ａ区出土遺物 ……252
第５図　上野第２遺跡Ａ地区試掘坑配置図 ……252
第６図　上野第２遺跡Ｂ地区調査区の位置 ……253
第７図　上野第２遺跡Ｂ地区調査区
　　南壁断面層序 ……253
第８図　上野第２遺跡Ｂ地区出土遺物 ……254

第８章　自然科学的分析
図１　資料採取位置 ……255
図２　プラントオパール定量分析手順 ……256
図３　Ａ地点のプラントオパール密度から推定
　　した植物量 ……256
図４　Ｂ地点のプラントオパール密度から推定
　　した植物量 ……257
図５　Ｃ地点のプラントオパール密度から推定
　　した植物量 ……257
図６　Ｄ地点のプラントオパール密度から推定
　　した植物量 ……258
第９章　調査の成果と課題
第１図　柱穴構造による分類 ……263
第２図　柱穴配置による分類 ……264
第３図　基本寸法による分類 ……266
第４図　竪穴建物跡と掘立柱建物跡の床面積 …267
第５図　竪穴建物跡の分類 ……268
第６図　カマドの分類 ……269
第７図　土坑の分類 ……273
第８図　東原地区の建物の方向 ……280
第９図　野間Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ区の建物の方向 …280
第10図　野間Ｉ・Ｊ区の建物の方向 ……281
第11図　平原地区の建物の方向 ……281

挿入表目次

第１章　はじめに
第１表　日田バイパス埋蔵文化財調査の経過……３
第８章　自然科学的分析
表１　植物体中の珪化機動細胞密度 ……256
表２　各層で生産されたイネ籾の推定値 ……258

挿入写真目次

第４章　東原地区
写真１　東原Ｂ区の調査風景……31
写真２　（１号土器棺墓出土遺物）……41
写真３　（４号土坑出土遺物）……45
写真４　（３号竪穴建物跡出土遺物）……73
写真５　（10号土坑出土遺物）……77

第５章　野間地区
写真１　６号竪穴建物跡出土遺物 ……131
写真２　19号土坑出土遺物 ……136
写真３　32号土坑遺物出土状態 ……143
写真４　（道路状遺構）土坑１～10、Ａ～Ｉ …150
写真５　（道路状遺構）土坑９～19、Ｉ～０ …150
写真６　（道路状遺構）土坑24～33 ……151
写真７　（道路状遺構）土坑31～39 ……152
写真８　水場状遺構層序 ……155
写真９　24・25号建物の関係 ……168
写真10　９号竪穴：土坑１遺物出土遺物 ……177
写真11　10号竪穴内遺物出土遺物 ……185
写真12　水田面調査風景 ……185
写真13　水田面西半 ……208
写真14　奈良時代水田面 ……209
写真15　水田面の下部 ……211
写真16　16トレンチ完掘状態 ……212
写真17　17トレンチ層序① ……214
写真18　17トレンチ層序② ……216
写真19　水田層遺物出土遺物：Ｃ18区付近 ……219

第６章　平原地区
写真１　52・53号掘立柱建物跡 ……233
写真２　縄文時代土坑群の配置 ……243

第７章　米田地区と上野第２遺跡
写真１　水没する調査区 ……250

（コラム　現地説明会）
写真１～４　（現地説明会風景） ……290

一覧表・観察表目次

第１表　上野第１遺跡掘立柱建物跡および柱穴列一覧表 ……292
第２表　上野第１遺跡竪穴建物跡一覧表 ……294
第３表　上野第１遺跡土坑一覧表 ……295
第４表　上野第１遺跡溝一覧表 ……298
第５表　東原地区出土遺物観察表 ……300
第６表　野間地区出土遺物観察表 ……311
第７表　平原地区出土遺物観察表 ……340
第８表　米田地区上野第２遺跡出土遺物観察表 ……344

カラー図版目次

巻頭
上野第１遺跡全景……巻頭１
三隈川南岸空中写真１…… 〃 2
三隈川南岸空中写真２…… 〃 3
東原地区全景…… 〃 4上
刻書石製品…… 〃 4下
カラー図版１　東原地区：全景
野間地区：全景 ……345
カラー図版２　野間地区：全景 ……346
カラー図版３　野間Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ区
野間Ｇ・Ｈ区 ……347
カラー図版４　周溝建物と水場状遺構 ……348
カラー図版５　周溝建物
野間Ｉ・Ｊ区と水田 ……349
カラー図版６　野間Ｍ区：水田 ……350

写真図版目次

図版１　東原地区　東原Ａ・Ｂ区：全景
東原Ａ区　東原Ａ区：全景 ……351
図版２　奈良時代　１号掘立柱建物跡
２号掘立柱建物跡
３号掘立柱建物跡 ……352
図版３　１号土坑：遺物出土状態
：完掘状態、
：出土状態細部、断面土層 …353
図版４　近世　２号土坑：完掘状態
東原Ｂ区　東原Ｂ区：全景
古墳時代　１号墓 ……354
図版５　奈良時代　１号竪穴建物跡と４号掘立柱建物跡
１号竪穴建物跡：完掘状態
：地床炉検出状態…355
図版６　４号掘立柱建物跡：完掘状態
３号土坑
３号土坑：土層断面
４号土坑：完掘状態 ……356
図版７　近世　２号溝、４号溝
５号溝、６号溝：完掘状態 …357
図版８　５号土坑：完掘状態、７号土坑：完掘状態
東原Ｃ・Ｄ区　東原Ｃ区：全景
東原Ｃ区：空撮１、空撮２ …358
図版９　東原Ｃ区：空撮３、東原Ｄ区：全景
縄文時代　11号土坑：完掘状態
奈良時代　５号掘立柱建物跡 ……359
図版10　６号掘立柱建物跡
６号建物付属土坑、付属土坑：完掘状態
７号掘立柱建物跡 ……360
図版11　８号掘立柱建物跡
９号掘立柱建物跡
11号掘立柱建物跡
10・12号掘立柱建物跡：南半　361
図版12　12号掘立柱建物跡柱穴８
：刻書石製品出土状態①、
：出土状態②
10・12号掘立柱建物跡：北半
２号竪穴建物跡：遺物出土状態 …362
図版13　２号竪穴建物跡：完掘状態（南から）
：完掘状態（東から）
：カマド出土状態
：カマド遺物除去後…363
図版14　２号竪穴建物跡：カマド完掘状態
３号竪穴建物跡：完掘状態（北から）
：完掘状態（東から）…364
図版15　１号柱穴列
８号土坑、９号土坑
10号土坑：遺物出土状態 …365
図版16　13号土坑：遺物出土状態、：完掘状態
14号土坑：遺物出土状態
：完掘状態 ……366
図版17　15号土坑：土層断面、：遺物出土状態
近世　12号土坑：完掘状態、７号溝
８号溝 ……367
図版18　野間地区　野間地区：全景（東上空から） …368
図版19　野間地区：全景（南上空から） …369
図版20　野間Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ区：空撮
野間Ｅ・Ｆ区　野間Ｅ区：全景（上空から）…370
図版21　野間Ｅ区：全景（南から）
野間Ｅ区：北遠景
野間Ｅ区：中央遠景 ……371
図版22　野間Ｅ区：南遠景
13・14竪穴と26建物
野間Ｆ区：南遠景 ……372
図版23　野間Ｆ区：北遠景
奈良時代　16号掘立柱建物跡

17号掘立柱建物跡 ……373
図版24 26号掘立柱建物跡
27・28号建物の重複
27号掘立柱建物跡 ……374
図版25 28号掘立柱建物跡（西から）
28号掘立柱建物跡（南から）
29号掘立柱建物跡 ……375
図版26 4号竪穴建物跡：遠景
：遺物出土状態
：完掘状態 ……376
図版27 ：カマド横断面、：カマド縦断面
：カマド完掘状態、：カマド遺物出土状態
13号竪穴建物跡：完掘状態 …377
図版28 ：カマド遺物出土状態、：カマド完掘状態(北から)
：カマド完掘状態(東から)、54号土坑完掘状態
14号竪穴建物跡 ……378
図版29 52号土坑：遺物出土状態、：完掘状態
53号土坑、55号土坑
近世 25号溝：完掘状態、時期不明17号土坑 ……379
図版30 野間G・H区 野間G・H区
：全景（上空から）……380
図版31 野間G・H区：全景（東から）
野間G区
：周溝建物から谷を望む …381
図版32 奈良時代 周溝建物：検出状態
：全景 ……382
図版33 ：遺物出土状態
：完掘状態
3号柱穴列 ……383
図版34 周溝建物：周溝東側遺物出土状態
：周溝北側遺物出土状態
：周溝Ⅰ－Ⅰ´断面、
：周溝西側遺物出土状態(№27) …384
図版35 5号竪穴建物跡：遺物出土状態
：完掘状態
：カマド1完掘状態、
：カマド2遺物出土状態 ……385
図版36 ：カマド周辺遺物出土状態
：カマド周辺完掘状態
6号竪穴建物跡：完掘状態 …386
図版37 ：遺物出土状態
：カマド遺物出土状態、：カマド完掘状態
7号竪穴建物跡：遺物出土状態
：完掘状態 ……387
図版38 ：カマド内遺物出土状態、：カマド完掘状態
19号土坑：土層断面
：完掘状態 ……388
図版39 20号土坑：完掘状態、23号土坑：完掘状態
30号土坑
31号土坑：遺物出土状態
：完掘状態、
：遺物出土状態細部…389
図版40 近世 13号溝
道と水場 道路状遺構：全景(南から)、
：全景(北から) …390
図版41 奈良時代 ：位置
：水場状遺構との接続
：中央部 ……391
図版42 水場状遺構：全景(東から)
：全景(北から)
：全景(西から) …392
図版43 ：湧水点近く
近世 近世溝（西から）
近世溝（南西から）……393
図版44 野間Ⅰ・J・L・K区 野間地区Ⅰ・J・L区：全景 ……394
図版45 野間Ⅰ・J区：全景(北から)
：全景(西から) …395
図版46 縄文時代 39号土坑：遺物出土状態、
：深鉢(No.1)出土状態
奈良時代 21号掘立柱建物跡 ……396
図版47 23号掘立柱建物跡
24号掘立柱建物跡
25号掘立柱建物跡 ……397
図版48 30号掘立柱建物跡
32・33号掘立柱建物跡
8・9・15号竪穴建物跡
：遺物出土状態 ……398
図版49 ：完掘状態
9号竪穴建物跡：完掘状態
：カマド、：土坑2遺物出土状態
……399
図版50 8号竪穴建物跡：カマドと土坑1
：完掘状態
：カマド遺物出土状態、
：カマド、：カマド完掘状態…400
図版51 15号竪穴建物跡：完掘状態
：カマドと土坑1
：カマド完掘状態 ……401
図版52 10号竪穴建物跡：遺物出土状態
：完掘状態
：カマドと土坑1出土状態
：カマドと土坑1完掘状態 …402

図版53　11・12号竪穴建物跡
11号竪穴建物跡：完掘状態
：カマド内遺物出土状態
：カマド完掘状態 …403
図版54　12号竪穴建物跡：遺物出土状態
：カマドと周囲の土坑
：土坑１遺物出土状態、
：土坑２・３完掘状態 …404
図版55　：カマド縦断面、：カマド横断面
：カマド内遺物出土状態、
：カマド完掘状態
38号土坑：遺物出土状態、40号土坑 …405
図版56　45号土坑：上部出土状態
：完掘状態
：完掘時の底面の状態 …406
図版57　102号土坑、19号溝：全景
：全景
19号溝南半と44号土坑 ……407
図版58　44号土坑：須恵器甕出土状態、
：出土状態①（西から）
：出土状態②（東北から）、
：下部出土状態
中　世　22号溝
近　世　14・15号溝：完掘状態 ……408
図版59　20号溝
基盤層調査区　野間Ｇ・Ｈ区の調査区 ……409
図版60　野間Ｍ区　野間地区M区（水田）：全景 ……410
図版61　野間M区：全景
：調査完了時全景 …411
図版62　奈良時代水田面（東から）
水田下土坑群の位置 ……412
図版63　奈良時代水田面（西から）
水田下（西から） ……413
図版64　水田下（西南から）
水田脇のピット群：東半
水田脇のピット群：西半 …414
図版65　水田下土坑群：全景
水田下土坑群（南から）
水田下土坑群（北西から）…415
図版66　301号土坑、：301・302・303号土坑
302号土坑、：303・304号土坑
304号土坑、：305号土坑
306号土坑、：307号土坑……416
図版67　308・318号土坑、：309号土坑
310号土坑、：311号土坑
312号土坑、：314号土坑、
：315号土坑……417
図版68　平原地区　平原地区Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区：全景……418
図版69　平原Ａ・Ｂ区　平原Ａ・Ｂ区：全景
平原Ａ区：全景
奈良時代　51号掘立柱建物跡 ……419
図版70　52・53号掘立柱建物跡
201号土坑
203号土坑
近　世　51号溝 ……420
図版71　平原Ｃ・Ｄ区　平原Ｄ区：全景
204号土坑
平原Ｅ・Ｆ・Ｇ区　平原Ｅ・Ｆ区：全景（西から） …421
図版72　平原Ｅ区　平原Ｅ・Ｆ区：全景（南東から）
縄文時代　平原Ｅ区211号土坑、213号土坑
212号土坑……422
図版73　近　世　平原Ｅ区：南半
平原Ｅ区：全景
１・３・４・５号溝 ……423
図版74　２・３・４・５号溝：断面層序
平原Ｆ区　平原Ｆ区：全景
平原Ｇ区　平原Ｇ区：調査風景
：完掘状態 ……424
図版75　米田地区　米田Ａ区：全景
米田Ａ区：トレンチ
：Ａ区トレンチ南壁断面
米田Ｂ区 ……425
図版76　上野第２遺跡　Ａ地区
Ｂ地区からＡ地区を望む
Ｂ地区トレンチ層序 ……426
図版77　東原Ａ区　１号土坑：出土遺物１・６
２号溝：出土遺物１
東原Ｂ区　１号土器棺墓：出土遺物１
４号掘立柱建物跡：出土遺物４・５
１号竪穴建物跡：出土遺物１
３号溝：出土遺物３・10
４号土坑：出土遺物６
６号溝：出土遺物１・２・３ ……427
図版78　東原Ｃ・Ｄ区　表面採集遺物８
東原Ｃ区　10号掘立柱建物跡：出土遺物４
２号竪穴建物跡：出土遺物６・
８・11・23
３号竪穴建物跡：出土遺物７・
８・11 ……428
図版79　10号土坑：出土遺物10
14号土坑：出土遺物10・11・22
８号溝：出土遺物３・４・５
野間Ｅ・Ｆ区　表面採集遺物１
野間Ｆ区　４号竪穴建物跡：出土遺物１・

4・7 ……429
図版80　4号竪穴建物跡：出土遺物9・10・12・14・15・16・17・18・22・23・38・45
野間E区　52号土坑：出土遺物1・8
野間G・H区　表面採集遺物5・11 ……430
図版81　：表面採集遺物33・34
野間H区　周溝建物：出土遺物5・10・11・13・15・21・23・27・28 ……431
図版82　周溝建物：出土遺物30・31
野間G区　5号竪穴建物跡：出土遺物13・22・37・38・39
6号竪穴建物跡：出土遺物8
野間G区　7号竪穴建物跡：出土遺物1 ……432
図版83　7号竪穴建物跡：出土遺物4・8
19号土坑：出土遺物1
25号土坑：出土遺物1
31号土坑：出土遺物1・4・5・16・17・18
野間G・H区　ピット出土遺物17・18
13号溝：出土遺物1
道路状遺構：出土遺物5 …433
図版84　道路状遺構：出土遺物6
野間I・J・L区　表面採集遺物4・5
39号土坑：出土遺物1
野間I区　30号掘立柱建物跡：出土遺物1
9号竪穴建物跡：出土遺物1・2・5
8号竪穴建物跡：出土遺物1・13 ……434
図版85　15号竪穴建物跡：出土遺物1・3・4・5
10号竪穴建物跡：出土遺物1・2・19
11号竪穴建物跡：出土遺物1・5・7・8 ……435
図版86　11号竪穴建物跡：出土遺物9・13
12号竪穴建物跡：出土遺物2・3・6
野間J区　38号土坑：出土遺物1・4・7
45号土坑：出土遺物6
野間I・J区　19号溝：出土遺物4
野間L区　44号土坑：出土遺物1
野間I区　22号溝：出土遺物　1
野間I・J区　ピット出土遺物5
野間地区基盤層調査区　出土遺物2
野間M区　16トレンチ：出土遺物5 …436
図版87　野間M区　17トレンチ：出土遺物3・10・12
水田層：出土遺物1
水田下302号土坑：出土遺物1
平原A区　201号土坑：出土遺物1・5・6・13・14 ……437
図版88　平原E・F区　表面採集遺物4
試掘区：出土遺物6・8・9
平原G区　出土遺物5
平原E区　2号溝：出土遺物1
5号溝：出土遺物1
米田A区　出土遺物5
上野第2遺跡B区　出土遺物1・14 ……438

第1章　はじめに

第1節　調査にいたる経過

一般国道210号は、福岡県久留米市を起点とし、大分県日田市を経て大分市にいたる九州中部を横断する主要幹線道路である。しかし交通渋滞や事故多発のために、幹線道路としての機能は低下しつつあった。特に日田市街では、現道の幅員が約10mと狭いうえ、沿道の都市化の進行により交通の隘路となった。さらに九州横断自動車道の開通にともなう交通量増加が予想され、それは現実のものとなりつつあった。

幹線道路の機能低下

このような事態に対応して計画されたのが日田バイパスであり（第1図）、建設省九州地方建設局大分工事事務所により事業着手された。計画区間は日田市大字石井字串川から大字日高字小ヶ瀬にいたる延長5.3kmである。西半の大字石井字串川から大字高瀬字土ヶ迫にいたる延長2.2kmが2工区、東半の大字高瀬字土ヶ迫から大字日高字小ヶ瀬にいたる延長3.1kmが3工区である。1977（昭和52）年度に事業化され、1983（昭和58）年6月28日に都市計画決定された。1987（昭和62）年度から用地着手がおこなわれ、その進捗にともなって1988（昭和63）年度から工事着手した。3工区は1993(平成5)年12月3日に完成し、供用開始した。2工区は現在用地交渉および工事中である。

日田バイパス

大分県教育委員会では、日田バイパスの路線が遺跡の存在する可能性の高い台地上を貫くことと、この地域が奈良時代には石井駅がおかれ古代官道の路線にあたる可能性があることから、路線内の遺跡の保存措置が必要と判断し、建設省九州地方建設局大分工事事務所と協議を開始した。それに基づき、1987年1月に路線内の遺跡分布調査を実施した。その結果、9ヵ所の遺跡および遺跡推定地を確認した（第1図)。東から大部遺跡（1)、手崎遺跡（2)、琴平山遺跡（3)、高瀬遺跡（4)、陣ヶ原遺跡（5)、上野第1遺跡（6)、上野第2遺跡（7)、寺内遺跡（8)、護願寺遺跡（9）である。このうち上野第1遺跡から護願寺遺跡までの4遺跡が2工区に、大部遺跡から陣ヶ原遺跡までが3工区に所在する。

県教委の対応

分布調査

この分布調査の結果に基づき、建設省と大分県教委文化課の協議を進め、89年度から上記の9遺跡について発掘調査を実施することになった。

第2節　埋蔵文化財調査の経過と調査組織

第1表を参考にしながら年度をおって、日田バイパスの埋蔵文化財調査の経過を述べる。なお1988（昭和63）年度から1994（平成6）年度までは、『報告Ⅰ』(註1）でまとめているので、上野第1遺跡に関わる部分を抄出し、1995（平成7）年度から1997（平成9）年度までは『報告Ⅱ』(註2）にまとめているので省略する。

1989（平成元）年度　上野第1遺跡東原地区の試掘調査を実施した。奈良時代と考えられる掘立柱建物跡が認められたため、次年度に本調査をおこなうことになった。

1989年度の調査

この年度の調査概要は、渋谷忠章・友岡信彦・吉田寛『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』(1990　大分県教育委員会）に速報されている。

概報Ⅰ

調査組織は以下のとおり。

調査組織

調査主体　大分県教育委員会　島津文雄（教育長）
調査総括　後藤正二（教育庁管理部文化課課長）

後藤宗俊（教育庁管理部文化課課長補佐）
今永一成（　　同　　管理係長）
調査主任　渋谷忠章（教育庁文化課埋蔵文化財第２係係長）
調査担当　友岡信彦（　　同　　主事）
調査事務　西　哲弘（　　同　　主任）

1990年度の調査

1990（平成２）年度　前年度の試掘調査に基づき、東原地区の本調査を実施した。奈良時代の遺構が広範囲に広がることが判明した。そのため調査は長期化し、ほかの地区の調査は後年度に継続することとなった。とりわけ文字を刻んだ石の重り（刻書石製品）が出土し、その文字『豊馬豊馬』から古代の駅の遺跡ではないかと騒がれた。

概報Ⅱ

この年度の調査概要は、田中裕介『誠和神社裏遺跡　陣ヶ原辻原遺跡　上野第１遺跡（東原地区）――一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ―』（1991　大分県教育委員会）に速報されている。

この年度の調査組織は以下のとおり。

調査組織

調査主体　大分県教育委員会　島津文雄（教育長）
調査委員　賀川光夫（別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（福岡大学人文学部教授・大分県文化財保護審議会委員）
後藤宗俊（別府大学文学部教授）
調査総括　後藤正二（教育庁文化課課長）
徳丸欽也（　　同　　参事）
林　英輝（　　同　　課長補佐）
今永一成（　　同　　管理係長）
調査主任　清水宗昭（教育庁文化課埋蔵文化財第１係係長）
調査担当　田中裕介（　　同　　主事）
調査員　吉武牧子（　　同　　嘱託）
調査事務　西　哲弘（　　同　　主任）　山口淳史（　同　管理係主事）
原　浩一（　同　管理係主事）

1991年度

1991（平成３）年度　手崎遺跡・大部遺跡の調査にかかることになったので、この年は年度末に野間地区の試掘調査をおこなったのみである。

この年度の調査組織は以下のとおり。

調査組織

調査主体　大分県教育委員会　宮本高志（教育長）
調査総括　秋葉正嗣（教育庁文化課課長）
徳丸欽也（　　同　　参事）
林　英輝（　　同　　課長補佐）
今永一成（　　同　　管理係長）
調査主任　清水宗昭（教育庁文化課埋蔵文化財第１係係長）
調査担当　田中裕介（　　同　　主事）
調査事務　西　哲弘（　同　埋蔵文化財第２係主査）　山口淳史（　同　管理係主事）
原　浩一（　同　管理係主事）

1992年度の調査

1992（平成４）年度　上野第１遺跡の本調査を再開し、東原地区の拡張部（Ｄ区）・野間地区と平原地区の大半を調査した。奈良時代の集落跡・水田跡、近世の畠地区画など多くの遺構が発見され、93年１月24日には現地説明会を開催した。年度末には残された平原地区の一部と米田地区の試掘調査をおこない、次年度に本調査をおこなうことになった。

概報Ⅳ 年報２

この年度の調査概要は、田中裕介『上野第１遺跡（東原・野間・平原地区）――一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ―』（1993　大分県教育委員会）と、田中裕介「上野第１遺跡（東原・野間・平原地区）」『大分県埋蔵文化財年報２（1992年度版）』（1994　大分県教育委員会）に速報した。

この年度の調査組織は以下のとおり。

調査組織

調査主体　大分県教育委員会　宮本高志（教育長）
調査委員　賀川光夫（別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員）

第１表　日田バイパス埋蔵文化財調査の経過

No.	遺跡名	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	(年度)　備考
1	大部				▲●				◆	◆	■				
2	手崎		▲		▲●		●		◆	◆	■				91年度本道、93年度交差点調査
3	琴平山		▲												試掘調査のみで終了。
4	高瀬	▲	●					◆■							高瀬深ノ田遺跡と改名。
5	陣ヶ原		▲	●				◆■							陣ヶ原辻原遺跡と改名。
	誠和神社裏			▲●				◆■							工事用道路。
	後藤家墓地			○				◆■							工事用道路。確認調査のみ。
6	上野第１		▲	●	▲	●	●					◆	◆	■	
7	上野第２						▲							●	
8	寺内													▲	
9	護願寺									▲	●				一部本調査。寺内遺跡に。
概報			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ								
埋文年報					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	10は2001年度刊行予定
本報告								Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ	

▲　試掘調査　　●　本調査　　◆　整理　　■　報告書

後藤宗俊（別府大学文学部教授）
西別府元日（広島大学文学部助教授）
佐々木章（大分短期大学助教授）
飯沼賢司（宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員）
山崎純男（福岡市教育委員会文化課）
調査総括　秋葉正嗣（教育庁文化課課長）
衛藤伸一（　　同　　課長補佐）
今井義人（　　同　　課長補佐兼管理係長）
調査主任　清水宗昭（教育庁文化課埋蔵文化財第１係係長）
調査担当　田中裕介（　　同　　主任）　高畠　豊（　　同　　嘱託）
調査員　坂本嘉弘（　　同　　主査）　吉田　寛（　　同　　主事）
小柳和宏（　　同　　主任）　吉武牧子（　　同　　嘱託）
後藤幹彦（　　同　　嘱託）　安部聡子（　　同　　嘱託）
調査事務　西　哲弘（　同　埋蔵文化財第２係主査）　竹中啓司（　同　管理係主査）
原　浩一（　同　管理係主事）

1993（平成５）年度　上野第１遺跡の本調査を継続し、平原地区の一部と米田地区を終了し、上野第２遺跡の一部（Ａ・Ｂ地区）の試掘調査を実施した。

1993年度の調査

この年度の調査概要は、田中裕介・高畠豊『上野第１遺跡（平原・米田地区）上野第２遺跡　手崎遺跡（２・３次）―一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ―』(1994　大分県教育委員会）と、田中裕介「上野第１遺跡（平原・米田地区）」、田中・高畠豊「上野第２遺跡」『大分県埋蔵文化財年報３（1993年度版）』(1995　大分県教育委員会）に速報した。

概報Ⅴ　年報３

この年度の調査組織は以下のとおり。

調査組織

調査主体　大分県教育委員会　宮本高志（教育長）
調査委員　柳沢一男（宮崎大学教育学部教授）
調査総括　末広利人（教育庁文化課課長）
岡　忠夫（　　同　　課長補佐）
姫野守正（　　同　　課長補佐兼管理係長）
調査主任　清水宗昭（教育庁文化課埋蔵文化財第１係係長）
調査担当　田中裕介（　　同　　主任）　高畠　豊（　　同　　嘱託）
調査員　坂本嘉弘（　　同　　主査）　吉田　寛（　　同　　主事）
吉武牧子（　　同　　嘱託）

調査事務　西　哲弘（　同　埋蔵文化財第２係主査）　竹中啓司（　同　管理係主査）
原　浩一（　同　管理係主事）

1998 年 度　**1998（平成10）年度**　本年度から上野第１遺跡の報告書刊行に向けて本格的な整理作業をはじめた。遺物実測と浄書を中心に整理作業をおこなった。この年度の調査組織は以下のとおり。

調 査 組 織
調査主体　大分県教育委員会　田中恒治（教育長）
調査総括　後藤一郎（教育庁文化課課長）
田原基之（　同　参事兼課長補佐）
調査主任　清水宗昭（教育庁文化課課長補佐埋蔵文化財第２係係長）
整理担当　田中裕介（　同　主査）
調査員　綿貫俊一（　同　主査）　吉田　寛（　同　主任）

1999 年 度　**1999（平成11）年度**　引き続き整理作業をおこない、遺構編集・浄書と編集・執筆をおこなった。この年度の調査組織は以下のとおり。

調 査 組 織
調査主体　大分県教育委員会　田中恒治（教育長）
調査総括　山本芳直（教育庁文化課課長）
田原基之（　同　参事兼課長補佐）
調査主任　清水宗昭（教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財第２係係長）
整理担当　田中裕介（　同　主査）

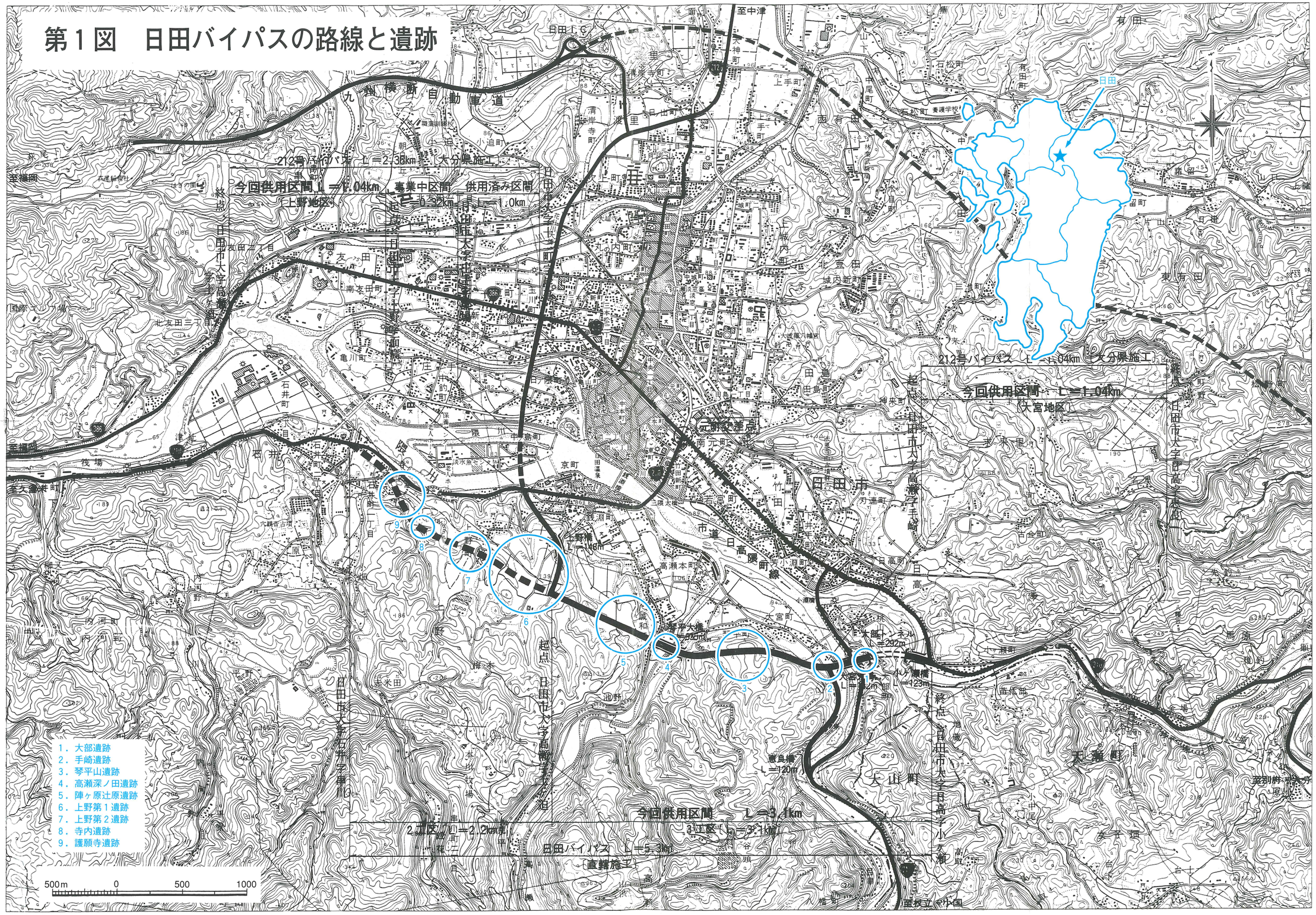
2000 年 度　**2000（平成12）年度**　今年度は報告書の印刷を発注した。調査組織は以下のとおり。

調 査 組 織
調査主体　大分県教育委員会　田中恒治（教育長）
調査総括　山本芳直（教育庁文化課課長）
伊藤正行（　同　参事兼課長補佐）
清水宗昭（　同　参事兼課長補佐）
調査主任　栗田勝弘（教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第２係係長）
整理担当　田中裕介（　同　主査　）

《註および参考文献》

註１．田中編『日田市高瀬遺跡群の調査１』(一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ）1995　大分県教育委員会
註２．田中編『日田市高瀬遺跡群の調査２』(一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ）1998　大分県教育委員会

第１図　日田バイパスの路線と遺跡



（建設省大分工事事務所編　日田バイパスパンフレットより）

第３節　調査日誌抄

上野第１遺跡の調査日誌を抄録する。

1989（平成元）年度

上野第１遺跡（試掘調査）

10月16日（月）東原地区の試掘調査を開始（～17日）。
17日（火）平原地区の試掘調査を開始（～11月2日）。
19日（木）野間地区の試掘調査。すべての地点で遺構を確認。
11月２日（木）試掘調査終了。

1990（平成２）年度

上野第１遺跡東原地区（本調査）・平原地区（確認調査）

７月６日（金）東原Ａ区よりトレンチ調査開始。
10日（火）Ａ区写真撮影・平板測量。Ｂ区トレンチ調査開始。
13日（金）Ｃ区の遺構検出作業開始。
17日（火）奈良時代の遺構が全体に広がること判明。
24日（火）平原地区の試掘開始（～31日）。奈良時代の遺構確認。
30日（月）Ａ区重機による表土剥ぎ。
31日（火）猛暑。Ａ区遺構検出作業開始（～８月２日）。Ｂ区重機による表土剥ぎ（～８月１日）。
８月１日（水）Ｃ区重機による表土剥ぎ。ほぼ遺構の全貌が判明。
３日（金）Ａ区遺構掘り下げ開始。掘立柱建物３棟、土坑１基。
８日（水）雷雨。Ｂ区遺構検出作業開始（～９日）。Ａ区遺構の写真撮影と実測開始。
９日（木）Ｂ区遺構掘り下げ開始。
10日（金）Ｂ区杭打。倉庫と竪穴がセットになる。
23日（木）橋本博文氏（早稲田大学）来訪。
24日（金）Ａ区平板測量補足。Ｂ区平板測量。
27日（月）Ｂ区古墳時代土器棺調査（～29日）。
30日（木）Ａ区完掘写真撮影。測量用杭打。
９月４日（火）Ｃ区測量用杭打。
10日（月）Ｃ区遺構検出作業開始（～13日）。
11日（火）Ｃ区平板測量。
12日（水）Ａ区平面実測開始（～14日）。
13日（木）Ｃ区柱穴調査開始（～20日）。
10月２日（火）Ｃ区12号掘立柱建物より刻書石製品出土。
３日（水）全区写真測量のため清掃作業。
４日（木）写真測量。
８日（月）以後Ｃ区の調査に集中。
19日（金）高瀬小４年生見学。調査指導委員会（賀川・小田・後藤３先生視察）。記者発表。
20日（土）水原道範氏（久留米市教委）来訪。
23日（火）全調査区の空中写真撮影。
30日（火）松村恵司文化庁調査官来訪。
11月13日（火）全調査工程終了。午後から現場片付け。
14日（木）現場撤収。

1991（平成３）年度

上野第１遺跡野間地区（確認調査）

１月24日（金）器材搬入。
28日（火）野間Ｆ区トレンチ調査開始（～31日）。
31日（金）野間Ｇ区トレンチ調査開始（～２月６日）。
２月６日（木）野間Ｈ区トレンチ調査開始（～２月12日）。
12日（火）試掘調査終了。奈良時代の遺物が多量に見つかる。

1992（平成４）年度

上野第１遺跡東原・野間・平原地区（本調査）

５月７日（木）関係各機関（建設省日田維持出張所、日田市都市計画課、日田市立博物館）と打ち合せ。
８日（金）東原地区に追加本調査の必要ある場所があること判明、Ｄ区として調査することになった。
11日（月）発掘器材を搬入、現地テント設営。平原地区試掘再開（～14日）。
12日（火）東原Ｄ区重機による表土剥ぎ（～13日）。安心院保氏（元県議会議長）来訪。
13日（水）東原Ｄ区遺構検出作業（～14日）。掘立柱建物群検出。
15日（金）東原Ｄ区、検出状態写真撮影。柱穴調査開始。
18日（月）東原Ｄ区平面実測開始（～19日）。野間地区重機による表土剥ぎ開始（～22日）。平原地区試掘トレンチ調査（～19日）。
19日（火）東原Ｄ区平板測量。
20日（水）東原Ｄ区調査終了。写真撮影。野間地区試掘トレンチ調査（～27日）。
21日（木）野間Ｍ区の試掘トレンチの水田層最下層で奈良時代の遺物出土。
25日（月）野間Ｊ区遺構検出作業、調査開始（～26日）。
26日（火）Ｊ区で縄文時代の土坑（39土坑）検出。
27日（水）調査範囲、水路付替え等について関係各機関担当者と協議。Ｈ区壁面清掃・観察（～６月３日）。
28日（木）拠点プレハブを市内銭淵町に設営。野間地区の調査区割り付け（Ｅ～Ｍ区）。
６月２日（火）現場プレハブ建設。最高気温32.4°
３日（水）Ｇ区壁面清掃・観察（～10日）。最高気温31.1°
５日（金）Ｈ区近世溝（10・11溝）調査開始（～９日）。
９日（火）Ｊ区15溝調査。Ｈ区で奈良時代の土坑列（道路状遺構）検出。
10日（水）Ｆ区壁面清掃・観察（～11日）。Ｍ区平板測量。
12日（金）Ｆ区遺構検出作業（～15日）。溝と柱穴

調査開始。
16日(火) F・G区測量用杭打(～17日)。
18日(木) G区遺構検出作業(～25日)。日野尚志氏(佐賀大学)来訪。
25日(木) G区柱穴調査開始。
7月2日(木) G区平面実測、竪穴と土坑の調査開始、測量用杭打
3日(金) F区竪穴と土坑の調査開始。
10日(金) M区16トレンチ土層実測
13日(月)～16日(木) 梅雨現場作業休止。
17日(金) I区遺構検出作業(～20日)。F区建物調査開始。
22日(水) I区遺構調査開始。このころから14日連続35°以上
24日(金) H区遺構検出作業(～8月4日)。
27日(月) H区測量用杭打(～28日)。
28日(火) F・G区平面実測(～29日)。
8月5日(水) H区遺構調査開始。G区平面実測(～7日)。
6日(木) J区遺構検出作業(～7日)。
7日(金) J区遺構調査開始。
11日(火) L区重機による表土剥ぎ(～17日)。
19日(水) L区遺構検出作業(～20日)。
20日(木) L区遺構調査開始。
この頃から半月間竪穴建物跡の調査に集中。
9月17日(木) 19溝は居住区から水田におりる道と判明。
10月1日(木) 野間地区全体の清掃。
2日(金) 野間地区の空中写真測量。
以後各区間の土手取り外しにかかる。
7日(水) E区重機による表土剥ぎ(～8日)。
12日(月) E区遺構検出作業、測量用杭打。
13日(火) E区遺構調査開始。
19日(月) I区平面実測。
26日(月) 道路状遺構の延長に谷頭に向う広い落ち込み検出。
27日(火) 午後1時ごろ竜巻が遺跡を横断、テント倒れる。
28日(水) L区45土坑は非常に深い。後に粘土採取坑と判明。
11月2日(月) M区トレンチ掘下げ開始(～17日)。
12日(木) 空中写真撮影。E区平面実測(～13日)。日田考古学同好会15名見学。
16日(月) G・H区平面実測。M区トレンチ土層調査開始(～25日)。H区8・9・15竪穴は3軒の重複であること判明。
17日(火) M区トレンチの最下層は奈良時代の水田らしい。
18日(水) E区平面実測(～25日)
19日(木) 渡辺幹男氏(緒方町歴史民俗資料館)来訪。
24日(火) 縄文時代以前の存否を確認するため試掘開始。
12月9日(水) I区全景写真撮影。平原A区遺構検出作業。掘立柱建物と土坑検出、調査開始。
15日(火) 平原B区遺構検出作業。
16日(水) L区平面実測(～18日)。平原B区調査開始。
18日(金) L区44土坑の底に須恵器の甕がつぶれている。
22日(火) 調査委員飯沼賢司氏(宇佐風土記の丘歴史民俗資料館)現地指導。日田咸宜大学46名見学。

1993(平成5)年

1月5日(火) 平原地区測量用杭打。調査委員西別府元日氏(広島大学)現地指導。
6日(水) 平原C・D区遺構検出作業(～7日)。
7日(木) 調査委員佐々木章氏(大分短期大学)現地指導、17トレンチのプラントオパール資料採取(～8日)。
11日(月) 平原A・B区平面実測。
12日(火) 平原A・B区完掘写真撮影。野間M区重機による掘下げ開始(～19日)。現地説明会の準備始める。
20日(水) 橋口定志氏(東京都豊島区教育委員会)見学。
21日(木) 野間地区重機による現道除去、遺構検出作業。
24日(日) 現地説明会開催。盛況。参加者200名を超える。
25日(月) M区調査開始。周溝建物調査開始。
27日(水) M区奈良時代水田面の検出作業開始。
2月1日(月) 空中写真撮影。
5日(金) 県教育委員会広報番組「ほっとはーと大分」取材。
12日(金) M区水田の下に土坑群検出。
18日(木) 周溝建物の全貌判明。日田市部課長会20名見学。
22日(月) 水場状遺構検出調査開始。
27日(土) 本調査終了。
3月2日(火) 平原E・F区試掘調査開始(～8日)。
4日(木) 米田地区試掘調査開始(～11日)。
9日(火) 平原E区重機による表土剥ぎ(～10日)。
11日(木) 上野第2遺跡A地区試掘調査開始(～16日)。
15日(月) 現場片付け、出土遺物箱詰め。
16日(火) 遺物を県文化財資料室に搬出。

1993(平成5)年度

上野第1遺跡平原・米田地区(本調査)
上野第2遺跡B地区(試掘調査)

4月22日(月) 平原F・G区重機による表土剥ぎ(～23日)。
23日(火) 平原E・F区本調査開始
5月23日(木) 米田地区本調査開始。
6月3日(月) 上野第2遺跡B地区試掘調査開始(～16日)。
7月29日(水) 本調査終了。
7月30日(木) 現場片付け、出土遺物箱詰め。
31日(金) 遺物を県文化財資料室に搬出。

第２章　三隈川南岸の地理と歴史

第１節　日田盆地の位置と地形

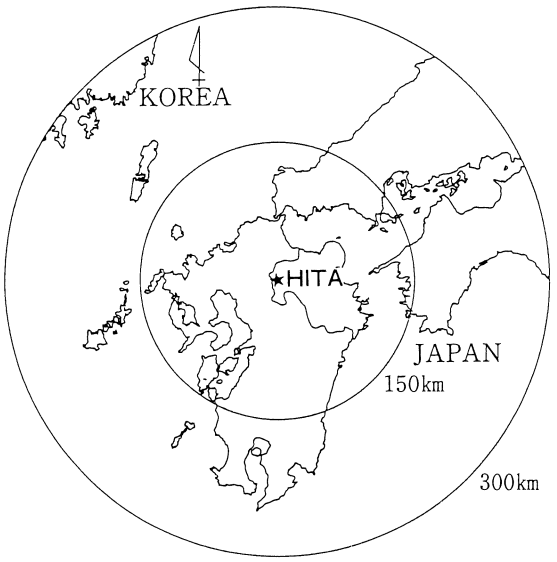
１－１　日田盆地の位置（第１・２図）

九州の中央

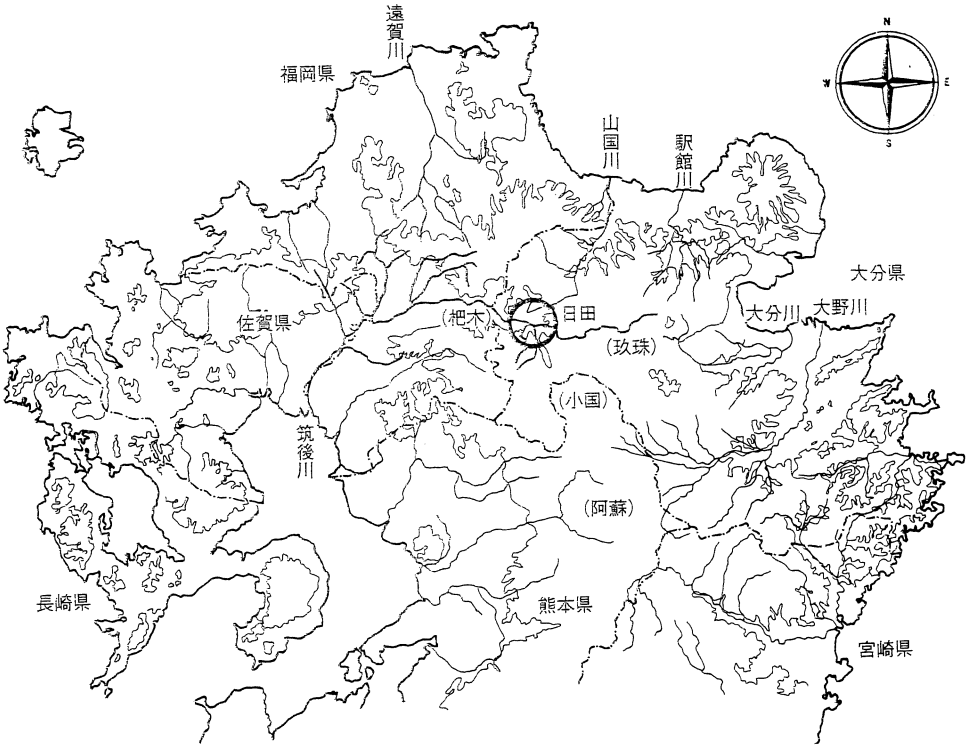
高瀬遺跡群の所在する日田盆地は、九州のほぼ中央に位置する（第１図）。現在の行政区分は大分県日田市に属し、古代以来の行政区画では西海道豊後国日田郡にあたる。その日田市は大分県の最西部に位置するが、水系的には筑後川流域に属し、北部および西部九州と関係が深い。視点を日田盆地の中央にすえると、西に筑後川を下って福岡県杷木・朝倉にいたり、東に玖珠川を遡ると玖珠盆地にいたる。北に大石峠を越えると山国川流域にいたり、豊前平野にでる。北西に山を越えると福岡県の遠賀川流域にいたる。さらに南に大山川を遡ると熊本県小国町に出て阿蘇に通じる（第２図）。日田盆地は一見山間の小盆地のように見えるが、このように筑前・筑後・豊前・豊後・肥後にいたる交通の要衝に位置していることがわかる。この地理的条件が、そこで展開した歴史に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

筑後川水系

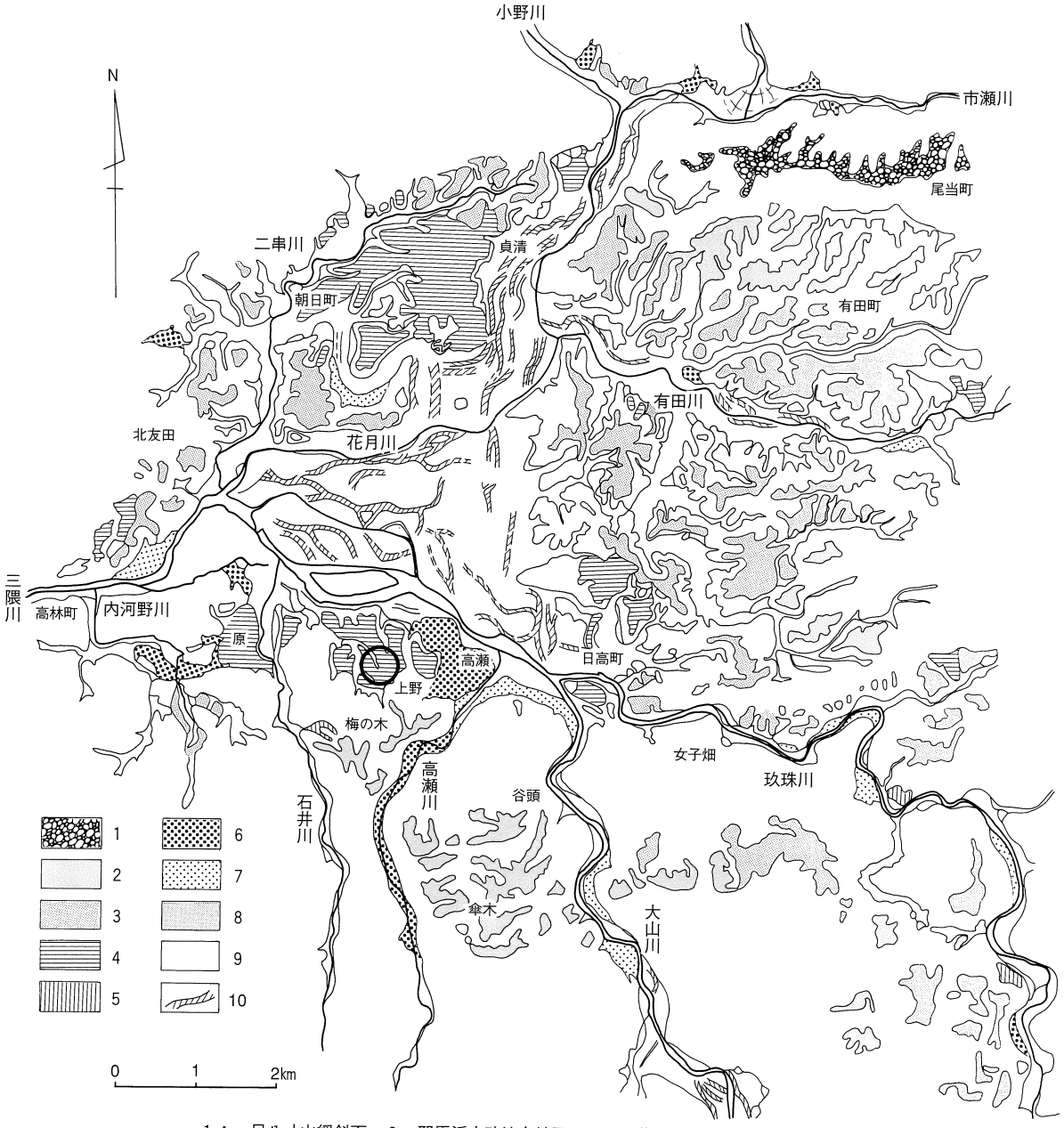
四通八達



第１図　遺跡の位置



第２図　日田盆地の位置と地勢



1：一尺八寸山緩斜面　2：耶馬渓火砕流台地面　3：阿蘇４火砕流堆積面　4：中位段丘１面
5：中位段丘２面　6：低位段丘１面　7：低位段丘２面　8：低位段丘３面　9：沖積面　10：河道跡

第３図　日田盆地の地形分類図（千田昇「日田・玖珠地域の地形」第２図を再トレース）

１－２　日田盆地の地形（第３図）

千田昇氏の研究

以下に日田盆地の地勢を千田昇氏の研究を紹介しながら述べる（第３図）(註１)。日田盆地の盆地底は標高65mで、盆地中央の標高は75～90mである。その外周の標高120～200mに平坦面が広がる。これは今を遡る約８万年前に噴出した阿蘇Ⅳ火砕流の堆積面としての台地面である。

日田盆地は火山活動の影響を受けた地形で、更新世の約90万年前の耶馬渓火砕流や、８～７万年前の阿蘇Ⅳ火砕流により盆地の埋積がおこなわれ、現在の盆地は阿蘇Ⅳ火砕流による埋積からの開析過程にあり、次の８つの地形面からなる。高位から順に説明する。

地形分類

一尺八寸山緩斜面　日田盆地周辺で最高位の地形面で、一尺八寸山（706.7m）とその西方に分布する。この緩斜面の高度は西部で350m、東方の一尺八寸山では700mに達する。全体が開析されて尾根状になった山頂緩斜面である。鮮新世後期の約270万年前の一尺八寸山安山岩により形成さ

れている。

耶馬渓火砕流台地面　97～90万年前に玖珠盆地南方の猪牟田カルデラから噴出した耶馬渓火砕流により形成された台地面である。盆地の北部と南部に分布し、北部の有田川北岸の尾当町で典型的にみられる。分布高度は一尺八寸山南麓で約500m、西方に向かって高度を下げ、尾当町で約340m有田町で200mである。盆地南部では開析が進み、尾根状になって分布する。高度は女子畑で200～270m、谷頭で300m、傘木で360m、梅の木で250mで基本的に盆地中央に向かい高度を下げる。

阿蘇Ⅳ火砕流堆積面　盆地周縁部に満遍なく分布している。阿蘇Ⅳ火砕流は日田盆地に流入して標高200m辺りまでほぼ完全に埋め尽くし、平坦な堆積面を形成した。その後現在の日田盆地の地形面はこの阿蘇Ⅳ火砕流の堆積面を開析して形成されている。

中位段丘１面　阿蘇Ⅳ火砕流堆積面の下位に比高10～30mの崖を作って分布する地形面である。盆地北部の貞清から朝日町にかけては標高110～150m、盆地南部の誠和町では標高120～150m、盆地西部の北友田では120～150mである。阿蘇Ⅳ火砕流堆積面の開析過程で、一時筑後川への出口が塞がり下方侵食が一時的に停滞したため、側方侵食が拡大した時期の河成段丘面と推定される。

上野第１遺跡

中位段丘２面　阿蘇Ⅳ火砕流堆積面がさらに開析されたときの地形面である。盆地内では阿蘇Ⅳ火砕流堆積面や中位段丘１面の縁辺部でみられる。

低位段丘１面　さらに盆地底が低下して形成された河成段丘面で、盆地出口の高井町で標高70～80m、中南部の高瀬本町で90～110mに分布する。

低位段丘２面　沖積面から数m高い面である。

沖積面　現在の盆地底を形成する地形面である。河道跡がきわめて明瞭である。高度は高井町でもっとも低く標高65m。盆地入り口の日高町では100m、花月川と小野川の合流点付近で20mである。

以上の地形分類をもとに千田氏は日田盆地の形成過程を次のように総括している。

日田盆地の形成過程

日田盆地では耶馬渓火砕流堆積の後長い侵食期に入り、その結果広い日田盆地（古日田盆地）が形成された。その後今からおよそ７～８万年前の阿蘇Ⅳ火砕流が古日田盆地を埋め尽くし、高度140～200mのきわめて平坦な広い堆積面を形成した。

以後筑後川水系はこの堆積面を開析する過程に転じ、下方侵食と側方侵食を繰り返し現在の盆地を形成してきた。中位段丘１面は阿蘇Ⅳ火砕流が堆積してから、それほど時間が経過しない時期に形成された面である。また浅い谷として残されているこの段丘面上の河道も自由蛇行の跡を残しており、火砕流堆積後下方侵食がそれほど強くない状態で、河道が自由に流れその結果、比高10m以下の小崖によって火砕流堆積面と隔てられたものと推定される。したがって中位段丘１面は、河成段丘としては高位置にある。中位段丘２面以下の段丘面は、下方侵食がほとんど現在の水準まで達したことで形成された段丘面である。

１－３　日田盆地の気候

川西博氏の分類

大分県の気候区分をおこなった川西博氏によれば（註２）、日田盆地は県内を四つの型に分けたうちの内陸山地型とされる（ほかに瀬戸内型Ⅰ、瀬戸内型Ⅱ、南海型がある）。その特徴は年降水量1800㎜以上で、降水量の年変化は６・７月極大型で梅雨期の雨が多い一方、９月の雨が少ない。冬の季節風の影響を最も強く受け、１月の降水日数は10～12日に達する一方、日照時間は130～140時間にとどまる、とされる。

内陸山地型

内陸盆地の気温

また内陸盆地では気温の平均日較差が10～11度と特に大きくなる。昼間海からの風が届かず、また盆地の内部と外部の大気の混合がおこなわれにくいので気温が上昇する。夜になると冷えた空気が盆地の底にたまってよどみ、上空の気温と混じりあわないので放射冷却が進んでさらに冷える。特に日田盆地では夏の暑さが際立っている。

上野台地の体感

以上の指摘は、我々の数年にわたる通年調査の実感と一致する。すなわち梅雨時の雨が多い割に台風の影響は少なく、冬はどんよりと曇った日が多くしばしば降雪があり、タイヤチェーンは必需品である。夏は暑く、上野第１遺跡調査たけなわの1992年夏には15日連続最高気温35度以上を記録し、その間37度の体温を超えた日が６日あり、こういう日は朝９時にすでに30度を超えていた。現場にはかげろうが立ってトランシットは焦点が定まらず、炎天下の作業は苛酷であった。いっぽう冬は寒く、朝現場が凍結し作業ができないこともしばしばで、遺構を霜から守るために大量のむしろを使用した。そして春と秋は盆地特有の霧が立ちこめ、季節の変化が実感しやすい。

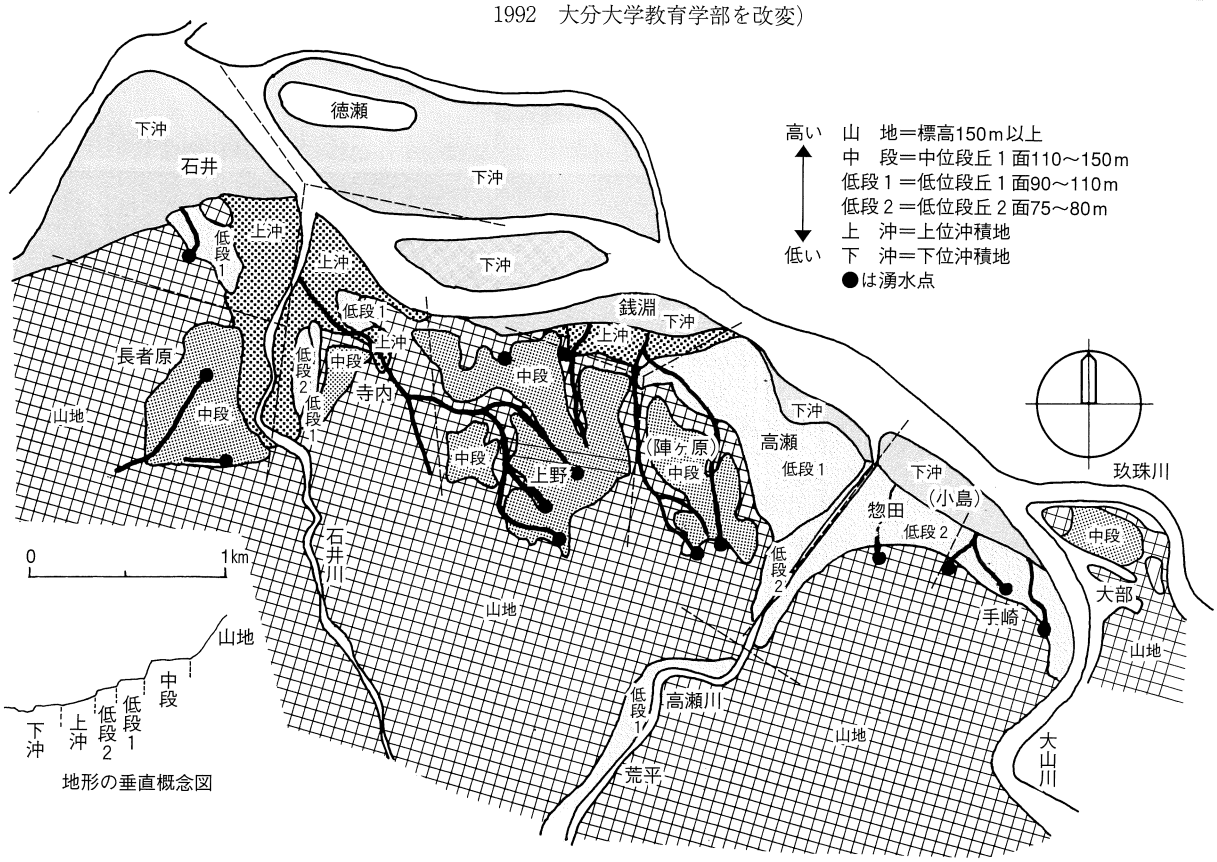
大分県内でも瀬戸内型気候が卓越する沿岸部とは気候がかなり異なる点は、後氷期の気候が安定した縄文時代前期以来基本的には変わっていないと考えられ、上野第１遺跡を残した先人たちは、今日われわれが実感する気候とほぼ同じ条件の中で生活したと考えて、間違いはないであろう。

《註および参考文献》

註１．千田昇「日田・玖珠地域の地形－とくに台地地形について－」『日田・玖珠地域－自然・社会・教育－』1992　大分大学教育学部

註２．川西博「気候」『大分県史　地誌編』1989　大分県

第４図　三隈川南岸の地形
（千田昇「日田・玖珠地域の地形」『日田・玖珠地域－自然・社会・教育－』1992　大分大学教育学部を改変）



第２節　三隈川南岸の地形（第４図）

第４図は千田昇氏の地形分類図（第３図）に調査遺跡と湧水点を加え、本報告の内容にしたがって改変したものである。この地図をみながら説明していこう。

２－１　地形区分の説明

下位沖積面　三隈川南岸地域の北は三隈川の沖積地に接し、東は大山川を東限とする。地形の全体は北から南に高くなり、高瀬川と石井川の２つの中河川が北流して三隈川に合流する（註３）。基本的な地形変化を標高の低い三隈川の本流域からみていくと、まず沖積地としては東から惣田地区の小島沖積面、銭淵の下位沖積面、石井地区北側の三隈川蛇行部に位置する沖積面が分布する。

三隈川本流の沖積地

これらの沖積地はいずれも三隈川本流の旧河道が埋積したもので、洪水時には河川敷に戻ってしまうという性質をもっており（註４）、現状では全面的に水田化されている。そこを下位沖積面と呼んで、後述する上位沖積面と区別しておきたい。下位沖積面が全面的に水田化されたのは近世であって、標高の高い微高地面を開発するため、三隈川の本流よりも水位の高い中河川に井堰を築いて取水している。たとえば惣田地区の小島は大山川に、石井地区の沖積面は石井川の河口近くに井堰を設けて水路導水をしている。これに対して中河川が近くにない銭淵下位沖積面では、旧河道部の低地のみは水田として利用されているが、微高地上は近代にいたるまで水田化できなかった（註５）。

現状は水田

小河川流域に分布

上位沖積面　小河川流域に分布する沖積面をこう呼んで区別する。流域面積は狭いものの下位沖積面に比べて洪水の影響を受けにくく、井堰から水田までの距離が短く、周辺の段丘や山地から流れこむ天水などを多角的に利用できるという利点をもっている。このような沖積面を上位沖積面と呼ぶことにする。三隈川南岸にはこのような上位沖積面が３地点存在する。銭淵の上位沖積面は陣ヶ原と上野の両段丘の間を流れる零細な小河川を水源とする沖積面で、流域面積は狭隘だが洪水の心配はない場所である。寺内の谷底沖積面は石井川のさらに支流の小河川が流れる谷底の低地である。もう一ヵ所は石井川の下流域で、この沖積面は流域面積が広く下位沖積面と同じ性質をもつが、段丘の縁辺部は比較的安定している。

台　地

低位段丘　以下にのべる段丘とは、日田地方で「原（はる）」と呼ばれている台地のことである。千田氏の研究によると低位段丘は標高の低い２面と標高の高い１面があり、手崎・惣田地区に低位段丘２面、高瀬地区に低位段丘１面、寺内地区に低位段丘１・２面と、石井地区に低位段丘１面の４地点が分布している。

上野台地

中位段丘　千田氏の分類による中位段丘１面である。この地域では最も高位の段丘面で、背後に山地が連なる。高瀬地区の陣ヶ原の中位段丘、上野の中位段丘、寺内の中位段丘、長者原の中位段丘の４地点に分布する。上野第１遺跡が立地するのは、この中位段丘である。

山地　段丘の南に連なる急峻な地形の部分で平坦地は少ない。現在はほとんど杉林になっているがかつてはかなり天然林を残していた。森林資源・動物資源の採集対象地として縄文時代以来利用されてきたが、現在でも水田化あるいは畠地化されているところはほとんどない。ただし惣田地区の南背後の山地上で、弥生時代後期から奈良時代まで小規模な集落が存在した口が原遺跡（註６）が知られているが、周辺の山地内には良好な水源や可耕地はなく、その性格が注目される。

２－２　段丘地形の特徴

湧水谷

上野第１遺跡の立地する段丘面の地形の特徴に触れておきたい。段丘面上には湧水点が何箇所かあり、その湧水が開析する浅い湧水谷が平坦な段丘面上にアクセントをつけている。湧水谷は比較的水田開発が容易であるが、段丘面そのものは大規模な灌漑施設を建設しないかぎり水田化は不可

能である。とくに河川との比高差の著しい中位段丘２面はその傾向が著しい。したがって段丘面は畠地として開発対象となるか、あるいは山地の延長としての役割をはたすことになりやすい。以上の段丘地形は三隈川南岸の景観の特徴をなすものであり、上位沖積面よりもはるかに広い面積をしめている。

畠地の卓越

ところで現在の段丘面上はかなり平坦な景観を呈しているが、この景観は、近世の畠地整理、近代の水田開拓をへて整えられた人工的景観である。上野中位段丘面に立地する上野第１遺跡の調査で段丘面の旧地形を観察したが（註７）、その結果近世の畠地整理以前は、比高１m内外の小起伏が連なっており、かなり凸凹した景観であったと推定される。つまり高燥な高位地形と水のたまりやすい窪み(ただし保水力はない)が連続し、その微地形変化に適応した利用がおこなわれていたと推定される。したがって段丘面を平坦化して均質な土地条件を作り出した近世の畠地整理以前には、微地形に応じて畑地・畠地・林・採草地・自然林がモザイク状に広がっていたと推定される（註８）。

小起伏の連続

湧水谷　湧水谷とは、湧水が流れ下る際に開析した狭い浅い谷であって、段丘上に点々と所在する。湧水点が山地から段丘面への変換点に存在するため、段丘面上では緩い傾斜の浅く広い池状の地形になるが、段丘の斜面を開析する際には急傾斜で狭く深い谷となるという地形的特徴がある。そのために湧水点に近い段丘上のほうが開発しやすい状況である。少面積ながら安定した湧水を利用した湿田として利用されており、収量は乾田に劣るが旱魃時にも不作になることはない安定度の高い水田となる。

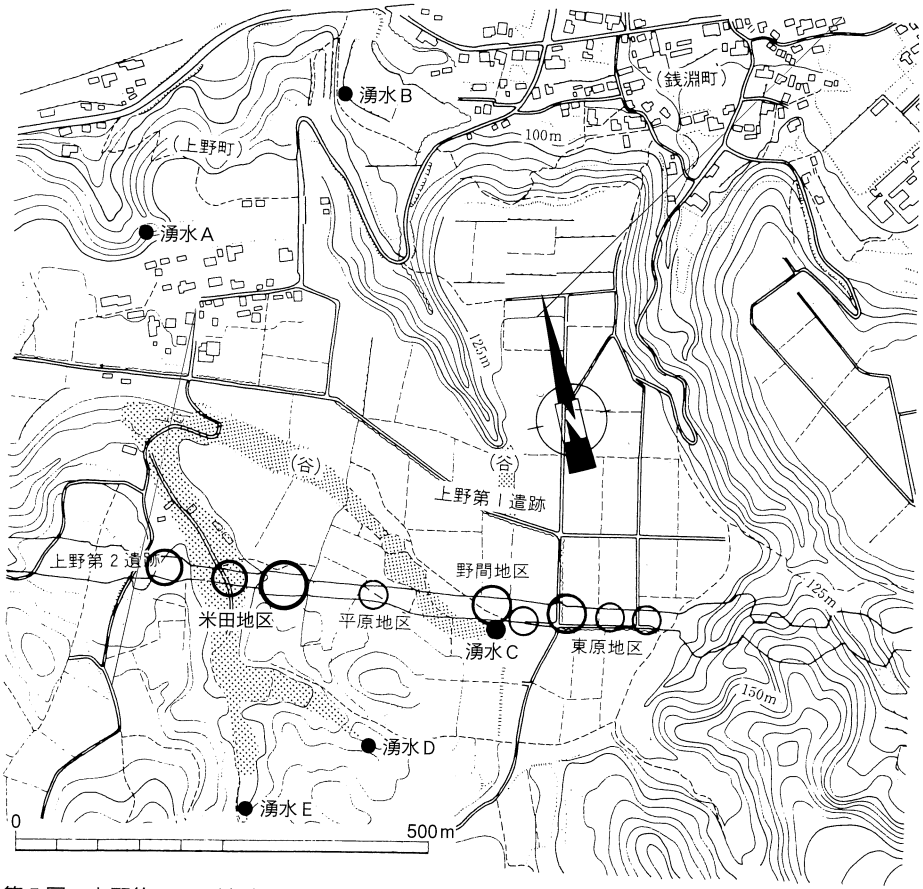
安定した湿田

《註および参考文献》

註３．近世以後に開発された三隈川本流域を大河川、その支流の大山川・高瀬川・石井川など奈良時代以後の技術段階で初めて直接取水可能となった川を中河川、それ以前の技術段階で利用可能な中河川の支流を小河川と呼び分ける。

註４．近代になっても1889年、1953年の洪水では水田全体が流出するような被害にあい、復興に10年以上の歳月をついやしている。

註５．ただし安定した微高地である徳瀬地区の沖積面では、微高地上はすでに弥生時代以降安定した集落が展開し、周辺でも平安時代ごろには水田化が進行していたことが、以下の調査から知られている。



第５図　上野第１・２遺跡と周辺地形

稲村博文・玉永光洋編『徳瀬遺跡』(大分県文化財調査報告94) 1996　大分県教育委員会
永田博久「村前遺跡」、松下桂子「徳瀬遺跡C地区」『平成7年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』1997　日田市教育委員会
吉田博嗣「徳瀬遺跡D地区」『平成9年度(1997年度)日田市埋蔵文化財年報』1999　日田市教育委員会

註6．吉田博嗣『口が原遺跡』(日田市埋蔵文化財調査報告17) 1998　日田市教育委員会

註7．以下の概報で簡単にのべたが、本報告書の中で詳述する。
田中裕介『上野第1遺跡－一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ－』1993大分県教育委員会

註8．畑地は焼畑などの移動する粗放な耕地、畠地は常畠的な毎年耕作可能な耕地、林は人為的な手入れや植樹によって作られた人工的なものと考えている。

第3節　上野地区の景観（第4・5図）

さて以上のように区分できる小単位の地形が複雑にからみあって三隈川南岸の地形全体ができあがっているわけであるが、次に近世の村の領域に基づく人文地理的単位としての上野地区（近世の上野村）の景観を、調査成果を交えながら、時代を逆に遡って見ていこう。

中位段丘上

上野第1遺跡と上野第2遺跡が所在する上野地区は、三隈川南岸中央に位置し、南岸でもっとも広い中位段丘面からなる。段丘を開析した谷の奥には三ヵ所の湧水谷が存在する。そのほかにも三隈川に面した北側の段丘裾に二ヵ所の湧水谷がある。段丘中央を大きく開析する小河川は西に流れて寺内地区・石井地区に至り、石井川に合流する。

湧水谷

近代から近世へ　段丘面は緩い傾斜をもち、北から南へ、東から西へと次第に下がっていく。現在は段丘面全体が水田化されているが、これは1910年代の耕地整理による開発（註9）であり、それ以前は湧水谷の水田と段丘面の畠地からなる景観であった。そして段丘の西北部には近世以来上野集落が展開している。

1910年代の水田化

さてその水田以前の畠地景観でさえ、上野第一遺跡や周辺遺跡の調査結果（註10）からみて、近世中期（18世紀）ごろに段丘面上に縦横に区画溝を掘り、一定の凸凹をならすことでできあがったものである。したがってそれ以前の中世、あるいはさらに遡って奈良時代集落が存在したころには、上野台地は現在の景観とは異なって起伏が多少あり、その中を湧水谷が開析し、台地上にはその起伏にあわせて畠地や林あるいは採草地が入り交じる景観であったと推定される。

畠地と谷水田

中世　以上の景観変化のなかで、現在の上野集落が中世後期に段丘上に成立していたことが、「西屋敷」「南園」「北屋敷」などの地名から推測される。当時の上野台地の景観は先に復元したように、まだ段丘面水田はなく、畠地もまた部分的な開発にとどまっていたと考えられる。それではなぜその中世の段階で上野集落が台地上に成立するのであろうか。それはおそらく上野段丘内を開析する湧水谷の水田開発がかなり進展したためと考えられる。第4図にも示したとおり、三隈川南岸の段丘地帯のなかで上野地区は湧水谷が最も多く、かつ流域にかなり広い水田が営まれている。詳細に上野台地内を観察すると、第5図のように少なくとも5ヵ所の湧水点と、その水を用水とする谷水田が、上野集落周辺の開析谷に存在する。そのうち古墳時代以前にまで開発が遡ると考えられるのは、上野台地北端の弥生時代集落や、付近の古墳群の存在からみて北側段丘裾の湧水点A・B周辺に限られると推定される。そして段丘内南側に存在する3ヵ所のうち、湧水点Cを水源とする谷水田の開発は、今回の上野第1遺跡の調査によって奈良時代まで遡り、その後営々と耕作されたことが判明している。湧水点D・Eの谷水田も奈良時代に開発された可能性があるが、米田地区の調査では湧水点に近接する場所を別にすれば、今日のように谷全体が水田と化するのは近世以後であると考えられる。くわえて湧水谷Cの開発は上野第1遺跡の奈良時代集落が台地奥に建設されるという歴史的に例外的な出来事にともなうもので、かりに湧水谷D・Eが同時に開発されていたとしても、それは後述するように、奈良時代にこの台地上に官道が建設されるという歴史的に特別な事情によるものであって、官道の重要性が低下し上野第1遺跡の集落が台地上から撤退した後の平安時代以後にあって、湧水谷C・D・Eの水田開発が順調に進んだとは考えられない。おそらくいったん奈良時代に開発され細々と維持されていた湧水谷C・D・Eの谷頭の水田を、中世になって拡大し、それを背景として上野地区の集落が成立するのではなかろうか。

上野集落の成立

湧水谷の開発

古代の開発

古代　では中世以前はどうなっていたのであろうか。その点はすでにたびたび触れたように上野第１遺跡の知見が重要である。遺跡は奈良時代の豪族居宅を含む大規模な集落遺跡で、その経営のために湧水谷水田を開発したりと、その規模と内容はこの地域の農業開発の自然な進展の中では営まれることのない集落であった。おそらく周辺における石井駅や関連する官道あるいは低位段丘上の高瀬条里の開発など、石井郷や日田郡の枠を越えた国家的計画による開発を前提として建設された集落と推定される。短期間でその集落は廃絶し、上野地区に限ればこの奈良時代の開発は例外的な現象で、後世にほとんど影響を与えていないと考えられる。

《註および参考文献》

註９.『日田市史』1990　日田市の第36表耕地整理事業一覧によれば、上野台地の耕地整理（水田化）は、高瀬耕地整理組合（組合長安心院義蔵－組合員152名）によって、1913（大正２）年工事着手、1917（大正６）年完了で、整理面積は約51町５反であった。

註10. 陣ヶ原辻原遺跡や手崎遺跡など。
田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査』１、1995　大分県教育委員会
田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査』２、1998　大分県教育委員会

第４節　三隈川南岸の歴史

上野地区を中心とした三隈川南岸に焦点をあてて、日田盆地の歴史を略述する。なお遺跡名のあとの括弧くくりの数字は第６図の番号である。

石器の採集

旧石器時代　旧石器時代の遺物が採集できる場所が、日田盆地各所に点在している。三隈川南岸の段丘上にも点在する。石井地区の長者原遺跡（41）ではナイフ形石器・細石刃が採集され、さらに長者原遺跡の南西に位置する平野遺跡でも三稜尖頭器などが採集されている（註11)。日田バイパス関係では低位段丘上の手崎遺跡（Ａ）で小石核と台形様石器が採集されている（註12)。

長期利用の遺跡と小遺跡

縄文時代　縄文時代になると遺跡は数を増し、段丘上に点々と存在するようになる。とくに三隈川南岸一帯は日田盆地のなかでも縄文遺跡の多いところである。低位段丘面から中位段丘面にかけて数多く存在し、手崎遺跡（Ａ）や長者原遺跡（41）のように近隣に湧水点を望む条件のよい場所は、縄文時代早期から晩期にかけて繰り返し居住地として使われている（註13)。このような繰り返し利用された「長期利用型遺跡」とは別に、特定の時期のみ立地する小遺跡が知られている。大部遺跡（Ｇ）で早期と晩期、誠和神社裏遺跡（Ｈ）で早期、上野第１遺跡（Ｅ）で早期と晩期の小遺跡が知られている（註14）ほか、惣田地区の山地上の口が原遺跡（87）でも黒耀石製の石器が採集されている（註15)。日田盆地の環境に適応しつつ、生活の拠点をここに定めた縄文集団が盆地内に割拠したと考えられる。

台地上の集落

弥生時代　前期後半から始まる吹上遺跡（４）・小迫辻原遺跡（１）をはじめ、前期末から中期にかけて、弥生集落が盆地全体に分布するようになる。その大半が沖積地を見下ろす台地の縁辺部に立地する。三隈川南岸でも、惣田遺跡で環壕をともなう集落遺跡（88)(註16）が知られ、高瀬遺跡（89）・赤塚遺跡（32）・長者原遺跡（41）・上野第１遺跡（36）もそのような遺跡である。ところで惣田地区背後の山丘平坦地上に口が原遺跡（87）があり、後期から小集落の形成がはじまる（註15)。一方沖積地の微高地上にも徳瀬遺跡（８）(註17）・柳本遺跡（32）等の集落が立地する。上野第１遺跡でも現在の上野集落周辺で、弥生時代前期から中期の遺物が知られている。その後弥生時代後期後半には大半の遺跡は台地上から姿を消す。

前方後円墳体制

古墳時代　この時代は後の奈良時代に成立する五郷の前身となる政治的単位が成立する時代である。小迫辻原遺跡（１）の「豪族居館」の出現からみて、古墳時代の当初から前方後円墳体制に組み込まれたことは明らかであるが、前中期には明確な前方後円墳は存在せず、後期になって初めて首長墳に前方後円墳が採用される。すなわち後の亘理郷にあたる政治的領域に天満１・２号墳（註18)、有田郷に城山古墳（註19)、石井郷に護岸寺１号墳（73）が築かれる。刃連郷には前方後円墳ではないが法恩寺古墳群（65）が営まれる（註20)。

古墳の分布

高瀬地区を含む三隈川南岸地帯は後の律令期に石井郷に編成されることになる。その前身となる

政治単位の首長は石井地区のガランドヤ古墳群（77）(註21）・穴観音古墳（75）(註22）である。高瀬地区にも中期の円墳姫塚古墳（69）(註23）や、惣田地区には後期の横穴式石室墳惣田塚古墳（68）が知られているほか、大山川を東にわたった大部地区の山頂上に位置する牧原遺跡では古墳時代前期の３基の小円墳と小方墳が調査されている（註24）。上野地区でも集落北側の台地縁辺に、かつてカグネ塚古墳（71）、姥塚古墳（72）などの古墳が存在したと伝えられるほか、台地から派生した急な尾根上にある銭淵石棺（70）が知られている。集落遺跡としては手崎遺跡（A）(註12）・口が原遺跡（87）(註15）・陣ヶ原遺跡（35）(註25）・陣ヶ原辻原遺跡（D）(註26）・長者原田迎遺跡（F）(註27）が知られ、同時代の古墳が存在しない段丘上に、集落が発見される傾向がある。

比多国造

ところで古墳時代後期にあたる６世紀には日田地域に「比多国造」が設定されたとみえるので盆地全体がひとつの政治的領域とみなされたと推定され、欽明朝には日下部君の祖邑阿自が靱部として仕えたという記事が『豊後国風土記』日田郡条にみえる。おそらく比多国造の祖先伝承に由来する記事であろう。この比多国造の墓の最有力候補は天満古墳群である。

奈良時代　７世紀後半には日田地方には日田評が設定され、日下部氏が評督・評造に任命されたであろうことが、「久須評」木簡の存在から類推されている（註28）。その後日田評は豊後国に属すことになり、701年の大宝律令の制定により日田郡となる。日田郡は靱編・石井・在田・亘理・夜開の五郷からなり、高瀬地区は石井郷に含まれたと考えられる。また石井郷内には石井駅がおかれていたことが『延喜式』の記載などからわかっているが、その具体的所在地については定説はない。しかし駅が置かれているのであるから、三隈川南岸にあたる高瀬地区周辺に古代官道が存在した可能性は高い。この官道については石井地区から寺内地区さらに上野地区にいたる直線路の推定と、高瀬地区の道路渡河点の位置推定をおこなったことがある（註29）。すなわち官道は上野台地上の今回報告する上野第１遺跡の北側に建設されていた可能性が考えられる。

日田郡
石井郷
石井駅と官道

ところで日田郡は律令の規定では下郡にあたり、大領・小領・主帳の３名の郡司が任命されていた。天平９年（737年）の『豊後国正税帳』によれば、３名のいずれの郡司も日下部姓を名乗り、しかも、血縁者が郡司を占めることを禁止した規定から、その３氏は別氏族であったと考えられているので、古墳時代以来の日田の有力首長はみなかつて「日下部」に組織されたことを物語っている。おそらく三隈川南岸の、首長古墳である護願寺古墳（73）・ガランドヤ古墳群（77）・穴観音古墳（75）の被葬者もまた日下部姓を名乗った可能性が高い。

条里制の遺構としては高瀬の低位段丘上に高瀬条里があるほかは、三隈川南岸には明確な条里はないが、惣田遺跡（88）で奈良時代に先立つ７世紀の水路遺構が発見されている（註16）。そのほか高瀬地区周辺では、手崎遺跡（A）・口が原遺跡（87）(註15）・陣ヶ原辻原遺跡（D）・上野第１遺跡（E）・長者原田迎遺跡（F）等の奈良時代の集落遺跡が知られている。

条里遺構

平安時代　９世紀には前豊後国介中井王が日田郡に本拠をおいて「悪政」をおこなったことが『続日本後紀』承和９年（842年）の記事にでている。彼の私宅がどこにあったか不明だが、筑後・肥後に浮浪したという点からみると、交通路からみて石井郷に本拠をもった可能性が考慮されてもよい。その後長元９年（1036年）には日下部為行による「別名」申請がおこなわれ、三隈川南岸でも「石井別符」の開発がおこなわれたことを『宇佐宮神領大鏡』は伝えているが、同時にこの開発が６世紀以来の豪族日下部氏による最後のものであり、以後日田郡は大蔵氏の時代になる。別符の開発地点からみて、日下部氏の本拠は靱編郷にあり、大蔵氏の拠点は花月川流域を拠点としたと推定されている（註28）。

中井王
石井別符

さて『日田郡司職次第』にみえる12世紀の大蔵氏一族内部の抗争のなかで、大蔵氏「重代の郎従」として高瀬氏が文献に初めて登場する。「高瀬」氏を称する点からみて、三隈川南岸の高瀬地区を名字の地として土着した土豪であり、現在の高瀬条里付近を拠点にして成長したと推定される。以後高瀬氏は16世紀までその地位を継承する。ところで12世紀後半に日田盆地の大半は、日田大蔵氏によって寄進され日田荘（金剛心院領）となり、三隈川南岸は宇佐神宮領となった石井別符をのぞいて、すべて日田荘に属したと推定される。しかし今のところ沖積低地の荻鶴遺跡で11世紀ころから水路遺構が発見されているほか（７）(註30）は、平安時代の遺跡はほとんど空白といってよく、

大蔵氏
高瀬氏
日田荘

わずかに手崎遺跡で9世紀の土坑と土器が知られているのみである（註12）。

大友姓日田氏

鎌倉・室町時代　日田大蔵氏は地頭職を源頼朝より安堵され御家人となった。以後15世紀中ごろに大蔵姓日田氏は断絶し、大友姓日田氏に交替するが、大友姓日田氏も16世紀前半に断絶し、以後戦国時代には、守護大友氏より指名された「郡老」にゆだねられた。その当初の郡老6名のなかに高瀬山城守の名があり、高瀬氏が中世を通じて日田氏の有力被官として推移したことを示している。この時代の遺跡としては、高瀬低位段丘上に立地する中世寺院永平寺（いひじ）跡があり、現在水田内に礎石と板碑群が残り、板碑には1311（応長元）年と1313（正和2）年の銘がある。12世紀中ごろに創建され、16世紀中ごろに廃寺になったと伝えられている。また惣田地区には14世紀中ごろに創建されたと推定される普門寺がある。1409（応永16）年銘の木造笑巌和尚造が伝来している。その外に手崎遺跡で鎌倉時代の墓地が発見されたり（註12）、長者原田迎遺跡で16世紀の建物群が発見されている（註27）。

永平寺板碑

普門寺

江戸時代　大友氏除国後、豊後国は太閤蔵入地となり、高瀬氏は帰農して高瀬村の庄屋となる。日田地方は大半が江戸幕府直轄領として幕末にいたる。高瀬地区は当初高瀬村その後、北高瀬・南高瀬・西高瀬の三村に分けられている。享保年間に西高瀬村の沖積地に小島井ぜきが開削され水田化される。

天領

近現代　明治維新により1868（明治元）年日田地方は日田県となり、1872（明治4）年大分県に編入される。高瀬地区は大分県日田郡となり、1875（明治8）年北高瀬・南高瀬・西高瀬の3村は合併して高瀬村に、さらに1889（明治22）年には上野村を合併する。1910～20年代に高瀬村の中低位段丘上が水田化される大規模な耕地整理事業がおこなわれる。1940（昭和15）年日田市に編入され現在にいたる。

高瀬村

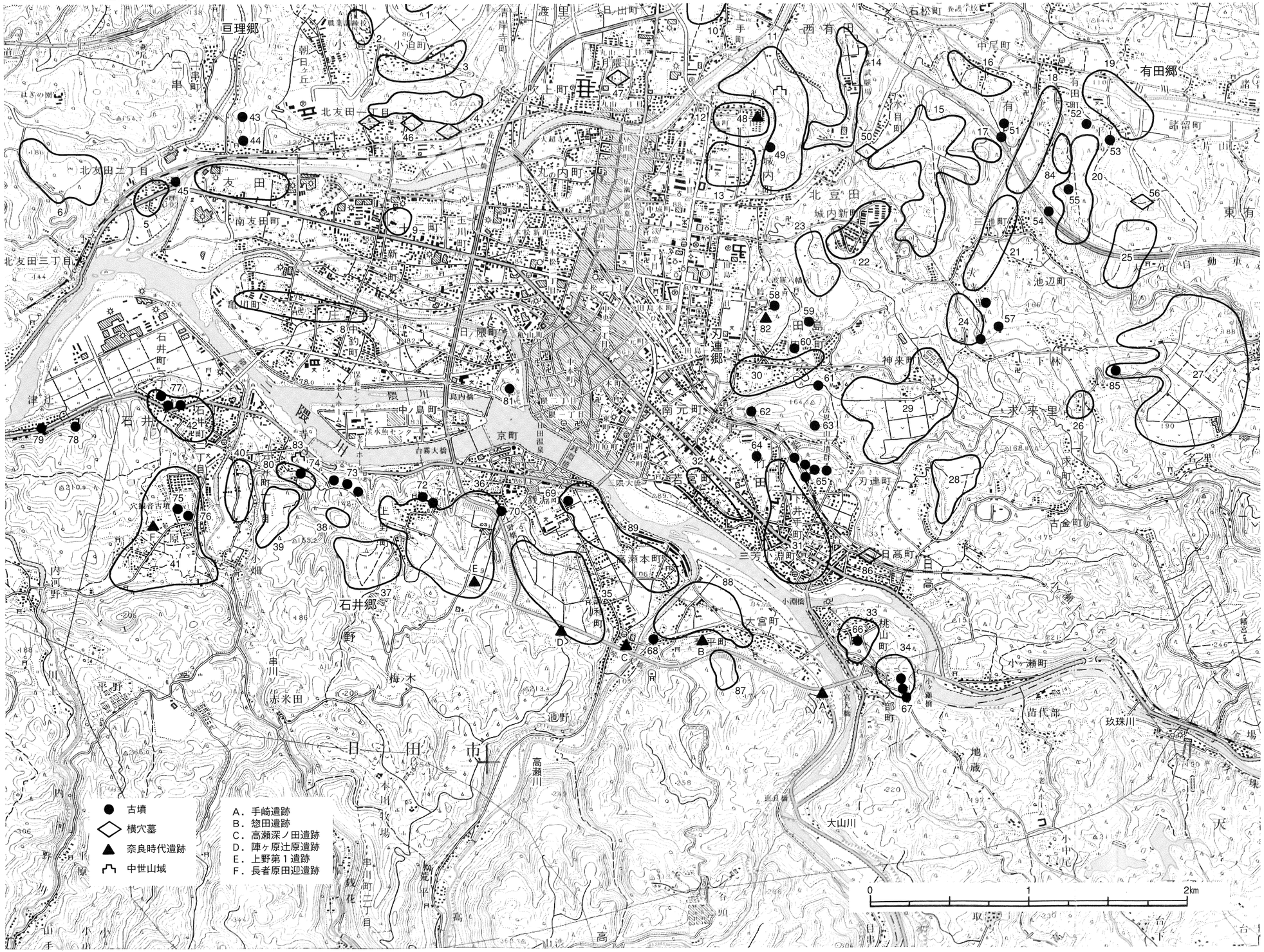
《註および参考文献》

註11. 穴井通照「旧石器・縄文時代」『日田市史』1990　日田市史
註12. 田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査2　手崎遺跡　大部遺跡』126頁　1998　大分県教委
註13. この大規模な2遺跡でも縄文時代中期の遺物はきわめて少なく、そのことは大分県全体の動向と一致する。
註14. 土居和幸「上野第1遺跡」『平成8年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』1998　日田市教育委員会
註15. 吉田博嗣『口が原遺跡』（日田市埋蔵文化財調査報告17）1998　日田市教育委員会
註16. 土居和幸「惣田遺跡」『平成4年度（1992年度）日田市埋蔵文化財年報』1994　日田市教育委員会
註17. 稲村博文・玉永光洋『徳瀬遺跡』（大分県文化財調査報告94）1996　大分県教育委員会
註18. 吉田博嗣「天満古墳群」『平成9年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』1999　日田市教育委員会
註19. 大分県前方後円墳研究会「大分の前方後円墳集成1」『おおいた考古』1　1988　大分県考古学会
この測量報告では、前方部が狭小な点から城山古墳を前期古墳としているが、墳丘の高さと周辺の改変の状況から、横穴式石室墳の可能性が高いと、現在筆者は考えている。
註20. 賀川光夫・小田富士雄ほか『法恩寺山古墳』1959　日田市教育委員会
註21. 小柳和宏『ガランドヤ古墳群』1986　大分県教育委員会
註22. 村上久和「穴観音古墳」『大分の装飾古墳』1995　大分県教育委員会
註23. 賀川光生「大分県における三つの竪穴式石郭を有する古墳」『西日本史学』15　1953　西日本史学会
土居和幸『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅲ　1988　日田市教育委員会
註24. 松下桂子『牧原遺跡』（日田市埋蔵文化財調査報告12）1997　日田市教育委員会
註25. 栗田勝弘「陣ヶ原遺跡」『大分県埋蔵文化財年報』1（1991年度）、1993　大分県教育委員会
註26. 田中裕介「陣ヶ原辻原遺跡」『日田市高瀬遺跡群の調査1』1995　大分県教育委員会
註27. 行時志郎編『長者原田迎遺跡』（日田市埋蔵文化財調査報告5）1992　日田市教育委員会
註28. 西別府元日「古代」『日田市史』1990　日田市
註29. 田中裕介「日田盆地三隈川南岸の考古学からみた開発史」『大分県地方史』154　1994　大分県地方史研究会
田中裕介「高瀬地区の開発史」『日田市高瀬遺跡群の調査1』1995　大分県教育委員会
註30. 行時志郎編『荻鶴遺跡』（日田市埋蔵文化財調査報告9）1995　日田市教育委員会

以上の記述にあたっては、とくに次の文献を参照にした。

『大分県土地改良史』1979　大分県耕地課。『大分県史地誌編』1989　大分県。『日田市史』1990　日田市。『日田・玖珠地域－自然・社会・教育－』1992　大分大学教育学部。田中裕介「日田盆地三隈川南岸の考古学からみた開発史」『大分県地方史』154　1994　大分県地方史研究会。『日田市高瀬遺跡群の調査1』1995　大分県教委。『日田市高瀬遺跡群の調査2』1998　大分県教委。

第６図　日田盆地の主要遺跡（1/25,000）



1．小迫辻原遺跡
2．森本遺跡
3．鍛冶屋廻り遺跡
4．吹上遺跡
5．三郎丸遺跡
6．穴原遺跡
7．荻鶴遺跡
8．徳瀬遺跡
9．日田条里郷四郎地区
10．日田条里上手地区
11．大蔵古城跡
12．慈眼山遺跡
13．上馬場遺跡
14．佐寺原遺跡
15．中尾原遺跡
16．宮ノ下遺跡
17．大迫遺跡
18．尾漕遺跡
19．平島遺跡
20．祇園原遺跡
21．森の元古墳
22．湯尻遺跡
23．赤迫遺跡
24．馬形遺跡
25．塚ヶ原遺跡
26．求来里平島遺跡
27．町野原遺跡
28．東寺原遺跡
29．元宮遺跡
30．会所宮遺跡
31．上井出遺跡
32．柳の本遺跡
33．桃山遺跡
34．牧原遺跡
35．陣ヶ原遺跡
36．上野第１遺跡
37．上野第２遺跡
38．寺内遺跡
39．赤塚遺跡
40．尾坪遺跡
41．長者原遺跡
42．尾園遺跡
43．鳥越古墳
44．片山石棺
45．三郎丸古墳
46．北友田横穴墓群
47．月隈横穴墓群
48．慈眼山瀬戸口遺跡
49．丸山古墳
50．水目横穴古墳
51．中尾古墳群
52．塔ノ本古墳
53．平島古墳
54．尾漕古墳
55．尾漕２号古墳
56．平島横穴墓群
57．ガニタ古墳群
58．薬師堂山古墳
59．丸尾神社古墳
60．丸尾古墳
61．田島古墳
62．鳥羽塚古墳
63．会所山古墳
64．鬼塚古墳
65．法恩寺古墳群
66．千人塚古墳
67．牧原古墳群
68．惣田塚古墳
69．姫塚古墳
70．銭淵古墳
71．カグネ塚古墳
72．姥塚古墳
73．護願寺古墳群
74．寺内古墳
75．穴観音古墳
76．倉園古墳
77．ガランドヤ古墳群
78．津辻２号墳
79．津辻１号墳
80．護願寺遺跡
81．日隈古墳
82．大波羅遺跡
83．寺内古城
84．長迫遺跡
85．亀ノ甲古墳
86．東寺横穴墓群
84．口ヶ原遺跡
88．惣田遺跡
89．高瀬条里・銭淵遺跡

第３章　調査の方法と報告書の凡例

まず発掘調査の対象となった上野第１遺跡の現状と周辺の調査状況にふれ、現地調査と整理の方法・経過についてまとめておく。

第１節　上野第１遺跡の現状

１－１　調査前の上野台地（第５図）

上野第１遺跡の立地する上野台地は三隈川南岸に東西に連なる台地群の一つである。標高130～140mで東西約600m南北約600mの広さをもち、北側は銭淵の低段丘をへて三隈川に落ち、東側は比高20mの谷を挟んで陣ヶ原台地が隣り合う。西側も深い谷を挟んで小丘陵が続きその西に石井低地がつづく。いっぽう南側は山地地形に変わる。

比高20m

上野台地は平坦な地形で、台地内には比高２～５mの谷が３条開析し、そのうち調査区を横切る谷の谷頭に自然湧水がある。湧水点は台地上ではこの１ヵ所のみである（第２章第４・５図）。

谷と湧水

上野第１遺跡は、この台地の南側一体に東西500m近くにわたって広がっている。そのため遺跡の立地する地形も一様ではない。第５図は調査区にあわせて台地東西の断面図を作成したものである。上野第１遺跡はその東端がもっとも高く、M区の谷に向かって次第に高度を下げ、谷の西ではふたたび高くなり、平原地区Ａ区を頂点として西の米田地区の急な谷に向かって次第に高度を下げている。これが現在の水田化された状態から読み取れる地形である。

台地上の微地形

現在台地上は、西北部の上野集落と南東部の浄水場・病院を除いて、すべて水田化されている。この水田は1913（大正２）年開始の耕地整理事業によるもので、当時水源のない上野台地に水を引くために大山川の上流から水路を開削しており、三隈川南岸台地上一体を水田開発する大事業の一環であった（註１）。水田化以前の地形は小字地名と地元住民の伝承を聞き取り、それに発掘調査の成果を加えることによって明らかとなった。それによれば台地全体に畠地が広がり、現在よりも起伏に富んでいたようである。畠地は台地全体に隙間なく広がり、草地あるいは山林として残されたのは、耕作地の造成不能な台地の斜面や、丘陵の頂上部に限られ、個々の畠の境界には溝がきられていた。いっぽう台地内唯一の湧水のわく谷は、古くから水田として使用されていたと思われ、「しょうやのた」という呼称が伝えられている。つまり上野村の庄屋の田の意味である。この大正時代の水田化の際に台地上の小起伏はかなり均されており、そのため遺跡は部分的に削平されたり、逆に埋められたために保存のよい部分があった。調査前あるいは今日みられる台地上の景観とその平坦な地形は、その水田開発によって生まれたものである。われわれの調査はこの現状から出発した。

現状の水田

湧水谷の水田

《註および参考文献》

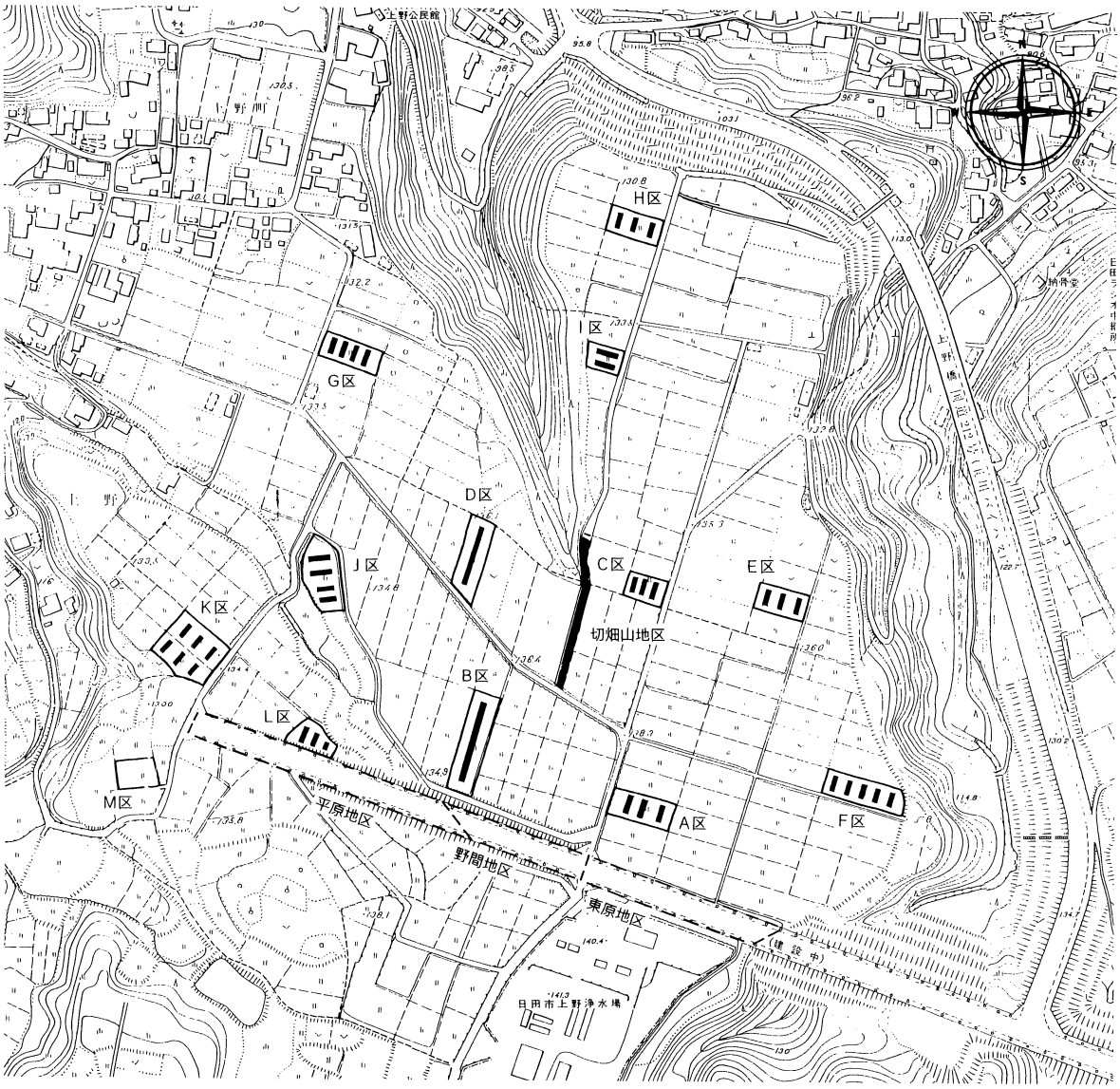
註１．「高瀬水路」『大分県土地改良史』1978　大分県耕地課。　末広利人「近代－大正時代－」『日田市史』1990　日田市。

１－２　上野台地における既往の調査（第１～４図）

台地上の遺跡

上野台地上には、第２章でふれたようにすでに古くから遺跡の存在が知られ、多くの遺物が採集されていた。特に台地西部から派生した丘陵頂部には前方後円墳をふくむ護願寺古墳群が、また現在の上野集落内には、姥塚・カグネ塚とよばれた古墳がかつて存在し、台地の縁辺が古墳時代の有

縁辺の古墳



第１図　上野台地の既往の調査
（平成８年度日田市埋蔵文化財年報　30頁の図に加筆）

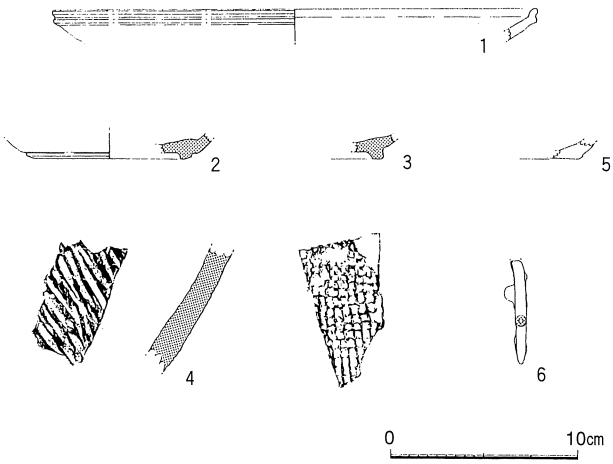
力者の墓地となっていたことが知られていた。またあまり注目されてこなかったが、上野台地西北部の畠からは弥生時代前期ないし中期の土器をかなり豊富に採集することができる。以上のように台地上でも三隈川に近い台地の北西部に遺跡の分布が濃密であるとみられてきた。そのため台地南側の今回の調査区では当初遺跡の分布は少ないものとおもわれた。しかし1990年の東原地区の調査で、奈良時代の遺跡が広範に遺存することが判明し、上野台地上にはほぼ全域に遺跡が存在する可能性が高くなった。以後発掘の対象は台地全体にひろがった。

西北部の遺跡

われわれの調査が上野台地における考古学的調査のはじまりであるが、報告にいたる約10年の間に、市道改良や工場建設計画やさらに、日田バイパス２工区の西側の着工にともなう上野第２遺跡Ｃ地区の発掘調査がおこなわれている（第１図）。以上の調査成果を紹介し、上野台地全体の遺跡の状況をまとめておきたい。まず東原地区の調査によって奈良時代の集落遺跡の存在が明らかになった翌年の1991年に日田市立博物館が、上野第１遺跡北側の南北方向の谷に沿う市道建設にともなう発掘調査を実施しており（切畑山地区）、水田下に隠れた谷地形を確認している（註１）。その調査では地形上の制約から、まとまった遺構の発見はないが、４条の溝といくばくかの柱穴を検出している。そのうち２号溝からは第２図に掲載した遺物が出土している。奈良時代の須恵器のほかに、縄文時代晩期の浅鉢や、中世の糸切り底の土師質土器が報告され、すでに知られていた弥生・古墳時代と奈良時代の遺物のほかに、この台地上に縄文時代と中世の遺跡が存在する可能性を指摘した。また野間地区の調査がおこなわれていた1992年には、県教育委員会によって台地東北隅の平坦

切畑山地区

台地の東北端



第２図　上野切畑山地区出土遺物（1/4）

面が玉川バイパス建設にともなって試掘調査がおこなわれたが、遺構・遺物は何ら発見されなかった（註２）。さらに県教育委員会による日田バイパスの発掘調査が終了した後の1993年には先の市道の北の延長部分の試掘調査がおこなわれている（註３）。

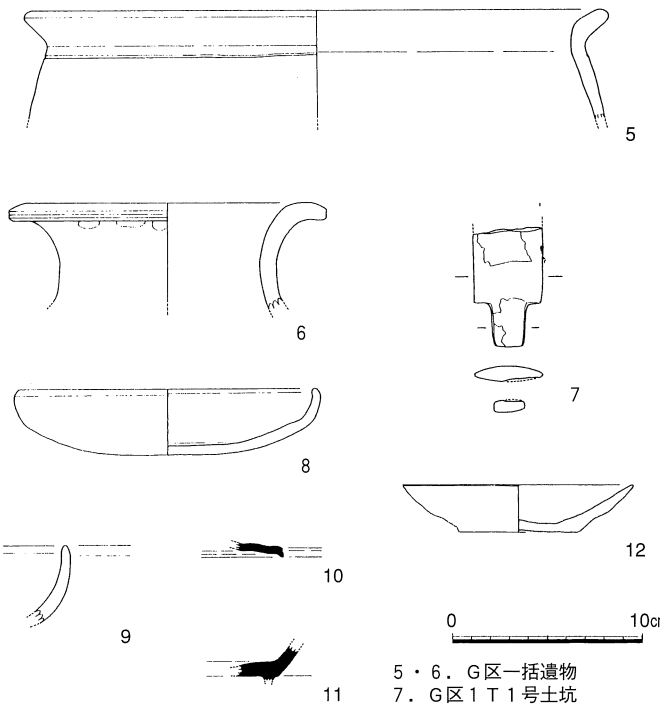
台地東半の確認調査

その後、この上野台地では大規模な工場造成計画が持ち上がり、そのために日田市教育委員会が台地東部で広範な試掘確認調査を1996年に実施している（第１図）（註４）。その結果をまとめると、①縄文時代早期の押形文土器期の包含層がＨ区で発見され、集石遺構１基が検出されている。第４図２のチャート製石鏃はそこから出土した。ほかにＢ区でも押形文土器が見つかっている。②縄文時代晩期の遺物がＪ区で出土している。縄文晩期の浅鉢や第４図３と４の石錐・サイドブレイドなどである。そのほかにＫ区やＥ区から黒曜石製の石鏃が、Ｄ区から扁平打製石斧などもみつかっており、縄文時代の小遺跡が点在するようである。③Ｄ区とＧ区では弥生時代前期末から中期前半の土坑や小児甕棺墓が発見され、第３図５や６の甕や壷、さらに７の磨製石剣が出土した。Ｄ・Ｇ区付近から北西の現上野集落周辺からは同時期の弥生土器が採集されるので、その付近に弥生時代の集落が存在することは確実であろう。④東原地区に近接するＡ区では掘立柱建物跡２棟が発見され、出土遺物は第３図11のような奈良時代の須恵器が多く、Ｆ区やＨ区では溝や小竪穴が発見され、第３図８の土師器坏も出土してい

縄文時代

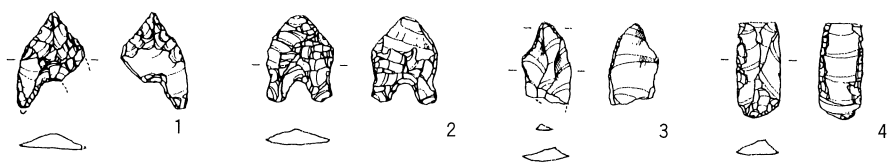
弥生時代

奈良時代



５・６．Ｇ区一括遺物
７．Ｇ区１Ｔ１号土坑
８・９．Ｈ区３Ｔ１号小竪穴
10．Ｌ区一括遺物
11．Ａ区一括遺物
12．Ｇ区２Ｔ２号土坑

第３図　上野試掘調査出土遺物①（1/4）



１．Ｋ区一括遺物
２．Ｈ区一括遺物
３・４．Ｊ区一括遺物

第４図　上野試掘調査出土遺物②（1/2）

る。平原地区に隣接するＬ区でも予想どおり第３図10のような須恵器が出土した。したがって奈良時代の遺跡もかなりの頻度で台地上に分布するものと考えられる。⑤中世の溝がＧ区で発見され、第３図12のような土師質土器や白磁等が出土し、部分的ながら中世の遺構が存在することも判明した。この確認調査の結果は、きわめて興味深い。遺構遺物の存在する時期が縄文晩期、弥生時代前半期、奈良時代と、中世の一時期に限られるという点である。これは今回報告する上野第１遺跡の内容とまったく一致しており、台地全体の遺跡分布の様相が、異ならないことを示している。

中　　世

上野第２遺跡Ｃ地区

さらに最近のことであるが、上野第２遺跡Ｃ地区の調査が2000年に県教育委員会によっておこなわれた（註５）。その結果、弥生時代前期末から中期初頭の小児甕棺墓群の列埋葬が発見されている。弥生時代の墓地の一端が明らかになるとともに、奈良時代の掘立柱建物跡群が検出され、その中には上野第１遺跡では発見されることのなかった形式の棟持柱を有する掘立柱建物跡が存在することがわかり、上野第１遺跡と関連するものとみられる。

《註および参考文献》

註１．行時志郎『上野切畑山遺跡』（日田市埋文報６）1992　日田市教育委員会

註２．調査担当者高橋徹氏より教示。

註３．行時志郎「上野切畑山遺跡」『平成５年度（1993年度）日田市埋蔵文化財年報』1995　日田市教育委員会

註４．土居和幸「上野第１遺跡」『平成８年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』1998　日田市教育委員会

註５．調査担当者松本康弘氏より教示。

第２節　調査の方法と経過

上野第１遺跡の発掘調査の推移と方法を、その経過を交えながら述べておく。

２－１　試掘調査

遺跡の有無とその保存状態を推定するための試掘調査を、1989年度に上野第１遺跡の東原地区・野間地区・平原地区の各区でおこなった（註６）。その時点での未買収地と耕作途中の水田をのぞく対象地区に、重機をもちいて現水田の床土除去を全面あるいは部分的におこない、遺構検出作業をおこなった。この結果、近現代の水田化による削平のため遺構の残存が悪い部分があるものの、おおむね全域で遺構の存在を確認した。特に東原地区と野間地区の一部では掘立柱建物跡が発見され、奈良時代の遺物も採集された。したがって予想外に大規模な遺跡が水田下に保存されている可能性が高まり、次年度以降本調査をおこなうこととなったのである。

重機による表土はぎ

遺跡の発見

２－２　確認調査

本調査に先立って、遺跡の範囲と内容をあらかじめ想定するために、手掘りによるトレンチ調査を、1990年７月に東原地区と平原地区の東部で、1992年２月に野間地区で、1993年には平原地区の西半分と米田地区でおこなった。調査の方法は、水田化により盛り土がおこなわれた部分を中心に、任意に幅２ｍのトレンチを設定し、手掘りで基盤層まで掘り下げ、その過程で遺構・遺物の内容を検討した。東原Ａ区に２本、東原Ｃ区に２本、平原Ｄ区に１本のトレンチを、野間地区では第１から第17までのトレンチを設定した。その結果、掘立柱建物跡のみでなく、竪穴建物跡・土坑が多数確認されるとともに、そのほとんどで奈良時代の遺物をともなうことが判明し、谷部分のＭ区では奈良時代に遡る水田層の存在が確認された。また水田化以前の畠地時代の溝が縦横に走ることも知られ、出土した遺物の中には縄文・旧石器時代まで遡る石器が含まれていた。以上の結果から上野

トレンチ調査

奈良時代の集落を確認

第１遺跡は奈良時代の掘立柱建物跡を中心とする大規模な集落遺跡であることが判明した。本調査はその内容を具体的に明らかにすることを中心に進められることになった。なお上野第１遺跡米田地区と上野第２遺跡Ａ地区とＢ地区は、遺構・遺物は近現代のものを中心とするものであったため、確認調査にとどめた（註７）。

２－３　本調査

調査区設定

上野第１遺跡の東西500ｍにおよぶ範囲を順次調査するために、台地上の地形の変化と現在の地目にしたがって便宜上調査区を３つに分割し、小字名を付して東から東原地区・野間地区・平原地区とした。さらに各地区内は現水田区画にしたがって、東原地区にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区、野間地区にＥ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ区、平原地区にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ区の各区に分け本調査をおこなった。そのうち東原地区Ａ～Ｃ区は1990年度に、東原地区Ｄ区・野間地区と平原地区のＡ～Ｄ区までは1992年度に、平原地区Ｅ～Ｇ区は1993年度に本調査を実施した（註８）。

作業手順

本調査の手順は、まず現耕作土と水田床土および1910年代の水田造成時に盛った造成土とそれ以前の畠地耕作土を重機で剥ぎ、次に人手により遺構検出作業をおこない、その際遺構の切合関係と埋没土の質と色調を検討したのち、遺構の掘り上げをおこなった。ピットは土層観察用の断面を残すために半裁し、竪穴建物等の大型遺構は土手を十字あるいは一本に残して、手掘りで掘り下げをおこなった。その際遺構には検出順に通し番号を与え、ピットは10ｍ方眼の調査区毎に番号をつけた。なお各地区には実測用に10ｍの方眼を、第６図のように調査区の平面形にあわせて任意に組んだ。したがって調査時期の異なる東原地区と野間・平原地区では、方眼の方位がやや異なった。この方眼にアルファベットとアラビア数字を与え、その交点の南西方眼をＢ５調査区というようにした。方眼には全体を通した呼称設定がおこなわれなかったので、東原地区と野間地区、平原地区Ａ・Ｂ区、平原地区Ｅ・Ｆ区ではそれぞれ１番から始まっている。実測は原則として20分の１実測図を作成し、遺構によっては10分の１あるいは５分の１実測図を作成した。写真は35ミリ一眼レフカメラでモノクロとカラースライド撮影をおこない、遺構によっては６×９中型カメラを併用した。

現場での調査は、田中と高畠が指揮監督し、実測と写真撮影は両名でおこなった。遺構の発掘は両名の指導のもと作業員がおこなったが、重要かつ複雑な遺構については調査担当者がおこなった。またこの地域での発掘調査は初めてのこともあり、作業員には未経験者も多く、経験のある熟練した作業員の方々には、リーダー役をつとめていただくとともに、実測とその準備作業について補佐していただいた。

また空中写真撮影をスカイサーベイ社に、航空写真測量をアジア航測（株）と国際航業（株）に委託した。あわせてＭ区の水田土層のプラントオパール分析を佐々木章氏（大分短期大学）に依頼し、その分析結果は第８章に掲載した。なお報告書で使用した国土座標は航空写真測量の成果を調製したもので、現地調査中には設定使用していない。

《註および参考文献》

註６．友岡信彦「上野第１遺跡」『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』1990　大分県教育委員会

註７．田中裕介「上野第１遺跡、上野第２遺跡」『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅴ　1994　大分県教育委員会

註８．田中裕介『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－上野第１遺跡』Ⅳ　1993　大分県教育委員会

本調査中、第１章第１節で前記した調査委員・調査員以外の、現地で調査の方法・遺構遺物につ

いてご助言をいただいた方々と調査に協力いただいた機関は以下のとおりである。明記して感謝したい。(アイウエオ順・肩書きは当時)

調査協力者

今泉正子(大分県教委)　梶原悦雄(上野町自治会長)　梶原秀彦(日田考古学同好会)　桑野洋輔(日田考古学同好会)　後藤一重(大分県教委)　後藤晃一(日田三隈高)　小林昭彦(大分県教委)　佐伯正一(アジア航測)　佐藤良二郎(宇佐市教委)　新宅信久(福岡県粕屋町教委)　高橋徹(大分県教委)　田中常雄(日田考古学同好会)　玉永光洋(大分県教委)　長順一郎(日田市文化財調査委員)　土居和幸(日田市教委)　橋口定志(東京都豊島区郷土資料館)　橋本一彦(大分県教委)　橋本博文(早稲田大学)　原田勝宏(日田市文化財調査委員)　日野尚志(佐賀大学)　松村恵司(文化庁)　松本康弘(大分県教委)　水原道範(福岡県久留米市教委)　宮内克己(大分県教委)　用松律夫　森馨(スカイサーベイ)　行時志郎(日田市教委)　渡辺幹雄(緒方町歴史民俗資料館)　池田朋生・鎌田洋昭・今田秀樹(別府大学生)　久住猛雄(早稲田大学院生)

日田市立博物館　日田考古学同好会　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

本調査中、調査員の目となり手となり、時には調査員の間違いを訂正してくれた調査作業員の皆さんは以下のとおりである。明記して感謝したい。(アイウエオ順)

調査参加者

石谷晟　宇野あさえ　宇野かすみ　宇野かさか　宇野京子　宇野けさか　宇野真由美　梅木鈴子　梶原みとし　加藤きよ子　木下かねよ　木村かめの　木薮ふみ　江田美代子　坂本都美子　高尾清子　武内はつえ　武内はまよ　武内ひろえ　刎留三　原田国介　原田友枝　益永勇　松本加代子　宮岡大輔　毛利四郎三　毛利真　毛利善光　矢羽田聖　横尾てる子　横尾のぶ子

第3節　整理の方法と経過

整理作業

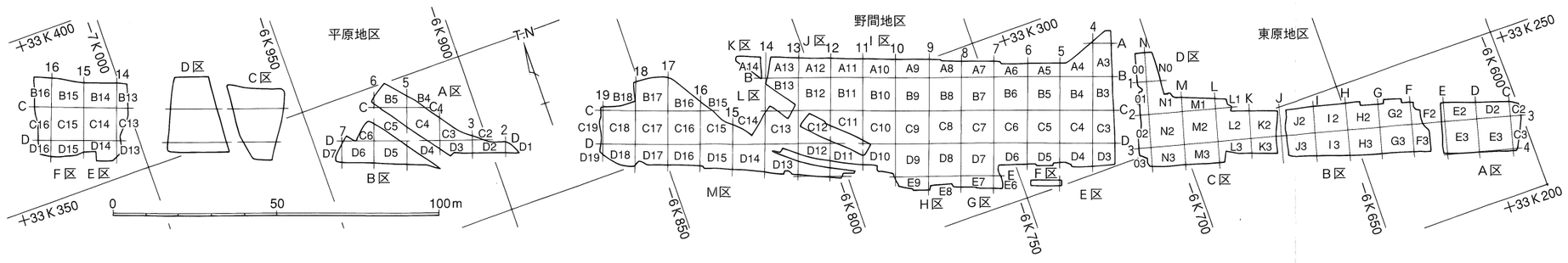
遺物整理作業は、本調査中に雨天で現場作業が中断した際に、現地で遺物洗浄と注記をおこなったが、すべての遺物は終了しなかった。現地調査終了後、1995～97年度に大分県教育庁文化課文化財資料室で一部遺物の洗浄・注記と接合作業をおこなったが、日田バイパスの手崎・大部遺跡の整理を優先したため作業は一部にとどまった。本格的に遺物の実測・観察作業にはいったのは98年度からで、99年度まで遺物の実測と復元、遺構図の編集と浄書をおこなった。遺物の接合には田北節子があたり、復元は中山つや子があたった。また報告書の作成は田中の指揮のもと、遺物の観察・実測は土崎弘子、麻生廣美、牧尾義則、田中がおこない、浄書は今泉正子・金丸涼子と麻生がおこなった。編集作業には、土崎、麻生、金丸、大倉久美子、古殿鈴代の協力をえた。遺物の写真撮影は、田中と友岡信彦がおこなった。鉄器については宇佐風土記の丘歴史民俗資料館においてレントゲン撮影をおこない、実測の参考にした。

整理報告書作成中、遺構遺物の検討と評価についてご助言いただいた方々は以下のとおりである。明記して感謝したい。(アイウエオ順・肩書きは当時)

整理協力者

飯沼賢司(別府大学文学部)　栗田勝弘(大分県教委)　後藤宗俊(別府大学文学部)　坂本嘉弘(大分県教委)　下村智(別府大学文学部)　高橋徹(大分県教委)　土居和幸(日田市教委)　富永直樹(福岡県久留米市教委)　牧尾義則(大分県教委)　宮内克己(大分県教委)　山本悦世(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター)　行時志郎(日田市教委)　綿貫俊一(大分県教委)

第５図　上野第１遺跡の調査区と地形（1/2,000）



第６図　上野第１遺跡の調査区設定図（1/1,600）

第４節　報告書の凡例

1．各遺構は「５号竪穴建物跡」のように表記し、本文中や挿図一覧表で省略する場合には「５竪穴」のように表現する。したがって、掘立柱建物跡・土坑・墓・溝も「４建物」「３土坑」「６溝」のように省略形をもちいる。

2．挿図中に書き込んだ方位はすべて真北である。

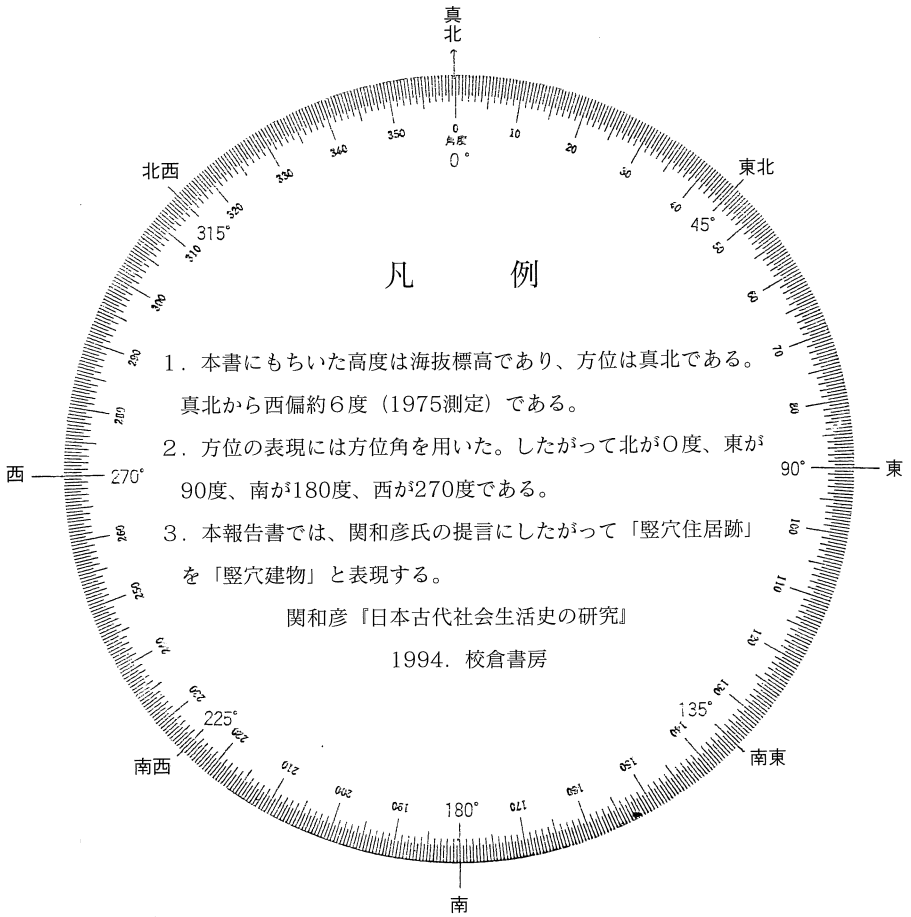
3．遺構の方向は、長軸線をもとに計測し、方位角で表現した。下図参照。

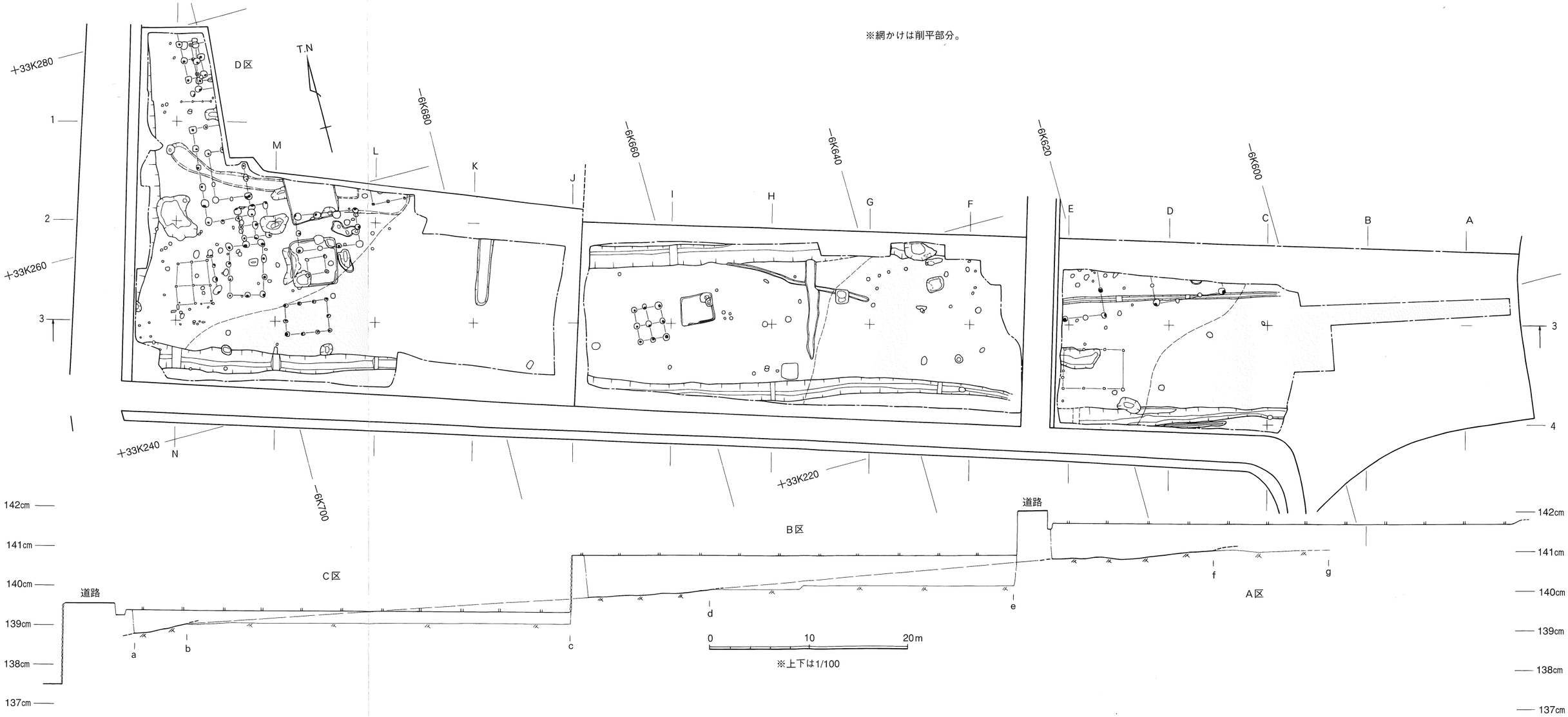
4．挿図の遺構の縮尺は、掘立柱建物跡と竪穴建物跡が50分の１、その遺物出土状態図は25分の１を原則とし、土坑は30分の１と40分の１とした。墓は10分の１、溝は100分の１とした。また遺構配置図はすべて200分の１で統一している。

5．挿図の遺物の縮尺は、土器が３分の１、石器が２分の１ないし３分の１、鉄器等は２分の１とした。

6．なお竪穴建物跡の床面積は竪穴の下場を、掘立柱建物跡は柱穴の心心距離の計測点の内側をプラニメーターで計測した。

7．本文あるいは観察表中の遺構と遺物の分類は第９章で適時、解説をおこなっている。





第１図　東原地区Ａ～Ｄの調査区（1/400）

第4章　東　原　地　区

第１節　調査概要（第１図、写真１）

調査区の位置

東原地区は調査区全体のなかで、最も高い位置にあたる（第３章第５図台地断面図参照）。台地の地形は、野間地区と平原地区の間に走る野間M区の谷をはさんで両側が高く、野間H区付近から東にいくに連れて次第に高さを増す。特に東原地区は一段と高く標高140mを超える。そして東原地区でも東端の台地崖面近くが最も高い。

保存状態

上野台地全体は、東方の陣ヶ原台地と同様に、1910年代の耕地整理によって水田造成がなされ、現在まで踏襲されている水田区画に造成され、現在は３枚の水田になっている。それ以前は谷筋を除き畠地として利用されていたといわれ、事実調査の結果、水田化以前の近世の畠地境界溝を発見している。旧地形は東に向かって緩やかに上昇するため、各水田の東半の削平がひどく西半は保存が良好であった。第１図の網かけ範囲、断面図ではｂ－ｃ間、ｄ－ｅ間、ｆ－ｇ間の削平がいちじるしい。調査区は水田の区画をそのまま東からＡ区・Ｂ区・Ｃ区とした。さらにＣ区の北の一部を本調査したため、その部分をＤ区とした。報告ではＣ・Ｄ区として一括してあつかう。

発見遺構

東原地区では、現水田床土と旧畠地耕作土を取りのぞいた基盤層上面で、樹根などの自然が産み出したことが明白な凹みや現代の穴をのぞいて、掘立柱建物跡15棟、竪穴建物跡３棟、土坑17基、溝11条、ピット100箇所あまりを発見した。ピットを除きすべてを報告する。遺構遺物の要点は、巻末の一覧表を参照されたい。

遺跡の概括

東原地区の各時代別の遺構の特徴は、①旧石器時代の包含層は存在しなかったが、水田造成土や後世の遺構に混入した石器が見つかっていること。②縄文時代は晩期の土坑１基を発見したのみであった。③弥生時代と古墳時代の遺構は非常に希薄で、Ｂ区で１基の古墳時代初頭の土器棺を検出したのみであること。④奈良時代の掘立柱建物跡と竪穴建物跡と土坑が、ほぼ全域で発見され、大規模な集落の一角が判明したこと。⑤平安時代から近世前期つまり９世紀から17世紀の遺構と遺物はまったく見つからず、その場所には集落が継続しなかったこと。⑥18世紀に台地全面におよぶ畠地の開発がおこなわれ、その際畠地境界溝で耕地が分割されていること。⑦1910年代の耕地整理で、全面的に水田化したことを確認した。

遺　　物

注目される出土遺物としては、奈良時代の日常生活用具である須恵器・土師器類のほかは、刀子などの二、三の鉄器と有溝石錘、後述する刻書石製品などがある。

写真１　東原Ｂ区の調査風景

第２節　東原Ａ区

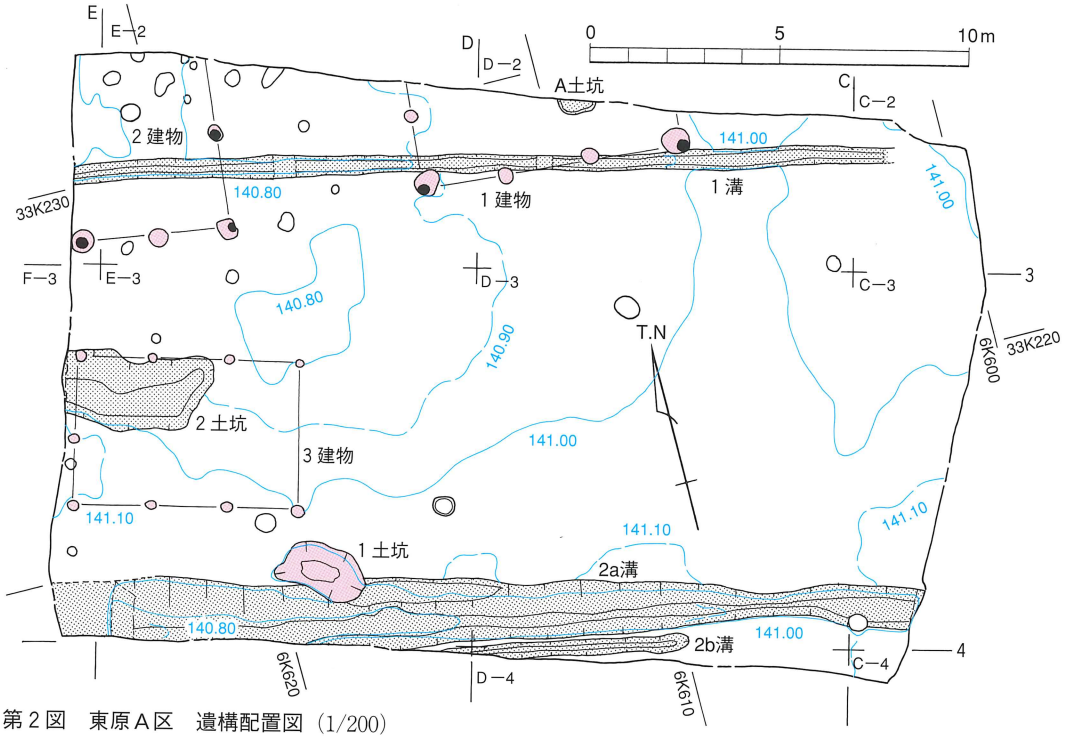
２－１　Ａ区の概要（第２図→図版１下）

遺　　構

調査区の東半分は近代の水田造成のために第１図のように削平されている。そのため浅い遺構はすでに消失したものと推定される。奈良時代に属する遺構は、１・２・３号掘立柱建物跡と１号土坑である。それ以外の１・２号溝と２号土坑およびＡ号土坑は、近世以後のものである。奈良時代の遺構と近世の遺構は、切合関係と埋土の土質で明瞭に区別することができた。ほかに十数ヵ所のピットを検出したが、明確に柱穴と判定できるものは少なく、埋土に遺物を含むものもなかった。

表採資料

表面採集と試掘時の遺物（第３図）　須恵器・土師器や近世の瓦片のほかに、１の縄文時代後期以後の結晶片岩製の扁平打製石斧の先端部、２の須恵器の高台付き坏身が、試掘時に採集されている。



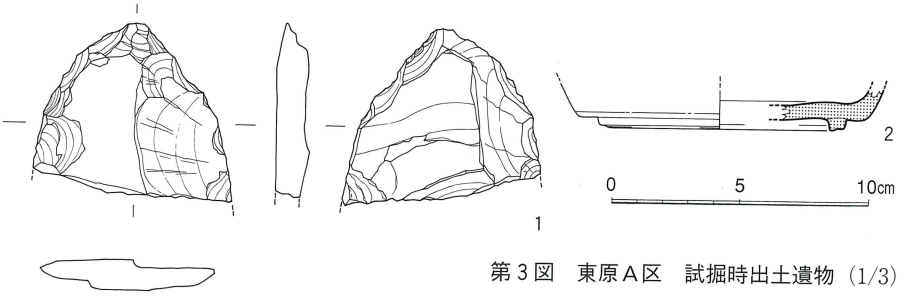
第２図　東原Ａ区　遺構配置図（1/200）

２－２　奈良時代の遺構と遺物（第２図）

１・２建物

奈良時代に属する遺構は、１・２・３号掘立柱建物跡と１号土坑である。そのうち１建物と２建物は南面の柱筋をそろえていた可能性が高く、方向も近似する。柱穴の構造と規模もほぼ同じである。これに対して３建物は規模・柱穴ともに小型で、その構造も１・２号に比べて簡易である。方向も１・２号建物が正方位に近いのに対し、３建物はやや東に振っている。その３建物の南東側には、廃棄土坑と考えられる１土坑があり、その廃棄物は北側の３建物から捨てられたような堆積状態であった。３建物と１土坑の密接な関係がうかがわれる。

３建物と１土坑



第３図　東原Ａ区　試掘時出土遺物（1/3）

① 掘立柱建物跡

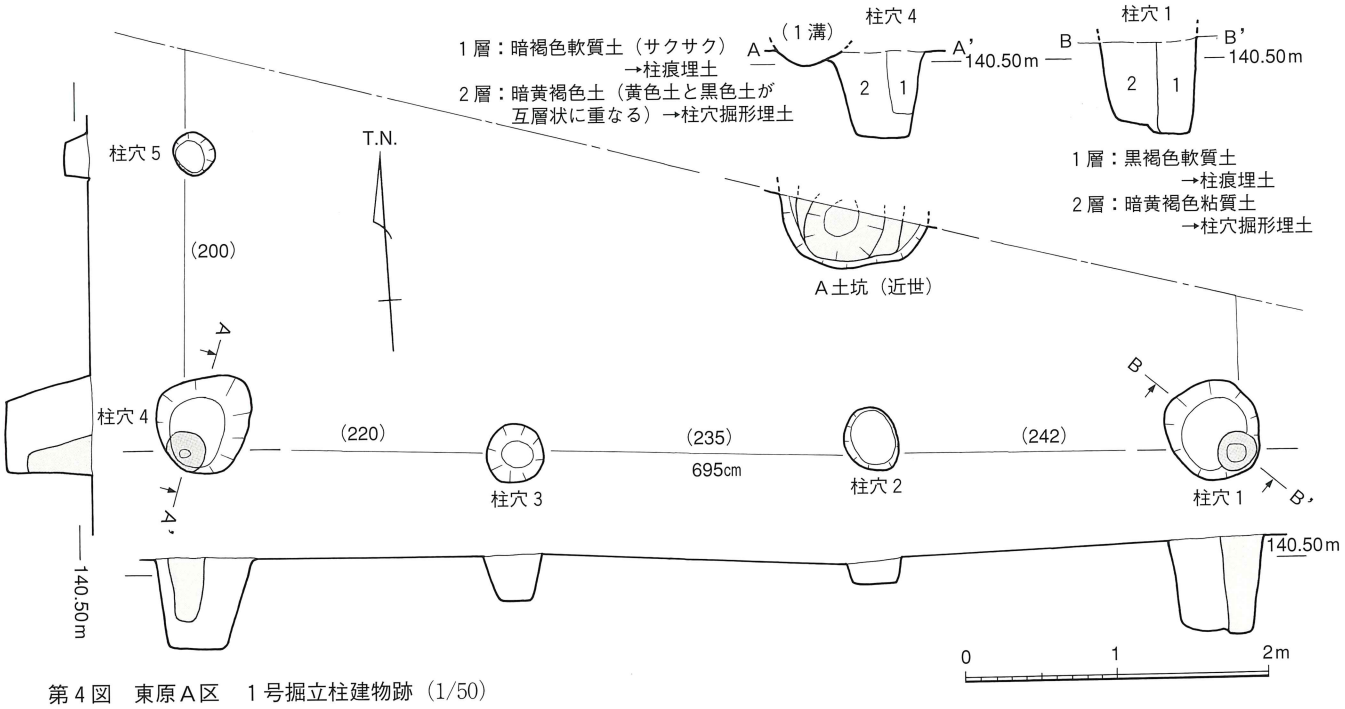
1号掘立柱建物跡（第4図→図版2上）

調査区の中央北側でその南半分を検出した梁間1間以上桁行3間の東西棟と推定される掘立柱建物跡である。北側は調査区外となっているため東柱の有無は不明だが、柱の規模と配置からみておそらく東柱のない側柱建物と推定される。建物の東西長軸の方位角は94度である。柱間寸法は心心距離で東西長約695cm、南北短軸長は柱穴4と5の心心距離200cmから復元して2倍の400cmほどと推定される。その復元値から推定される床面積は約27.8m²で、中型ないし大型の側柱建物に分類される。柱間距離の1単位は231×200cmのタテナガ長方形となるⅡa類である。検出された5本の柱穴はすべて円形で、そのうち東西両隅の柱穴1・4が深くかつ大きく掘削されたB類掘立柱建物である。その掘形は柱穴1・4が径60～65cm、その他は径40cmほどである。柱穴1・4のみから径20

1+×3間

側柱建物

柱穴



第4図　東原A区　1号掘立柱建物跡（1/50）

cmほどの円形柱の痕跡を検出した。柱を固定するための掘形埋土は、掘削した黄色土をふたたび埋めて固めている。柱穴4の埋土中から土師器の小片が出土したほかに出土遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代と認定し、建物の方向と関連する東原B区の3・4土坑の時期から上野2期と推定した。

上野2期

2号掘立柱建物跡（第5図→図版2中）

調査区の西北隅でその一部を検出した梁間2間以上桁行1間以上の南北棟と推定される掘立柱建物跡である。東柱のない側柱建物と推定され、南北軸の方位角は8度である。柱間寸法は心心距離で南北長は240cm以上、東西長約397cmである。床面積は約9.6m²以上で、おそらく中型規模である。柱間距離の1単位は240×199cmのタテナガ長方形となるⅡa類である。検出された4本の柱穴はすべて円形で、そのうち東西両隅とみられる柱穴2・4は、径が大きく掘削されたB類掘立柱建物にあたるが、柱穴の底の深さは揃っている。柱穴の掘形は平均径40～50cmほどである。柱穴1・2・4から径25～30cmほどの円形柱の痕跡を検出した。柱穴3の埋土中から古墳時代～奈良時代の土師器の小片が出土したが、ほかに出土遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代と認定し、建物の方向と関連する東原B区の3・4土坑の時期から上野2期と推定した。

2+×1+間

側柱建物

柱穴

上野2期

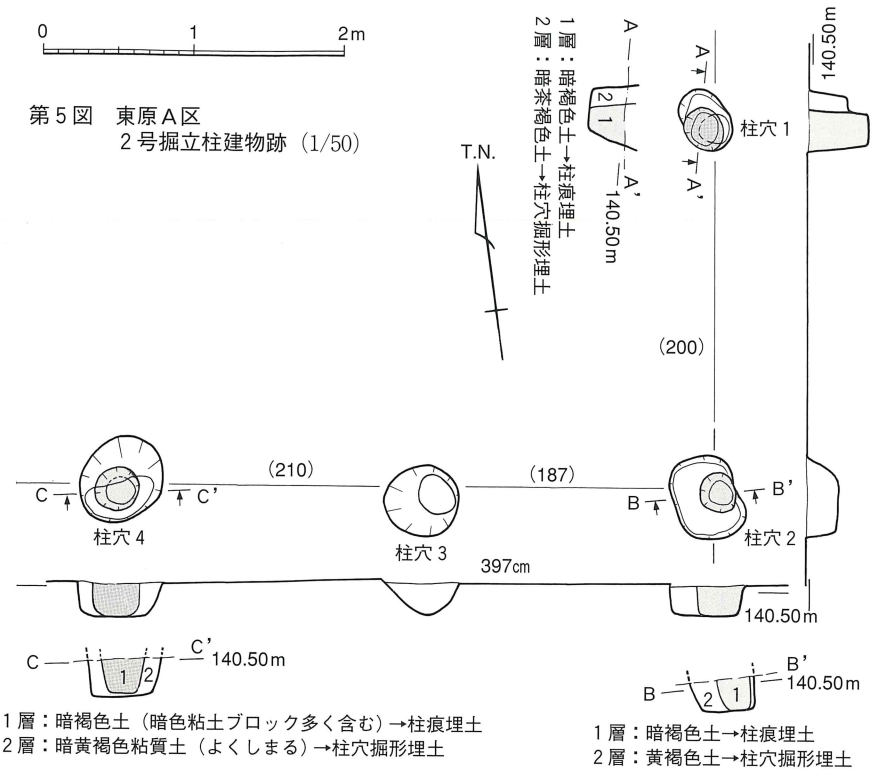
3号掘立柱建物跡

（第6・7図→図版2下）

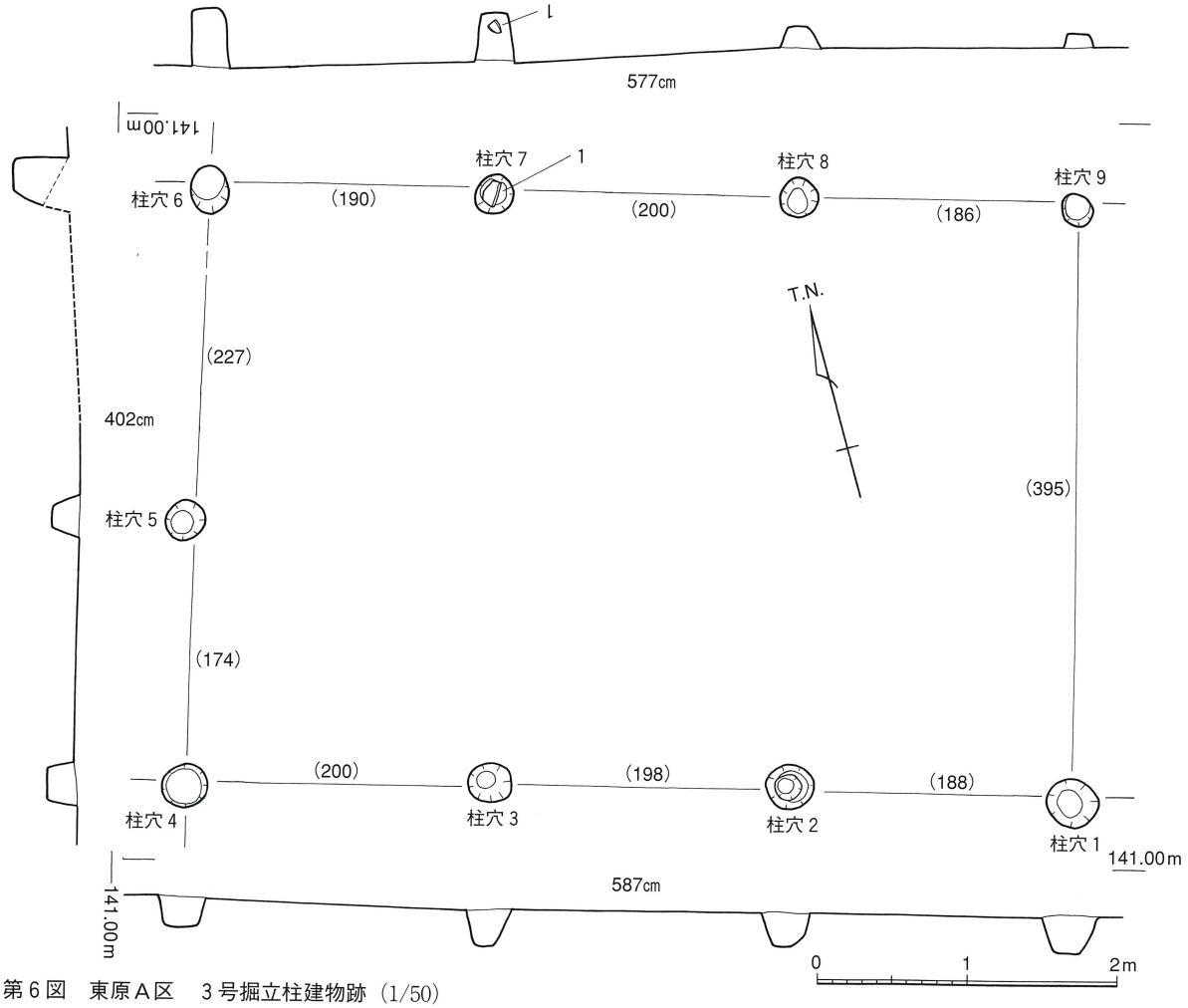
2×3間側柱建物

調査区の西端で検出した梁間2間桁行3間の東西棟の掘立柱建物跡である。東柱のない側柱建物で、東西長軸の方位角は105度である。柱間寸法は心心距離で東西長約577～587cm、南北長約395～402cmをはかり、床面積は約23.3㎡の中型に分類される。柱間距離の1単位は199×199cmの正方形となるⅠ類である。検出された柱穴はすべて小型円形で、東側の側柱は見当たらなかっ

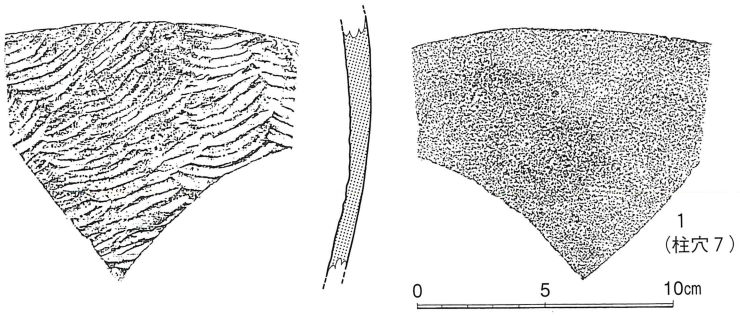
柱穴



第5図　東原A区
2号掘立柱建物跡（1/50）



第6図　東原A区　3号掘立柱建物跡（1/50）



第７図　東原Ａ区　３号掘立柱建物跡　出土遺物（1/3）

た。柱痕は検出できなかったが、柱穴の掘形はすべて径30cmほどで、柱穴の大きさと深さが同じになるＣ類掘立柱建物である。柱穴７の中央に底面からやや浮いて須恵器の甕の破片（第７図１）が、柱穴をふさぐように出土した。おそらく建物廃絶直後の、柱が抜き取られた際に混入したものと考えられる。ほかに土師器の細片が出土した以外に遺物はなく、須恵器の存在と埋土の土質から奈良時代と認定し、建物の方向から上野１期と推定した。

出土遺物

上野１期

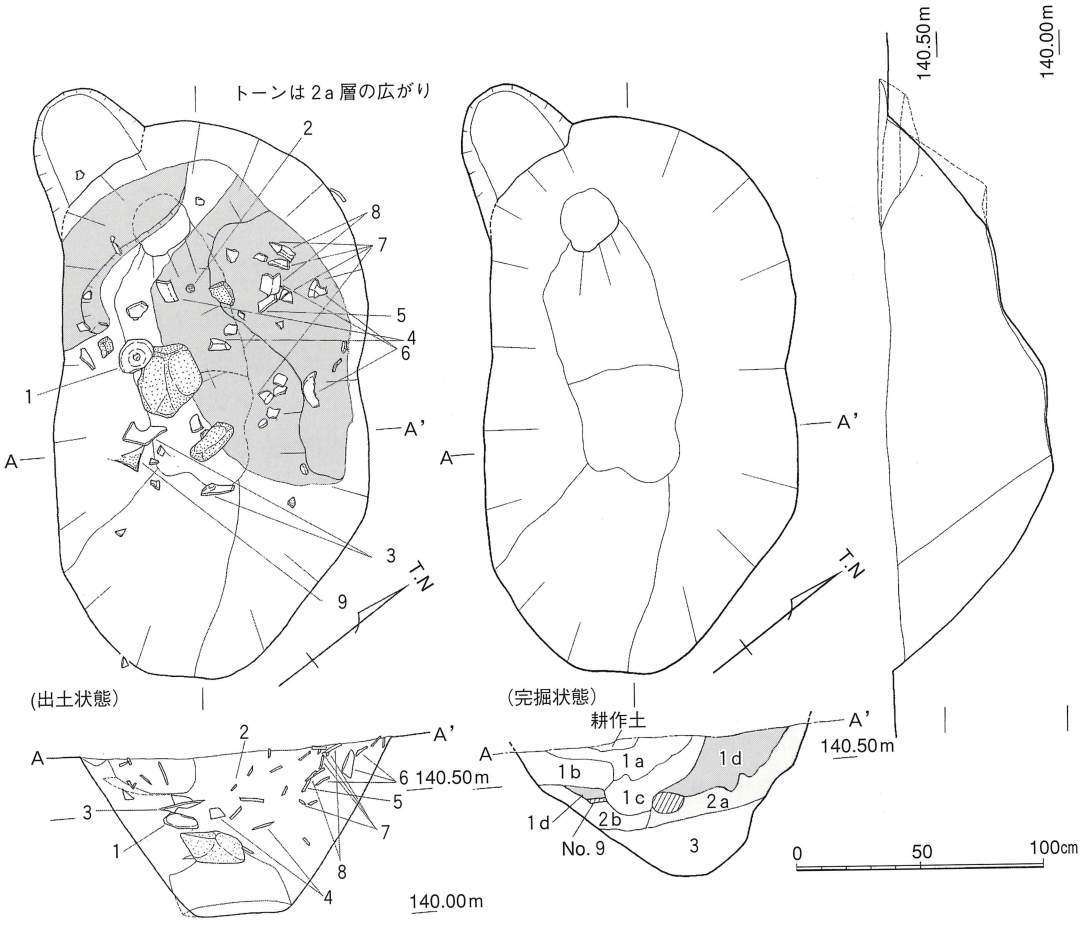
② 土坑

１号土坑（第８・９図→図版３・77）

３建物の東南隅で検出された長円形の大型土坑で、底面は平坦ではなく断面半円形をなすＢ１類土坑である。規模は検出面を基準に測って長軸長224cm、短軸長128cm、深さは最も深いところで57cmである。その形態からみてゴミ捨て穴として掘られた廃棄土坑と考えられる。

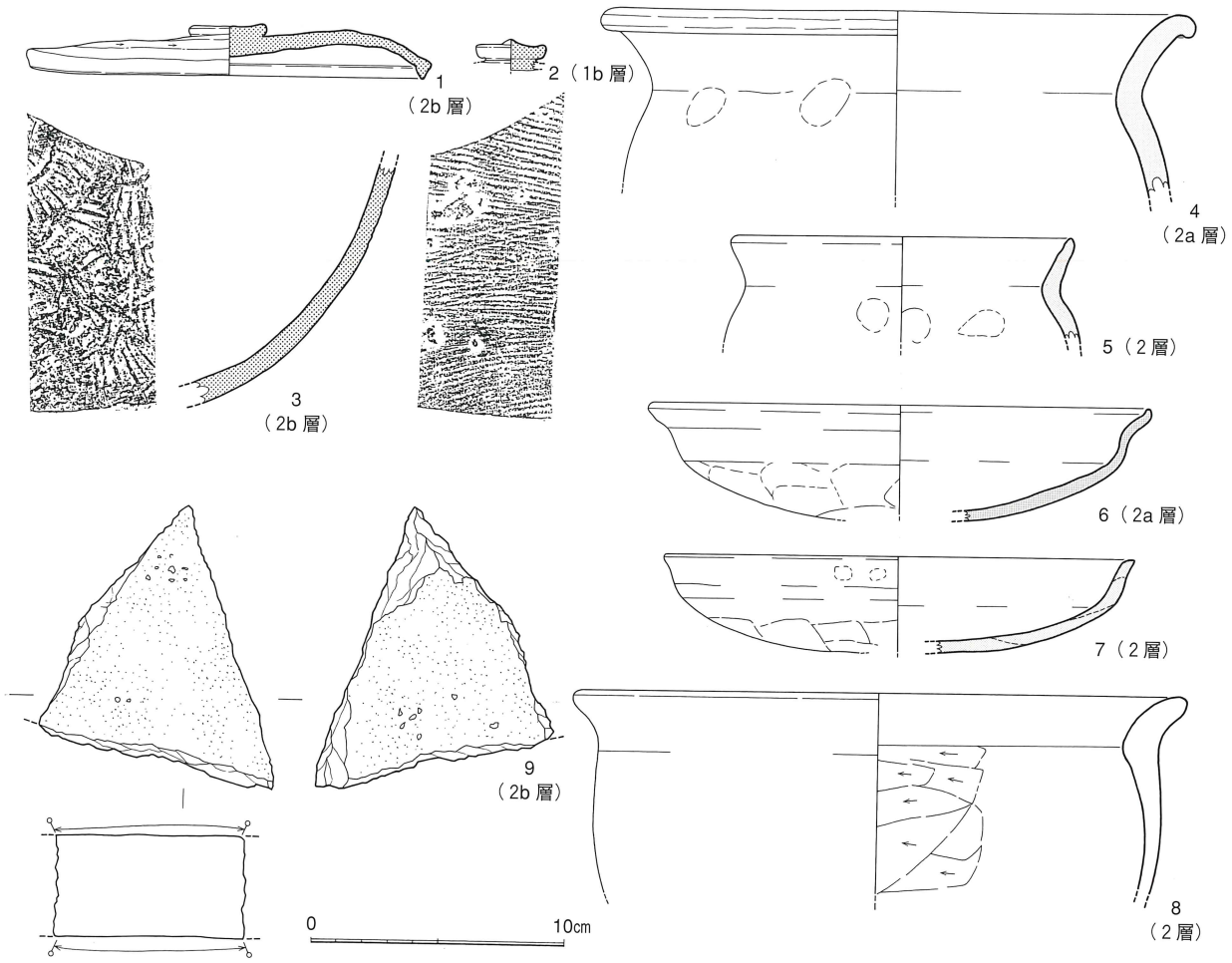
長円形大型

廃棄土坑



1a層：黒褐色軟質土（均質で、土器小片を含む）
1b層：暗黄褐色土（黄色粘土ブロックを含む）
1c層：暗褐色土（土器片・黄色粘土ブロック含む）
1d層：黒褐色軟質土（均質で、土器片を多量に含む）
2a層：暗褐色混焼土・炭層（硬くしまる。１cm大の焼土片・炭片と土器片を多量に含む）
2b層：暗褐色粘質土（炭片・礫・土器片含む）
3層：暗黄褐色軟質土（土器片は含まない。上部に大型円礫がくいこむ）

第８図　東原Ａ区　１号土坑（1/30）



第９図　東原Ａ区　１号土坑　出土遺物（1/3）

埋没状況は、まず掘削直後に無遺物の３層が堆積し、その上に円礫と安山岩磨石や土器片さらに焼土と炭片を多量に含む焼却廃棄物が、東北側すなわち３号掘立柱建物の方向から投棄されている。それが２層と１層下部にあたり、大型土器片を多く含む一括遺物廃棄である。

一括廃棄

出土遺物

出土遺物は安山岩の円礫と土器で、そのうち２は１ｂ層出土で、それ以外は２層出土である。１～３は須恵器。１は完形のつまみ付き坏蓋、２も同じくつまみ部分。３は甕の胴部片。土師器には精製の壷の破片が多く４と５は胎土Ａである。６と７は精製胎土Ａの坏で、底部外面は手持ちヘラケズリをナデ消している。精製胎土の土師器にはこのほかに器壁の薄いミニチュア土器の破片がある。８は通常胎土の甕で、すすが付着する。９は両面がよく磨かれた石皿の破片である。一括廃棄の遺物のなかに含まれているので、残留遺物ではなく、奈良時代に使われていたものである。

３建物との関係

出土遺物の内容から奈良時代であることは明確で、３号掘立柱建物が存続中に掘られたものと推定されるので、廃棄物の大半は３号掘立柱建物で使用されていたものと考えられる。同時に焼土や炭の多くが建物内の炉やカマドと関係するとみてよければ、３号掘立柱建物は居住用建物であったことになる。その３建物は正方位を指向する以前の上野１期と考えられるので、この１号土坑も同時期と考えられ、出土遺物とも矛盾しない。

上野１期

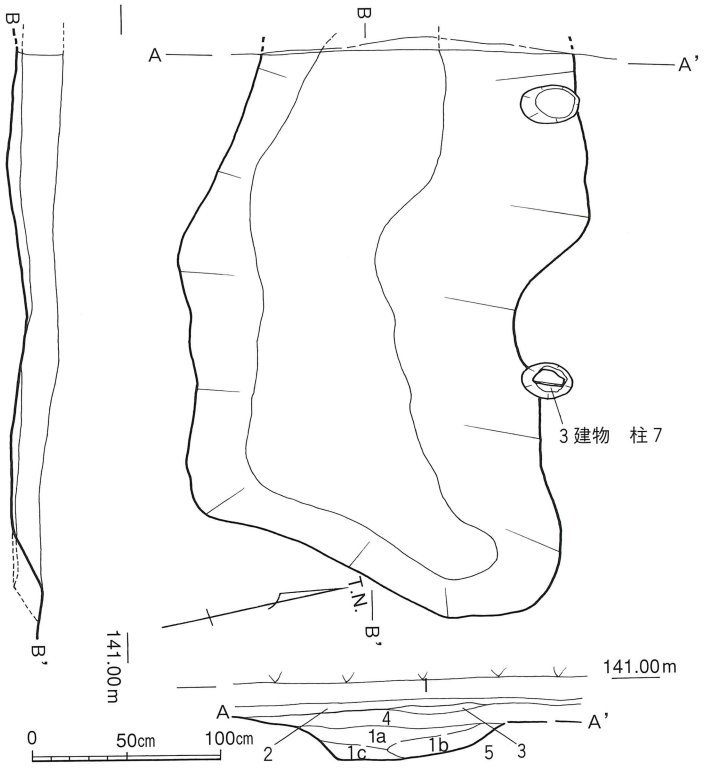
２－３　近世以降の遺構と遺物（第２図）

①　土坑

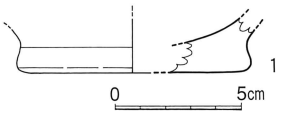
２号土坑（第10・11図→図版４上）

不定形大型

調査区西端で検出された不定形の大型土坑で、西側の道路下につづく。深さが一定しない凸凹し



第10図　東原Ａ区　２号土坑（1/40）



第11図　東原Ａ区　２号土坑出土遺物（1/3）

た底面のＥ３類土坑である。規模は検出面を基準に測って長軸長396cm以上、短軸長180～210cm、最も深いところで約25cmである。底面形状からみて何らかの目的をもって掘られた土坑と考えられるが、具体的用途は不明である。埋土は三層に細分されるが、炭片と図示できない近世陶磁器の細片を含む。１は埋土中に残留していた縄文時代晩期の深鉢の底部片である。近世遺物の出土から近世の土坑と認定した。

埋土と遺物

Ａ号土坑（第12図）

不整円形の小型土坑で、南半分を調査した。規模は検出面を基準に測って長軸長100cm、短軸長36cm以上、最も深いところで約78cmである。下部にいくほど狭まり底面もはっきりしない。底面形状からみて何らかの目的をもって掘られた土坑と考えられるが、具体的用途は不明である。埋土は八層に細分されるが、３層と６層を中心に大量の炭片・焼土を含み、なんらかの焼却物を廃棄したものとみられる。図示できないが１点近世陶磁器の細片が出土している。その遺物から近世の土坑と認定した。

円形小型

焼却廃棄物

②　溝

三条の畠地境界溝を検出した。二条一単位の溝が近接して平行して走る２号溝と、１号溝とである。２号溝はＢ区の２号溝、さらにＣ区の７号溝に連続する。一方１号溝はＢ区の６号溝とはつながらない。しかも底面の傾斜を比較してみるとＡ区とＢ区の境の道路下付近で段違いになるので、現在の水田の段差は近世の畠地開発の際に造成された段差をそのまま利用したものと推定される。

畠地境界溝

段　差

１号溝（第13図、第15図左）

東西に長く延びる一直線の畠地境界溝で、21.5m分を検出した。東の延長は近代の水田造成で削平される。方位角は103度である。幅は約50～60cmで、断面は浅い皿状のＵ字形をなし、最も深いところで約20cmほどである。底面の絶対高は東から西にいくほど低くなるが、Ｂ区の６溝と高さが段違いになる。埋土は暗褐色軟質土の単一層（１層）で、近世の遺物が出土した。１の残留した弥生時代前中期の甕底部片のほかに、２は近世の陶器擂鉢で底部は回転糸切りによる。３は半分におれた頁岩製の砥石。このほかに近世陶磁器の細片があり、時期の推定できるものはいずれも18世紀後半以後のものであった。

畠地境界溝

埋土と遺物

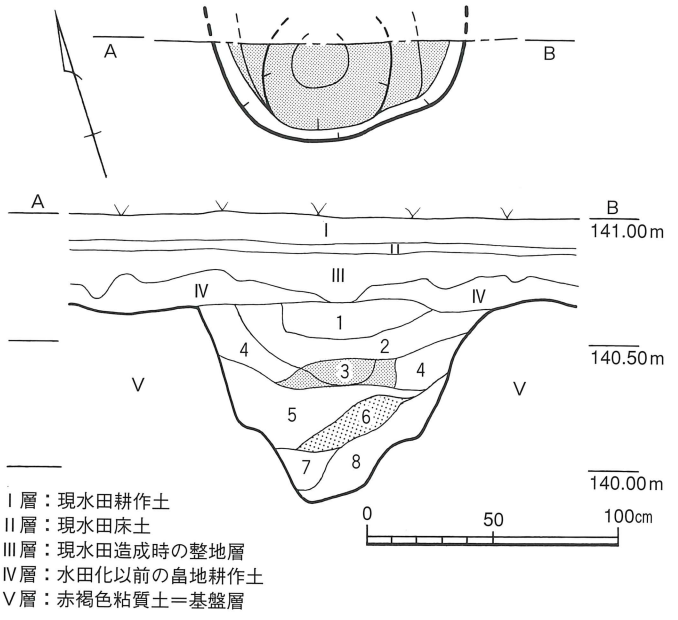
2号溝(第14図、第15図右→図版77)

畠地境界溝　1溝と正確に平行する二条一単位の畠地境界溝で、ともに直線的に伸び、2ａ溝は23m、2ｂ溝は6.5mを検出した。東の延長は近代の水田造成で削平され、西の延長はＢ区の2溝と平面的には連続する。方位角は103度である。幅は2ａ溝が約110～170cmで断面は浅い皿状のＵ字形、最も深いところで約35cmほどである。2ｂ溝の幅は約40～50cmで断面は同じく浅い皿状のＵ字形、最も深いところで約10cmほどである。底面の絶対高はともに東から西にいくほど低くなるが、Ｂ区の2溝とは高さが段違いになる。

埋　土　埋土は二層にわかれ、上層は暗黄褐色の粘質土で、基盤層の粘土を掘り崩した土であるから、耕地整理のおこなわれた1910年代の整地土とみてよい。

1910年代に埋没　下層は暗褐色のやわらかい畠地耕作土で、畠地境界溝として機能していた時期の埋土である。

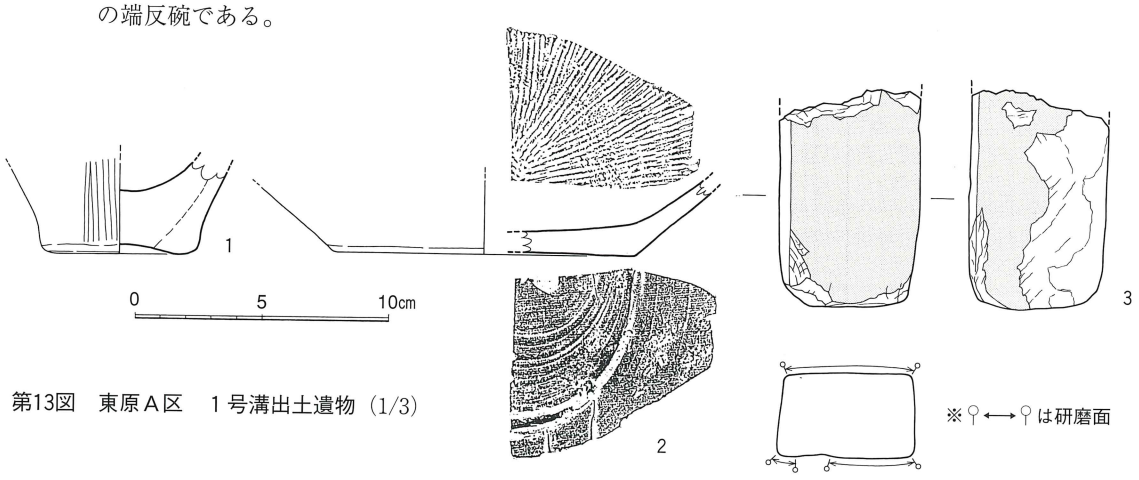
出土遺物　下層から1の近世染付碗の破片が出土した。1810～1860年代の肥前産染付の端反碗である。



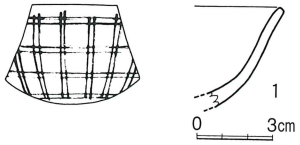
Ⅰ層：現水田耕作土
Ⅱ層：現水田床土
Ⅲ層：現水田造成時の整地層
Ⅳ層：水田化以前の畠地耕作土
Ⅴ層：赤褐色粘質土＝基盤層

1層：暗黄褐色粘質土（1cm大の炭片・1～2cm大の焼土粒多く含む）
2層：暗褐色粘質土（2・3cm大の焼土ブロック、1～2cm大の炭片・黒色粘土ブロックを多量に含む）
3層：淡黒褐色軟質土（1cm大の炭片・1～3cm大の焼土片を含む黒色粘土ブロック）
4層：暗褐色粘質土（中央に焼土塊があり、1～2cm大の焼土片、1cm大黒色粘土粒多く含む）
5層：暗黄褐色軟質土（1～2cmの焼土片、1cm大の炭片、黒色粘土ブロック多量に含む）
6層：淡黒褐色軟質土（焼土片少い黒色粘土ブロック）
7層：暗黄褐色土（焼土片、1～2cm大の黒色粘土多く含む）
8層：黄褐色土（黒色粘土粒を少量含む）

第12図　東原Ａ区　Ａ号土坑（1/30）

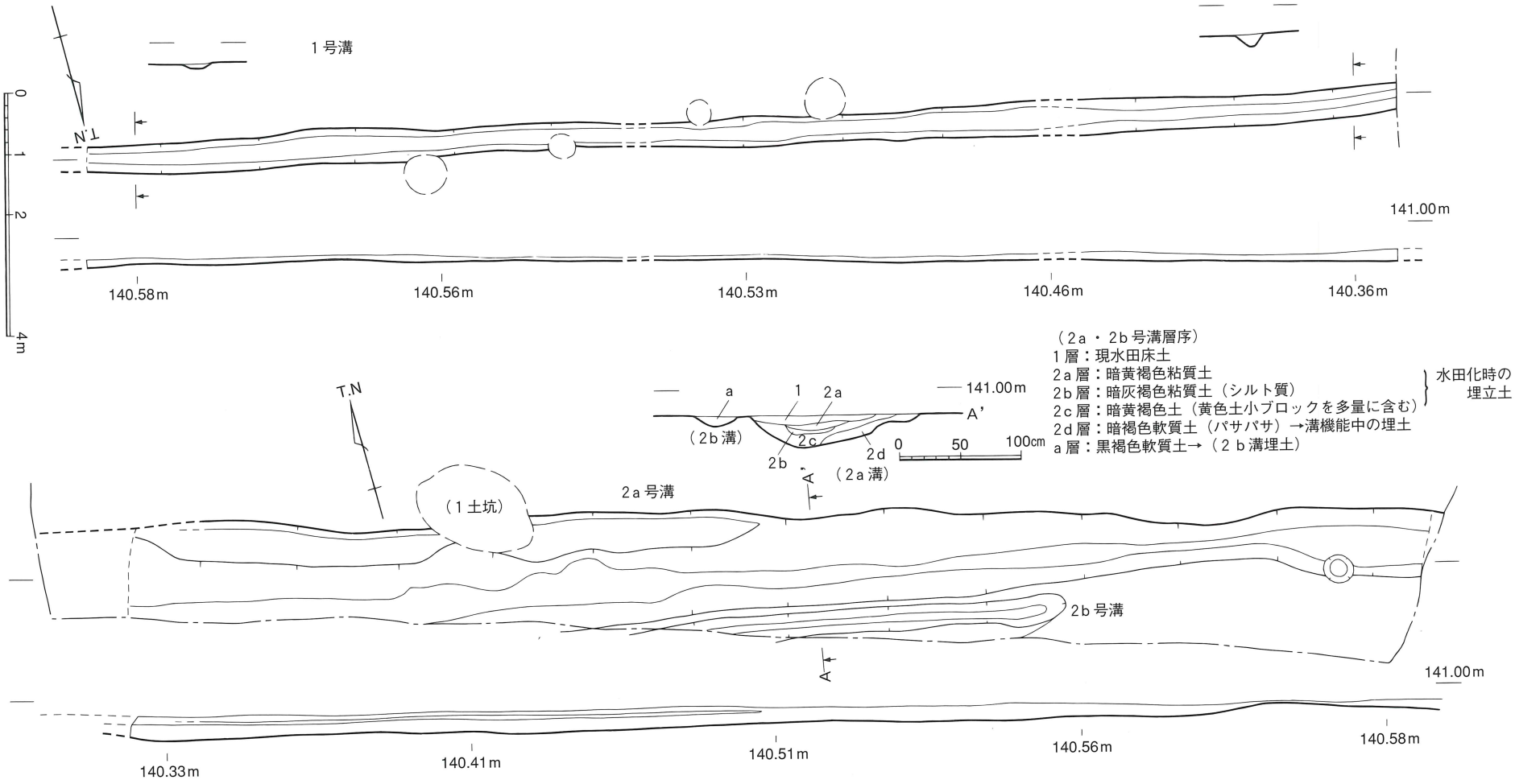


第13図　東原Ａ区　1号溝出土遺物（1/3）



第14図　東原Ａ区　2号溝出土遺物（1/3）

第15図　東原A区　1・2号溝（1/100）



第３節　東原Ｂ区

３－１　Ｂ区の概要（第16図→図版４中）

保存状態　調査区の東半分は近代の水田造成のために第１図のように削平されている。そのため浅い遺構はすでに消失したものと推定される。検出された遺構は、古

古墳時代　墳時代の１号土器棺墓１基と、

奈良時代　奈良時代の４号掘立柱建物跡１棟・１号竪穴建物跡１棟と３・４号土坑の２基である。それ以外の５・７号土坑と３・４・５・６号溝は近世以後の遺構である。ピットは30ヵ所あまりを検出し、その埋土中に遺物を含むものは４ヵ所にすぎず、そのうち３ヵ所は奈良時代、１ヵ所は

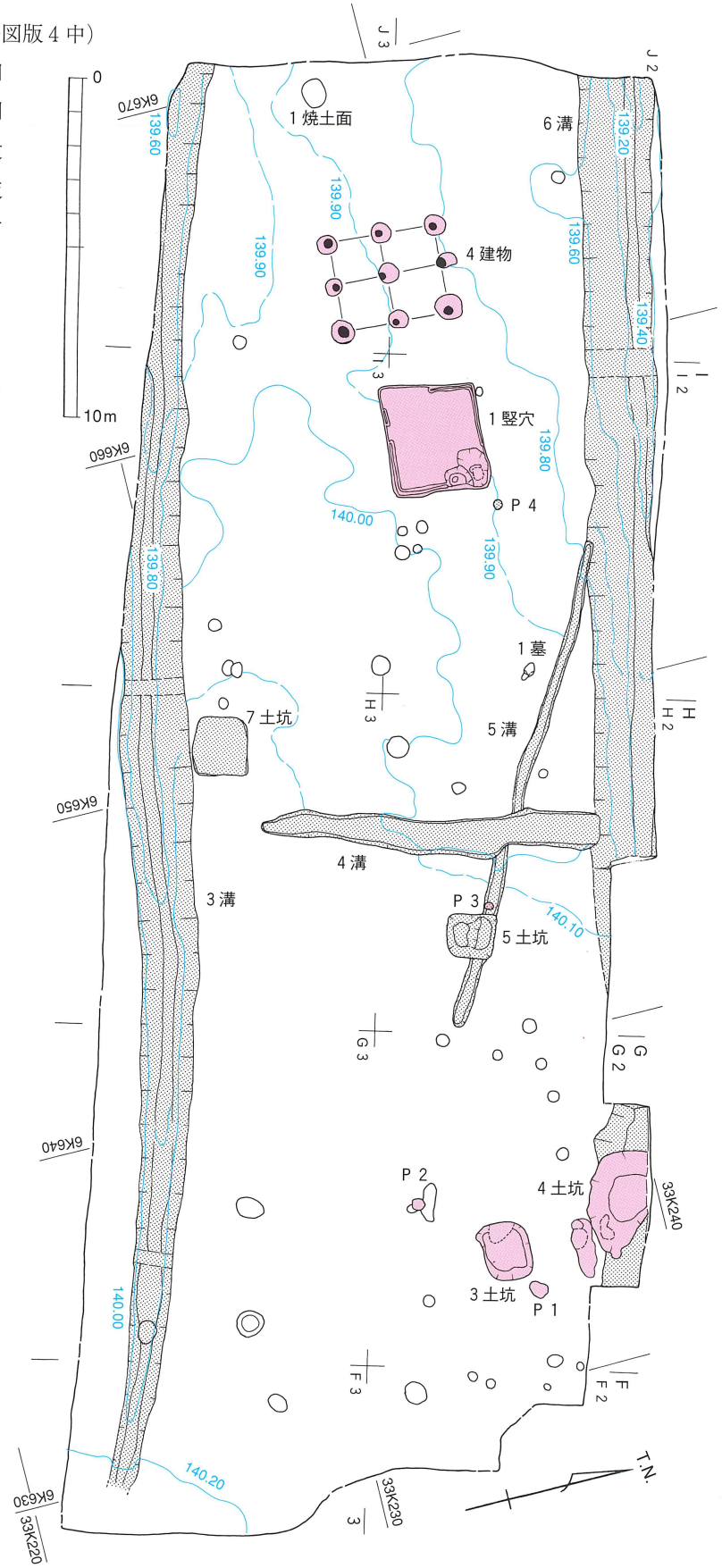
近　　世　近世のピットと推定されるが、そのほかのものは時期不明であり、同時に人為的な遺構かどうかも不明である。古墳・奈良時代の遺構と近世の遺構とは、切合関係と埋土の土質で明瞭に区別することができた。

表採資料　**表面採集と試掘時の遺物**（第17図）　いずれも旧畠地耕作土中から採集された遺物で、１と２は須恵器坏蓋。３は坏身、４は長頸壷の口縁部である。

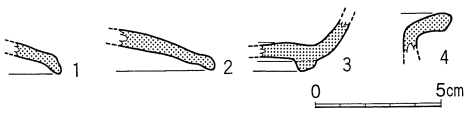
３－２　古墳時代の遺構と遺物（第16図）

小児墓１基　関連する遺構は周辺にはまったく無く、同時期の遺物も皆無である。墓地の一角あるいは集落の縁辺となる可能性は限りなく低い。それゆえ単独の埋葬と

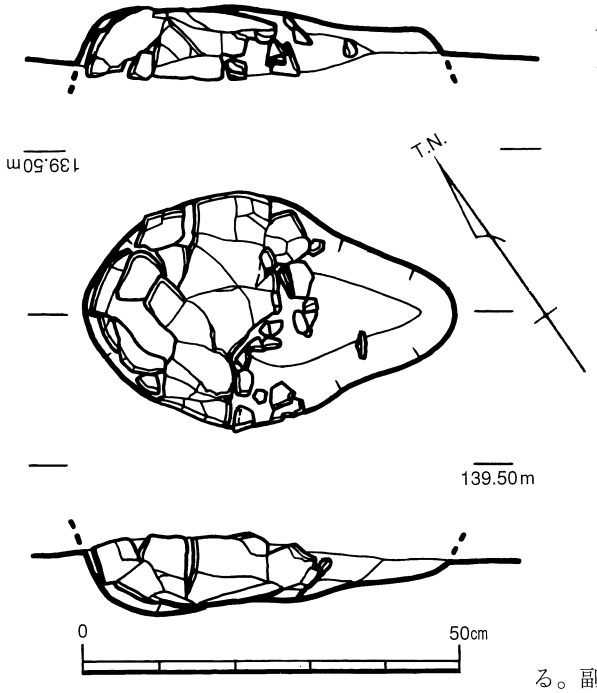
単独埋葬　考えざるをえない。集団墓地あるいは集落周辺の一般的な埋葬のほかに、このような単独埋葬例があることは注目される。



第16図　東原地区Ｂ区　遺構配置図（1/200）



第17図　東原Ｂ区　表面採集遺物（1/3）



第18図　東原Ｂ区　１号土器棺墓（1/10）

①　墓

１号土器棺墓（第18・19図、写真２→図版４下・77）

調査区中央の５溝のかたわらで発見された。土器は日常用の壷を使い、横にねかす小児棺である。底面が浅くなって土器の胴部が検出された東南方向が頭位と推定され、その方位角は125度である。掘形は土器の形のままでほとんど空間がない。その規模は残存部で長さ49cm、幅33cmで、検出面からの深さは最も深いところで11cmであった。壷の上半部は削平によって失われているが、本来あるべき底部が欠けているので、棺として用いるために取り除いたものと考えてよい。副葬品と推定されるものは２の貝のみであるが断定はできない。

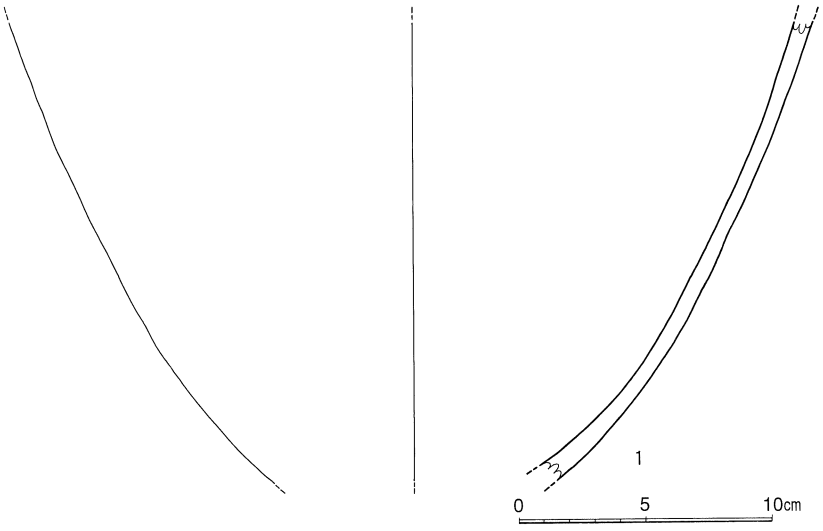
小児用壷棺

東南頭位

１は棺に用いられた土師器の大型壷の下半で、底部を欠いている。内面を丁寧にナデ上げた在地系の土器である。２は甕内部の土の中から検出された二枚貝の断片である。副葬品なのか偶然の混ざり込みであるか不明。そのほかに内部からは炭化したドングリの実を水洗で検出している。土器の形態からみて古墳時代前期前半と推定されるが、細かい時期の特定はできない。

底部打欠き

副葬品？



第19図　東原Ｂ区　１号土器棺墓　出土遺物（1/3）

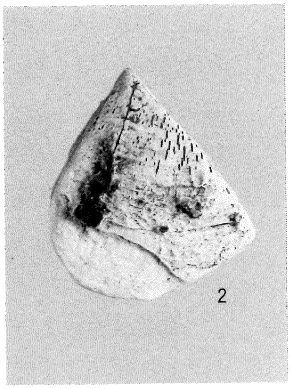


写真２

3－3　奈良時代の遺構と遺物（第16図）

遺　構

4建物と1竪穴

奈良時代の遺構は4号掘立柱建物跡、1号竪穴建物跡と3・4号土坑である。ピットのうち3ヵ所は奈良時代の遺物のみを検出した（ピット1～3）。高床倉庫とみられる4建物は2×2間の総柱建物で、C区の上野3期の建物群と方向を同じくする。1竪穴は北東隅に地床炉をもつ方形の小規模な竪穴で、柱穴はもたず、住居とは必ずしもいえない。4建物と方位を合わせて隣接しており、4建物と一単位を構成するものと推定される。建物と竪穴からかなり離れて発見された3・4土坑はいずれも不整形で土坑内には土器片とともに炭・焼土を捨てており、廃棄土坑であろう。その位置からみてA区の建物群と関係があるものと考えられる。

3土坑と4土坑

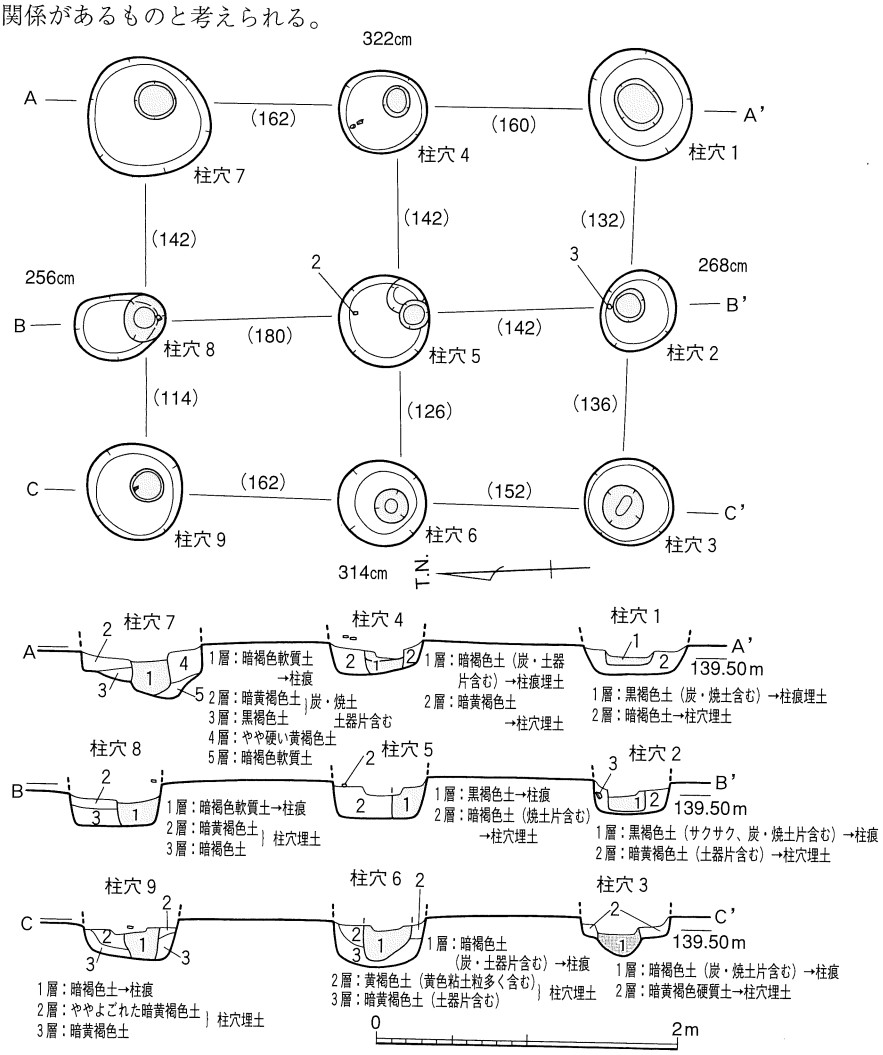
①　掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡（第20・21図→図版6上・77）

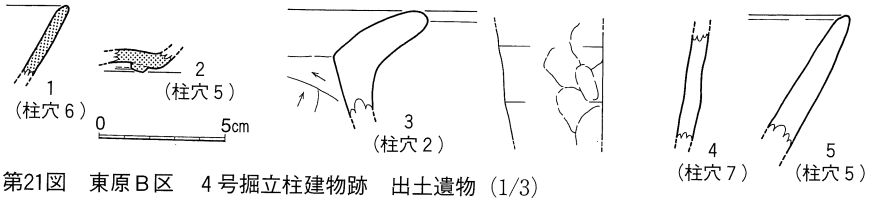
2×2間高床倉庫

梁間2間桁行2間の南北に長い総柱掘立柱建物跡である。中央に束柱をもつ高床倉庫と考えれ、南北長軸の方位角は4度である。柱間寸法は心心距離で南北長約314～322cm、東西長約256～268cmである。床面積は約8.4m²で、倉庫建築としては小型に分類される。柱間距離の1単位は159×131cmのタテナガ長方形となるⅡa類である。検出された9本の柱穴はすべて円形で、そのうち四隅の柱穴1・3・7・9が大きく掘削されたB類掘立柱建物である。掘形は四隅の柱穴が径60～80cm、その他は径40～60cmほどである。すべての柱穴から径20～30cmほどの円形柱の痕跡を検出した。柱の周囲には掘り出した黄色土をふたたびいれて固めている。柱痕と掘形で遺物を分離できたのは柱穴4・5・8・9のみである。遺物は土器の細片で、埋土へ混ざり込んだ遺物である。

柱　穴



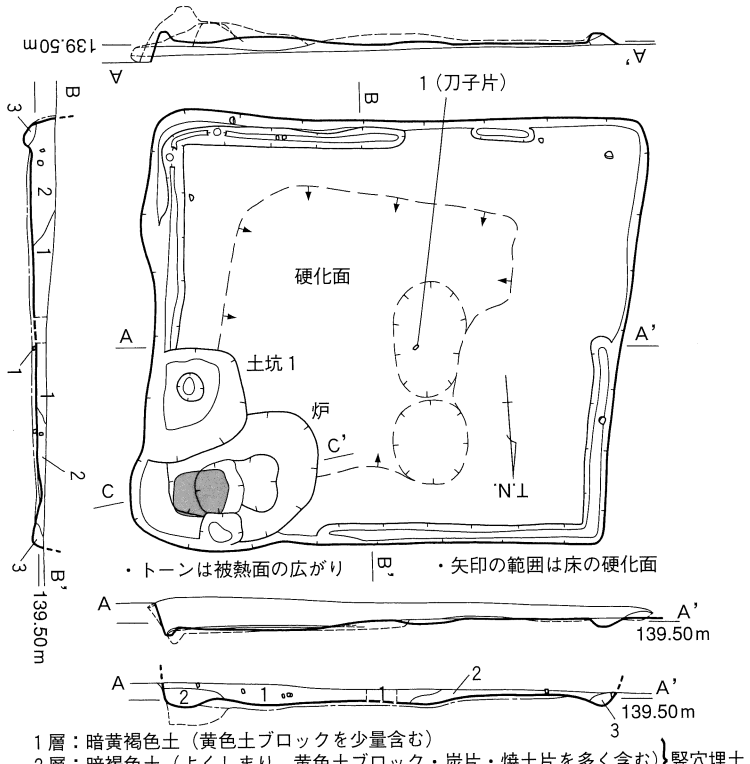
第20図　東原B区　4号掘立柱建物跡（1/50）

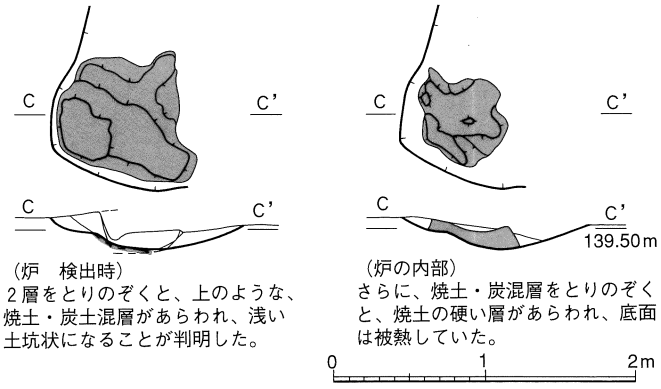


第21図　東原B区　4号掘立柱建物跡　出土遺物（1/3）

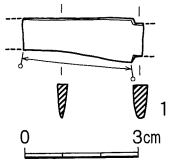
出土遺物

1は柱穴6出土の須恵器坏身。2は柱穴5の掘形埋土出土の高台付き須恵器坏身。3は柱穴2の掘形埋土出土の土師器甕。4と5はいずれも焼塩用の製塩土器で、4は砲弾形の六連式にあたり、





第22図　東原Ｂ区　１号竪穴建物跡（1/50）



第23図　東原Ｂ区
１号竪穴建物跡出土遺物
(1/2)

内面の布目痕をナデ消している。５は逆錐形のもので、被熱して赤変している。

出土遺物から奈良時代の遺構であることがわかり、建物の方向が東原Ｃ区の上野３期の建物と一致し、遺物に六連式の製塩土器があることから上野３期と推定した。　**上野３期**

②　竪穴建物跡

１号竪穴建物跡（第22・23図→図版５・77）

４建物に隣接しかつほぼ同じ方向に建てられた、東北隅に炉をもうけた方形の竪穴建物跡である。　**方形竪穴**

その規模は東西長軸長330cm、南北短軸長280cmの長方形で、検出面からの深さは約20cmである。東西軸の方位角は96.5度である。竪穴の床面積は8.3m²で、小型に分類される。柱穴はなく無柱穴の構造（Ｂ類竪穴建物）の上屋であったと推定される。周溝が途切れながらも全周し、東北隅に炉と土坑１が接して設けられている。床面は貼り床ではなくそのまま踏みしめられている。炉と土坑につらなる竪穴中央部の床面が特に硬化している。　**無柱穴**

炉は竪穴東北隅を長円形に掘り窪め底面を炉床としている。底面は被熱し、その上に焼き締まった焼土の層が広がっていた。近接する土坑１の存在からみて上部構造をもつカマドとは考えられず、地床炉とみてよい。炉内には焼土と炭を多量に含む土が堆積していたが、廃絶時の祭祀行為の痕跡ではないかと考えられる。　**地床炉**

竪穴の埋没状態は、層位がレンズ状堆積をなした廃絶後自然埋没の状態である。出土遺物は極めて少なく、竪穴廃絶後に廃棄土坑には転用されていないとみられる。おそらくこの１竪穴廃絶後は、周辺に建物が建てられず人が生活しなかったためと推定される。出土遺物は土師器の細片が数点出土したほかは、１の鉄製刀子の断片が、竪穴中央の床面直上で出土した。おそらく竪穴使用中に破損した破片が意図せず踏み込まれたものであろう。　**自然埋没**　**出土遺物**

出土した土師器から奈良時代に属すことが判明し、隣接する４竪穴と併存していたと推定されるので、同じ上野３期と推定される。　**上野３期**

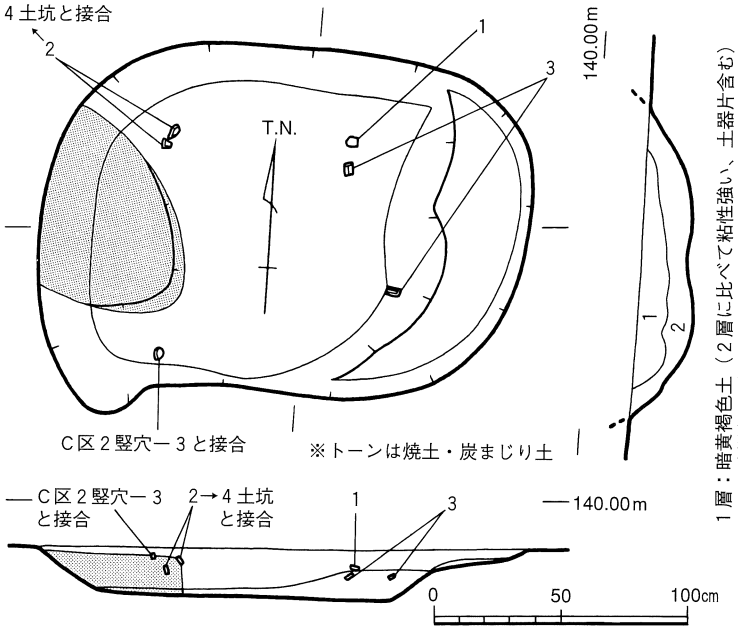
③　土坑

３号土坑（第24・25図→図版６中）

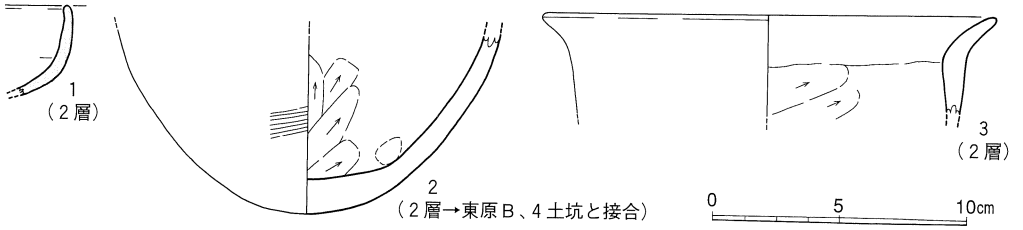
４土坑のそばで検出された隅丸長方形の大型土坑で、底面は平坦でなく断面半円形に近いが、東　**長方形大型**

側が階段状になるＣ４類土坑である。規模は検出面を基準に測って東西長軸長195cm、南北短軸長136cm、深さは最も深いところで24cmである。削平状況からみてさらに深かったものと考えられる。東西長軸の方位角は91度である。階段状の底面形状からみて、土取りなどの何らかの目的をもって掘られた土坑と考えられるが、具体的な用途は不明である。

土取り？



第24図　東原Ｂ区　３号土坑（1/30）



第25図　東原Ｂ区　３号土坑出土遺物（1/3）

埋没状態はまず西側より焼土・土器の廃棄（２層）があり、土器片の中には隣接する４土坑や50m近く離れた２竪穴の３のカマド祭祀出土の精製胎土の土師器壷（接合資料②）と接合したものがある。つづいて１層が埋積する。したがって掘削後は廃棄土坑として用いられている。１～３はいずれもその２層中の土師器で、１は精製胎土Ａの坏。２は通常胎土の土師器小型甕で、その破片の一部は隣接する４土坑の２層中からも出土した。３は通常胎土の小型鉢である。

廃棄土坑に転用

接合資料①

出土遺物から奈良時代に属することが判明し、接合遺物から上野１期の２竪穴が廃絶する時期に２層の廃棄がおこなわれたと解釈すると、４土坑とともに上野１期の終わりに掘られ上野２期に埋没したと推定される。

上野２期

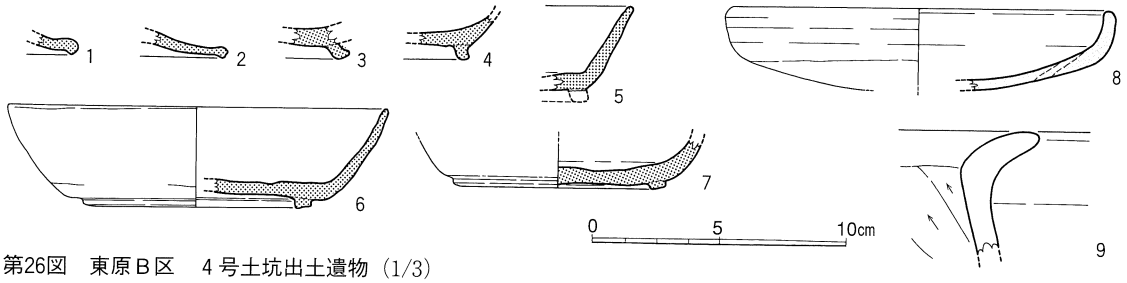
４号土坑（第26・27図、写真３→図版６下）

やや不整な長円形の大型土坑で、底面は平坦でなく断面半円形をなすＢ１類土坑である。規模は検出面を基準に測って長軸長300cm、短軸長180cm以上、深さは最も深いところで74cmである。上半は現代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。その形態からみてゴミ捨て穴として掘られた廃棄土坑と考えられる。そのそばに焼土面をもつ小土坑があり、その小土坑での焼却物を廃棄したと思われる焼土と炭の堆積が、小土坑と近接する南側に認められる。土器片は比較的少なく、焼却廃棄物を中心に廃棄している。

長円形大型

廃棄土坑

小土坑



第26図　東原Ｂ区　４号土坑出土遺物（1/3）

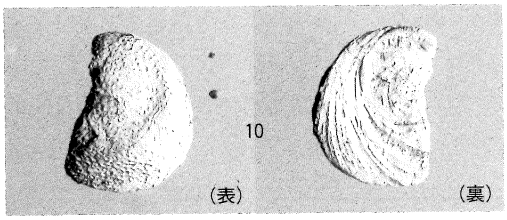
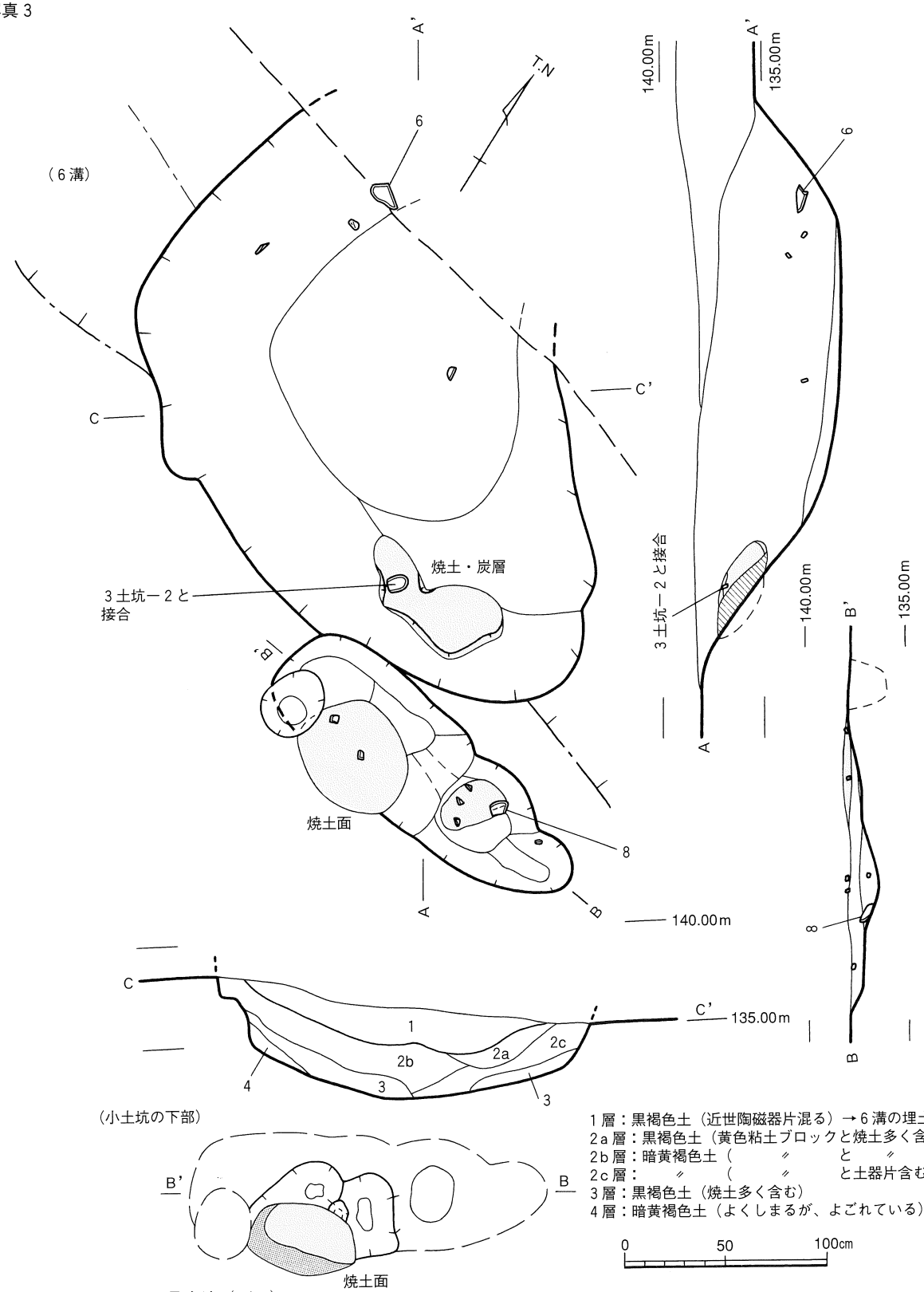


写真３



第27図　東原Ｂ区　４号土坑（1/30）

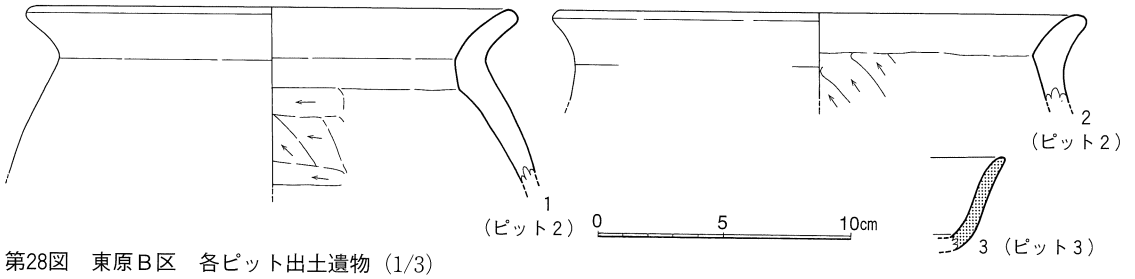
埋没状況は南側から土器片・焼土・炭などが短期間に何度か投棄された状態である。土器は小片が多く、3と5が上層から、6と7が下層から出土した。3土坑の2の甕と接合した破片が2層中から出土している、1～7は須恵器で、1と2は坏蓋口縁片、3～7は坏身片である。8は精製胎土Aの土師器坏で、9は通常胎土の土師器甕の口縁部片である、10はさざえのへたである。ほかに図示できないが精製胎土の土師器の甑把手の小片が出土している。

接合資料①

上野2期　出土遺物から奈良時代と判明し、3土坑と同時に使用されていたと推定される。

④ **ピット**（第16・28図）

削平が深いので柱穴とおもわれるピットは少ない。そのうち奈良時代の遺物のみが出土し、かつ土質からも奈良時代の遺構と考えられるのはピット1～3である。ピット2からは1と2の通常胎土の土師器甕の大型破片が出土した。ピット3からは3の須恵器坏身片が出土した。



第28図　東原B区　各ピット出土遺物（1/3）

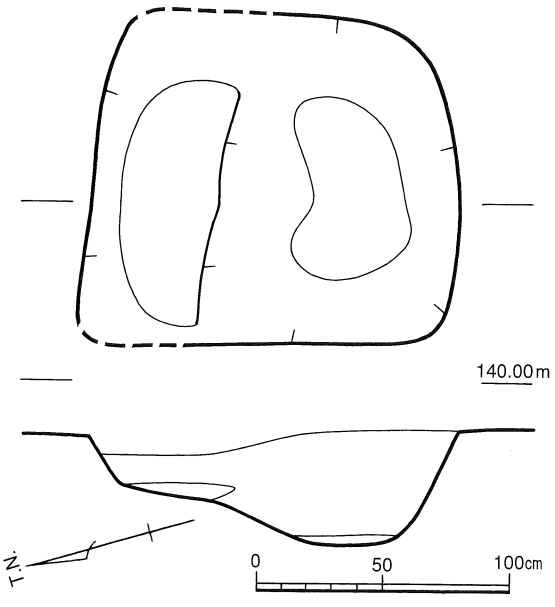
3－4　近世以降の遺構と遺物（第16図）

溝の順序　5・7号土坑と3・4・5・6号溝とピット4が近世以後の遺構である。以上の遺構には変遷がある。まず細い5溝が全面畠地化以前に掘られ、次に18世紀後半に幅広の3溝と6溝を平行して掘ることで、一筆の短冊形の耕地が区画される。その後その耕地を東西に分割するために4溝が掘られている。以上の3時期の推移がある。土坑が掘られた細かい時期は不明である。

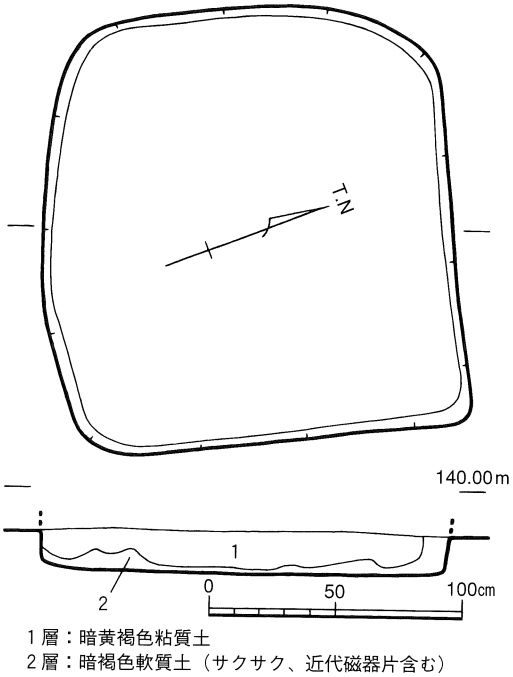
① **土坑**

5号土坑（第29図→図版8左上）

長方形　5溝を切って検出された隅丸長方形の土坑で、底面は平坦でなく断面半円形に近いが、北側が階段状になるC4類土坑である。規模は検出面を基準に測って南北長軸長145cm、東西短軸長130cm、深さは最も深いところで45cmである。削平状



第29図　東原B区　5号土坑（1/3）



1層：暗黄褐色粘質土
2層：暗褐色軟質土（サクサク、近代磁器片含む）

第30図　東原B区　7号土坑（1/3）

況からみてさらに深かったものと考えられる。南北長軸の方位角は15度で、周囲の近世溝の方向と一致する。階段状の底面形状からみて何らかの目的をもって掘られた土坑と考えられるが、具体的な用途は不明である。　用途不明

埋土はかなり深いにもかかわらず、よくしまった暗褐色の単一層で、1～2㎝大の花崗岩礫と土器の小片を含んでいた。遺物はいずれも残留した土師器や須恵器の小片であったが、近世の掘削が確実な5溝埋没後に掘り込まれているので、近世の遺構と認めた。

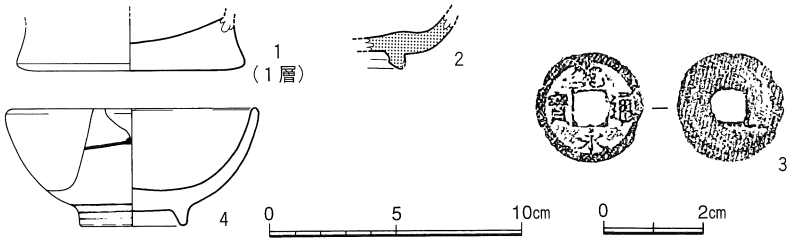
7号土坑（第30図→図版8右上）

3溝にとりつくように掘られた隅丸方形の土坑で、底面は平坦で壁も垂直に立って、断面箱形に近いC2類土坑である。規模は検出面を基準に測って東西長軸長173㎝、南北短軸長163㎝で正方形に近く、深さは最も深いところで15㎝である。削平状況からみてさらに深かったものと考えられる。東西長軸の方位角は105度である。平坦な底面形状からみて何らかの目的をもって掘られた土坑と考えられるが、具体的な用途は不明である。　方形箱形　用途不明

埋土は二層に別れ、底面に接する下部の2層は近代の磁器小片を含むサクサクの土で、その上の1層は均質の粘土層で、故意に埋められたものと考えられる。磁器小片と土質から近世の遺構と認めた。　埋めもどし

② **溝**

3号溝（第31・32図→図版7左上・77）



第31図　東原B区　3号溝出土遺物（1·2·4＝1/3　3＝2/3）

東西に長く延び、ゆるやかに湾曲した畠地境界溝である。その42.5m分を検出した。東方向の延長は近代の水田造成で削平されている。幅は約80～215㎝で、削平状態を考えると2mを超える幅広い溝であったと考えられる。断面は皿状のU字形をなし、深さは最も深いところで70㎝ほどである。底面の絶対高は東から西にいくほど低く、地形の傾斜と一致するが、中央から西は比較的平坦である。A区の2a溝とC区の7溝と平面的には連続する。底面の高さの点ではC区の7号溝とはスムーズに連続するのに対し、A区の2a溝とは段違いになり、東原A区とB区の境界付近には畠地開発時の造成による段差があるものとみられる。底面に接して拳大の円礫がまとまって出土する地点があり、その円礫に混在して、4の染付碗が出土した。　畠地境界溝　段差　集石

埋土は暗褐色軟質土の単一層で、この層中からは残留した縄文土器や須恵器片のほかに、近世の遺物が出土した。1は縄文土器の深鉢底部片で、晩期中葉以後のものである（註）。2は須恵器坏身。3は寛永通宝、1697年初鋳の新寛永である。4は18世紀後半の肥前産染付碗、いわゆる「くらわんか」である。　埋土と遺物

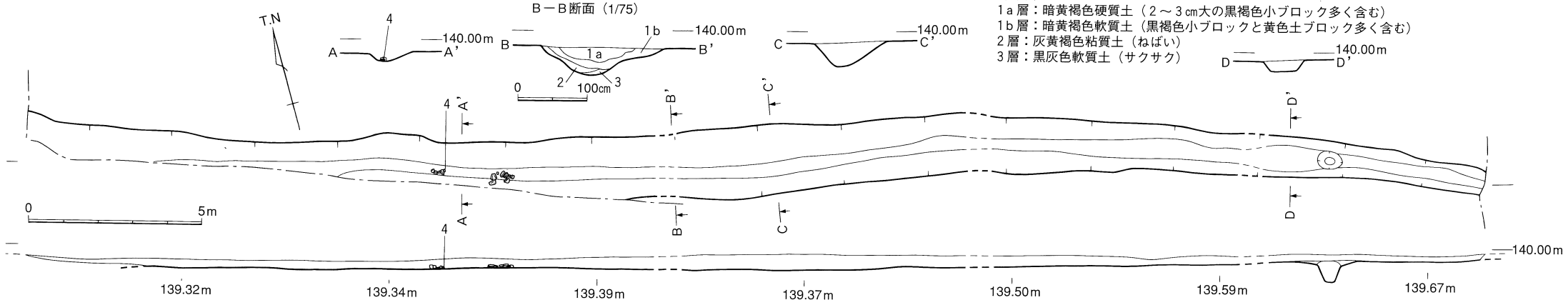
掘削後間もない時期に埋没したとみられる円礫群中に18世紀後半代の染付碗が出土したことは、この溝の掘削時期が、それ以前に遡らないことを示唆している。

（註）坂本嘉弘「手崎遺跡－縄文時代の包含層－」『日田市高瀬遺跡群の調査』2　1998　大分県教育委員会

4号溝（第33図→図版7右上）

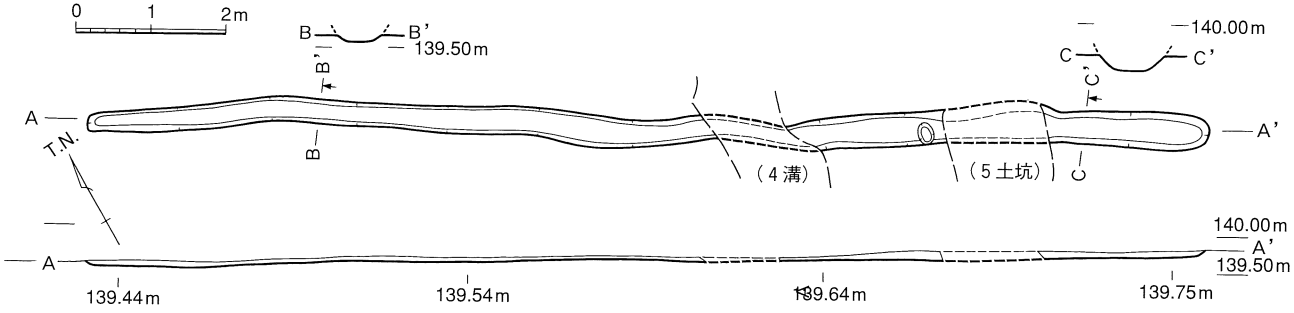
6溝から交差するように南北に延び、5溝を切った一直線の畠地境界溝である。10.1m分を検出した。南方向の延長は近代の水田造成で削平されているが、本来3溝にも接続していたものと考えられる。北方向の延長は6溝に接する。その方位角は14度である。幅は約80～115㎝で、どちらかといえば断面は浅い逆台形をなし、深さは最も深いところで20㎝ほどである。底面の絶対高は南か　畠地境界溝

第32図　東原Ｂ区　３号溝（1/150）

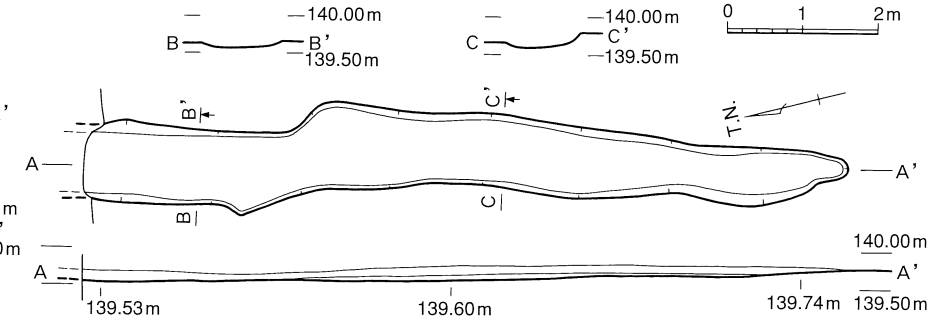


（層序）
1ａ層：暗黄褐色硬質土（２～３㎝大の黒褐色小ブロック多く含む）
1ｂ層：暗黄褐色軟質土（黒褐色小ブロックと黄色土ブロック多く含む）
２層：灰黄褐色粘質土（ねばい）
３層：黒灰色軟質土（サクサク）

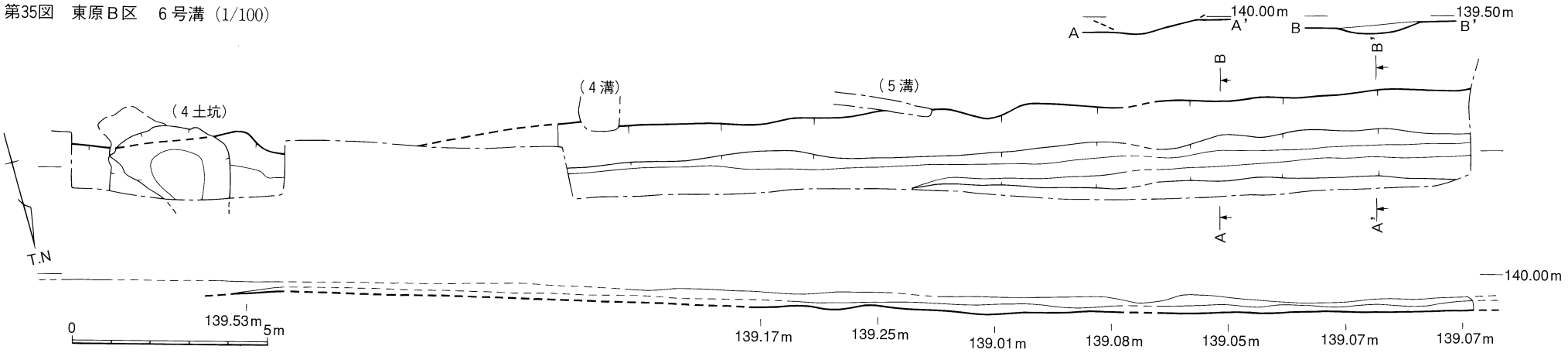
第34図　東原Ｂ区　５号溝（1/100）

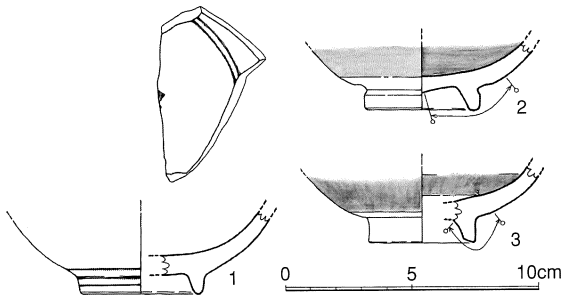


第33図　東原Ｂ区　４号溝（1/150）

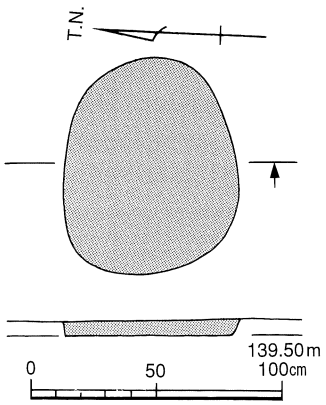


第35図　東原Ｂ区　６号溝（1/100）





第36図　東原Ｂ区　６号溝出土遺物（1･2･4＝1/3　3＝2/3）



第37図　東原Ｂ区　１号焼土面（1/30）

ら北にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。埋土からは残留した須恵器片とともに近世陶器の小片が出土した。

耕地の分割

東西に平行する２溝と６溝にかぎられた東西に長い耕地を分割するために、直交して掘られた境界溝で、底面の絶対高が２溝と６溝より高いことから推定して、３溝と６溝が４溝の底面の高さまで埋没した時点で新たにほられた溝と考えられる。

５号溝（第34図→図版７左下）

境界溝以前

４溝・６溝さらに５土坑に切られ、ほかの畠地境界溝と唯一異なる方向に長く延びる一直線の溝である。14.8m分を検出した。東方向の延長は近代の水田造成で削平され、西方向の延長は６溝に切られているためどうなるか不明である。その方位角は119度である。幅は約35～40cmと狭く、断面は皿状のＵ字形をなし、深さは最も深いところで20cmほどである。底面の絶対高は東から西にいくほど低くなり地形の傾斜と一致する。埋土はよく締まった暗褐色軟質土の単一層で、黄褐色粘土ブロックをところどころに含み、ほかの畠地境界溝と異なり比較的短期間の埋没あるいは埋め戻された可能性が高い。内部からは残留した須恵器片２点のほかに近世以後の陶器と磁器の小片が出土した。

埋土と遺物

６号溝（第35・36図→図版７右下・77）

畠地境界溝

東西に長く延びる直線状の畠地境界溝である。３溝と平行し５溝と４土坑を切っている。その35.5m分を検出した。東方向の延長は近代の水田造成で削平され、西方向の延長はＢ区内でおさまりＣ区には連続しない。その方位角は103度で、Ａ区の１溝と２溝の方位に一致する。幅は約250cm以上とかなり広い。断面は皿状のＵ字形をなし、深さは最も深いところで40cmほどである。底面の絶対高は東から西にいくほど低く、地形の傾斜と一致するが、中央から西は比較的平坦である。この特徴は平行する３溝と同じである。

埋土と遺物

埋土は暗褐色軟質土の単一層で、近世以後の陶磁器の小片が点在していた。そのうち図示できるものは以下のとおり。１は18世紀後半の肥前産染付碗で、見込みに蛇の目釉剥ぎがおこなわれ、五弁花文様の一部がみえる。２と３は鉄釉陶器碗である。

③　ピット（第16図）

出土遺物から近世のピットと考えられるのは、近世陶器の小片を出土したピット４のみである。

３－５　時期不明の遺構

①　１号焼土面（第37図）

調査区の西端で検出された円形の浅い凹みで、中央部が被熱して硬化している。やや楕円形で、87×70cmの規模である。深さはわずかに３cmであり、焼土・炭混じり層が堆積していた。カマドの最下部が残存したともみられるが、耕地整理による削平は及んでいない地点なので、なんらかの火処と推定される。土師質の土器細片がかなり出土したが、時期は不明である。

火　　処

第４節　東原Ｃ・Ｄ区

４－１　Ｃ・Ｄ区の概要（第39図→図版８・９）

保存状態

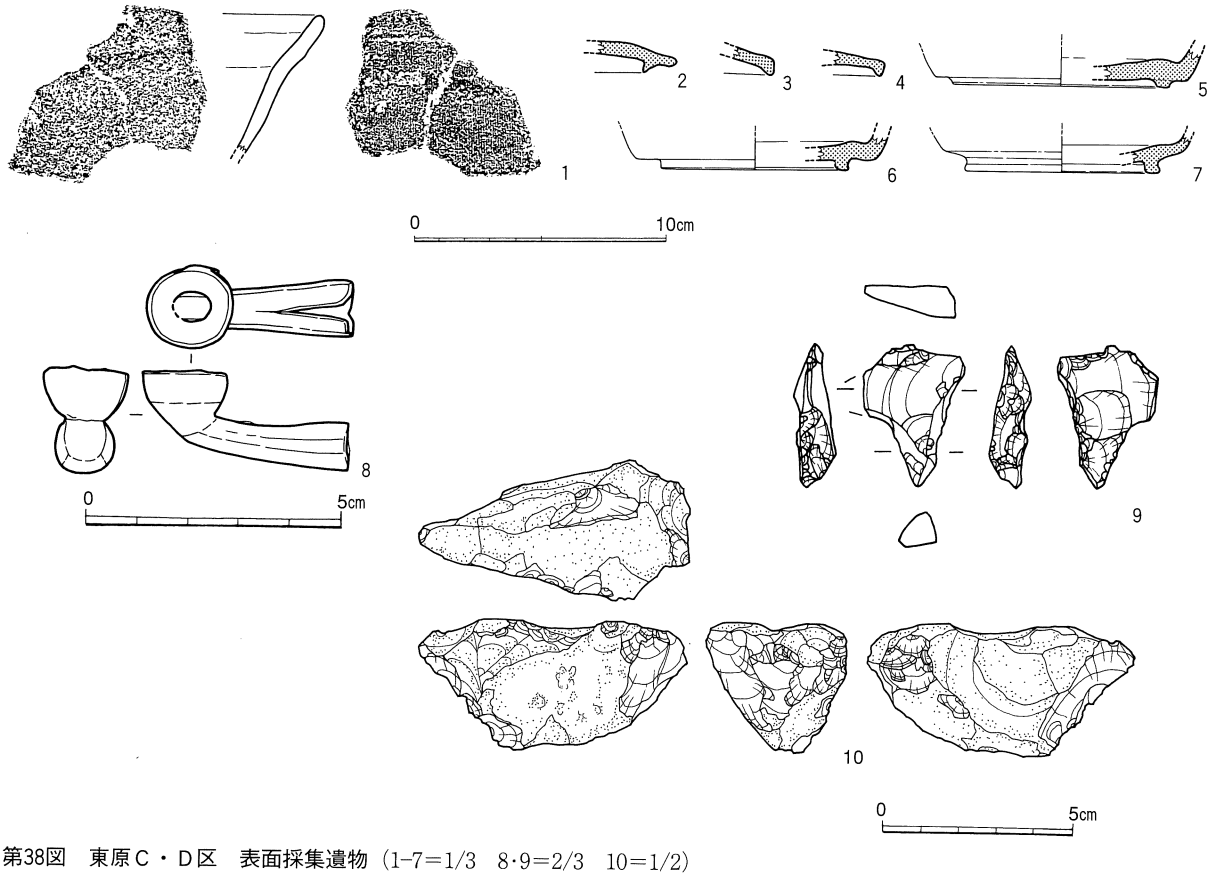
Ｃ区とＤ区は調査時期を異にする調査区だが、遺構が連続することから一括して報告する。調査区の東半分は近代の水田造成のために第１図のように削平されている。そのため東半分においては、浅い遺構はすでに消失したものと推定される。一方西半分は水田化の際埋め立てられていたため、遺構の保存状態は良好であった。

時代と遺構

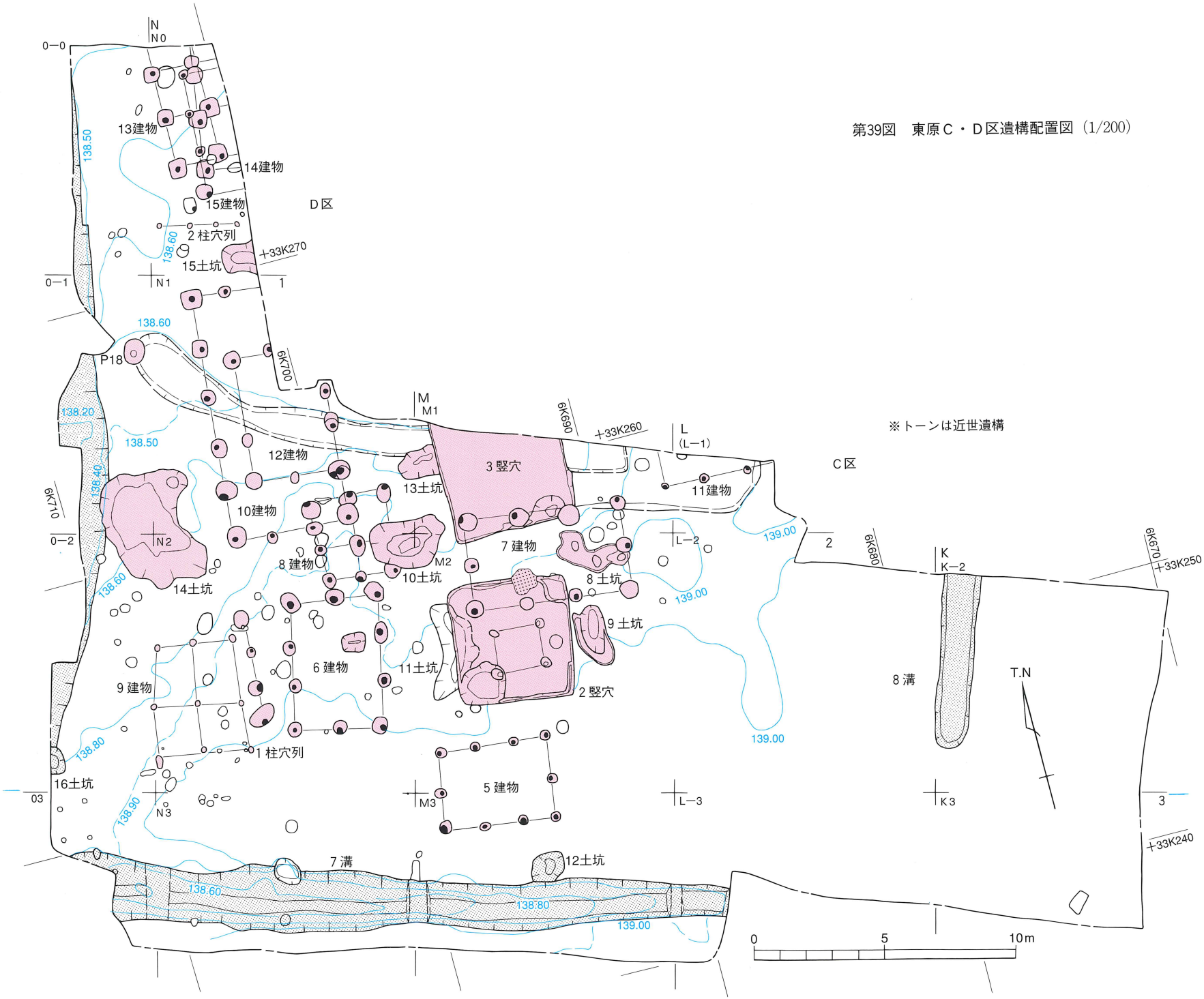
縄文時代の遺構は11号土坑１基のみで、奈良時代の遺構は５・６・７・８・９・10・11・12・13・14・15号掘立柱建物跡の11棟、２・３号竪穴建物跡の２棟、１・２号柱穴列の２基、８・９・10・13・14・15号土坑と６建物に付属する土坑の７基を発見した。近世の遺構としては12・16号土坑の２基と７・８号溝の２条を検出した。ほかに多数のピットを検出したが、それは４－５項でふれる。縄文時代と奈良時代の遺構および近世の遺構は、切合関係と埋土の土質で明瞭に区別することができた。

表面採集

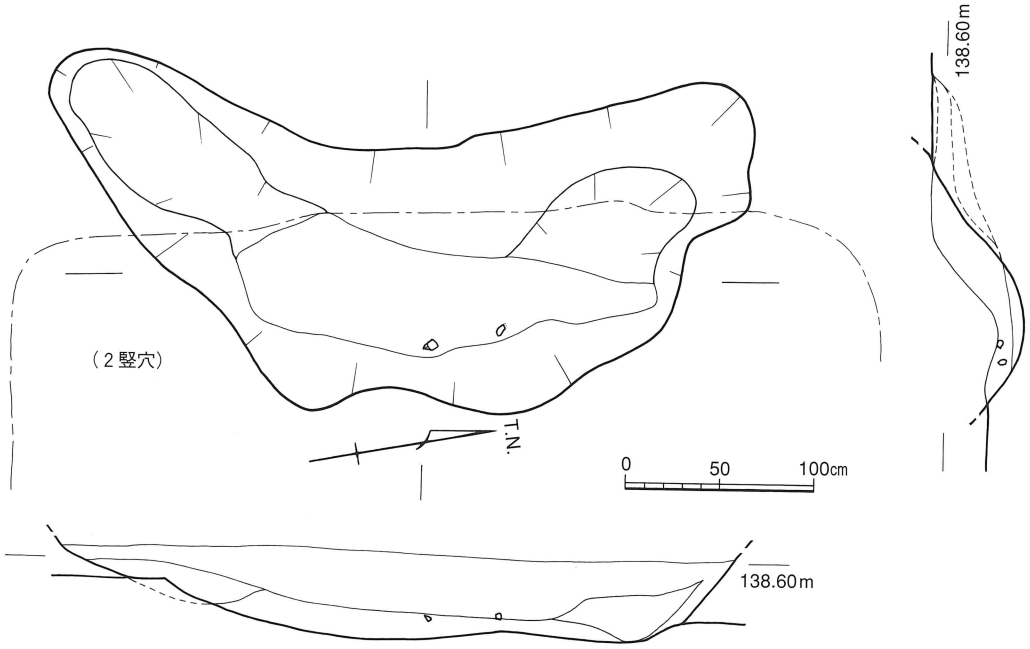
表面採集と試掘時の遺物（第38図→図版78）　７がＣ区、それ以外はＤ区の表面採集またはⅢ層の旧畠地耕作土内採集品である。１は縄文土器の浅鉢口縁部で、波状口縁である。２～７は須恵器で、２は口縁端部内面にかえりのつく坏蓋。３と４はかえりの消失した坏蓋。５～７は坏身で、須恵器は７世紀末から８世紀前半の製品である。８は近世以後の銅製のキセル。９は腰岳産黒曜石製の台形石器。10は同じく腰岳産黒曜石製の石核で90％自然面を残す。そのほかに土師器や近世陶磁器の細片を多数採集している。



第38図　東原Ｃ・Ｄ区　表面採集遺物（1-7＝1/3　8･9＝2/3　10＝1/2）



第39図　東原Ｃ・Ｄ区遺構配置図（1/200）



第40図　東原Ｃ区　11号土坑（1/40）

4－2　縄文時代の遺構と遺物（第39図）

①　土坑

11号土坑（第40図→図版９中）

船底形大型

２竪穴によって大半が破壊されていた湾曲した船底形の大型土坑で、底面は平坦でなく断面半円形の皿状になるＤ１類土坑である。規模は検出面を基準に測って南北373cm、東西186cm、深さは最も深いところで50cmである。削平状況からみてさらに深かったものと考えられる。用途は不明である。

埋土単層

埋土はかなり深いにもかかわらず、よく締まった暗褐色土の単一層で、暗黄褐色粘土のブロックと縄文土器の小片を含んでいた。奈良時代の２竪穴の埋土中に、保存の悪い縄文土器片が多量に混入していた。土器片は深鉢と浅鉢ばかりである。時期の特定が困難な小破片ばかりであるが、縄文時代の遺構と認めた。

4－3　奈良時代の遺構と遺物（第39図）

奈良時代の遺構は５・６・７・８・９・10・11・12・13・14・15号掘立柱建物跡、２・３号竪穴建物跡、１・２号柱穴列、８・９・10・13・14・15号土坑と６建物に付属する土坑である。

掘立柱建物

掘立柱建物が密集しており、そのうち規模が不明な11建物を除いて、５・６・７・12建物が梁間２間桁行３間の側柱建物で、そのうち５建物はやや小規模である。10建物は梁間３間桁行５間の大型建物である。８・９建物は２×２間の総柱建物で、このうち８建物は高床倉庫と推定される。９建物は柱穴の径が10cm未満で高床建物とは考えがたい。13建物は梁間２間以上桁行２間以上の総柱でやはり高床倉庫と考えられ、柱穴は方形である。14建物は梁間２間以上の掘立柱建物で、同じく柱穴は方形で、高床倉庫と考えられる。15建物は桁行３間以上の小柱穴による側柱建物である。竪穴建物はカマドをもつ居住用の施設である。また側柱建物の周囲には廃棄土坑が存在し、14・15土坑は10建物と、９・10土坑は７建物と密接な関係があると推定される。一方建物内にあたる位置から発見された土坑もある。６建物内の付属土坑である。おそらく建物の機能にかかわる施設であろう。また10建物と13～15建物群の間には杭を打ち込んだような２号柱穴列があり、そこで南北に区画されている。

竪穴建物
土　坑
柱穴列

切合関係

ところで以上の遺構には切合関係があり、遺構群は変遷を重ねたものである。まず２竪穴が古く

次に３竪穴が建設され、以上の竪穴を埋め戻して整地し７建物が建設され、周囲に９・10土坑が付設される。その10土坑は８建物を切っており、さらにその８建物と12建物を切って10建物が建設されて14・15土坑が付設される。13・14・15建物はこの順で切り合っている。

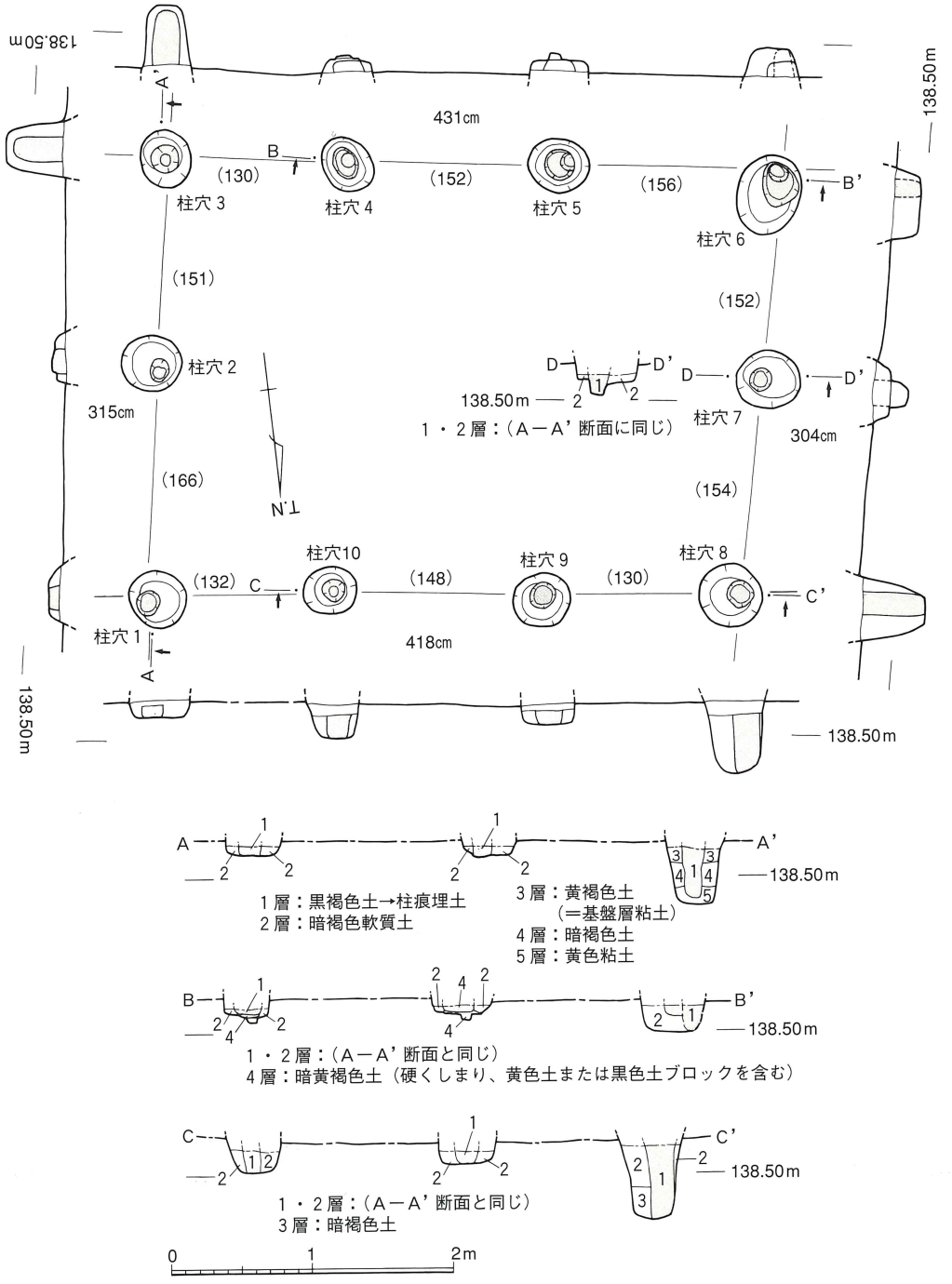
① **掘立柱建物跡**

５号掘立柱建物跡（第41図→図版９下）

２×３間側柱建物

梁間２間桁行３間の東西棟の掘立柱建物跡で、束柱のない側柱建物である。東西長軸の方位角は97度で、柱間寸法は心心距離で東西長約418～431cm、南北長約304～315cmである。床面積は約13.1㎡で小型建築に分類される。柱間距離の１単位は141×154cmのヨコナガ長方形となるⅡｂ類である。10本の柱穴はすべて円形で、そのうち北西と南東の柱穴３と８が、ほかの柱穴より30cmほど深く掘られたＢ類掘立柱建物であるが、大きさは揃っていて径40cmほどである。すべての柱穴から径

柱　穴



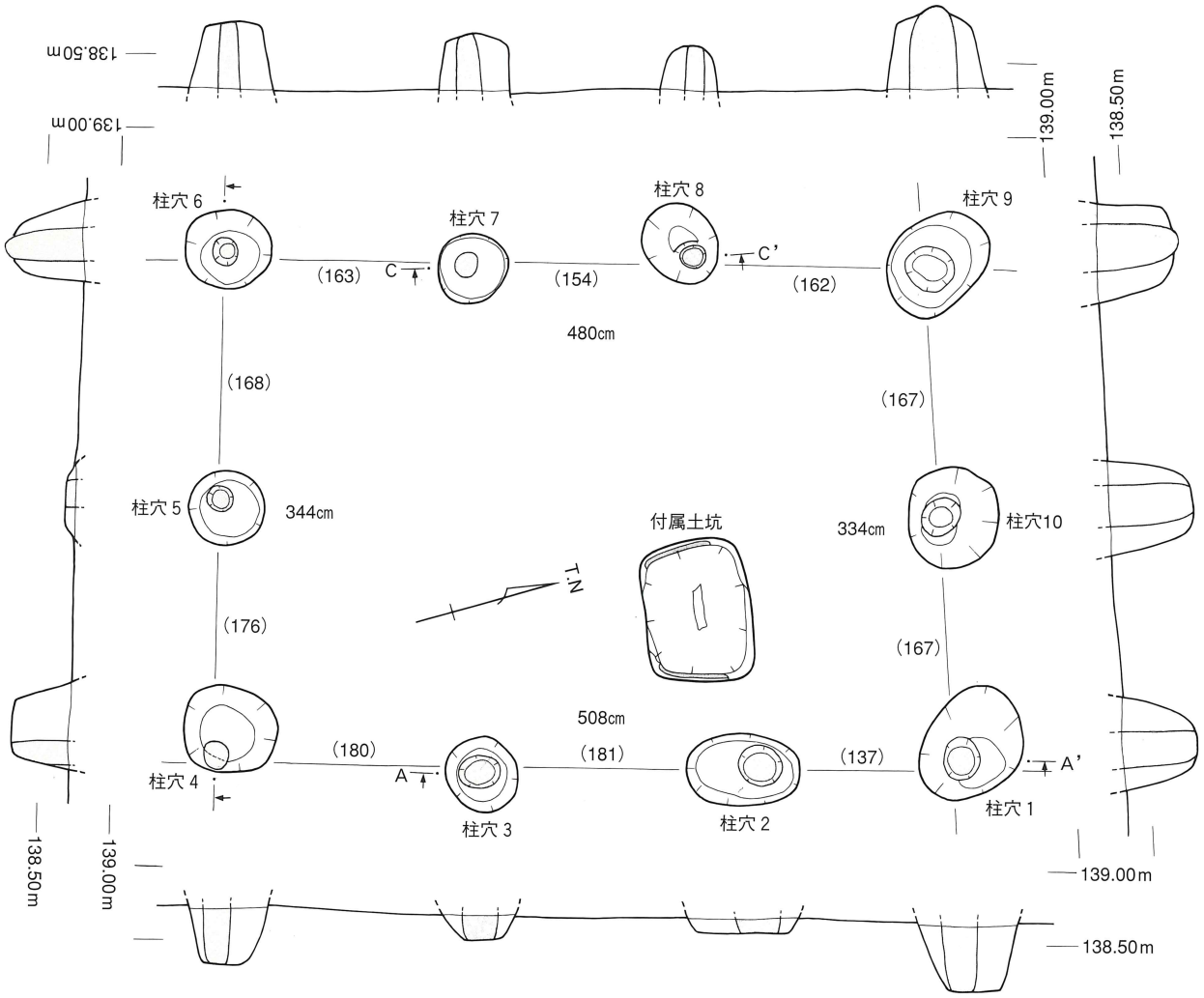
第41図　東原Ｃ区　５号掘立柱建物跡（1/50）

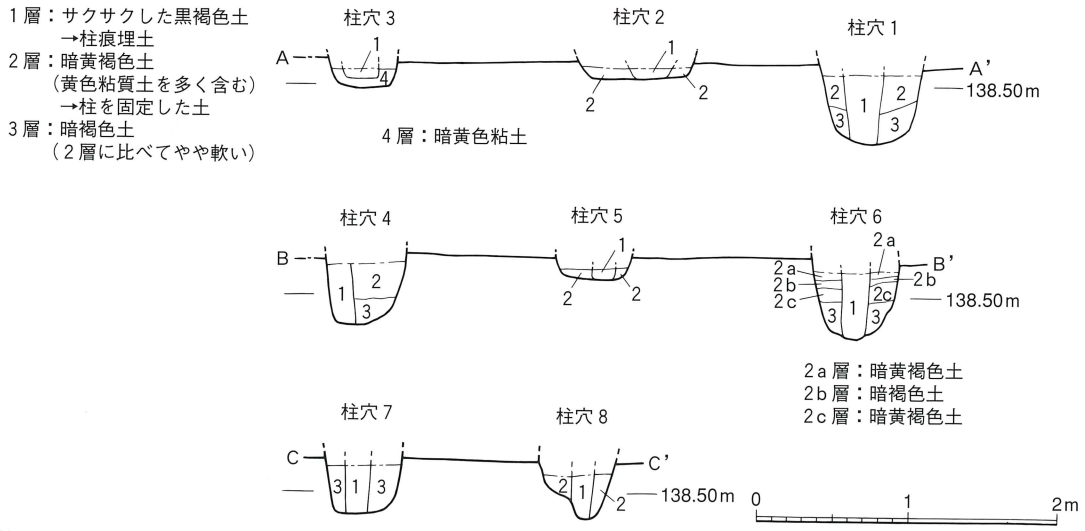
出土遺物　20cmほどの円形柱の痕跡を検出し、柱は掘り出した黄色土をふたたび入れて固めている。柱穴３と８から精製胎土Ａの土師器坏小片、柱穴５と９から須恵器細片、柱穴６から通常胎土の土師器甕小片が出土したがいずれも細片で図示できない。以上の出土遺物から奈良時代と判明し、７建物や10建物などと方向が一致するので上野３期と推定した。

上野３期

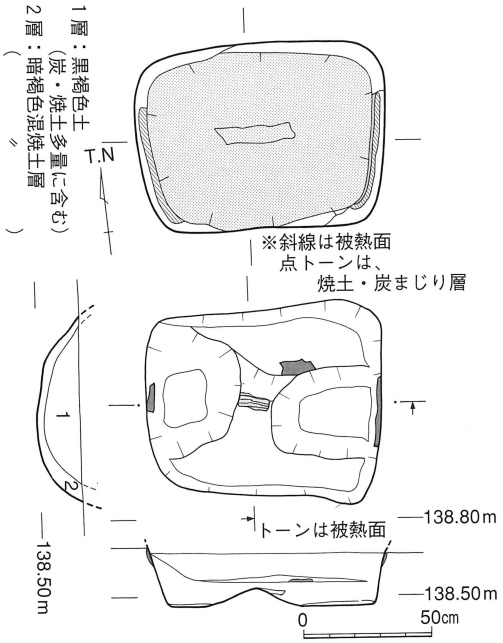
６号掘立柱建物跡（第42～44図→図版10上・中）

２×３間側柱建物　梁間２間桁行３間の南北棟の掘立柱建物跡で、束柱のない側柱建物である。南北長軸の方位角は12度で、柱間寸法は心心距離で南北長約480～508cm、東西長約323～342cmである。床面積は約16.8

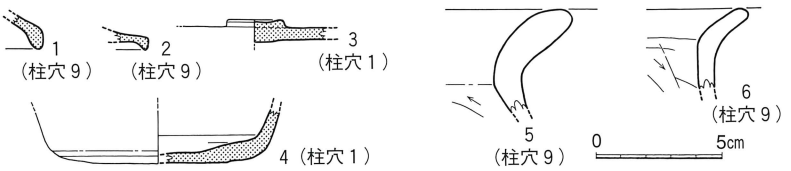




第42図　東原Ｃ区　６号掘立柱建物跡（1/50）



第43図　東原Ｃ区　６号掘立柱建物跡付属土坑（1/30）



第44図　東原Ｃ区　６号掘立柱建物跡出土遺物（1/3）

m^2で小型建築に分類される。柱間距離の１単位が164×166cmのほぼ正方形となるⅠ類である。10本の柱穴はすべて円形で、そのうち四隅と北の梁をささえる柱穴10が、ほかの柱穴より深くかつ大きく掘削されたＢ類掘立柱建物である。大きな柱穴で径60～70cm、ほかの柱穴で径は50～60cmほどである。すべての柱穴から径20～30cmほどの円形柱の痕跡を検出し、柱は掘り出した黄色土をふたたびいれて固めている。各柱穴には土師器の甕の細片が含まれていた。とりわけ北の両隅の柱穴１と９からまとまって土器片が出土している。柱穴１からは３の須恵器坏蓋のつまみ部分と４の高台のつかない坏身片が出土し、柱穴９からは１と２の須恵器坏蓋の口縁部片、および５と６の土師器の被熱した甕と鉢の破片のほかに、精製胎土Ａの土師器壷の小片が出土した。さらに南西隅の柱穴６からは精製胎土Ａの土師器坏の小片が２点出土している。この遺物出土状態は偶然ではなく、おそらく建物建築あるいは廃絶時の祭祀行為に関わるものと思われる。出土遺物から奈良時代と認め、建物の位置と方向から上野１期と推定した。

柱　穴

出土遺物

祭祀行為？

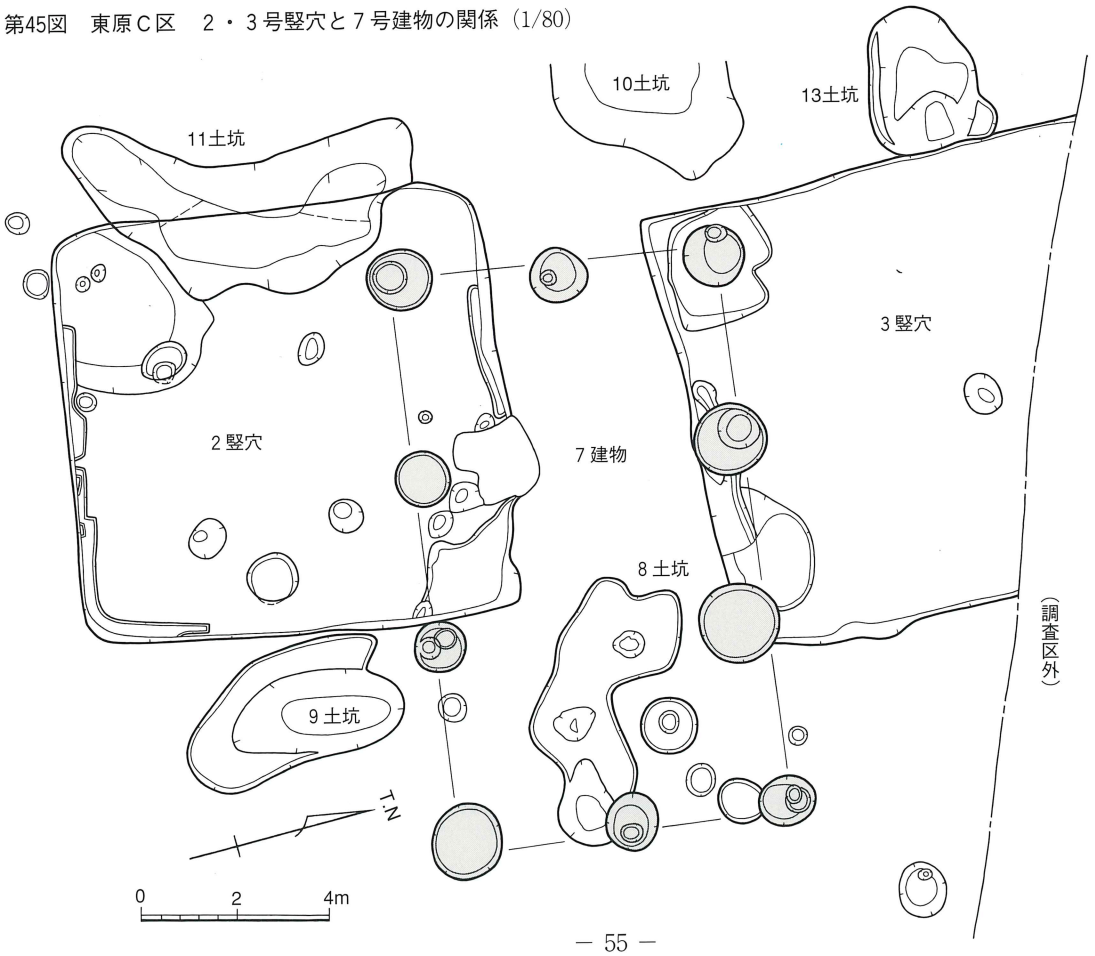
上野１期

付属土坑（第43図）６建物の内部北東側に掘られた隅丸方形の土坑で、底面は半円形だが東西両側に構築時に方形のピットが切られたＣ１類土坑である。方位は６建物とほぼ一致する。規模は検出面を基準に測って東西長軸長92cm、南北短軸長79cmを測り、深さは最も深いところで24cmで、削

方　形

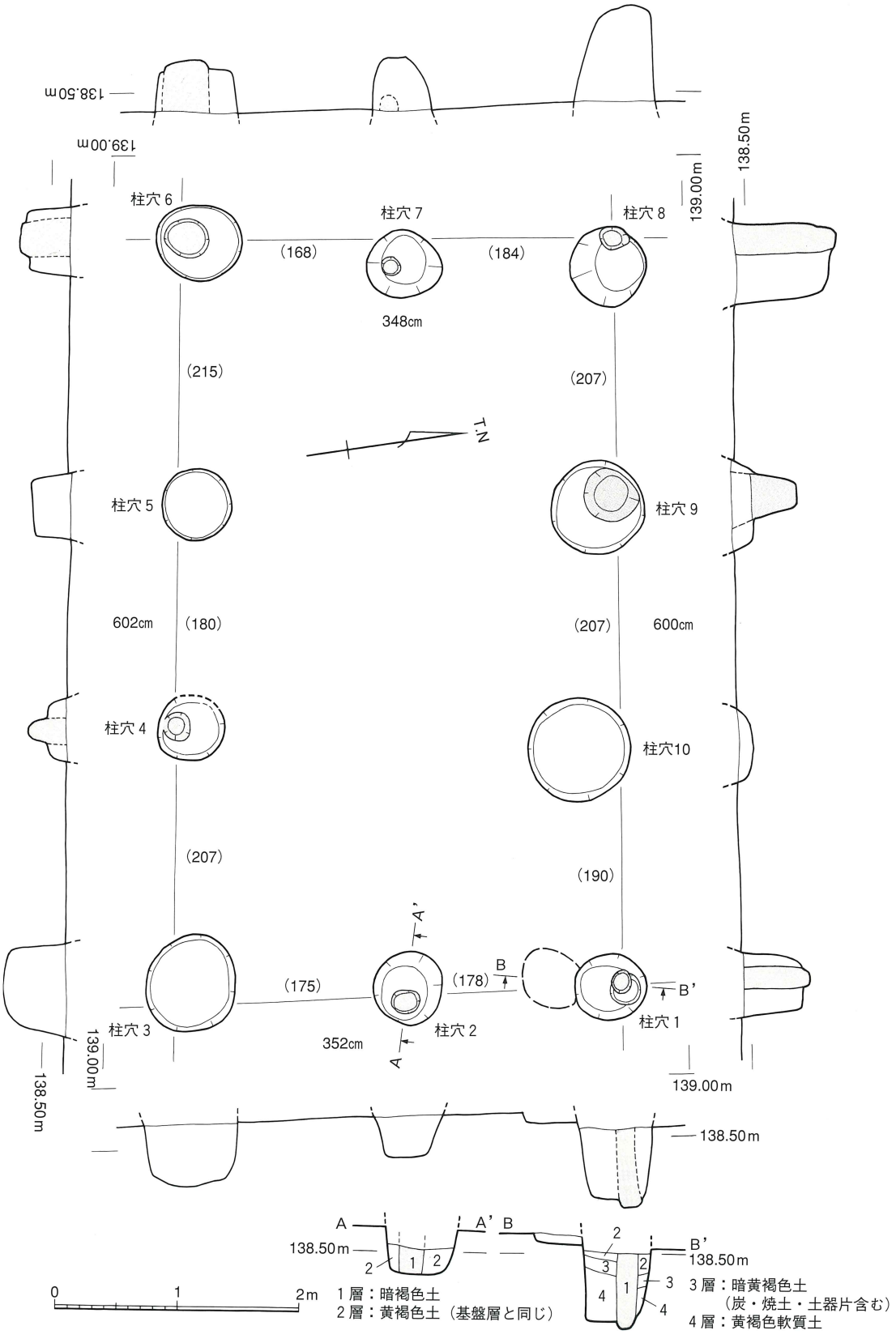
方形ピット

第45図　東原Ｃ区　２・３号竪穴と７号建物の関係（1/80）

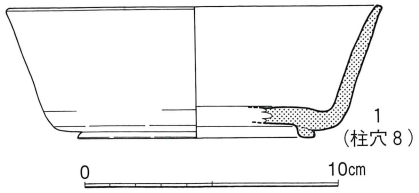


被　　熱　平状況からみてさらに深かったものと考えられる。東西の両辺が焼けて硬化しており、２ヵ所のピットは被熱時には埋まっていたので、この土坑で火が焚かれた時点では、中央が皿状に深い土坑であった。

埋没状態　埋土は二層に別れ、下部の２層は焼土と炭が堆積し、その上の１層は焼土と炭を大量に含む黒褐色土であった。焼土と炭片以外の遺物はまったく出土しなかった。



第46図　東原Ｃ区　７号掘立柱建物跡（1/50）



第47図　東原Ｃ区
７号掘立柱建物跡出土遺物（1/3）

７号掘立柱建物跡（第45～47図→図版10下）

２×３間側柱建物

２竪穴と３竪穴が廃絶後に埋め戻され整地された上に建てられた、梁間２間桁行３間の東西棟の掘立柱建物跡で、８土坑も切っている。束柱のない側柱建物で、東西長軸の方位角は97度である。柱間寸法は心心距離で東西長約600～602cm、南北長約348～352cmである。床面積は約21.1㎡で中型建築に分類される。柱間距離の１単位が200×175cmのタテナガ長方形となるⅡａ類である。検出された10本の柱穴はすべて円形で、そのうち北西隅と北東隅の柱穴１と８が、ほかの柱穴より深く掘削されたＢ類掘立柱建物である。いくつかの柱穴から径20～30cmほどの円形柱の痕跡を検出し、柱は掘り出した黄色土をふたたび入れて固めている。

柱穴

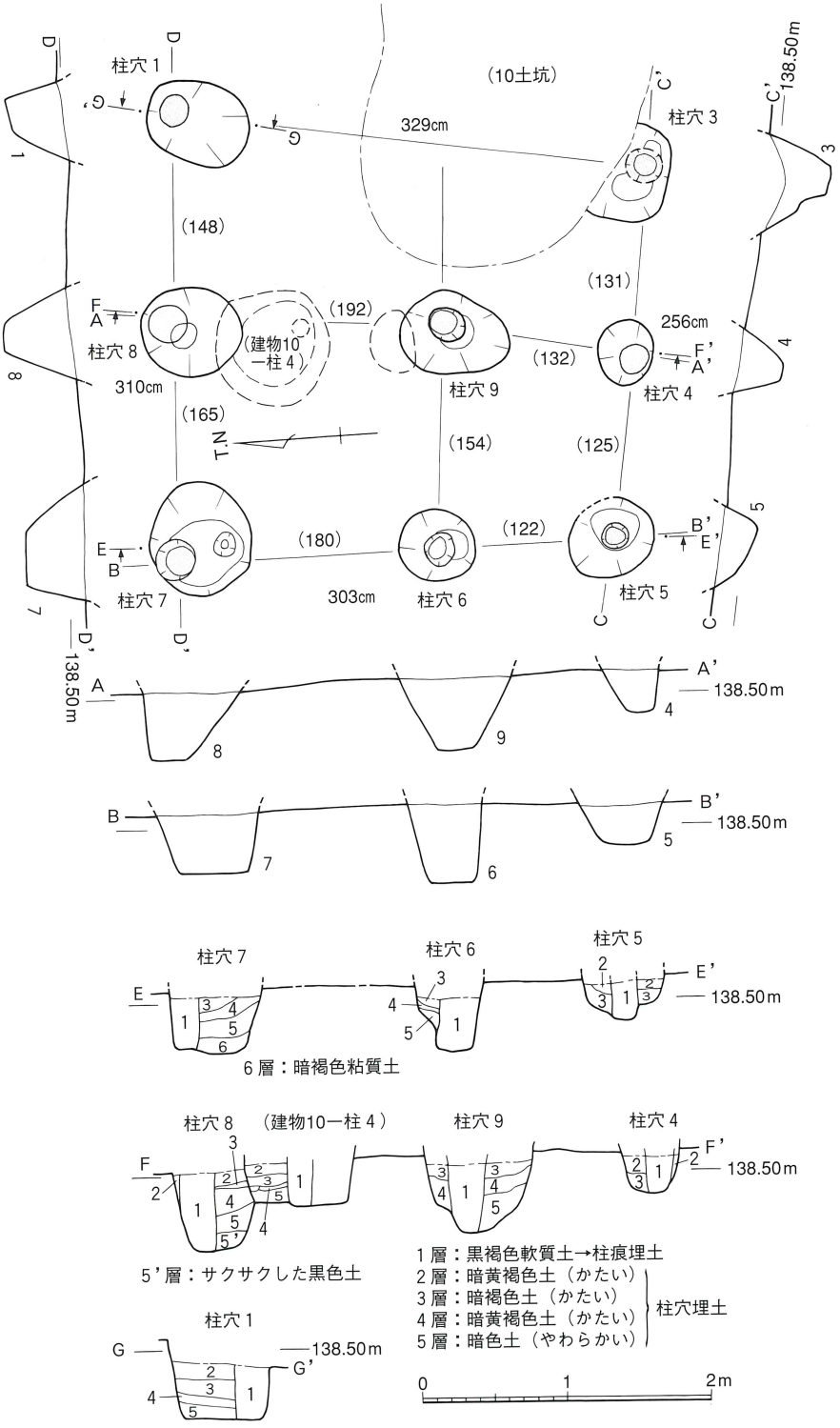
出土遺物

柱穴からの出土遺物は少なく、四隅の柱穴１・３・６・８と東西の梁間の柱穴２と７のみから土器片が出土した。柱穴１・２・３・６からは土師器甕の細片が、柱穴６と７からは精製胎土の土師器片が出土し、柱穴８から１の高台付きの須恵器坏身が出土した。接合作業によって１の破片はさらに10土坑の上層からも出土していることが判明した。以上の遺物出土状態は偶然ではなく、おそらく建物廃絶時の祭祀行為に関係するものと思われる。建物の切合関係から

接合資料⑥

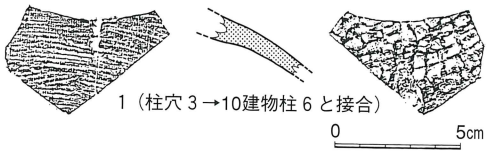
祭祀行為？

上野３期



第48図　東原Ｃ区　８号掘立柱建物跡（1/50）

ら建築時期は上野３期と推定した。



第49図　東原Ｃ区　８号掘立柱建物跡出土遺物（1/3）

８号掘立柱建物跡（第48・49・55図→図版11上）

２×２間
高床倉庫

10号土坑に柱穴を切られた梁間２間桁行２間の南北に長い総柱の掘立柱建物跡で、中央に束柱をもつ高床倉庫と考えられる。建物の南北長軸の方位角は７度である。柱間寸法は心心距離で南北長約302～328cm、東西長約256～310cmで全体に矩形にゆがんでいる。床面積は約8.9m²で、倉庫建築としては小型に分類できる。柱間距離の１単位が157×142cmのタテナガ長方形となるⅡａ類である。

柱　穴

検出された８本の柱穴のうち、７本は円形で柱穴３のみが隅丸方形である。明瞭ではないが四隅の柱穴が大きく掘削されるＢ類掘立柱建物と考えられる。すべての柱穴から径20～30cmほどの円形柱の痕跡を検出した。

出土遺物

柱は掘り出した黄色土をふたたび入れて固めている。四隅の柱穴３・５・７と中央の柱穴９のみから土器片が出土した。柱穴３からは１の須恵器壷の胴部片が出土し、10建物の柱穴６出土品と接合した。柱穴５からの須恵器甕の小片が、柱穴７からは精製胎土の土師器片が、柱穴９からは土師器甕の小片が出土した。この遺物出土状態は偶然ではなく、おそらく建物廃絶時の祭祀行為に関わるものと思われる。建物の切合関係から上野２期の建築と推定した。

接合資料⑦
祭祀行為？
上野２期

９号掘立柱建物跡（第50・51図→図版11中上）

２×？間
小屋掛け

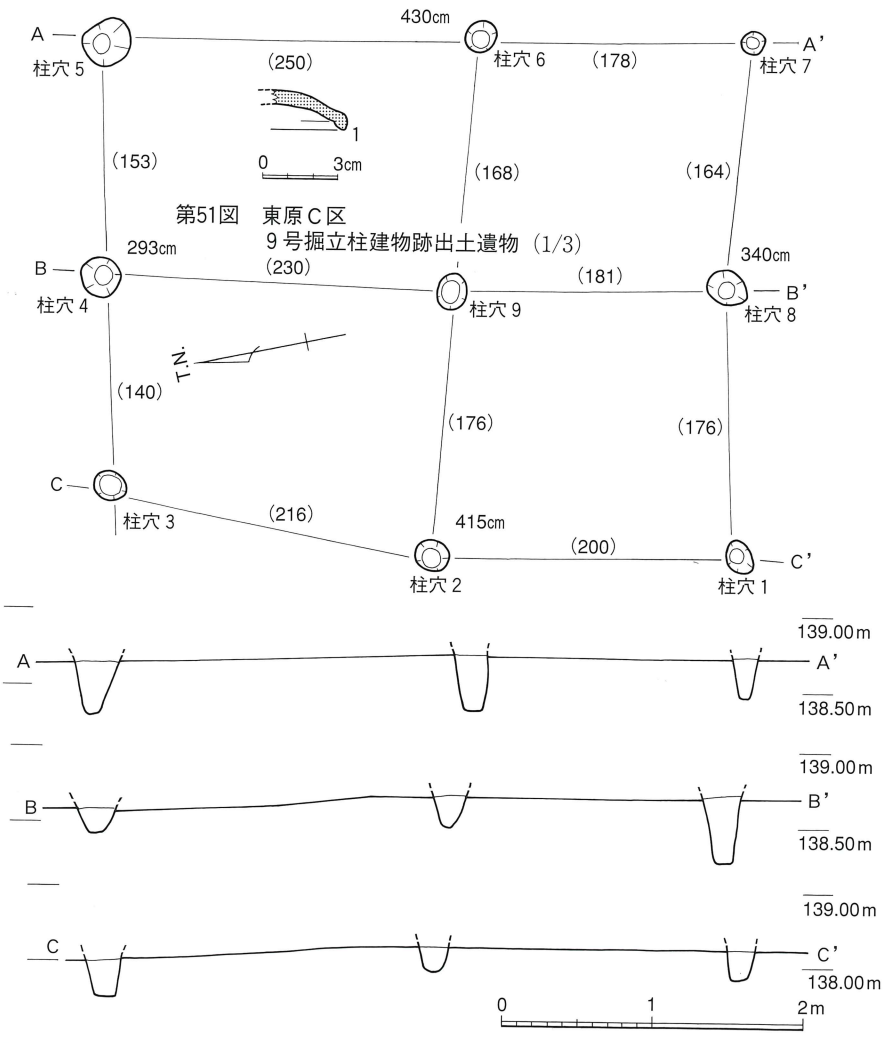
梁間２間桁行２ないし３間の南北に長い総柱掘立柱建物跡である。中央に柱をもつが、柱穴の規模からみて高床倉庫とは考えられず、簡易な小屋掛けで、臨時的な施設の可能性がある。南北長軸の方位角は８度で、柱間寸法は２×２間の場合心心距離で南北長約415～430cm、東西長約293～310cmである。柱はややいびつに配置されている。床面積は約13.4m²で、小型に分類される。柱間距離の１単位が211×150cmのタテナガ長方形となるⅡａ類である。

柱　穴

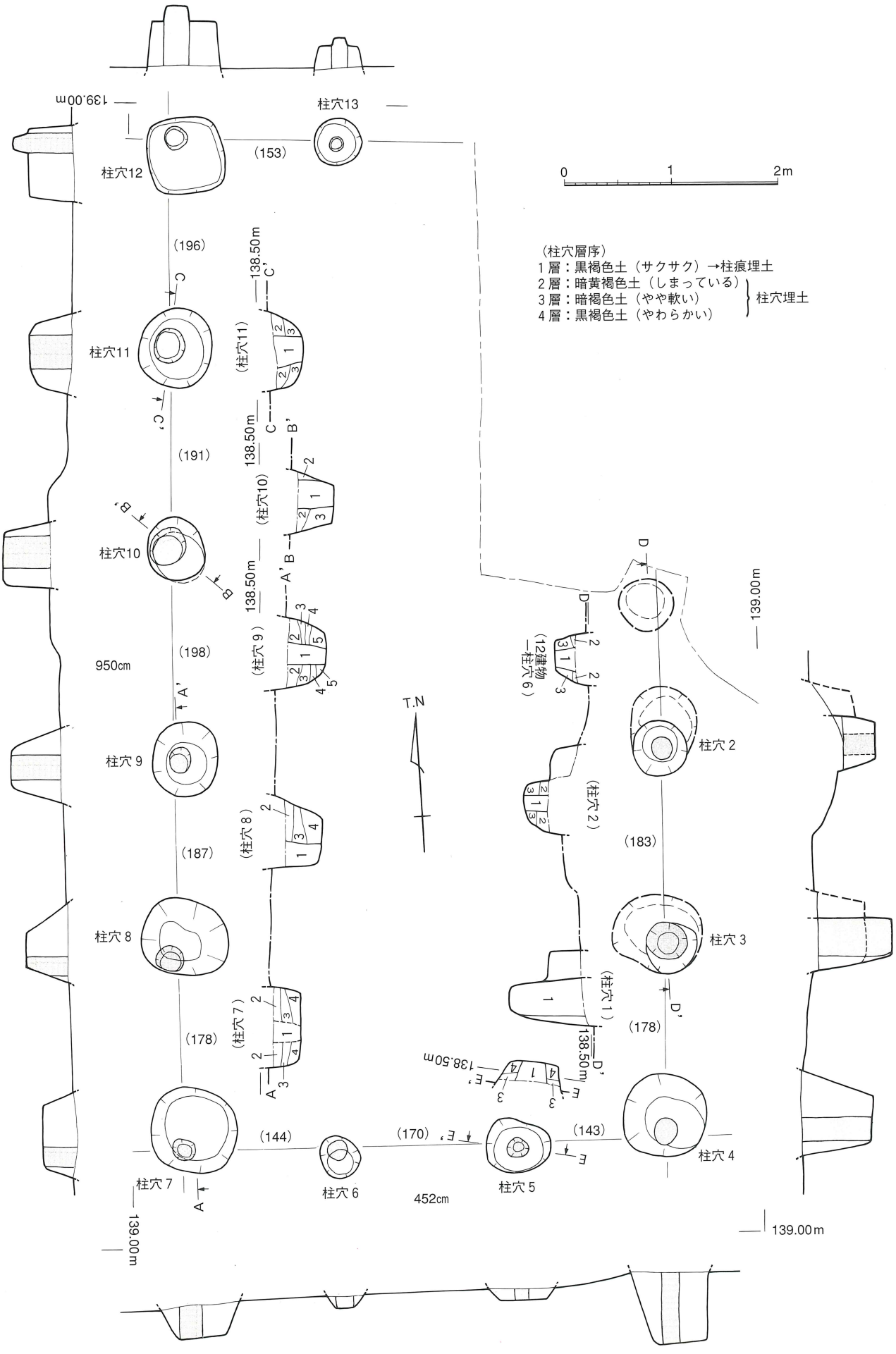
柱穴はすべて小型円形で柱の痕跡は検出できなかったが、掘形はすべて径20cmほどで、柱穴の大きさと深さが同じＣ類掘立柱建物である。なお建物の南側にも同規模の柱穴が点在しており、あるいは南にさらにのびていた可能性もある。

出土遺物

出土遺物はほとんどなく、わず

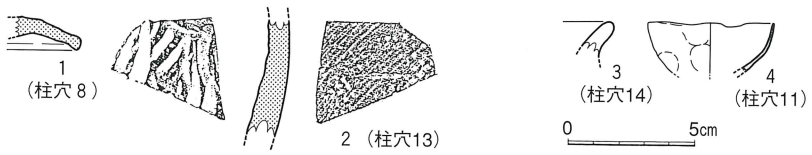


第50図　東原Ｃ区　９号掘立柱建物跡（1/50）



第52図　東原C・D区　10号掘立柱建物跡（1/50）

かに柱穴６から１の須恵器坏蓋の口縁部片が１点だけ出土した。この遺物以外に新しい遺物が含まれていないので、奈良時代の遺構と認め、建物の位置と方向から上野３期に建てられたと推定した。



第53図　東原Ｃ区　10号掘立柱建物跡出土遺物（1/3）

上野３期

10号掘立柱建物跡（第52・53・55図→図版11下・12中・78）

３×５間側柱建物

調査区外にのびる梁間３間桁行５間の南北棟の大型掘立柱建物跡である。８建物と12建物を切って建てられた束柱のない側柱建物で、南北長軸の方位角は４度である。柱間寸法は心心距離で南北長約950cm、東西長約453cmで、床面積は約43㎡前後と推定され特大型に分類される。今回の調査で発見された掘立柱建物跡としては最大である。柱間距離の１単位は190×151cmのタテナガ長方形となるⅡａ類である。12本の柱穴のうち柱穴12が隅丸方形となる以外はすべて円形である。南北の梁を支える柱穴５・６・13が浅くかつ小さく掘削された以外は、柱穴は深くかつ大きく掘られたＡ類掘立柱建物である。その掘形は東西列の柱穴が径60～80cm、梁間の柱穴は径30～50cmほどである。すべての柱穴から径20～30cmほどの円形柱の痕跡を検出したが、柱そのものの太さに大小はない。

柱　穴

出土遺物

柱は掘り出した黄色土をふたたび入れて固めている。各柱穴から土師器の細片が出土しているほかに、柱穴２から精製胎土Ａの土師器坏片、柱穴６から須恵器の壷片が出土し、８建物の柱穴３出土片と接合した（第49図１）。柱穴８からは１の須恵器坏蓋片が、柱穴９からは精製胎土Ａの土師器壷片が、柱穴11からは４の手づくねで器壁の薄い精製胎土Ａのミニチュア土師器の小碗片が、柱穴13からは２の須恵器の壷胴部片が、柱穴14からは３の精製胎土Ａの土師器壷口縁部片が出土した。

接合資料⑦

上野３期

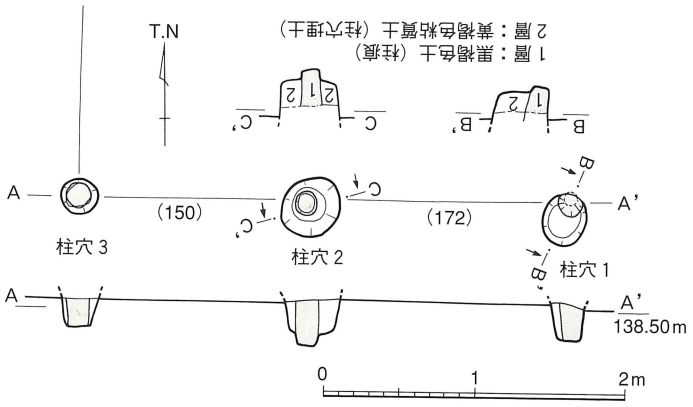
以上の遺物より新しい遺物が含まれていないので奈良時代の遺構と認め、建物の位置と方向から上野３期の建築と推定した。

11号掘立柱建物跡（第54図→図版11中下）

？×2+間柱穴

桁行２間以上の東西棟と推定される掘立柱建物跡で、東西長軸の方位角は92度である。柱間寸法は心心距離で東西長約322cm以上である。３本の柱穴はみな円形で、大きさと深さの揃うＣ類掘立柱建物と推定される。柱穴は径30～40cmほどで、柱穴３がやや小さい。すべての柱穴から径10～15cmほどの円形柱の痕跡を検出した。柱穴の掘形には黄色土を入れた痕跡は観察できなかった。出土遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代の遺構と認定し、方向から上野２ないし３期と推定した。

上野2・3期



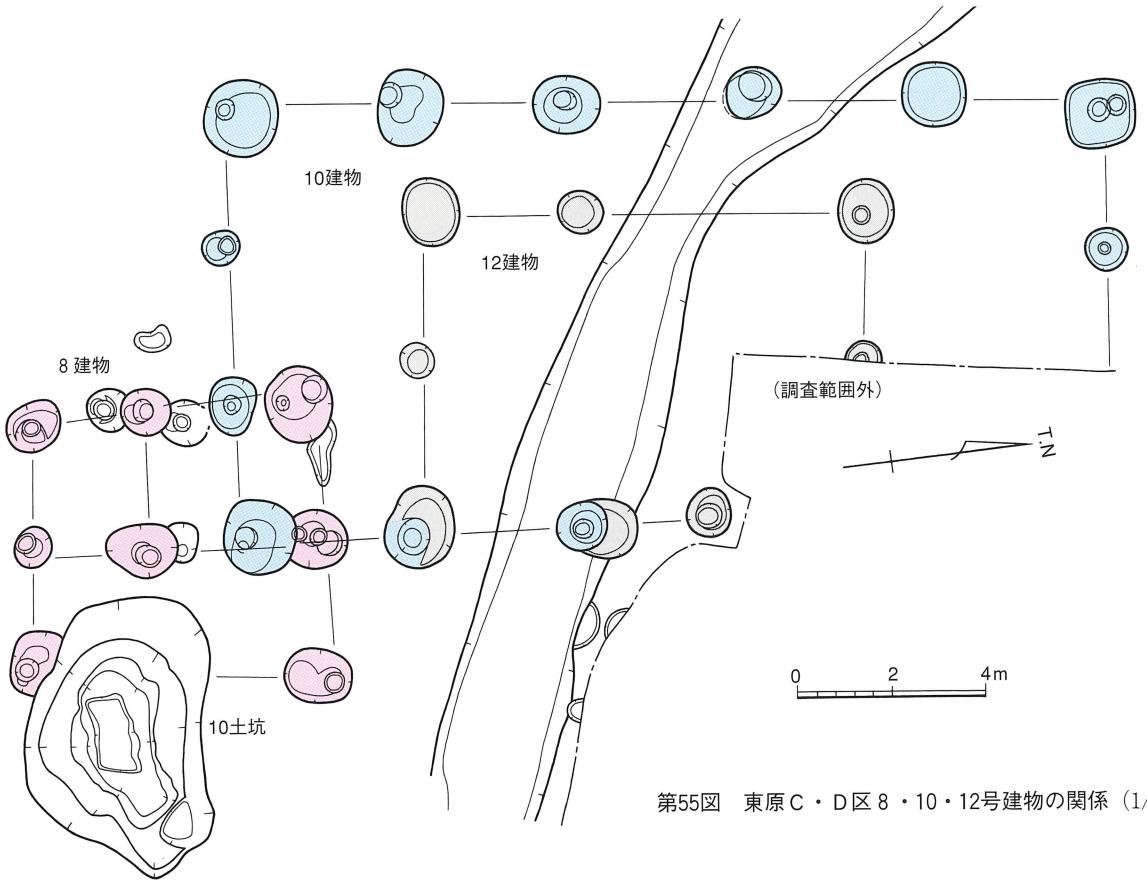
第54図　東原Ｃ区　11号掘立柱建物跡（1/50）

12号掘立柱建物跡（第55～58図→図版11下・12中）

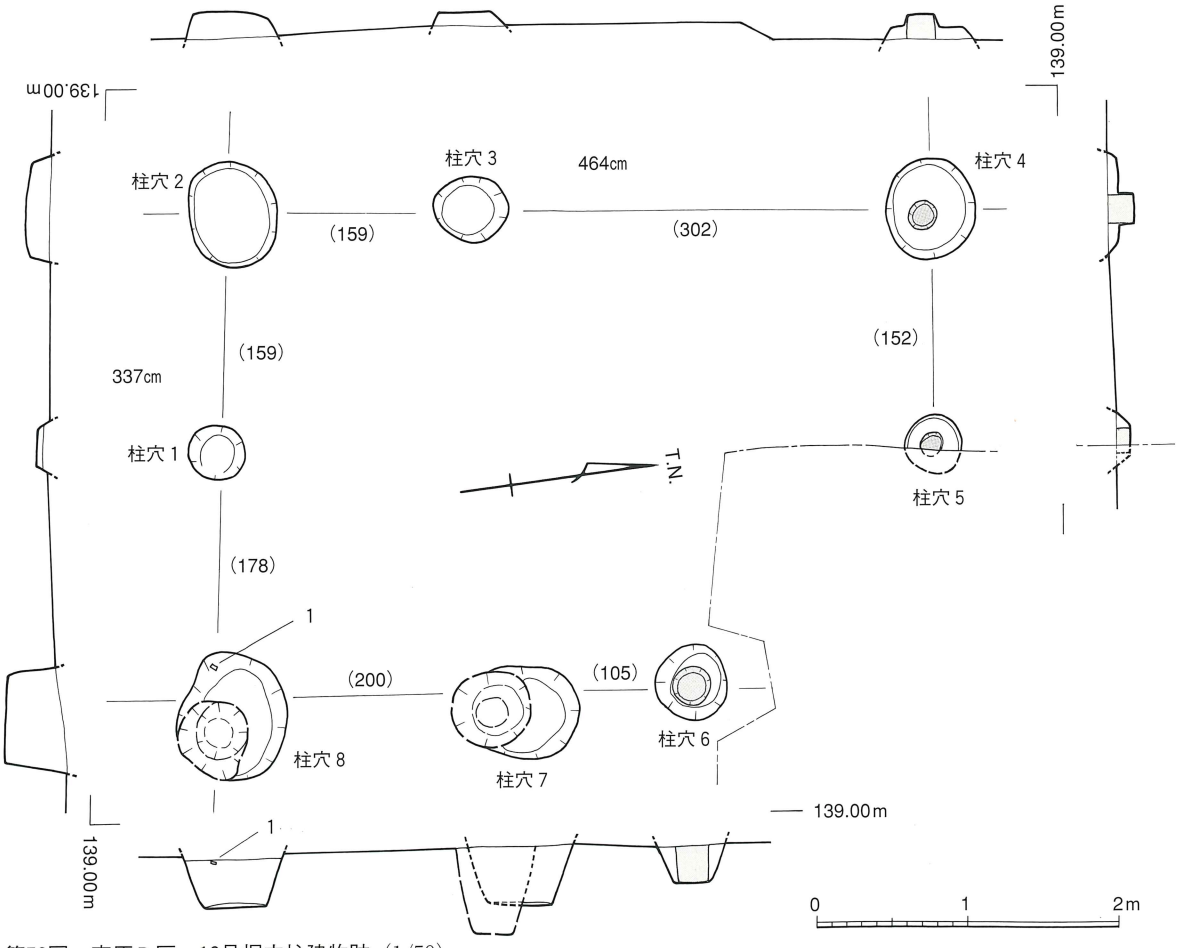
２×３間側柱建物

東北部は調査区外にある梁間２間桁行３間の南北棟の掘立柱建物跡である。10建物と東面を一致させて重複し、そのため一部の柱穴は10建物に切られている。束柱のない側柱建物で、南北長軸の方位角は7.5度である。柱間寸法は心心距離で南北長約464cm、東西長約337cmである。床面積は約14㎡前後と推定され、小型建築に分類される。束柱と西側の側柱を１本欠いている。柱間距離の１単位は154×168cmのヨコナガ長方形となるⅡｂ類である。検出された８本の柱穴はすべて円形で、そのうち四隅の柱穴が、ほかの柱穴より大きく掘削されたＢ類

柱　穴



第55図　東原C・D区8・10・12号建物の関係（1/80）



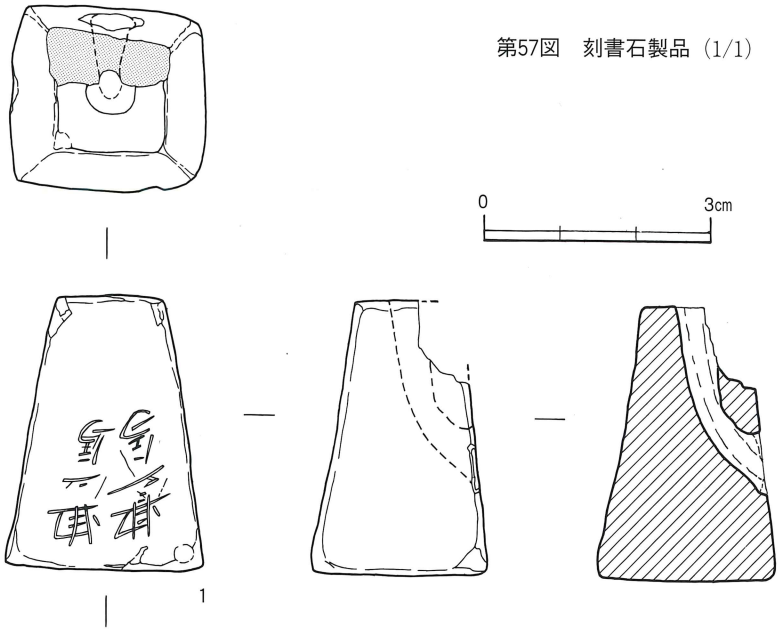
第56図　東原D区　12号掘立柱建物跡（1/50）

掘立柱建物である。その掘形は四隅の柱穴が径60～70cm、それ以外の柱穴は径40～50cmほどである。柱穴4・5・6から径15～20cmほどの円形柱の痕跡を検出したが、柱そのものの太さに大小はない。柱穴2と3の埋土中から土師器の小片が出土したほかは、南東隅の柱穴8の掘形中から1の権と推定される刻書石製品が発見されたのみである。建物の切合関係と方向から上野2期と推定した。

出土遺物

刻書石製品

上野2期



第57図　刻書石製品（1/1）

刻書石製品（第57・58図→図版12上）　第56図で図示した柱穴8の掘形埋土中より出土したもので、12建物の建築時の柱固定の際に混入したものである。したがってこの石製品の使用時期の下限は上野2期であって、主に上野1期に使用されていたと考えられる。石製品は高さ3.6cm、下辺幅2.4cm、上辺幅1.3cm、奥行は下辺で2.1cmである。重さは約29gだが背面上部を欠失しているので幾分重くなる。石材は頁岩である。上面中央から背面中央にかけて、紐を通す径4ないし5㎜の丸い穴が穿孔されている。全面がよく研磨されて分銅型につくられている。正面下部に上辺から向かって第57・58図のように「豊馬豊馬」と読める線刻がある。細かく観察すると第58図で示したような筆跡の切り合いと方向が観察される。おそらく第9章で述べるように、重りとしての権であり、12建物周辺が倉庫地区であった上野1期に使われていると考えられるので、おそらく倉の収納物の秤量に使用されたと考えられる。

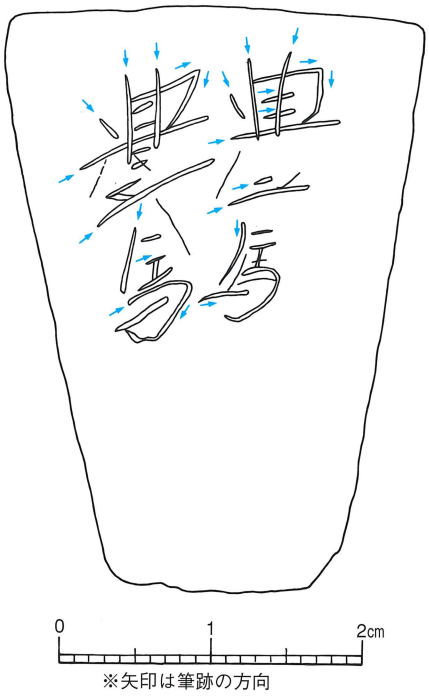
上野1期に使用

大きさ

重さ

文字

権



第58図　刻銘細図（2倍）

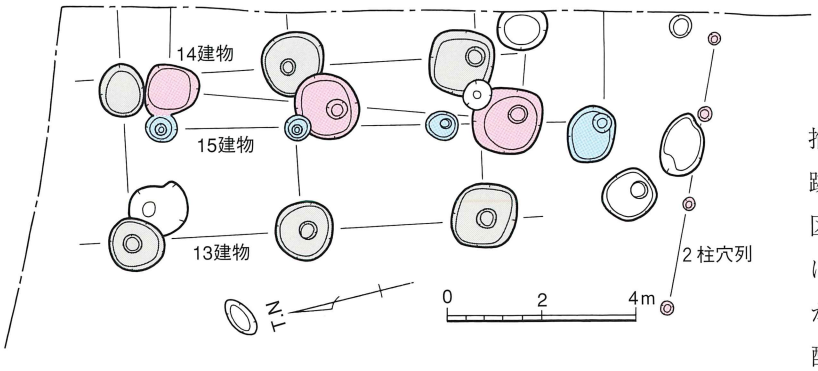
13号掘立柱建物跡（第59・60図）

梁間2間桁行3間と推定される総柱の掘立柱建物跡で、中央に束柱をもつ高床倉庫と考えられる。14建物と15建物に切られている。南北長軸の方位角は2度で、柱間寸法は心心距離で南北長約378cm以上、東西長約171cm以上である。床面積は8㎡以上で、倉庫建築としては中型に分類される。柱間距離の1単位が189×171cmの長方形となるⅡ類である。6本の柱穴のうち南辺の柱穴4と5が隅丸方形となる以外はすべて円形である。すべての柱穴が深くかつ大きく掘られたA類掘立柱建物である。掘形は柱穴4と5が径65～70cm、ほかの柱穴は径50～65cmほどである。5本の柱穴から径15cmほどの円形柱の痕跡を検出したが、柱そのものの太さに大小はない。柱は掘り出した黄色土をふたたびいれて固めている。柱穴から土師器の細片が出土したのみで、切合関係から奈良時代の上野1期と推定した。

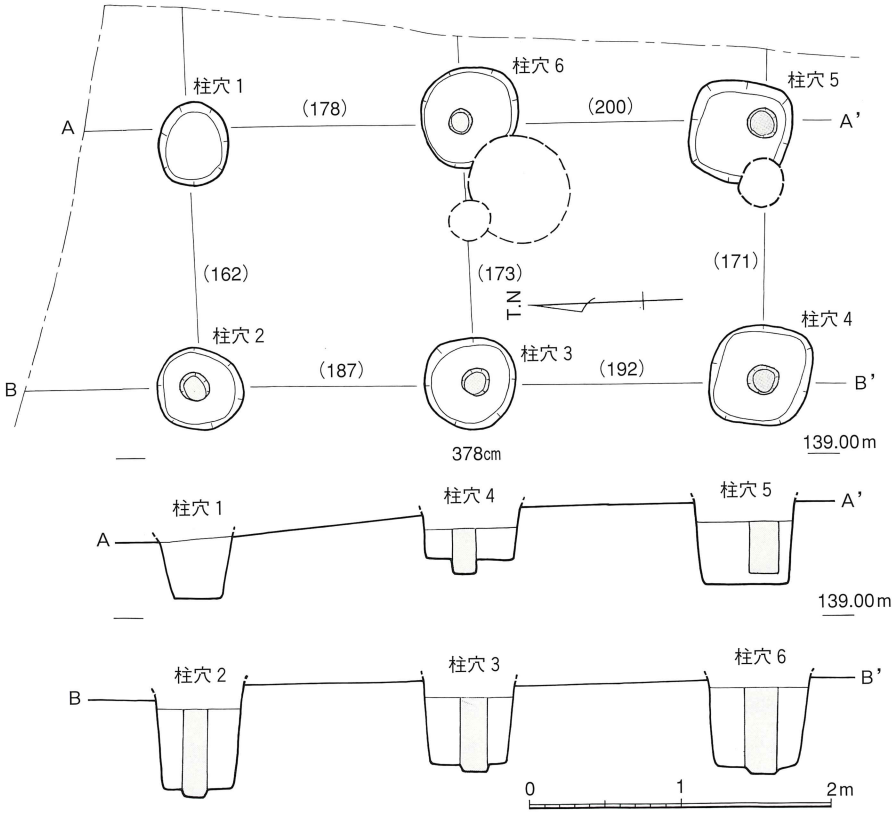
2×3間高床倉庫

柱穴

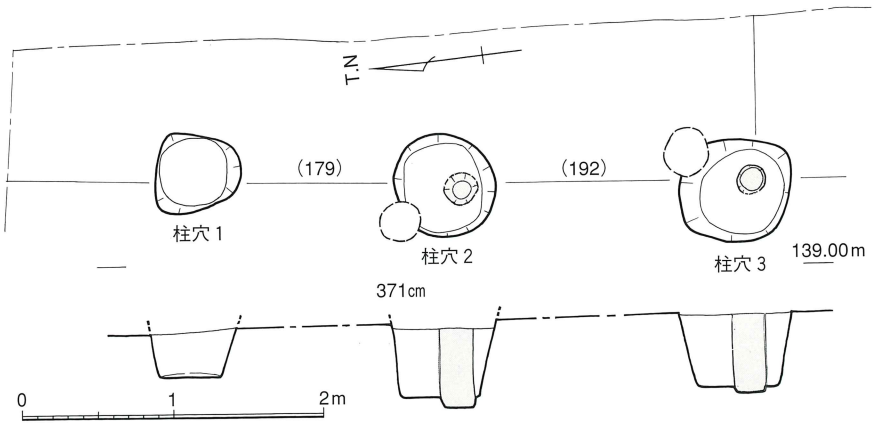
上野1期



第59図　東原Ｄ区　13・14・15号建物の関係（1/80）



第60図　東原Ｄ区　13号掘立柱建物跡（1/50）



第61図　東原Ｄ区　14号掘立柱建物跡（1/50）

14号掘立柱建物跡

（第59・61図）

2×3間高床倉庫

梁間２間桁行３間と推定される掘立柱建物跡である。東側は調査区外となり束柱の有無は不明だが、柱の規模が大きく柱間隔が狭い配置からみて、おそらく束柱をもつ高床倉庫と考えれる。13建物を切り15建物に切られている。南北長軸の方位角は7.5度で、柱間寸法は心心距離で南北長約371cm以上で、床面積は不明である。３本の柱穴のうち南の柱穴３が隅丸方形となる以外はすべて円形である。すべての柱穴が深くかつ大きく掘られたＡ類掘立柱建物である。その掘形は柱穴２と３が径70～75cm、ほかの柱穴は径50～55cmほどである。２本の柱穴から径20cmほどの円形柱の痕跡を検出したが柱そのものの太さに大小はない。柱穴１から精製胎土Ａの土師器細片、柱穴２と３から土師器の小片が出土したのみだが、12建物と８建物の方向と一致するので上野２期と推定した。

柱穴

出土遺物

上野２期

15号掘立柱建物跡

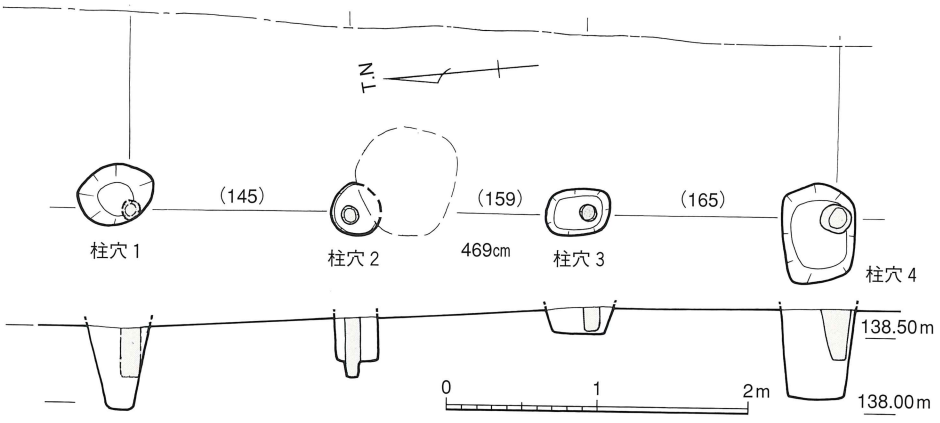
（第59・62図）

1+×3間

14建物を切っている梁間１間以上桁行３間

側柱建物　の南北棟と推定される掘立柱建物跡である。東側は調査区外となり束柱の有無は不明だが、柱の規模と配置からみておそらく束柱のない側柱建物と考えられる。南北長軸の方位角は５度で、柱間寸法は心心距離で南北長約469cmで、床面積は不明であるが、桁行の長さからみて側柱建物としては小型に分類されるであろう。４本の柱穴はすべて円形（柱穴３と４は掘り間違いである。）で、そ

柱　穴　のうち南北端の柱穴が、ほかの柱穴より大きく掘削されたＢ類掘立柱建物である。南北の柱穴が径30cmと50cm、それ以外の柱穴は径30cmほどである。すべて柱穴から径10～20cm程の円形柱の痕跡を検出し、柱穴４の柱が特に太かった。柱穴４の埋土中から通常胎土の土師器の小片が出土したが、ほかに出土遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代の遺構と認定し、切合関係と方向が10建物と一致することから上野３期に建てられたと推定される。



第62図　東原Ｄ区　15号掘立柱建物跡（1/50）

上野３期

② 竪穴建物跡

２棟の竪穴　隣接する２号竪穴建物跡と３号竪穴建物跡は、その接近の度合いからみて、同時に存在していたものではない。どちらの竪穴も７号掘立柱建物が建てられるときに、埋め戻されて整地されている。

前後関係　整地の前にすでに埋没が進行していた２竪穴よりも、埋没のほとんどない３竪穴の方が新しいことは確実である。おそらく２竪穴から３竪穴に建て替えられて、２竪穴は３竪穴の居住者のゴミ捨て

強制埋没　穴になり、整地の際にいっしょに埋め戻されたと考えられる。ところでともに北カマドであることと、ほぼ同規模で同じ方向に建てられていることから、両者は密接な関係にあったことは疑いなく、

建て直し　同一の居住者による建て直しであると推測される。

２号竪穴建物跡（第45・63～68図→図版12下・13・14上・78）

方形竪穴　北面にカマドをもうけた方形の竪穴建物跡である。規模は南北長辺長465cm、東西短辺長455cmの正方形に近く、検出面からの深さは約30cmである。南北軸の方位角は11度で、竪穴の床面積は21.0㎡で中型に分類される。床面から竪穴の平面形に対応した４本の柱穴が検出され、柱間寸法は175

４本柱　×160cmであった。４本柱構造（Ａ１類竪穴建物）の上屋であったと推定される。周溝は部分的に

北カマド　めぐり、北面やや東よりにカマドがあり、ほぼ同じ位置にカマドの造り直しがみとめられた。竪穴内部には４ヵ所の土坑が検出されたが、建築時と改修時に掘り直されている。床面は貼り床ではなく、掘削面をそのまま利用している。以下に調査の順序とは逆になるが、竪穴建物の履歴にそって記述する。

床下土坑　竪穴建設時の状況として注目されるのは床下土坑である。硬化した床面を削り取ると第63図のように床下に長方形の土坑があらわれた。この土坑３は竪穴北面のカマドの下部に掘られていたもの

カマドの下　で、内部には炭や焼土・土器の小片を比較的多く含む粘質土が充填されていた。おそらく竪穴建物建設時にカマドの底面の防湿効果を目的に掘られ、土の入れ替えがおこなわれたものと推定される。また当初は北面中央に壁面をあまり削りこまない形態のカマドが作られていたらしい。当初検出したカマド（２次カマド）の底面の下から、建築当初のカマド（１次カマド）の基底部が検出さ

れたからである（第65図）。１次カマドは床下の土坑３の中心部に位置しているので、土坑３が１次カマドと関連することは明らかである。

１次カマド

さてその１次カマドは長円形の浅い土坑として検出され、左右に一対の小穴があり、それに挟まれて被熱硬化した焼土面がある。小穴と焼土面は側石の掘形とカマド燃焼部である。その構造からカマドの形態はＢ１類と推定される。内部には赤褐色の焼土（５・６層）が充満し、上面は硬化して貼り床状の黒褐色土（４層）がひろがっていた。上部施設は２次カマドに作り直す際に丁寧に取り除かれたと推定される。その１次カマドの使用期間中に掘られたと推定されるのが土坑４で、上面に貼り床がなされ、後に土坑１に切られていた。

土　坑　４

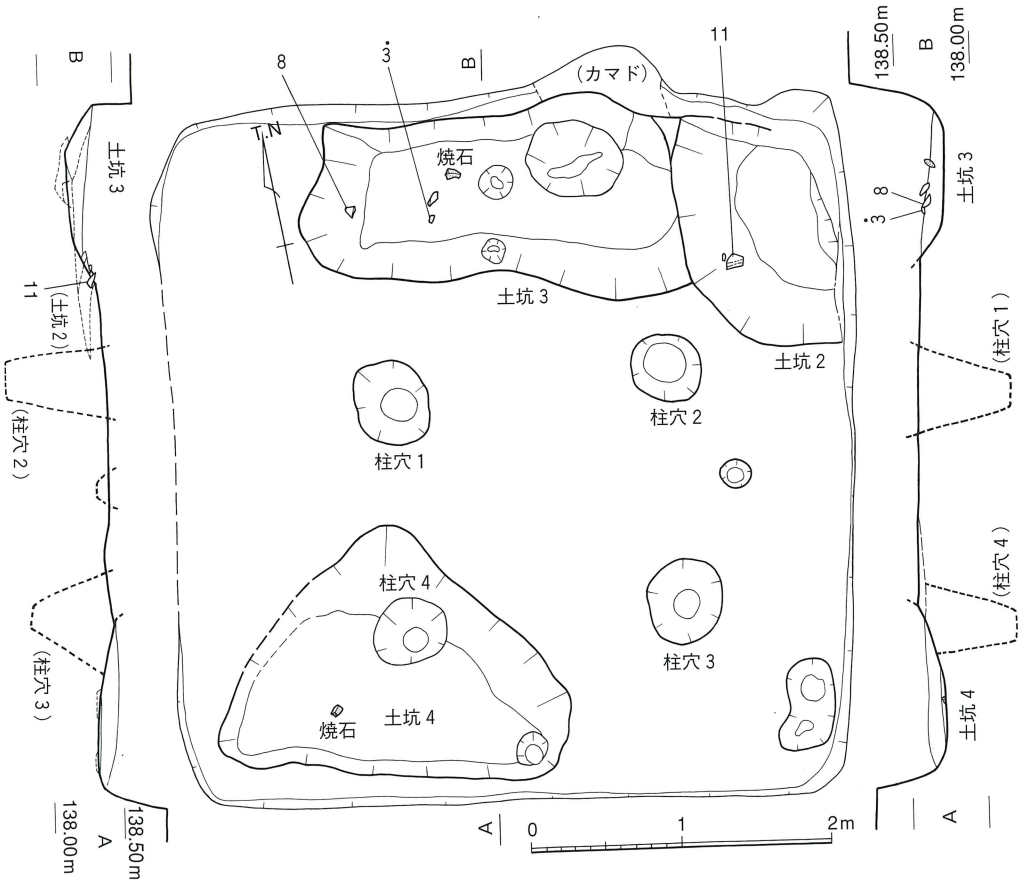
２次カマド

次に２次カマドがやや東によって作り直されている。カマドは壁面からやや外に飛び出していて、おそらく１次カマドの奥壁を東にずらしながら拡張したものである。奥壁全体が激しく焼けて硬化しているが、この壁面から煙道の痕跡は認められなかった。燃焼部基底面は皿状のくぼみをなし、その底は被熱した硬化面となり、その上には焼土の堆積が認められた。また奥壁の隅には、このカマド使用時の灰層とみられる３層が残っていた。基底面にはａ・ｂ２ヵ所の小穴があり、小穴ａは支石の掘形、小穴ｂは側石の掘形と推定される。いずれも石そのものは残されていない。また当然あったはずの袖部や天井部はその残骸さえなかった。カマドはＢ３類にあたろうか。この２次カマドが破壊された竪穴廃絶の時点で開口していた、と考えられる内部の土坑が２ヵ所ある。土坑１は南西コーナーに、土坑２は北東コーナーの２次カマド脇に掘られている。その機能は不明だが、貼り床はなく内部から検出した土器片が床面直上やカマド祭祀の土器と接合したので、竪穴廃絶後に埋没したと考えられる。

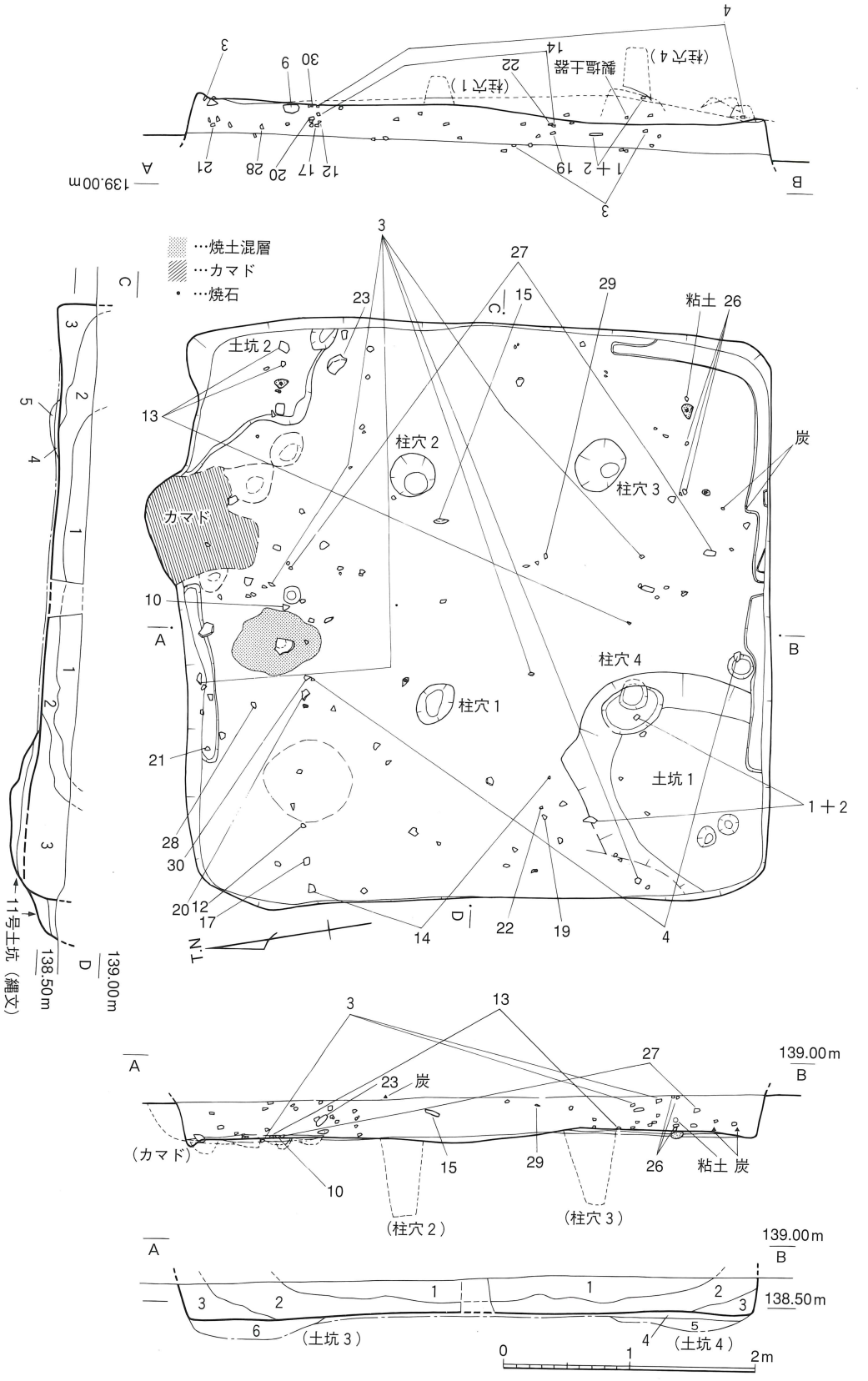
土坑１・２

以上の廃絶までの竪穴の履歴をまとめると、まず①方形の竪穴を掘り、カマドと４本柱の位置をきめ、カマドを作る前に床下に土坑３を掘って土を入れ替え、その上に１次カマドを構築する。②１次カマド存続中に土坑４が掘られ、のちに埋められる。③床下の土坑３の範囲内に、１次カマド

建設から廃絶まで



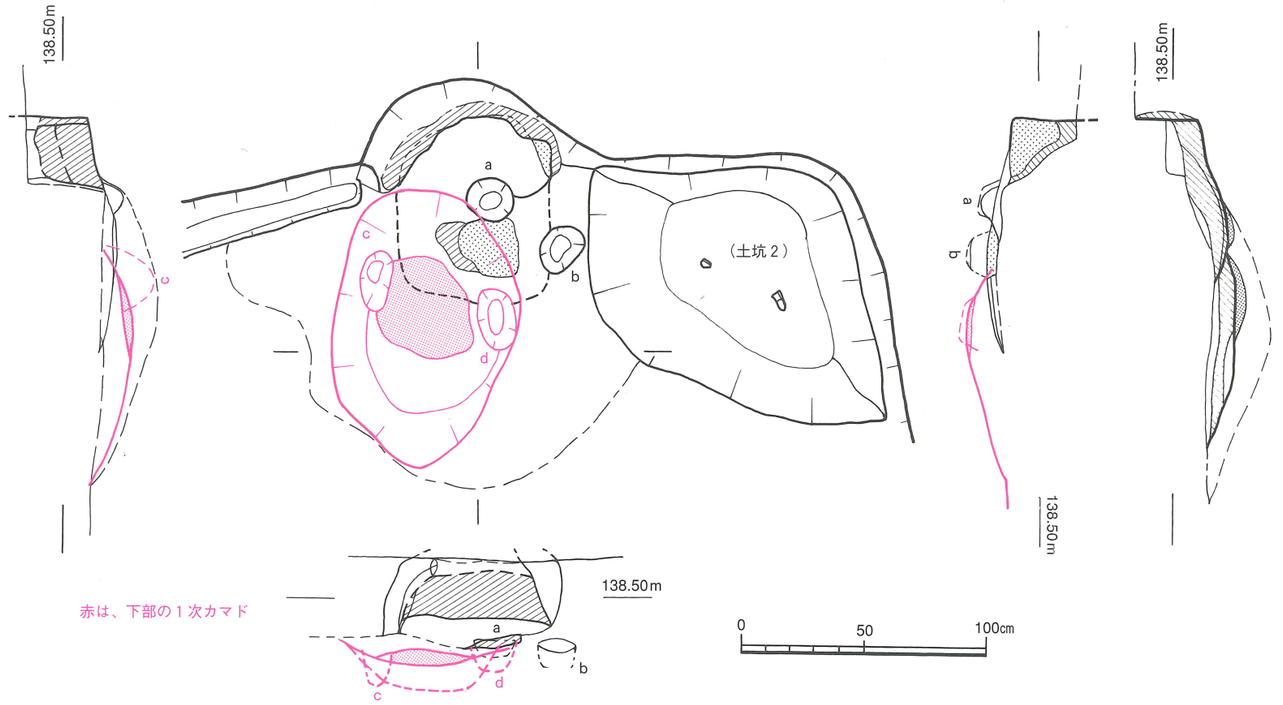
第63図　東原Ｃ区　２号竪穴建物跡①ー床面除去後ー（1/50）



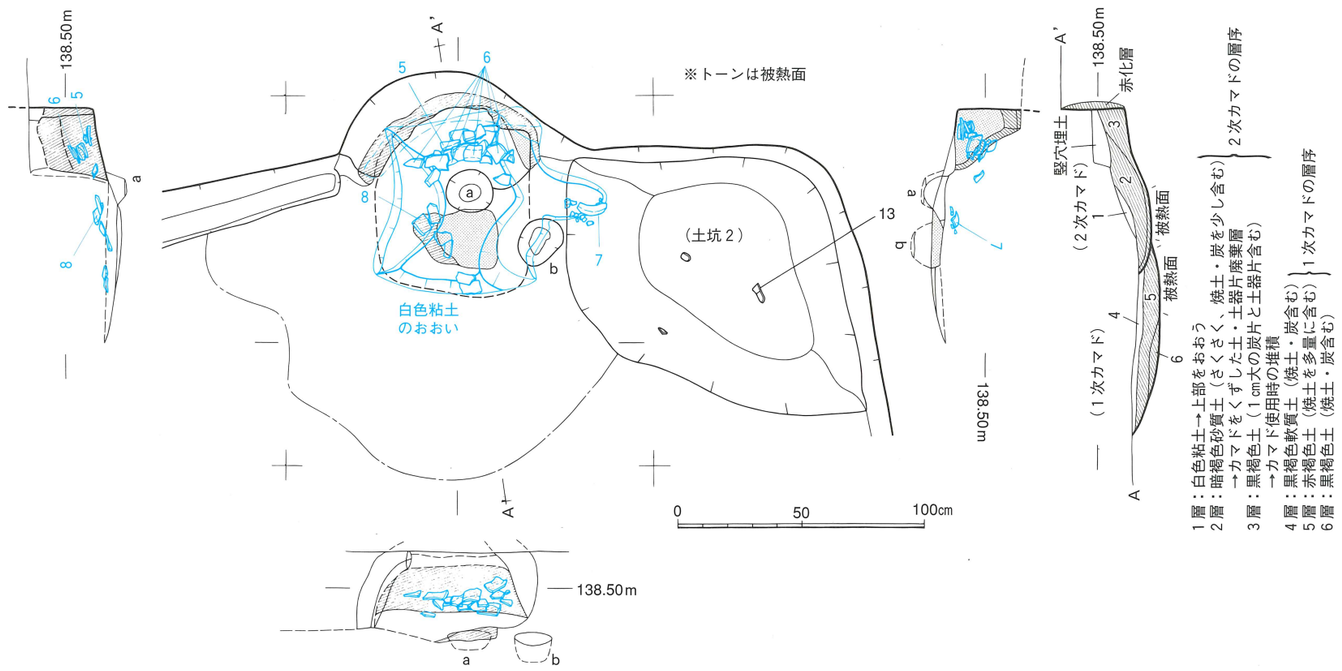
1層：暗黄褐色硬質土（黄色粘土ブロックと土器片を多く含み、焼土・炭片を少量含む）
2層：暗褐色硬質土（黄色粘土ブロックは1層より少ないがかなり含む。土器片・焼土・炭片を含む）
3層：黒褐色土
4層：黄色粘質土＝はり床
5層：暗褐色軟質土→土坑4埋土
6層：暗黄褐色粘質土（炭・焼土・土器片・焼石多く含む）→土坑3埋土

} 土器片集中
→人為的に埋めた
可能性高い

第64図　東原C区　2号竪穴建物跡②—出土状態と埋没状態—（1/50）



第65図　東原Ｃ区　２号竪穴建物跡③―改修されたカマド―（1/25）



第66図　東原Ｃ区　２号竪穴建物跡④―２次カマドの廃絶状態―（1/25）

を拡張しつつ、２次カマドに作り替えられる。その際１次カマドは丁寧に取り除かれている。いっぽう柱穴は掘り直されていないので、１次カマドは比較的短期間で作り替えられたようである。④土坑１と２が掘られ、廃絶時には開口している。以上の状態でこの竪穴建物は廃絶する。

竪穴廃絶時の様子は第64図に、カマドについては第66図に示した。竪穴埋土を取り除くと床面近くで白色粘土混じりの土層の広がりと、そのそばで床面に張りついて分布する焼土の広がりを検出した。前者はその後カマドの内部にあたることが判明し、後者は床面に広がるのみでなんら遺構をともなわなかったし、直下の床面にも被熱面は見られなかった。なお後者の焼土堆積のなかから第67図９の土師器甕の大型破片が出土した。前者の白色粘土混じり層を掘り下げると、第66図のような白色粘土の層（１層）がカマドの基底部を覆うようにあらわれた。その層は非常に薄く、下層の土器片が顔を出す状態であった。その白色粘土被覆層をのぞくと、サクサクとして焼土・炭が大量に混じる暗褐色の砂質土層（２層）があらわれ、基底の被熱面まで達していた。その層中には第66図のように土師器の割れた破片が重なるように発見された。第67図３～８がそれで、いずれも破片で完形に復元できるものはなかった。３は精製胎土の大型土師器壷の胴部片で、カマド２層のみならず床面直上や周溝内に破片が散らばり、さらに東原Ｂ区３土坑の２層の一括廃棄遺物出土の破片と接合した。４の精製胎土の土師器壷の底部片は、カマド２層のほかに破片が床面直上に散らばっていた。５の精製胎土の土師器高坏の破片は、６の破片の下に埋もれていた。その６の精製胎土の土師器坏は割れた破片が重なるように出土し、復元すると２分の１個体になった。７の精製胎土の土師器坏は、半個体が逆さになって土坑２に流れこむような位置で出土した。その破片の一部は14土坑１層からも出土している。８の土師器鉢はやや手前で出土した。そのほかに図示できないが土師器甕の胴部片が数片出土した。いずれも割れた状態で出土し、復元しても一部にとどまり、他の部位は別の場所に廃棄されたと推定される。その一ヵ所がかなり離れた東原Ｂ区の３土坑であることは興味深い。また14土坑１層からも破片の一部が出土したが、１層は一時に廃棄された一括廃棄層ではないので、やや後に２次的に埋没したものと考えられる。以上のように白色粘土に被覆された土器群を含む２層はカマドを破壊したときに堆積した土で、なかに埋納されていた土器片、特に精製胎土の土師器群には被熱した痕跡がなく、土器を破砕してその一部をカマドの位置に置いたものと考えられる。さらにその上から白色粘土を覆っている。この一連の行為はカマドを対象におこなわれており、カマドを壊しておこなっているのであるから、竪穴建物廃絶時におこなわれたカマド祭祀と考えられる。ところでカマド２層に置かれた土器群は、貯蔵用と供献用の土器としては精製胎土の土師器を、煮沸用として通常胎土の土師器の甕と鉢を用いている。須恵器を欠くことが注目される。このほかに竪穴廃絶時に廃棄されたと推定される遺物に、１と２の同一個体の須恵器坏身がある。１が柱穴４の柱痕内に２は床面直上で発見されたが、カマドからは離れていた。その他に床面直上からは10の須恵器坏蓋小片や12の須恵器坏身小片が出土したが、竪穴使用時に床面に踏み込まれたものか、カマド祭祀時のものかは不明。土坑２内からは11と13の精製胎土Ａの土師器壷と坏が出土しており、破片の状態と種類からカマド祭祀に用いられたものの一部とみられる。なお竪穴廃絶時の柱の状況としては、柱の抜取り痕はなく柱痕はいずれもが明瞭であるので、丁寧に抜き取られたか切断されたものであろう。

以上の竪穴建物の廃絶時の状況を復元すると次のようになる。①まず上屋と柱が取り除かれ、その際柱は切断された可能性もある。周溝内にはカマド祭祀の際に埋納された土器片の一部が出土するので、おそらく土壁にはめられた板などの壁材も取り除かれ、周溝とした浅い溝は除去する際の痕跡の可能性が高い。カマドは奥壁を残して上部構造物がすべて取り除かれ、②カマド祭祀がおこなわれる。その順序はまず精製胎土の土師器壷や坏・高坏と土師器甕・鉢が用意され、おそらく同時に食物と飲料が用意され、食物は土師器で煮られ、飲料は精製胎土の土師器壷などに入れられた

廃絶時の様相

白色粘土

土器片埋納

接合資料②出土状態

接合資料③

カマド祭祀

祭祀土器

柱

竪穴廃絶時儀礼の復元

と考えられる。食物と飲料は精製胎土の土師器坏や高坏にもられて、参加者による共食共飲儀礼がとりおこなわれたと推定される。その場所はおそらく竪穴の内部ではなく外部のどこかである。なぜなら土器はいずれも完形に復元できず半分以上の破片は別な場所に廃棄されたと思われるからである。また竪穴床面には煮炊きした痕跡の被熱面が無いからでもある。カマドそばの床面で発見され9の土師器甕片が出土した焼土の広がりは、その下の床面がまったく焼けておらず、そこで火を使ったのではなく、まとめて廃棄されたものである。③共食共飲儀礼終了後、儀礼に使われた土器は破砕され、その一部は煮炊きの際の焼土や炭灰とともに、竪穴内に廃棄され、大部分はカマドの基底部から奥壁にかけて置かれる。その上には白色粘土で被覆する。また甕などの土器と炭灰の一部はそのそばに廃棄されている。以上の行為がおこなわれて、カマド祭祀は終了する。

竪穴跡のその後

その後竪穴跡は放置されているようで、自然埋没の始まった状況が竪穴埋土3層の斜め堆積から判明する。3層はやわらかい黒褐色土で、このなかからは須恵器・土師器の小片が多数出土した。14・17・19・20・21・23・26～30などで精製胎土の土師器片が多いが、これはカマド祭祀の遺物が残存したからであるとみられる。その他の遺物も15と19を除けば3層と2層下部に集中している。

廃棄土坑化

竪穴廃絶後しばらくは大きな凹みのままで、そこに不要物が捨てられるようになったと考えられる。つまり廃棄土坑に転用されているのである。

埋めもどしと整地

その後暗褐色で基盤Ⅳ層に由来する黄褐色粘質土ブロックをかなり含む竪穴2層と、その上にさらに黄褐色粘質土ブロックが多いために暗黄褐色となる1層が堆積している。この両層はともに堅く締まり黄褐色粘質土ブロックが多量に混じる点からほとんど同時に埋没したものである。そして遺物はきわめて少なく炭・焼土が点在するものの、土器は15と19が図示できる程度である。堅く締まる土質と別な地点から掘り出されてまもない基盤Ⅳ層の土が大量に混じり、それが土壌としてなじんでいない点からみて、埋め戻されて固められたと考えられる。その際埋め戻しに使った土は別な地点に穴を掘るか、地下げをおこなって調達されたと考えられる。なぜなら基盤Ⅳ層に由来する黄褐色粘質土ブロックを多量に含むからで、下部の3層の方がその量が少なく汚れているのは、掘る際に表土が最初は多く混じるからであろう。こう考えてよければ、竪穴跡の埋め戻しと平行して

3竪穴と7建物

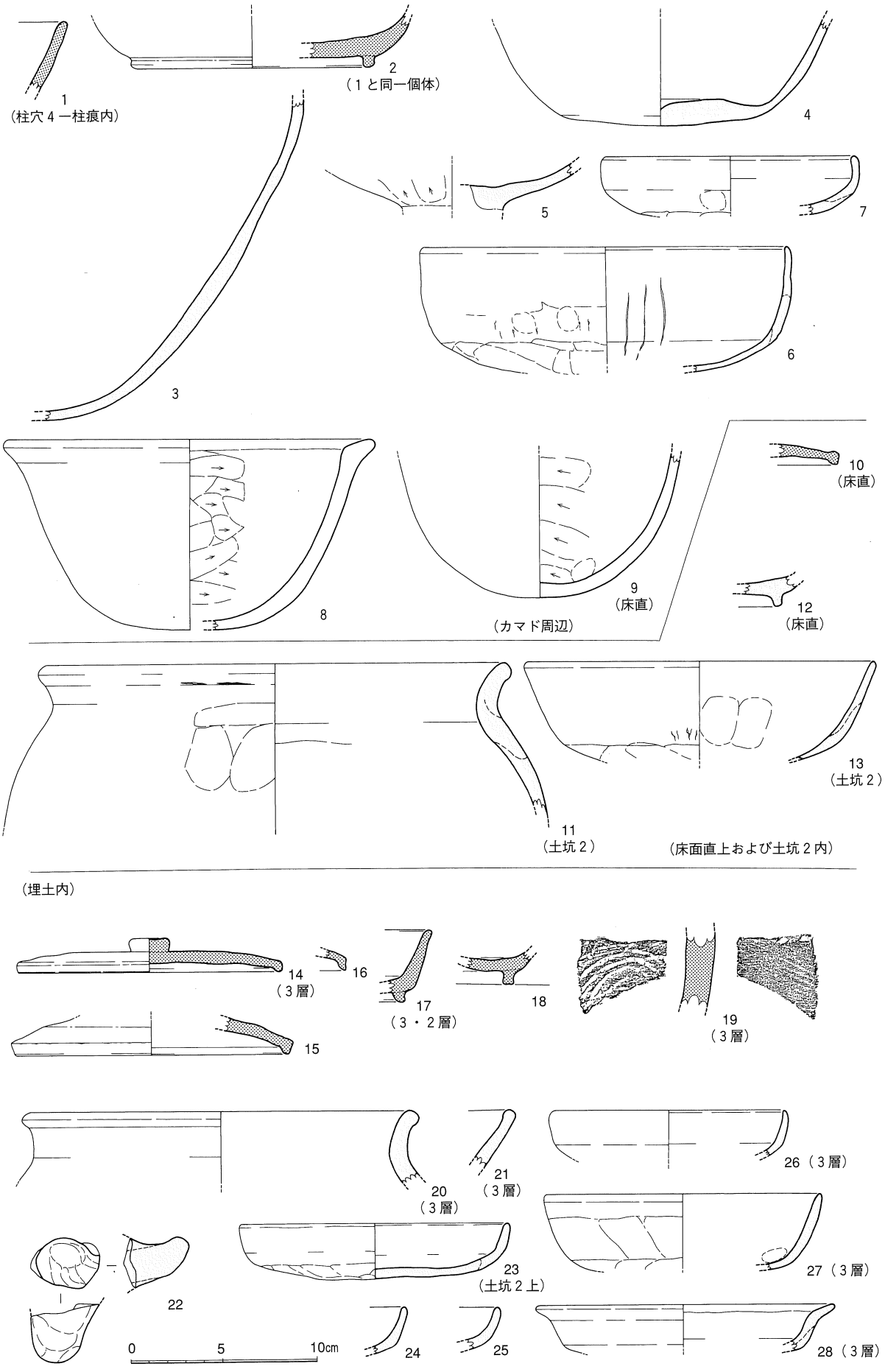
土坑掘削や削土がおこなわれていたと考えてよい。この埋め戻しは隣接する3号竪穴建物跡でもおこなわれており、両者の上には7号掘立柱建物が建設されているので、以上の土木作業は、単なる埋め戻しではなく整地されたものと考えられる。

出土遺物

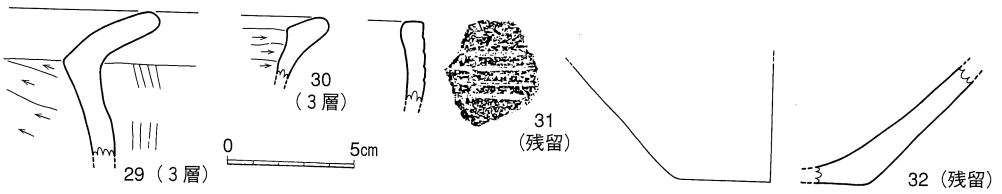
出土遺物のうち、1から9まではカマド祭祀などに廃棄された竪穴建物廃絶時の遺物である。1と2は須恵器坏身片で同一個体と考えられ、1は柱穴4の柱痕内から、2は床面直上から出土した。3～7は精製胎土Aの土師器で、3と4が壷、5が高坏、6と7は手持ちヘラケズリがみられる坏で大小がある。8と9は通常胎土の土師器の鉢と甕である。以上のうち3～8はカマド祭祀にともなうもので、精製胎土の土師器が尊重されていたことがわかる。10から13は床面直上と竪穴廃絶の際に埋没した土坑2の出土遺物で、カマド祭祀の時期に近い。10は床面直上発見の須恵器坏身口縁片である。11～13は精製胎土Aの土師器で、11は壷、12は高台付きの坏身、13は坏で手持ちヘラケズリが明瞭である。14から30は竪穴埋土出土だが、大半は3層から2層の下部に集中し、埋め戻し土のなかは非常に少ない。そのなかには製塩土器の細片も1点含まれていた。14～19が須恵器で、14～16は坏蓋片、17と18は高台付きの坏身片、19は甕胴部片である。20～28は精製胎土Aの土師器で、20と21が壷口縁片、22が甑の把手片、23～28は坏で大小と形態の違いがある。29と30は通常胎土の土師器の甕と小型鉢である。このほかに残留遺物として、31と32に縄文土器があり、2竪穴は縄文時代の11土坑を破壊しているので、そこからのものと推定される。

上野3期の7建物建設の際に整地されているので、それ以前に建設されたことは明らかである。隣接する3竪穴が整地の際にはなお使用中であったから、この2号竪穴建物は3竪穴に建て直される以前の上野1期と推定される。

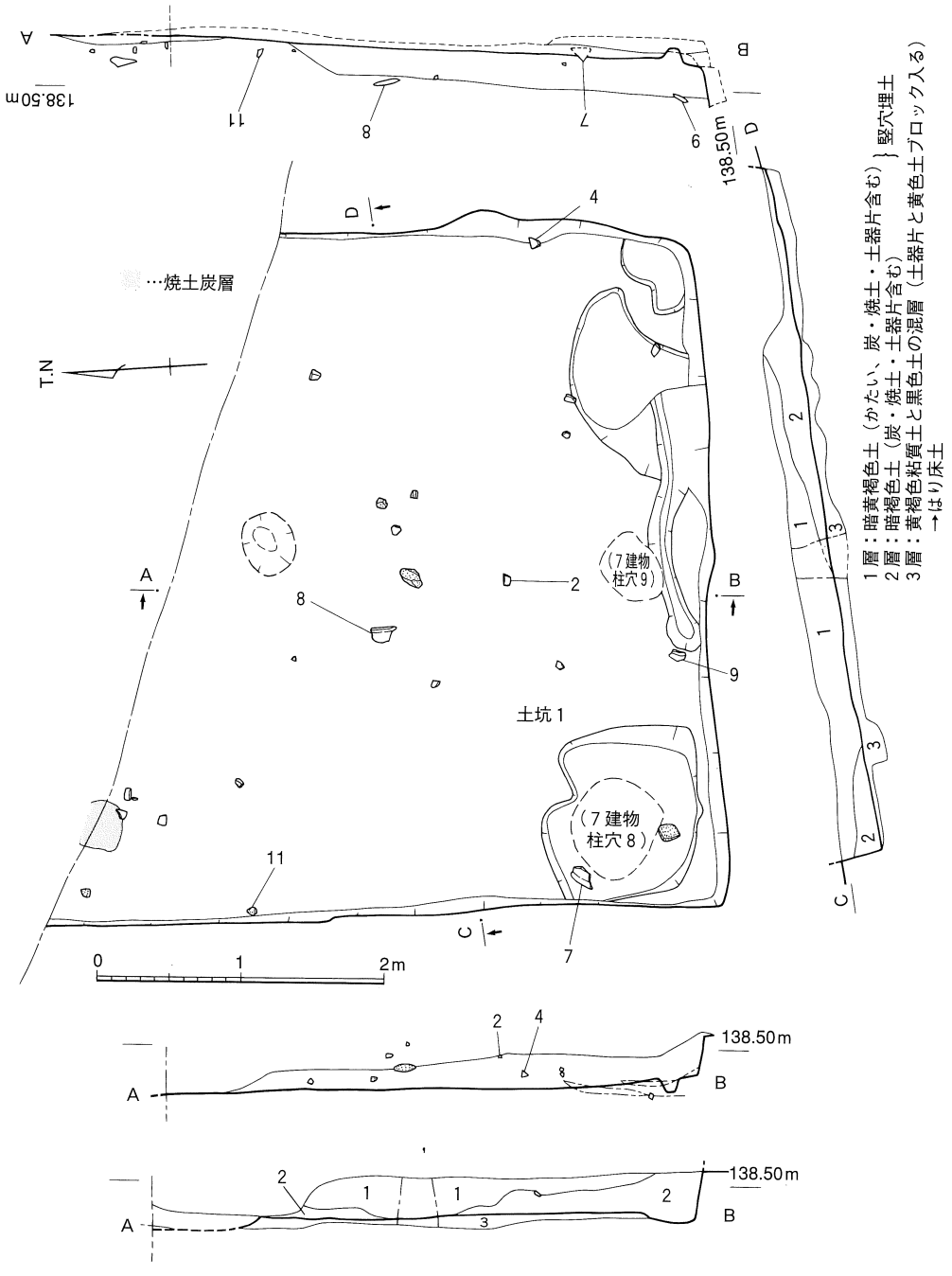
上野1期



第67図　東原Ｃ区　２号竪穴建物跡出土遺物①（1/3）



第68図　東原Ｃ区　２号竪穴建物跡出土遺物②（1/3）



第69図　東原Ｃ区　３号竪穴建物跡（1/50）

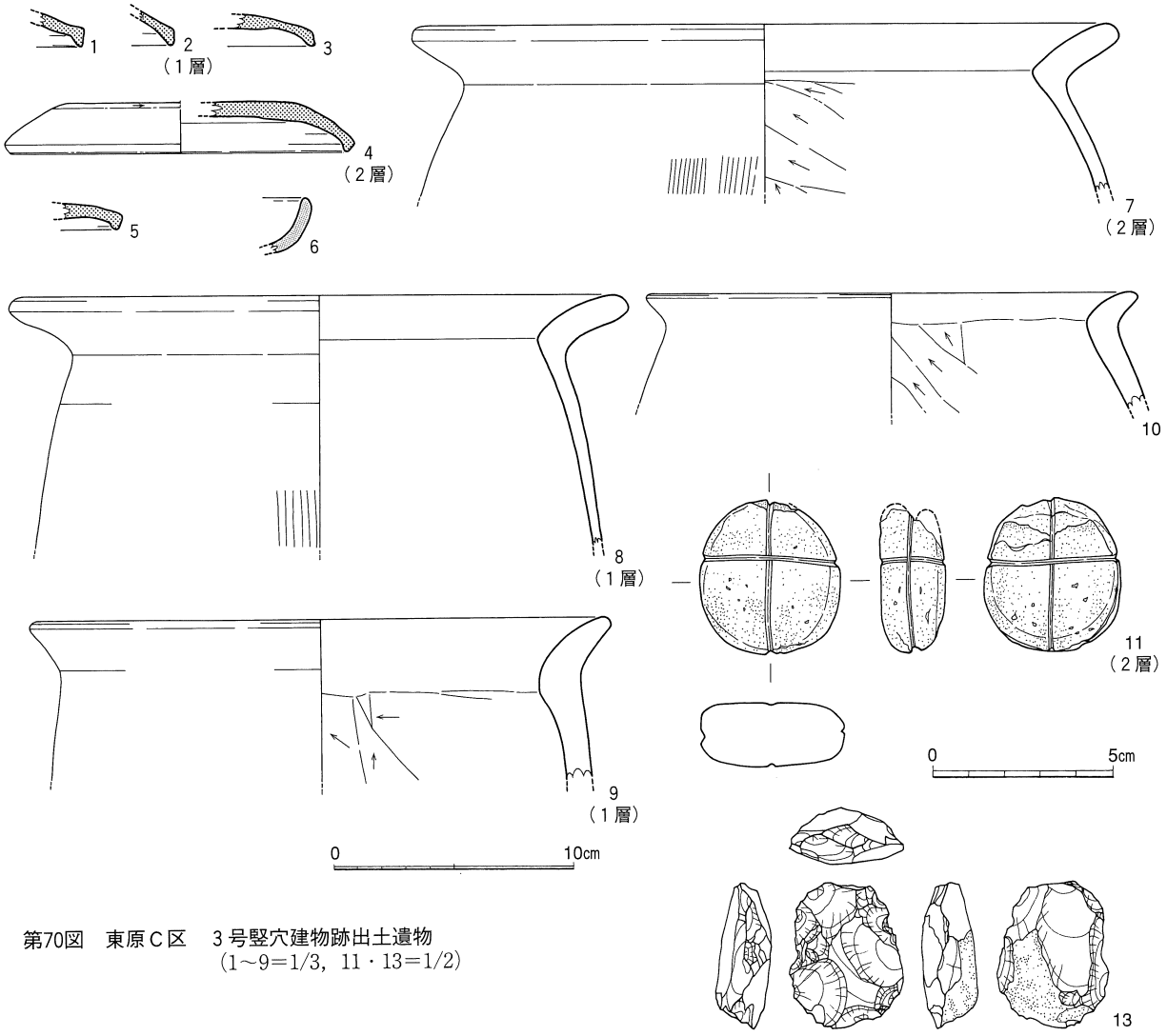
3号竪穴建物跡（第45・69・70図、写真４→図版14中・14下・78）

北辺が調査範囲外の方形の竪穴建物跡で、７建物に切られている。その規模は南北長辺長480cm以上、東西短辺長480cmで、検出面からの深さは約25cmである。南北軸の方位角は０度で、竪穴の床面積は18㎡以上の中型に分類される。中央のピットは床面を剥いだのちに検出したもので、本来柱穴はなく無柱穴の構造（Ｂ類竪穴建物）の上屋であったと推定される。周溝がごく一部にあり、竪穴内部には土坑が１ヵ所南西隅にある。その土坑１の上面には貼り床が認められるので、建築時の床下土坑であった可能性が高い。床面は貼り床で黄色粘質土混じりの３層が比較的厚くはられて、全体によく踏み締められている。発掘した範囲ではカマドは検出できなかったが、ほかの竪穴建物の構造からみて北面にカマドは設けられていたと推測される。

方形竪穴　無柱穴　床下土坑　北カマド？

竪穴の埋没状態は、人為的に埋め戻されたと考えられるものである。１層と２層に分かれるもの

埋め戻し



第70図　東原Ｃ区　３号竪穴建物跡出土遺物
（1～9=1/3，11・13=1/2）

の、どちらもよく締まり特に上部ほど堅くなって基盤Ⅳ層に由来する黄色土が目立つようになる。２竪穴の１・２層とよく似ている。出土遺物も床面直上で発見されたものが多く、埋土内の出土はかえって少ない。２層中から出土した４・７・11はいずれも床面で検出した。４・７は細片で、11の有溝石錘のみが住人の生活をうかがわせる。２・８・９は１層

遺物の状況

写真４

接合資料④ の埋め戻し土に混ざり込んだものである。そのうち2は14土坑（層位不明）出土破片と接合し、ほ
接合資料⑤ かに10土坑の破片（層位不明）と接合した精製胎土の土師器坏片があった。通常認められる壁際の斜め堆積がまったく観察されないことは、埋め立てがおこなわれた時点で竪穴がほとんど埋没していなかったことを推測させる。おそらく上野3期の大規模な造作によって強制的に廃絶したと考えられる。

強制廃絶

出土遺物 出土遺物は、土器が1～5が須恵器坏蓋口縁片で、6は精製胎土Aの土師器坏口縁片である。7～10は通常胎土の土師器甕である。ほかに精製胎土Aの土師器甑把手片がある。石器は11の軽石製の有溝石錘1点である。自然遺物として12の桃の種子の出土があった。以上が奈良時代の竪穴建物にともなう遺物である。13は残留したサヌカイト製の石核である。

竪穴建物が意図的に埋め戻されて整地され、その上に掘立柱建物が建てられるのは上野第1遺跡全体で認められる。その時期を上野3期と設定したので、この竪穴建物はそれ以前の上野2期に使

上野2期 用されていたと推定される。

③ **柱穴列**

2ヵ所で柱穴列を検出している。いずれも他の遺構と重複せず、建物の横に設けられていることから、目隠し塀の役割を果たしたものと考えられる。

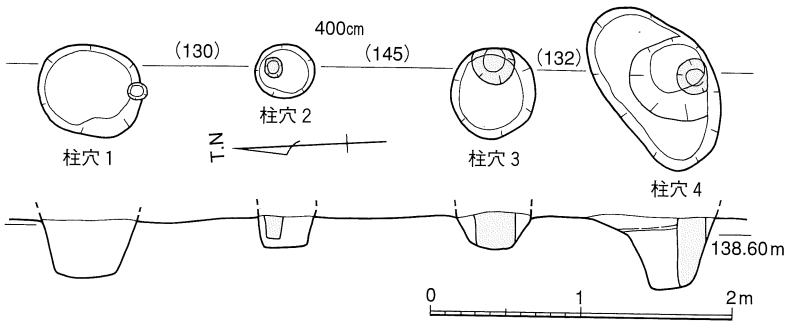
目隠し塀

1号柱穴列（第71図→図版15上）

柱間3間の4本柱穴からなる南北方向の柱穴列で、柱筋の方位角は4度である。長さは400cmで、柱間距離の平均は133cmである。検出された4本の柱穴はすべて円形で、そのうち南北両端の柱穴1と4が深くかつ大きく掘られていてB類掘立柱建物の柱の建て方と同一である。出土遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代の遺構と認定し、方向が10・15建物と一致するため上野3期に建てられたと推定した。

3間4本

柱穴



第71図 東原C区 1号柱穴列（1/50）

上野3期

2号柱穴列（第59・72・73図）

東方向にどこまで伸びるか不明な柱間3間以上の東西方向の柱穴列で、柱筋の方位角は105度である。長さは288cm以上となり、柱間距離の平均は96cmである。検出された4本の柱穴はすべて小型円形で、径は15～20cmと細く、深さは揃っている。

3+ 間

柱穴

柱穴1から1の須恵器甕の胴部小片が1点のみ出土した。この遺物以外に新しい遺物が含まれていないので奈良時代の遺構と認め、14建物と方向が一致するので、上野2期と推定した。

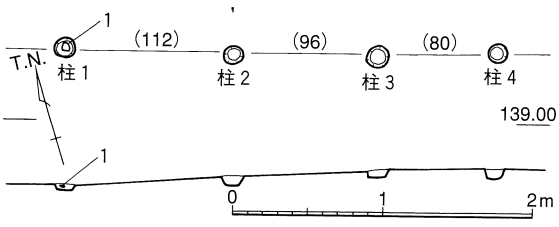
出土遺物

上野2期

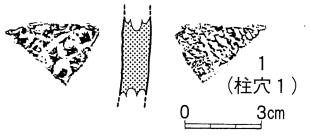
④ **土坑**

9・10・13・14・15号土坑は大量の奈良時代の須恵器・土師器片を含む廃棄土坑で、焼土・炭も多く含まれている。掘立柱建物との位置関係と出土遺物の接合関係から、各掘立柱建物に付設された廃棄土坑とみられる。

廃棄土坑化



第72図 東原D区 2号柱穴列（1/50）



第73図 東原C区 2号柱穴列出土遺物（1/3）

しかしその多くは壁土採取あるいは竪穴埋め戻しなどのための土取りの目的を兼ねていたため掘立柱建物建設と同時に掘られたものと推定される。すなわち９・10土坑と７建物、14・15土坑と10建物の組合せである。

建物との関係

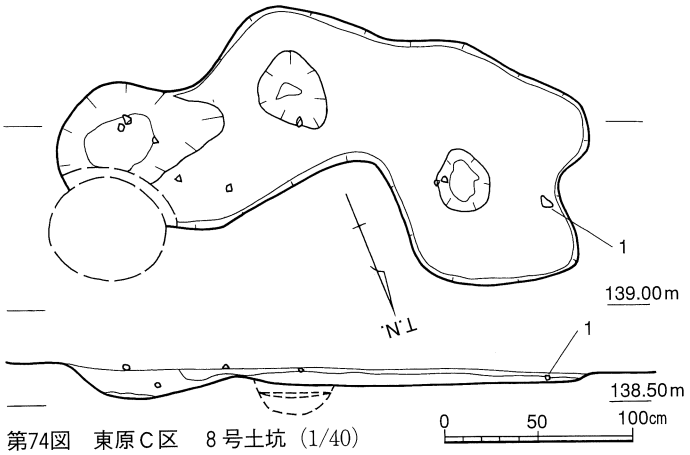
８号土坑（第74・75図→図版15左中）

７建物に切られた不定形の大型土坑で、底面は凸凹で深さが一定しないＥ３類の土坑である。規模は検出面を基準に測って最大長285cm、幅100～150cm、深さは最も深いところで15cmである。上半は現代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。用途は不明である。埋土は暗褐色土の単一層で、焼土と炭の小片や、数点の土師器と須恵器の小片が出土した。図示できるのは１の須恵器甕の破片のみで、土師器には通常胎土の甕と精製の小片がある。遺物の内容から奈良時代の土坑と認定し、７建物に切られているので上野３期以前と推定した。

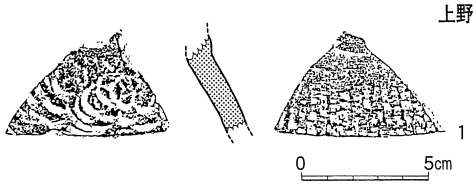
不定形大型

出土遺物

上野１～２期



第74図　東原Ｃ区　８号土坑（1/40）

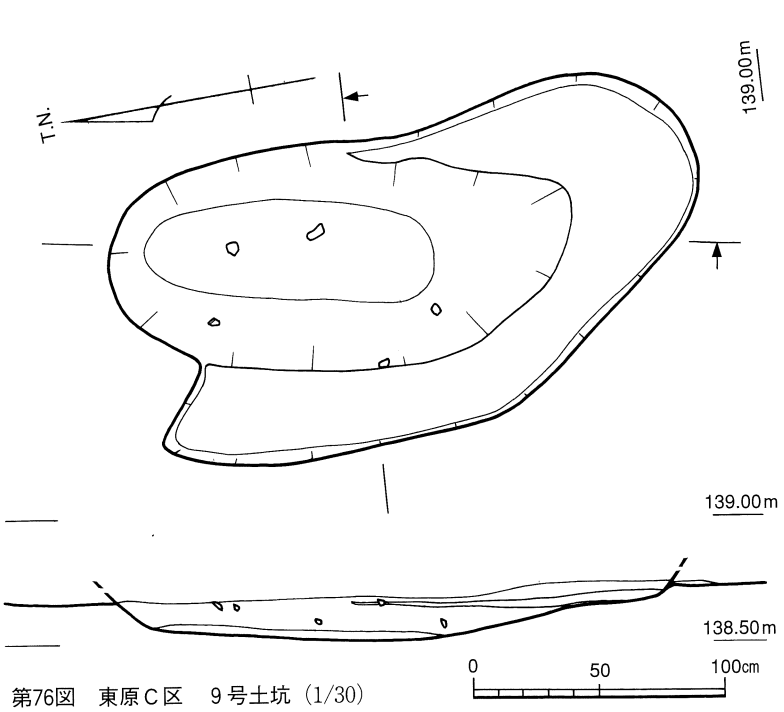


第75図　東原Ｃ区
８号土坑出土遺物（1/3）

９号土坑（第76図→図版15中右）

７建物の南に検出されたやや不整な長円形の大型土坑で、底面は平坦でなく断面半円形の皿状をなすＢ１類土坑である。深い部分と浅い部分の二段になっている。その規模は検出面を基準に測って南北長軸長238cm、ただし下段の深い部分では185cmである。東西短軸長120cmと90cmで、深さは

長円形大型



第76図　東原Ｃ区　９号土坑（1/30）

最も深いところで25cmである。上半は現代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深

埋没状態　かったものと考えられる。埋土は三層に別れ、底面に接する下層の３層は比較的きれいな黄褐色土だが、上中層の１・２層には黄色土ブロックや焼土と炭、土器砕片を多く含む。土器片には、残留した縄文土器片以外は土師器の小片ばかりで甕の胴部片が含まれていた。土坑の形態と埋没状況から

廃棄土坑　らみてゴミ捨て穴として掘られた廃棄土坑と考えられる。遺物の内容から奈良時代の土坑と認定

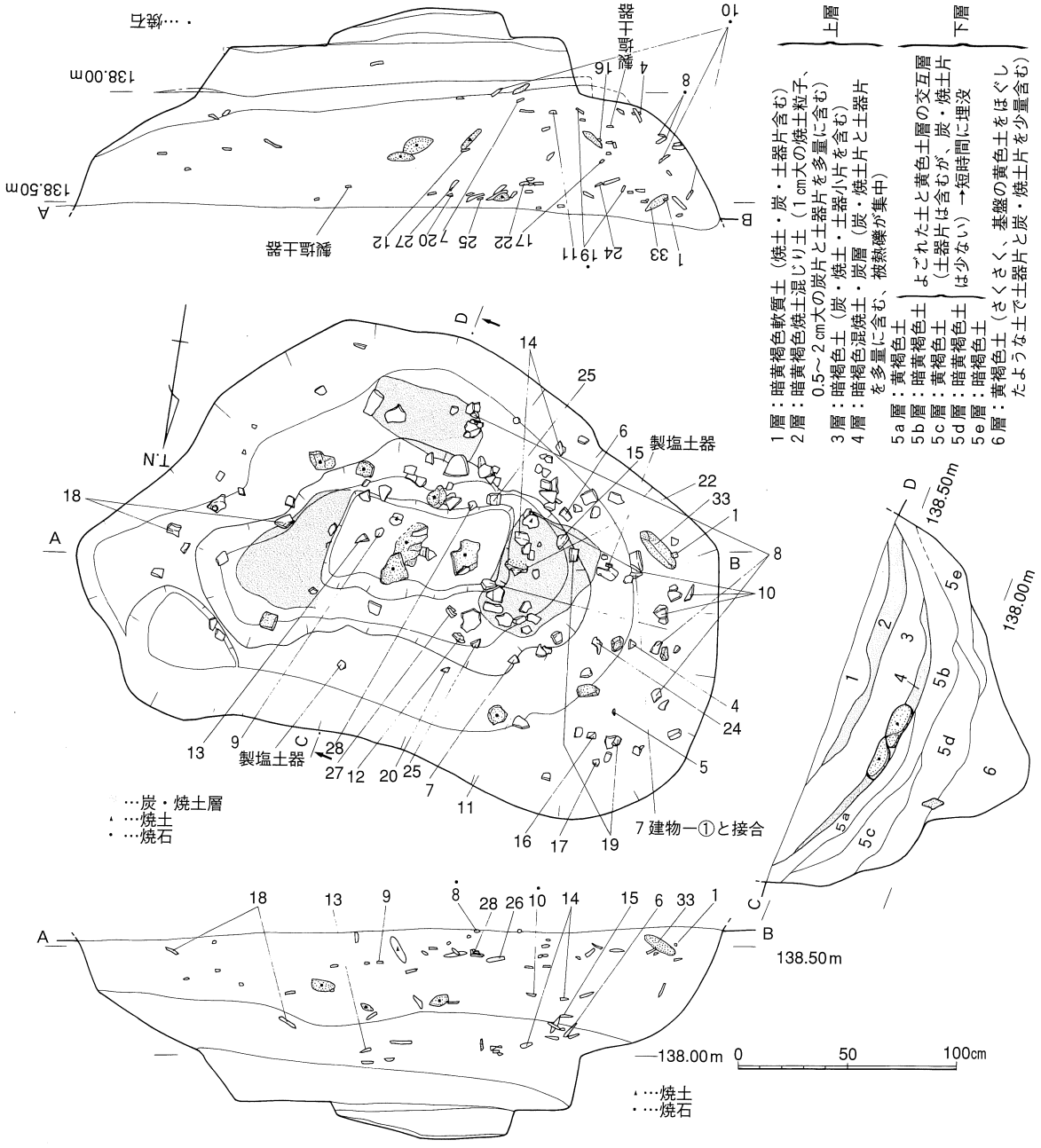
上野３期　し、７建物に隣接するので上野３期と推定した。

10号土坑（第77・78図、写真５→図版15下・79）

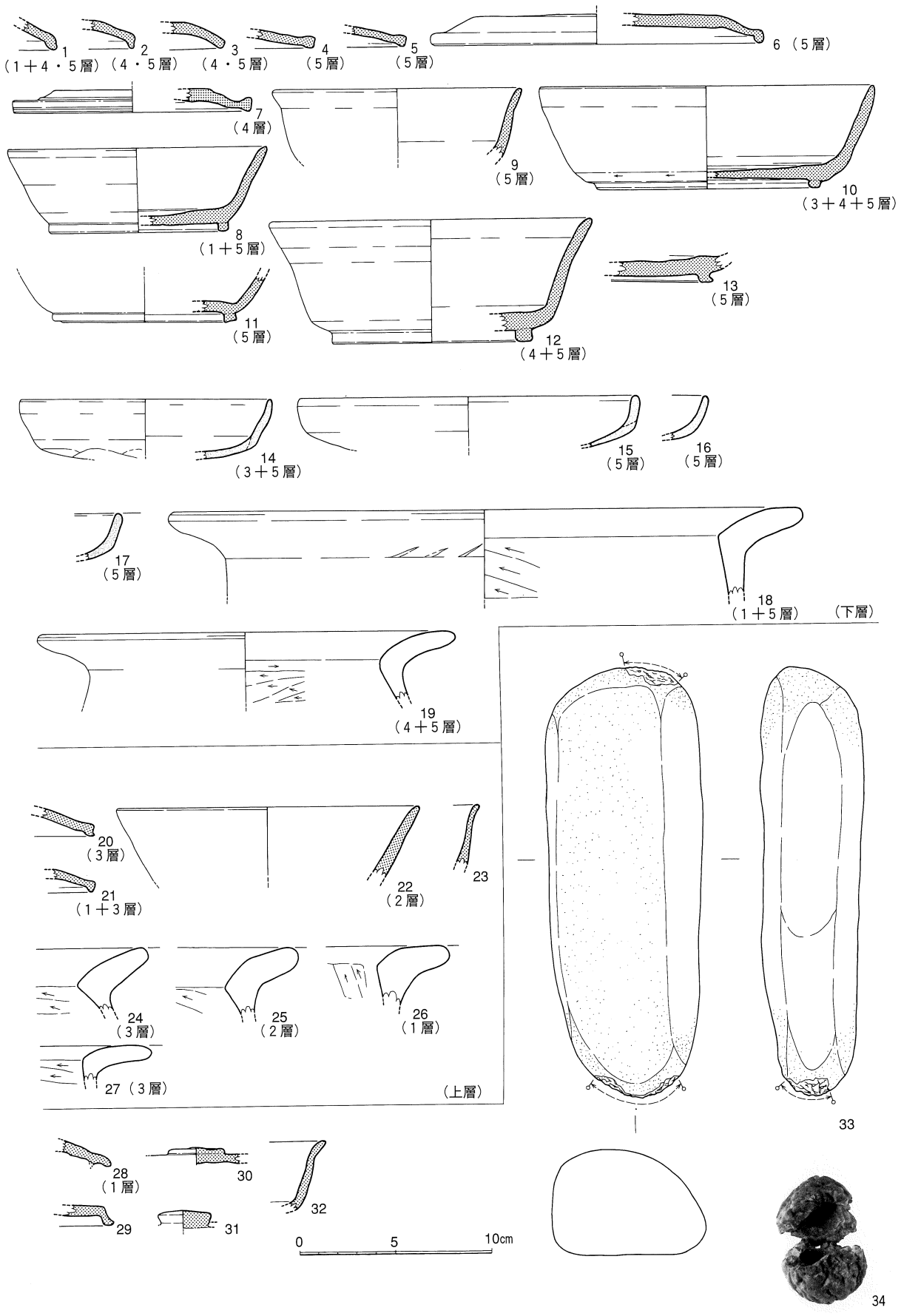
長円形大型　８建物を切って掘られたやや不整な長円形の大型土坑で、底面は平坦でなく全周が階段状になる

底面階段状　Ｂ４類土坑である。規模は検出面を基準に測って東西長294cm、南北長188cm、深さは最も深いところで95cmである。階段状の底面形状からみて土取りの目的で掘られた土坑とも考えられるが、その

廃棄土坑化　具体的な用途は不明である。その後は廃棄土坑に転用されて埋没している。



第77図　東原Ｃ区　10号土坑（1/30）



第78図　東原Ｃ区　10号土坑出土遺物（1～32＝1/3，33＝1/2）

写真５

埋土は六層に別れ、２層と４・５層に２回の一括遺物廃棄がある。まず掘削して直後に遺物が少なく黄色土の多く含まれる６層が堆積し、そのあと４・５層の下層一括廃棄がなされる。特に上部の４層には被熱した円礫や焼土・炭片と土器片が集中する。この廃棄のなかには１～19の遺物が含まれる。次に暗褐色で遺物の少ない３層が堆積したのち再度焼土・炭と土器片が一緒になった２層が廃棄されている。これが上層一括廃棄である。この廃棄には20～27と33・34が含まれる。土器はいずれも割れて破片となっている。最後に遺物の少ない１層が堆積する。なお上層廃棄の２層から出土した須恵器坏身の破片が、７建物の柱穴８の出土遺物（７建物１）と接合した。ただし７建物１の出土状況が不明なので、７建物を建てるときに廃棄されたのか、廃絶時なのかはわからない。

一括廃棄

接合資料⑥

出土遺物

出土遺物のうち１から19は、４ないし５層の下層出土土器である。１～13は須恵器で、１～７は坏蓋片である。８～13は高台付きの坏身である。なかでも７と８は新しい型式である。14～17は精製胎土Ａの土師器坏である。18と19は通常胎土の土師器の甕口縁部である。この他に５層から逆錐形の製塩土器の小片が出土している。20から27は１～３層の上層出土である。20～23は須恵器で、20と21は坏蓋片、22と23は坏身口縁片である。ほかに壷胴部片がある。24～27は通常胎土の土師器甕口縁片である。28から32は帰属層位不明の土器で、すべて須恵器である。28～31は坏蓋片、32は坏身片で、なかでも28は端部に返りがつく。33は上層出土の安山岩製叩き石で両端に使用痕があり、完形である。34は上層出土の桃の種子である。

７建物との関係

出土遺物から奈良時代の遺構であることは明らかで、土坑の位置と遺物の接合関係からみて、７建物と密接な関係があることをうかがわせ、上野３期におそらく土取り目的で掘削され、７建物付設の廃棄土坑に転用されたものと推定される。

上野３期

13号土坑（第79・80図→図版16上）

長円形

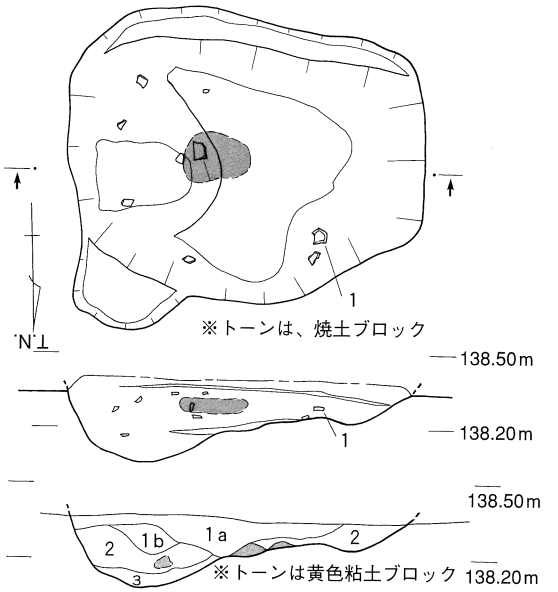
３竪穴に近接して発見された不整な長円形の土坑で、底面は平坦でなく深さは一定しない凸凹のＢ３類の土坑で、東側が特に深くなっている。規模は検出面を基準に測って東西最大長144cm、南北幅118cm、深さは最も深いところで30cmである。上半は現代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。その形態から当初は掘立柱建物の壁などの土を採取するために掘られたもので、埋没状態からみて、その後廃棄土坑に転用されたものと考えられる。

土取り？

廃棄土坑化

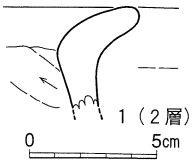
遺物の出土状態は１・２層中に土器の小破片が焼土・炭片とともに散在する状態で、その中には須恵器甕片、精製胎土Ａの土師器坏片、通常胎土の土師器甕片があり、１の土師器甕口縁部片のみが図示できる。上野２期の３竪穴と併存は考えられず、竪穴建物が近くにある場合は、そこがゴミ穴になるので廃棄土坑が竪穴建物のそばで発見されることは少ない傾向にある。それゆえ東原Ｃ・Ｄ区で竪穴建物が建てられなくなる上野３期と推定される。

上野３期



1a層：暗褐色軟質土（1cm大の炭・焼土片を少量と土器小片を含む）
1b層：ややよごれた暗褐色軟質土（1cm大の炭・焼土片と土器小片を含む）
2層：淡黒褐色軟質土（1cm大の炭・焼土片、5～10cm大の基盤層に由来する黄色粘土ブロックと土器片を含む）
3層：黒褐色土（2～3cm大の黄色粘土ブロック含む）

第79図　東原Ｃ区　13号土坑（1/30）



第80図　東原Ｃ区
13号土坑出土遺物（1/3）

14号土坑（第81・82図→図版16中・16下・79）

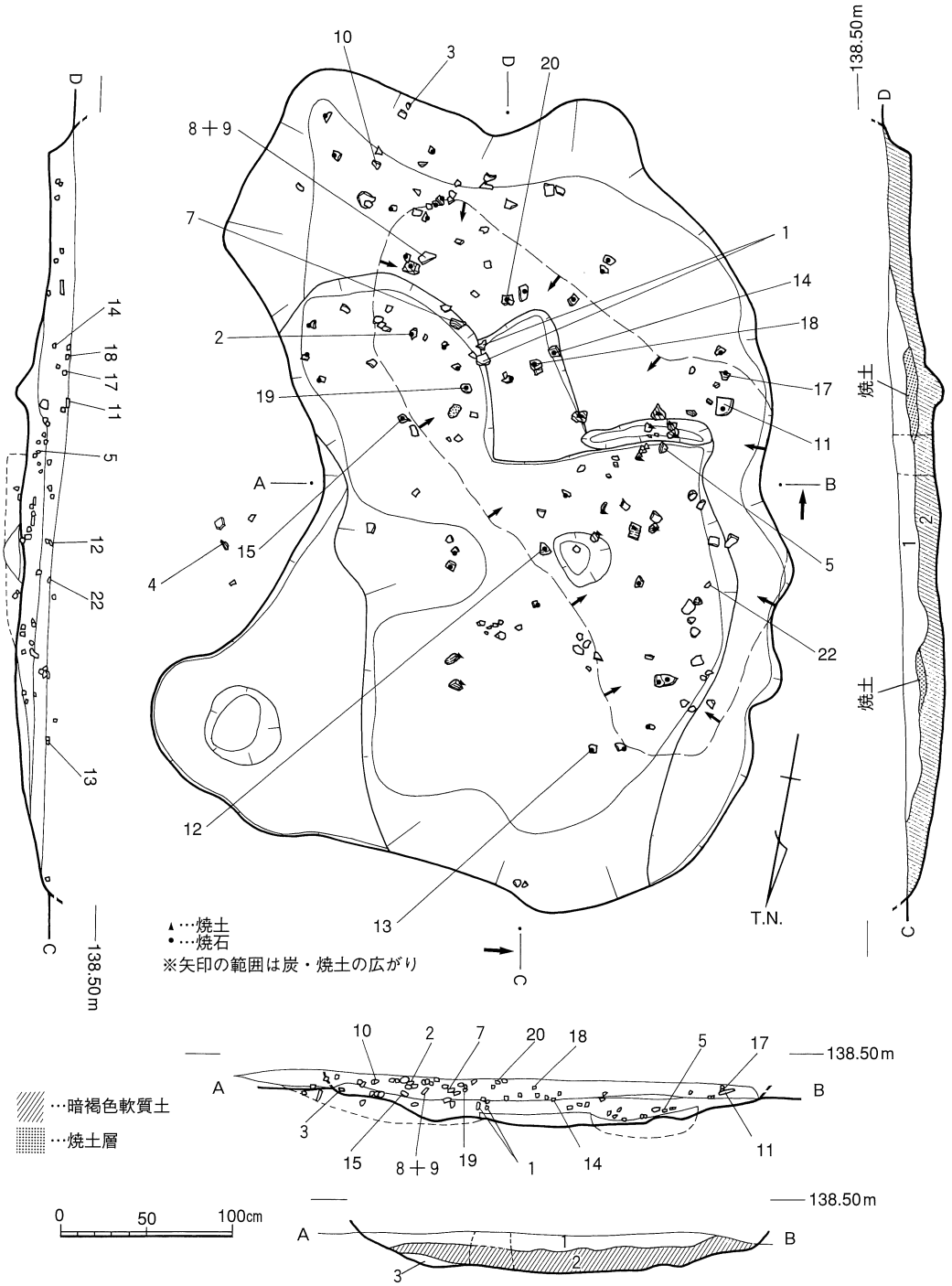
10建物の西に隣接した不定形の大型土坑で、底面は凸凹で深さの一定しない凸凹のＥ３類の土坑である。規模は検出面を基準に測って南北最大長520cm、東西幅250～300cm、深さは最も深いところで25cmである。上半は現代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。その用途は当初は建物建て替え時の片付け用と土取りを兼ねたものと推定され、その後は廃棄土坑に転用されている。

不定形大型

廃棄土坑化

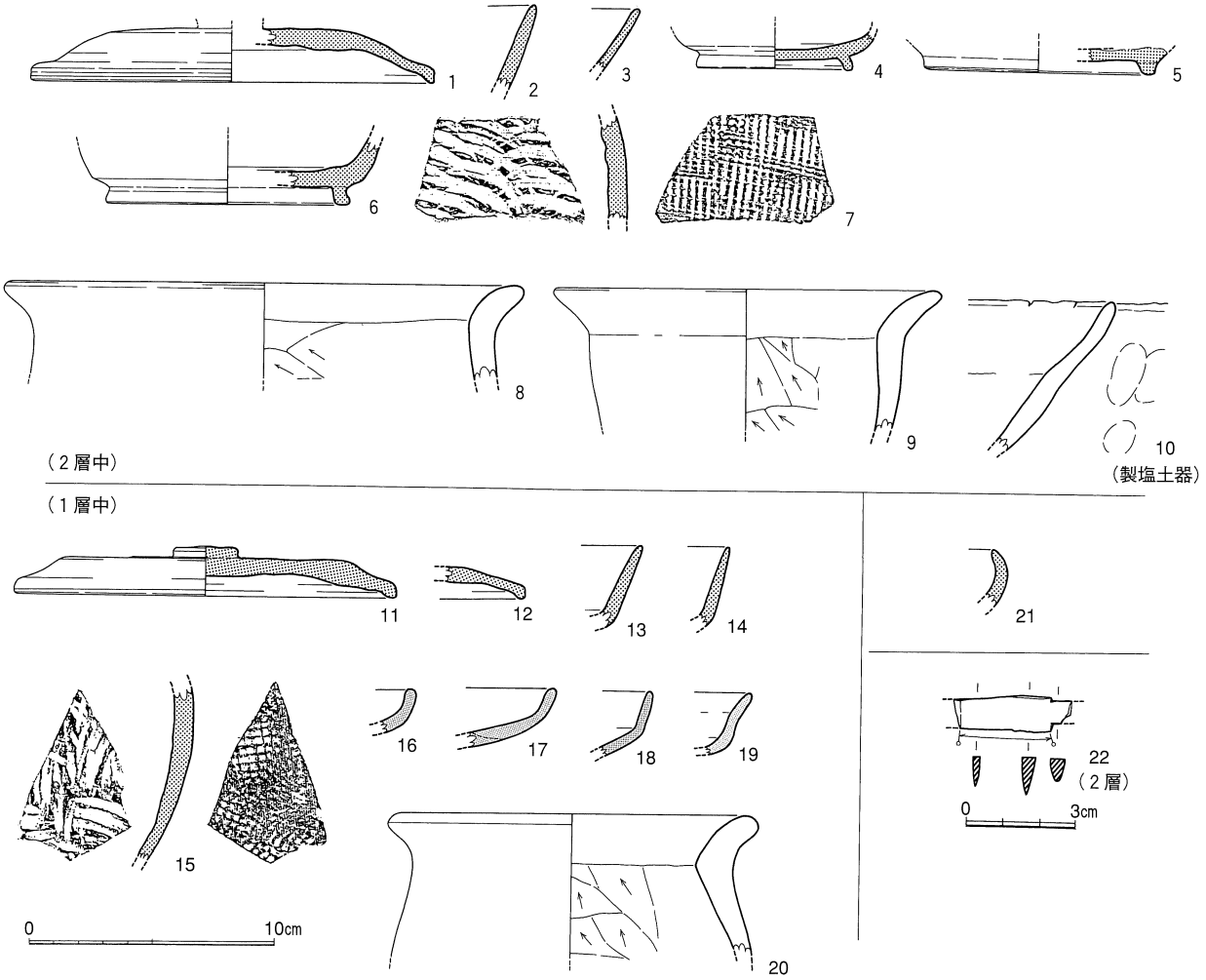
埋土は基本的に二層に別れ、掘削時の残土が堆積した黄色土の３層が点在するものの、下部に掘削直後の大量の焼土ブロックや大型の炭片、焼けた円礫と土器片が一括廃棄されている（２層）。

一括廃棄



1層：暗黄褐色土（炭・焼土・土器片含む）
2層：暗褐色軟質土（焼土ブロックや、大型炭片、土器片を多量に含む）
3層：黄褐色土

第81図　東原Ｃ区
14号土坑（1/40）



第82図　東原Ｃ区　14号土坑出土遺物（1～21＝1/3，22＝1/2）

特に２層上部に焼土と炭の層の広がりがあり、１層との分離は容易であった。焼土ブロックのなかには壁土とみられるものがあり、建物建て替え時の廃棄物を焼却して廃棄した可能性が高く、遺物の一括性は高い。この２層出土土器のなかに３竪穴１層埋め戻し土層出土の須恵器坏蓋（３竪穴２）と接合した破片があり、３竪穴が廃棄されて整地される際に、14土坑は同時に掘られた可能性が高い。その後は廃棄土坑に転用されたとみられ、暗黄褐色の１層が堆積する。それは隣接する10建物からの廃棄とみてよい。上部の１層のなかには２竪穴カマド祭祀の際埋納された土器と接合する破片が混入していた。

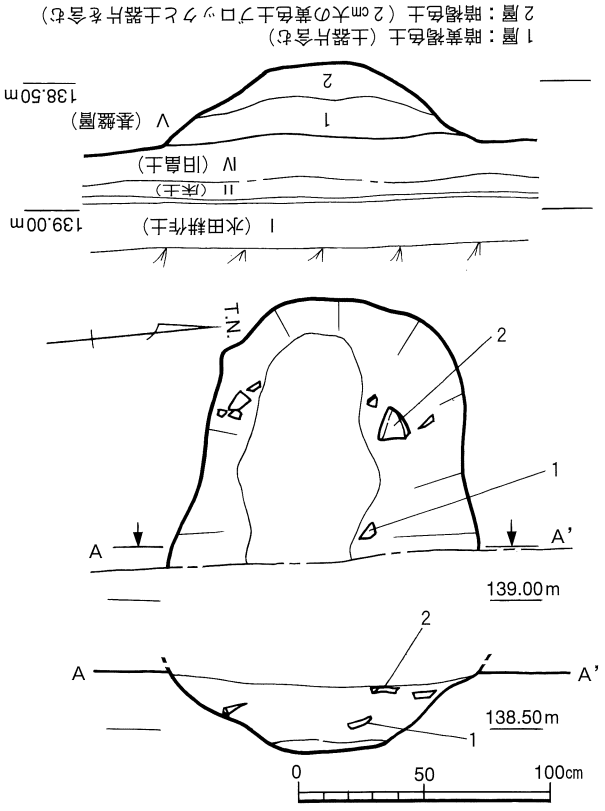
接合資料④

出土遺物

出土土器のうち１から10は下部の２層出土である。１～７は須恵器で、１は坏蓋片、２と３は坏身口縁片、４～６は高台付きの坏身である。ほかに須恵器の甕胴部片がある。精製胎土Ａの土師器坏と壷があり、特に壷の破片は多い。８と９は通常胎土の土師器の甕と鉢である。10は逆錐形の製塩土器片である。11から20は上部の１層出土土器である。11～15は須恵器で、11と12は坏蓋片、13と14は坏身口縁片、15は甕胴部片である。16～19は精製胎土Ａの土師器でいずれも坏である。ほかに壷片が多い。20は通常胎土の土師器甕の口縁片である。21は層位不明の須恵器で鉄鉢模倣の鉢の口縁部である。22は下部２層出土の鉄製刀子片で、先端と基部を失っており、廃品となって捨てられたものであろう。

出土遺物から奈良時代の遺構であることは明らかで、土坑の位置と遺物の接合関係からみて、３竪穴が廃絶して整地され、７建物と10建物が建てられる上野３期初めに掘削され、10建物付設の廃棄土坑として使用されたものと推定される。

上野３期



第83図　東原Ｄ区　15号土坑（1/30）

15号土坑（第83・84図→図版17上）

10建物と２号柱穴列に挟まれた位置で検出されたやや不整な長円形の土坑で、東半分は調査区外につづく。底面は平坦でなく断面半円形の皿状をなすＢ１類土坑である。その規模は検出面を基準に測って東西長104cm以上、南北幅121cmで、深さは最も深いところで30cmである。上半は現代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。埋土は二層に別れ、底面に接する下層（２層）は２cm大の黄色土ブロックを含む暗褐色土だが、上層の１層は黄色土ブロックを含まない。その形態と埋没状況からみてゴミ捨て穴として掘られた廃棄土坑と考えられる。

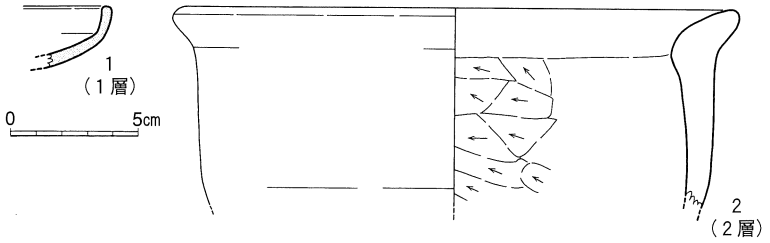
長円形

廃棄土坑

出土遺物は１層から手持ちヘラケズリを施す１の精製胎土Ａの土師器坏口縁部片が出土し、２層からは２の通常胎土の土師器甕片のほかに精製胎土Ａの土師器片がある。出土遺物の内容から奈良時代に属し、10建物のそばにある点から上野３期と推定する。

出土遺物

上野３期



第84図　東原Ｄ区　15号土坑出土遺物（1/3）

４－４　近世以降の遺構と遺物（第39図）

12・16号土坑の２基と７・８号溝の２条を検出した。12土坑は７溝に切られ、８溝は７溝で区画された畠地の区画をさらに東西に分割するための溝と考えられる。

土坑と溝

①　土坑

12号土坑（第85図→図版17左中）

近世の７溝に切られたやや不整な長円形の土坑で、底面は平坦でなく断面半円形の皿状をなすＢ１類土坑である（第85図では一見階段状にみえるが、これは掘りすぎたためである）。規模は検出面を基準に測って東西長145cm、南北幅105cmで、深さは深いところで26cmである。上半は現代の水田造成時にかなり削平されている。

長円形

埋土は底面に接して黄色土ブロック（基盤Ⅳ層土）が堆積し、その上に焼土や礫を小量含むやわらかい暗褐色土で厚く埋まっている。土器等の遺物は出土していない。土質から近世の遺構と考えられる。

埋没状態

16号土坑（第86図）

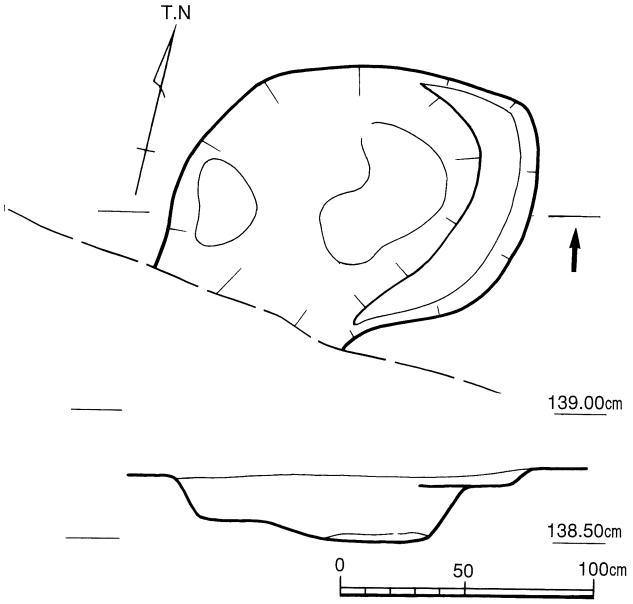
長　円　形　東原Ｃ区西端の段落ちで西半分を失った円形かあるいは長円形の土坑で、底面は平坦でなく断面半円形の皿状をなすＡ１類土坑である。規模は検出面を基準に測って南北長103㎝、東西幅56㎝以上で、深さは深いところで14㎝である。上半は現代の水田造成時にかなり削平されている。

埋土と遺物　埋土は暗褐色土の単一層で、須恵器の甕小片が１点出土したが、これは残留遺物で、土質から近世遺構の土坑と認定した。

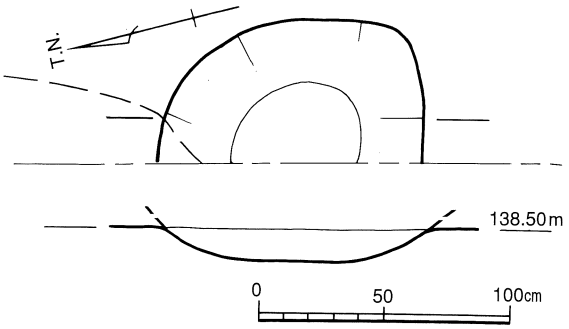
②　溝

７号溝（第87・88図→図版17右中）

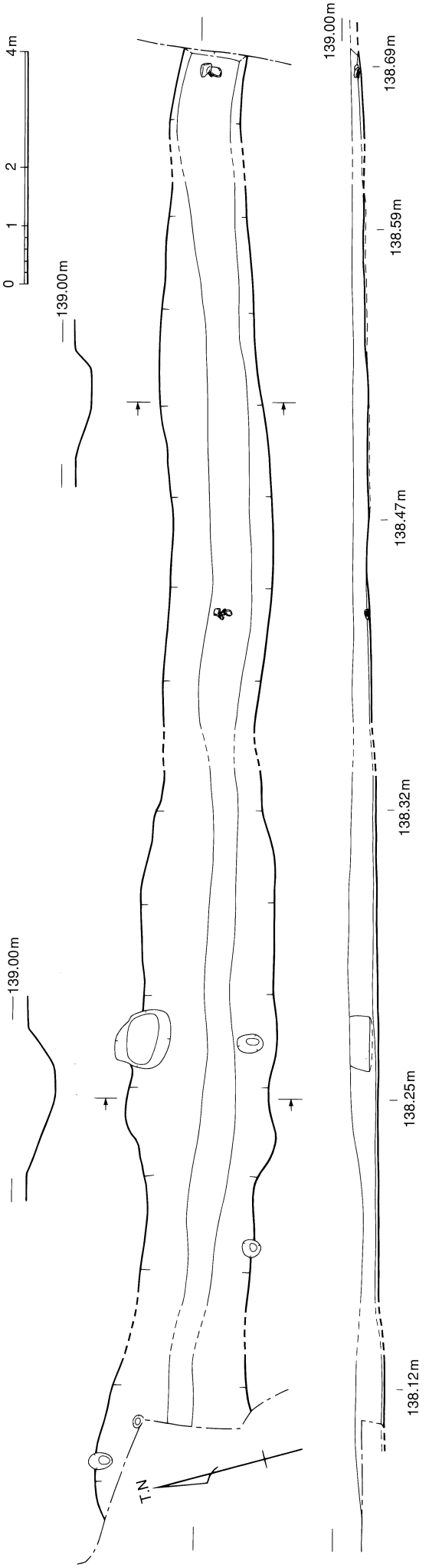
畠地境界溝　東西に長く延びる直線状の畠地境界溝である。８溝と直交し12土坑と重複するが前後関係は不明で、その25m分を検出した。東方向は近代の水田造成で削平されているが、Ｂ区３溝と平面的に連続する。幅は約100～250㎝と広い溝



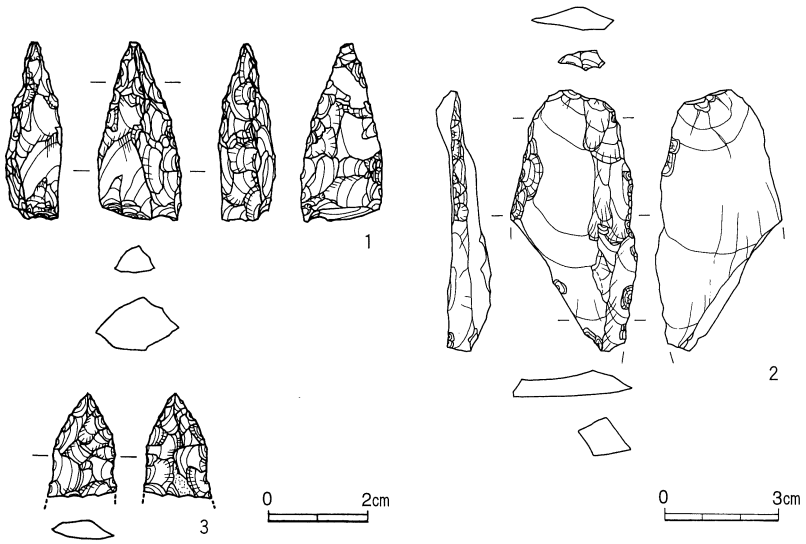
第85図　東原Ｃ区　12号土坑（1/30）



第86図　東原Ｃ区　16号土坑（1/30）



第87図　東原Ｃ区　７号溝（1/100）



第88図　東原Ｃ区　７号溝出土遺物（1·3=2/3，2=1/2）

であった。断面は皿状のＵ字形をなし、深さは最も深いところで50cmほどで、方位角は110度であった。底面の絶対高は東から西にいくほど低く、地形の傾斜と一致する。底面の高さはＢ区の３溝とスムーズに連続する。溝底の二ヵ所で円礫数個の集積を検出した。おそらく境界の印として置かれたものであろう。

埋土と遺物

埋土は軟質土の単一層で、この層中からは残留した石器のほかに近世以後の陶磁器片が出土した。図示した１は完形の腰岳産黒曜石製の角錐状石器、２はサヌカイト製の削器、３は腰岳産黒曜石製の石鏃で、いずれも残留遺物である。図示できない小片ながら近世の瓦や、18～19世紀代の近世陶磁器の細片が数多く出土した。

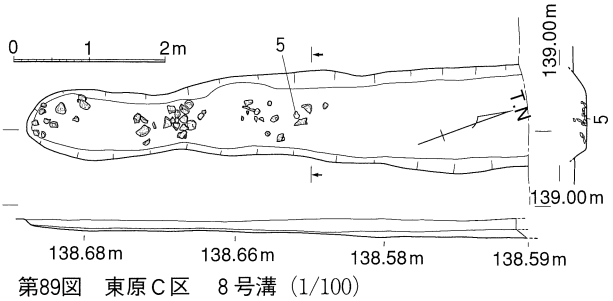
８号溝（第89・90図→図版17下・79）

畠地境界溝

７溝と直交して南北に延びる一直線の畠地境界溝である。6.5m分を検出した。南方向は近代の水田造成で削平されているが、本来７溝に接続するものと考えられる。北方向は調査区外のため不明で、方位角は20度である。幅は約90～140cmで、断面は皿状のＵ字形をなし、深さは最も深いところで15cmほどである。底面の絶対高は南から北にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。

埋土と遺物

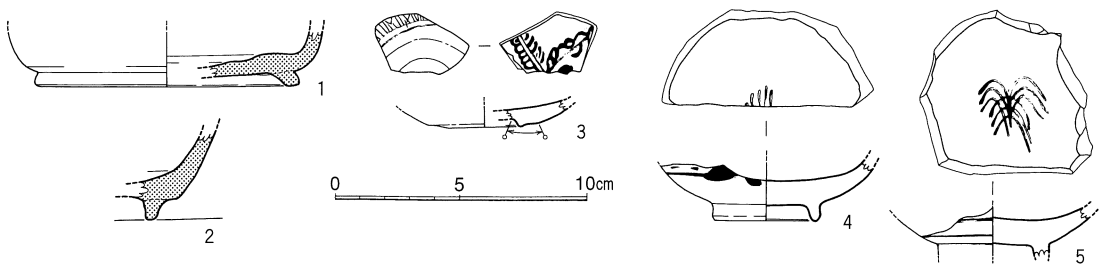
埋土は黒褐色の単一層で、層中からは多量の礫とともに残留した須恵器片などと近世陶磁器片が数点出土した。いずれも破片が散在する状態であった。１と２は須恵器の高台付き坏身片。３は碁笥底の中国産染付皿で、15世紀後半から16世紀前半の景徳鎮産とみられる。４と５は18世紀後半の肥前産染付碗。そのほかに近世陶器の小片も出土している。東西にのびる７溝を南限とする地片を分割するために、直交して掘られた境界溝と考えられる。



第89図　東原Ｃ区　８号溝（1/100）

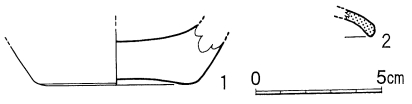
４－５　ピット（第39・91図）

東原Ｃ・Ｄ区には掘立柱建物跡に復元できた以外に、さらに多くの柱穴に類するピットを数十ヵ所検出した。遺物が出土したピットは21ヵ所で、近世陶器を出土したピット１ヵ所と石器や縄文土器のみを出土し



第90図　東原Ｃ区　８号溝出土遺物（1/3）

たピット111を除き、ほかはすべて須恵器や土師器の細片を含み、奈良時代の遺構であった可能性が高い。1はピット111から出土した縄文時代後期後半から晩期初頭の深鉢の底部である。2はピット18出土の須恵器坏蓋片である。



第91図　東原C区　ピット出土遺物（1/3）

第5節　小結－奈良時代建物群の変遷と性格－

東原地区全体の奈良時代建物群の変遷をまとめておく。上野1期から5期に分けることができる。

上野1期

まず上野1期には、A区に3号掘立柱建物が建てられ1号土坑が付設される。C・D区では2号竪穴建物と6号掘立柱建物が東西に建設され、その北には高床倉庫である13号掘立柱建物が建てられている。

上野2期

次の上野2期には、A区では1号掘立柱建物と2号掘立柱建物が方向と柱筋を揃えて建てられ、B区の3号土坑と4号土坑はこの建物群にともなうものである。C・D区では2竪穴が廃絶して3号竪穴建物に建て替わる。その西隣には12号掘立柱建物と高床倉庫である8号掘立柱建物が設けられ、東隣には11号掘立柱建物が建てられる。その北では、塀となる2号柱穴列がたてられ、その北に14号掘立柱建物（高床倉庫）が13建物と同じ位置に建て替わる。3竪穴はカマドをもつ居住用の施設であるが、その廃棄物は2竪穴跡の凹みに廃棄されているようである。以上上野1・2期を通して竪穴住居と倉庫の組合せという関係を見いだせ、C・D区付近が当初倉庫地区として割り当てられていたことを物語っている。

倉庫地区

刻書石製品が出土した12建物も3竪穴と併存していたと考えられるので、刻書石製品は権すなわち度量衡の重りであるから、それが使用されていたとき倉庫群が存在したことになり、倉庫に貯蔵されたものを量る道具として使われたと考えれば不思議ではない。したがって上野1・2期にはA・B区は居住区、C・D区が倉庫地区として利用されていることになる。

居住区

上野3期

次の上野3期には、C・D区において倉庫はすべて取り払われ、竪穴建物は埋め立てられて整地されるという大きな変化がある。今度はL字型に配置された大型の10号掘立柱建物と7号掘立柱建物を中心として、その南に5号掘立柱建物、東に1号柱穴列が設けられ、さらに東隣に簡易な9号掘立柱建物が付設されている。北側のそれまで倉庫がくりかえし建てられた地点には15号掘立柱建物が建設されて高床倉庫がなくなる。この建物群全体を区画するための堀や柵・塀のような施設はなかったようである。10建物周辺には14・15号土坑、7建物には9・10号土坑のように、当初は土取りなどの目的で掘られた土坑がゴミ捨て用の廃棄土坑として屋外に付設されているので、側柱建物は居住用であったことを示している。

整地と豪族居宅

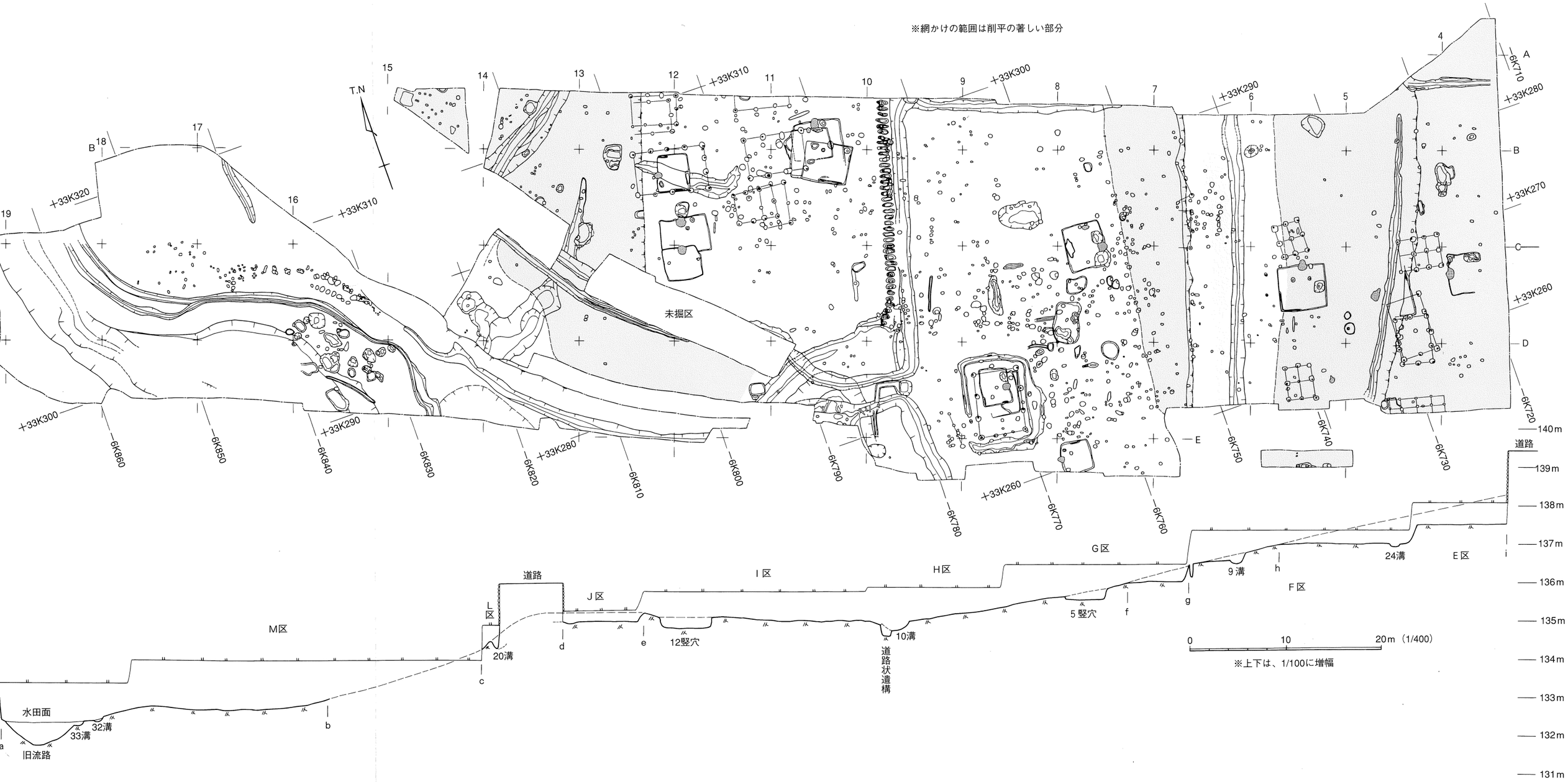
建物が東西あるいは南北方向に棟をあわせていることと、敷地を整地していることからみて、建物配置には計画性があり、上野3期の建物群は同時に建て替えられた可能性が高い。したがってそれまで倉庫地区であったC・D区は、10建物の大型建物を中心とする数棟の掘立柱建物のみからなる一単位の「豪族居宅」に変化したことを物語っている。一方B区では上野3期に1号竪穴建物と高床倉庫の4号掘立柱建物が建設されている。おそらくC・D区にあった倉庫群の一部を移転させたものと推定される。

倉庫の移転

ところで東原地区の上野3期の建物群には大型の建物が多く、ほかの建物より耐久性があったとすれば、次の上野4期まで一部存続した可能性がある。しかし野間地区で発見されている上野4期ないし5期の竪穴建物に対応する遺構はない。おそらく上野4期には、野間地区に先立っていち早く建物がなくなり、「豪族居宅」と倉庫群はどこかに移転したものと考えられる。

上野4・5期

※網かけの範囲は削平の著しい部分



第１図　野間地区の調査区（1/400）

※網かけの範囲は削平の著しい部分

T.N

未掘区

+33K320 +33K310 +33K300 +33K290 +33K280 +33K270 +33K260

6K860 6K850 6K840 6K830 6K820 6K810 6K800 6K790 6K780 6K770 6K760 6K750 6K740 6K730

B C D E

道路 L区 M区 I区 J区 H区 G区 F区 E区

20溝 12竪穴 10溝 5竪穴 9溝 24溝

道路状遺構

135m
134m
133m
132m
131m

平原地区 水田面 32溝 33溝 旧流路

a b c d e f g h i

0 10 20m (1/400)

※上下は、1/100に増幅

第1図　野間地区の調査区（1/400）